



労働政策研究報告書 No.27

2005

JILPT : The Japan Institute for Labour Policy and Training

個人のキャリアと職業能力形成

「進路追跡調査」35年間の軌跡

労働政策研究・研修機構

個人のキャリアと職業能力形成

「進路追跡調査」35年間の軌跡

独立行政法人労働政策研究・研修機構

The Japan Institute for Labour Policy and Training

はじめに

本研究は、プロジェクト研究「職業能力開発に関する労働市場の基盤整備のあり方に関する研究」の一部である。同プロジェクト研究においては、教育訓練サービス供給側（プロバイダー）と教育訓練サービス需要側（労働者）の双方から、日本社会における職業能力開発の実態解明に取り組んでいる。

本研究は教育訓練サービス需要側からのアプローチに位置付けられ、労働者個人がどのように職業能力を身につけ、キャリアを形成しているかについて探ろうとするものである。一人ひとりの労働者のキャリア形成の実態をインタビューを通じてつぶさに調べ、マクロ的視点では十分になしえない問題の把握と分析を行うことを目的としている。

本研究は、インタビューの調査対象者として、1970年からおよそ10年にわたって行った「若年労働者の職業適応に関する追跡研究」における「進路追跡調査」の対象者に協力を求めることとした。「進路追跡調査」は、雇用職業総合研究所（当時）と国立教育研究所（同）との共同で行った調査である。その後は、しばらく調査をしていなかった。調査開始時に対象者の方々は15歳頃であったが、現在は50歳前後に達している。

本プロジェクト研究全体は、平成15年度下期から18年度末までの3年半をかけて実施する大がかりなものである。本研究自体も今年度については、全国各地の対象者を訪問して、調査を行い、その結果得られた情報を第一次的に整理することとし、来年度の詳細分析につなげることにしている。

久方ぶりの対面であったにもかかわらず、調査対象者の皆様は私どものお願いに快く応じてお話をしてくださった。調査担当者それぞれが、調査にご協力頂いた方のお話に大きな感銘を受けた。本報告書は、調査対象者である68人の方々の人生の軌跡でもある。ここで調査にご協力くださった対象者の方のお名前を挙げることはできないが、心からお礼を申し上げたい。

2005年3月

独立行政法人 労働政策研究・研修機構
理事長 小野 旭

執筆担当者(執筆順)

氏名	所属	執筆章
おくつ まり 奥津 眞里	労働政策研究・研修機構 統括研究員	序章、第2章第11節、終章、ケース記録
ほり ゆきえ 堀 有喜衣	労働政策研究・研修機構 研究員	序章、第2章第5節、終章、ケース記録
こすぎ れいこ 小杉 礼子	労働政策研究・研修機構 副統括研究員	第1章、第2章第6節、ケース記録
なかじま ぶみあき 中島 史明	労働政策研究・研修機構 アドバイザリー・リサーチャー	第2章第1節、ケース記録
すずき かつお 鈴木 勝夫	特定非営利活動法人自立支援ネット我孫子 監事	第2章第2節、ケース記録
くによし しげのり 國吉 重徳	日本産業カウンセリング協会 理事	第2章第3節、ケース記録
かみわき たかし 上脇 貴	日本産業カウンセリング学会 理事	第2章第4節、ケース記録
たかしま なるひで 高嶋 成豪	特定非営利活動法人キャリアエンパワメント代表理事	第2章第7節、ケース記録
こわた ひでお 木幡 日出男	東京成徳大学 教授	第2章第8節、ケース記録
まつした ゆみこ 松下 由美子	山梨県立看護大学 教授	第2章第9節、ケース記録
おがた いちこ 緒方 一子	東京メトロ カウンセラー	第2章第10節、ケース記録
さわだ とみお 澤田 富雄	モルゲン人材開発研究所 代表取締役	ケース記録

「進路追跡調査」委員一覧(五十音順)

石田 浩	労働政策研究・研修機構特別研究員	東京大学教授
緒方 一子	東京メトロ	カウンセラー
奥津 眞里	労働政策研究・研修機構	統括研究員
上脇 貴	日本産業カウンセリング学会	理事
木村 周	東京成徳大学	客員教授
國吉 重徳	日本産業カウンセリング協会	理事
小杉 礼子	労働政策研究・研修機構	副統括研究員
木幡 日出男	東京成徳大学	教授
澤田 富雄	モルゲン人材開発研究所	代表取締役
鈴木 勝夫	特定非営利活動法人自立支援ネット我孫子	監事
高嶋 成豪	特定非営利活動法人キャリアエンパワメント	代表理事
中島 史明	労働政策研究・研修機構	アドバイザー・リサーチャー
堀 有喜衣	労働政策研究・研修機構	研究員
松下 由美子	山梨県立看護大学	教授

目 次

序章 調査研究の目的と概要	1
第1章 全体を通じた概観	5
第2章 分析編	13
第1節 調査から見えたコーホート特性	13
第2節 職業選択は人生模様	17
第3節 職業人生における専門性の確立	20
第4節 就学期におけるキャリア形成支援教育の重要性に関する提言	24
第5節 キャリアの初期における支援者の重要性	29
第6節 早期に就きたい仕事を決めたケースのキャリアと職業能力の形成	34
第7節 キャリア形成とリーダーシップの発達	37
第8節 組織における個人のキャリアアップの困難さ	41
第9節 流されるままの職業生活から主体的な職業生活への転換	46
第10節 初職の影響を受けつつも以後のキャリア形成にみられる自分らしさ	49
第11節 ライフ・キャリア形成のポリシーを『家庭との調和を基軸』とする 生き方に確立した女性モデル	53
終章 調査研究から得られるインプリケーション	56
資料編	65
ケース記録	67
調査票（男性票・女性票）	262
ライフヒストリーカレンダー	268

序章 調査研究の目的と概要

1. 調査研究の目的

本研究は、プロジェクト研究「職業能力開発に関する労働市場の基盤整備のあり方に関する研究」の一部である。

同プロジェクト研究においては、教育訓練サービス供給側（プロバイダー）と教育訓練サービス需要側（労働者）双方から、日本社会における職業能力開発の実態の解明に取り組んでいる。本研究は、教育訓練サービス需要側からのアプローチと位置付けられ、労働者個人がどのように職業能力を身につけ、キャリアを形成しているかについて探らうとするものである。

近年においては、学卒直後に入社した企業の中でキャリア形成を行うという「標準的キャリア」を歩む者は減少しつつある。労働行政においては、自らキャリアを構築する個人を支援するサポートシステムが求められている。個人を支援する有効なシステムをつくるためには、過去の様々なキャリア形成のありようを踏まえたうえで、今後どのような施策が有効であるのかを議論する必要がある。

そこで本研究では、一人ひとりの労働者のキャリア形成の実態をつぶさに調べることを通じてこうした課題に接近することにした。そしてその実態調査に基づき、日本社会における労働者のキャリアと職業能力形成についての論点を導くことを試みた。今後行う個人を対象とした全体像を把握するための量的な面についての調査との関連を分析することによって、本研究はさらに分析の充実が図られるものと考えている。

こうした問題意識に基づき、本研究はインタビューの調査対象者として、かつての「進路追跡調査」の対象者に協力を求めることとした（同調査の概要については次の2参照）。その理由は3つある。第一に、かつての調査対象者であるので、若い頃の調査結果を参考にできることから、より正確なキャリアを把握できる可能性が高いためである。第二に、事例研究ではあるが、35年間のキャリアを追ったパネル調査であるということである。日本においてパネル調査の重要性が強調されながらも、まだほとんど蓄積がない状況を考慮すると、予備的な試みであったとはいえ意義のある調査といえよう。第三に、10年間ものあいだ調査にご協力頂いた方であるので、個人のキャリアのみならず人生にまで分け入った今回の調査に対しても、積極的な協力をお願いできるのではないかと考えたからである。

そこで、かつて行われた「進路追跡調査」をもとに、50歳前後に達した当時の調査対象者にインタビューを行い、これまでどのような職業能力形成、キャリア形成を行ってきたのかを調査することとした。

2. 調査の概要

(1) 進路追跡調査の概要

「進路追跡調査」は、「若年労働者の職業適応に関する追跡研究」(以下「進路追跡研究」という)の一環として、雇用職業総合研究所(当時。以下、職研という)と国立教育研究所(同)が共同して行った調査である。「進路追跡研究」は、もともと国立教育研究所がはじめていた「長期的進路追跡研究」において中学・高校在学時の詳細な資料を蓄積していたことから、層化抽出法をとらずに、この利点を生かす形で、同調査の対象者の一部を引き続いて調査対象としたものである。調査の分担は、国立教育研究所が主に在学中の者を中心に行い、職研が学校を離れている者を対象に調査するというかたちで行われた。

進路追跡調査の調査対象者は、1953年から55年に生まれた2,820人(男性1,459人 女性1,361人)で、7都府県にまたがる71校の学校から、学級を単位として1学校1学級の原則で選定した。労働力の供給県か需要県かを考慮して対象県を選んだが、結果的にすべて関東以西の都府県となった。また卒業後すぐに就職する者を研究の中心に据えたことから、このデータでは中卒者の就職者比率が当時の就職率よりも高くなっていることに注意が必要である。

追跡は、15歳時から26歳時になるまで行われたが、調査対象者が多く、経済的・時間的困難のため、対象者を都府県単位で3群に分け、1年ずつ卒業年次をずらして調査を行った。そのため、同じ教育年数であっても、労働市場へ出るときの状況が調査者によって異なっている可能性があるという問題点がある。

職研の調査は、学校から離れた者のみを対象とする調査設計のため、対象者全員に対してすべて同じ調査を行っているわけではない。職研は17歳、20歳、23歳、26歳の計4回の調査を行っているが、例えば、中卒就職者は4回すべての調査対象者となるが、高校に進学し、現役で大学に進学した者については18歳時に国立教育研究所が調査を行うため、職研は23歳から対象とすることになる。ただし、15歳調査と26歳調査は全員が対象となっている。

当時の調査の主要な目的をごく簡単に述べるならば、若者の職業・職場適応のメカニズムを解明することにあつた(雇用職業総合研究所1988)。進路追跡研究の発足した1960年代当時は、若者の離転職が社会的に問題視され、離転職は職業・職場不適応の結果という見方が一般的であつたが、「進路追跡調査」の主眼は、個人の職業とのかかわりを一連の過程として、発達的に捉えようとするにあつたという。具体的には、職業経歴の実態的把握、進路選択と職業適応、離転職と定着の把握・分析、職業世界における自己の確立の分析、追跡研究手法の検討と開発、が課題として挙げられている。

十年にわたる追跡研究で得られた成果は次のように要約されている。

第一に、在学中の職業選択および就職先決定のための準備と活動の計画性、積極性等の要因は、卒業後の職業的目標の達成と就職初期の職業への取り組みの積極性に大きな影響を与

える。

第二に、学校卒業後の最初の職業（初職）及び職業生活は、それ以降の個人の職業的な生き方に関する見通しやキャリアの形成に不可逆的な要因として重要な役割を果たす。とりわけ、初職の職種・産業・業種・企業規模等が、それに強いかわりを持っている。

第三に、在学中に形成された自己の適職領域に関する意識（適職感）は、初職以降の実際の職業経験を通じ、適職領域を拡大する方向で、かつ、自分自身が就いている職業を取り込む形で修正される。

第四に、早期（初職就職後1年未満）の離職は、中学卒から大学卒に至るまで一定割合で発生しており、学歴による顕著な差異は見られない。

第五に、早期の離転職は、それ以降におけるその個人の離転職の頻発傾向につながるものではない。

第六に、職場定着は、必ずしもその個人が自分の仕事や職場に満足していること（あるいは不満がないこと）を意味するものではない。また、離転職が、前の仕事や職場に不満があったことを必ずしも意味するものではないし、逆に不満が直ちに離転職を誘発するものでもない。

第七に、個人が、仕事や勤務先に対して継続（定着）・変更（離転職）等の見通しを持ち、それを表明することは、少なくとも5年程度のスパンでのその個人の職業行動に対して、きわめて高い予測性を有する。

第八に、青年期を通じての職業に対する取り組みには、個人個人が独自のスタイルで職業的な生き方を選択決定していく、という方向での変化の経過が見られる。そのような変化の特徴は、一般的かつ平均的にいえば、自己の職業の遂行能力に関する自信の増大、自己の職業に対する適職感の増大、自分の仕事あるいは勤務先への継続意志の増大等によって顕著に示される。

第九に、個人の職業生活はもとより、人生で生起するさまざまなできごとや経験が、それまでの個人の職業経験の蓄積やキャリアの展望を超えて、そのキャリアの大きな変化を与えることがある。

なお調査は、職研 労働省 都道府県職業安定主務課 公共職業安定所 調査員というルートで行われた。調査方法は、訪問面接（ただし女性については一部を除き23歳調査以降郵送）で、回答率は26歳時点で男性が83.1%であった。

男性の場合、調査からの脱落者（attrition）は低学歴層で主に生じており、地域によっても差が見られた。脱落は主に所在把握ができないことから生じており、就職が早く離転職が多い中卒者、また都市部で多く起こっている。したがって、26歳時点ですでに、低学歴者および地域という点で、サンプルに偏りがある可能性をあらかじめ指摘しておく。

（2）今回調査の概要

26歳時調査がすべて終了した82年以降調査を行っていなかったが、2003年末から2004

年初めにかけて、26歳時点で住所を把握していた約2,800名に調査協力のお願いの文書を発送した。かなり間隔があいたため、そのうちの約半数は住所不明で戻って来てしまった。残り約半数については郵便が戻ってこなかったことから考えると、受理者が存在したと思われる。返事を頂いた約300名のうち、当初は72名から調査も協力してもよいとの返事を得、このうち実際に66名に対してインタビュー調査を実施した。なお調査を実施している途中で、対象者のご紹介により、連絡のつかなかった2名を紹介頂けたので、今回の調査対象者は全部で68名となった(概略は図表1-1の通り)。対象者が全国に点在していることから、調査を円滑に進めるため、調査の経験が豊富な外部の研究者や実践者に対して一部の調査を委託した。

調査を行う際には、インタビューシートとライフヒストリーカレンダー(後述)を用いた。インタビューは、対象者の方のご希望の場所で行った。

3. 本報告書の構成

本報告書は、個別のインタビュー調査から得られる知見の整理と要約に続き、資料編に進むという構成をとる。

第1章では、26歳時までの調査に基づき、調査の対象者がどのようなキャリア形成をしていたのか概観する。続いて今回のインタビュー調査に基づき、対象者全体について把握する。

第2章分析編では、インタビュー内容をもとに、トピックごとに検討する。本研究は日本社会のキャリアと職業能力形成の全体像を把握するのではなく、論点を整理するという目的であることから、すべてのケースを通じる分析を行うのではなく、個別のケースを深く議論するという方法を用いた。そのため、インタビューを担当したケースを中心に、それぞれの研究者が自らの問題意識を展開している。

インタビューの具体的な内容については、後に資料編としてケースごとにとりまとめて示した。

終章では分析編を要約し、得られる示唆について議論する。

本報告書で整理した論点は、すでに述べた、今後実施する予定となっている日本社会におけるキャリアと職業能力形成について全体像を把握するための個人調査の予備的検討としても位置づけられるものである。

なおインタビューシートは、男性と女性のキャリアの違いを考慮して、男性票と女性票を作成した。またできるだけ正確にキャリアを把握するため、海外のパネル調査ではよく用いられるライフヒストリーカレンダー様式を今回調査用に考案し、対象者の方に事前にご記入頂くことをお願いした。いずれも巻末に見本を掲載してあるのでご参照頂きたい。

参考文献

雇用職業総合研究所(1988)『青年期の職業経歴と職業意識 若年労働者の職業適応に関する追跡研究総合報告書』職研調査研究報告書 7

第1章 全体を通じた概観

1. はじめに

本章では1988年に職研がまとめた『青年期の職業経歴と職業意識』をもとに、これまで明らかにされている調査結果を整理する。続いて、今回のインタビュー調査にご協力頂いた対象者について概観する。

2. 26歳までのキャリア形成

ここでは、以前実施した進路追跡調査の結果に基づいて、男性対象者の26歳までのキャリア形成について概観する。男性に限っているのは、女性については退職者が多くなったので、23歳調査から個人に対する郵送調査に切り替えられたために情報が限られる、という理由による。

はじめにキャリア形成の背景要因として、調査期間の労働市場の状況を簡単に整理した。序章で述べたように、同調査は1年ずつずらした3つのパネル調査の合成であることから、背景要因の影響は複雑であるが、以下のような傾向が見られる。

1969-1971	中学卒業	景気拡大期、中卒求人倍率 4.8～6.8 倍
1972-1974	高校卒業	景気拡大期、石油危機・高卒求人倍率 3.2～3.9 倍
1974-1975	短大・高専卒業	石油危機
1976-1978	大学卒業	石油危機後
1979-1981	26歳調査時	安定成長期

まず、調査対象となった期間の日本の全体的な傾向であるが、1970年頃の中卒者は仕事を選ぶのにかなり恵まれた世代であった。石油危機の影響については、74年3月卒の高卒者の就職には大きな影響は与えていない。一方、75年3月の短大・高専卒、76年3月の大卒者では、内定取り消しが起きるなど就職に大きな影響を与えている。

またこの時期は、高学歴化が進行した時期でもあった。1969-1971年の中卒就職者比率をみると、わずか2年の間に15%から10%に下がり、1972-1974年の高卒就職者比率は同じく52%から47%に下がった。中卒養成訓練が後退していった時期と重なっている。

次に、かつての分析結果を引用しながら、対象者の26歳時点までのキャリア形成をみる。

学歴別の初職を企業規模別^(注)に見ると(不明除く)、中卒は大企業27.8%・中企業37.4%・小企業33.9%であった。「高卒(高専・専門学校を含む)」は大企業51.2%・中企業24.8%・小企業22.3%であった。短大・大卒は大企業59.7%・中企業28.9%・小企業8.9%であった。

学歴ごとに、就職3年目の最初の職場への定着率をみると、中卒58.6%、高卒71.9%、大

卒 73.1%であった。

学歴別初職の企業規模と初職継続の関係をみると、26歳時点の初職継続者の割合は中卒が大企業 51.6%・中企業 23.3%・小企業 20.5%であった。高卒は大企業 65.5%・中企業 38.8%・小企業 48.8%であった。短大・大卒は大企業 83.2%・中企業 58.1%・小企業 47.4%であった。学歴よりも企業規模の影響が強いことがうかがわれる。

26歳時調査では、中卒および短大・大卒の転職者は母集団が少なかったため、高卒の転職経路についてのみ、初職の企業規模（大・中・小）と次職の企業規模（同）との関係をみると、同規模内での異動が最も多く、次に、より規模の大きい企業から小さい企業への異動が多くなっていた。

3. 本インタビュー調査対象者のキャリア形成の概略

はじめに本インタビュー調査対象者の職業能力とキャリア形成に影響を与えたと思われるできごとを簡単に整理する。

80年代後半から90年代初頭 バブル景気

90年代 企業の倒産・リストラ相次ぐ

1995年 阪神大震災

すでに述べたように、今回のインタビュー調査は68ケースにとどまっており、26歳時点の前回調査からの脱落率が大きいものの、同一個人を追跡したパネル調査の性格があるので、同一世代の大まかな傾向を読みとることは可能だと思われる。

今回の調査対象者の中には、90年代後半に勤務先が倒産したり、リストラに遭った者も含まれていた。また関西在住者へのインタビューは、阪神大震災によって勤務先が大きな影響を受け、これに伴い彼らのキャリアが変化したことを端々に感じさせるものであった。

分析編で扱うケースの順番に基づいて並べられた対象者表（図表 1-1）に基づき、傾向を指摘する。学歴・性別によって就業年数や行動が大きく異なるため、学歴・性別ごとにみていく。

高卒男性においては、16ケースのうち、8ケースが仕事を変わっている。うち6ケースは、初職に就いて3年半以内という若い時期の転職であり、自営への転身が3ケース含まれる。中卒・高卒女性は5ケースすべてが3年半以内で離職し、その後結婚してパートや家業、内職など何らかの仕事を経験している。

高等教育（高専・専門・短大・大学）卒男性 33ケースのうち、初職が家業や専門職という者が3ケースあり、病気を抱えているケースが1人あった。これらを除いた29ケースのうち18ケースが何らかのかたちで仕事を変わった経験を持っている。この18ケースのうち、初職に就いて10年以内の転職・自営業への転身は4ケースであった。現職継続年数（自営

図表1-1 対象者の概略

No.	性別	年齢(満)	学歴	初職(年数はおよその継続期間)	調査時(2004年)(年数はおよその継続期間)	転職の回数(パート・アルバイト除く)	失業経験	パート・アルバイト期間合計(学生時代は除く)	職業にかかわる資格	その他の活動、学習、趣味・教養	備考
1	男	51	高校	正社員(自衛隊)(3年)	正社員(20数年)	2	0	なし	大型運転免許	ソフトボール	
2	男	50	高校(商業)	正社員(32年)		0	0	なし			
3	男	50	高校(商業)	正社員(20数年)		0	0	なし			
4	男	49	専門学校	アルバイト(2年)	無職(時折アルバイト)(1年)	3	1年	1年、1種類	栄養士、ヘルパー2級		
5	女	51	短大	正社員(教員)(20数年)		0	0	なし	看護教諭免許	リフレクソロジー	
6	女	51	短大	正社員(？年)	家事従業(数年)	1	0	数年、3種類	レクリエーション・インストラクター資格		
7	男	50	大学	アルバイト(5年)	正社員(教員)(29年)	0	0	5年、2種類	教員免許		
8	男	50	大学	正社員(20数年)		0	0	なし	測量士、土木施工管理技士(1級)、管工事施工管理技師(1級)、下水道管理技術認定試験(2種、3種)		
9	男	49	大学	正社員(8年)	正社員(2年)	3	0	なし			
10	男	51	大学	正社員(20数年)		0	0	なし			
11	男	49	大学院(修士)	正社員(20数年)		0	0	なし	博士号取得	MBAの勉強	
12	男	49	高校(実業)中退	正社員(1年半)	自営業(？年)	4	0	なし			
13	男	50	高校(工業)	正社員(31年)		0	0	なし	JIS溶接技能検定、通産省の溶接技能検定、クレーン運転士、有機溶剤に関する資格など	重板金溶接の技能習得	
14	男	50	高校(実業)	正社員(32年)		0	0	なし	高圧ガス製造保安責任者(丙種ガス責任者)、ボイラー技師、クレーンインディケーター取扱資格		
15	女	51	高校	正社員(3年半)	パート(20数年)	1	0	20数年、1種類	電話交換取扱者認定書	バレーボール	
16	女	51	短大	正社員(5年)	正社員(3年)	2	0	4年、1種類	教員免許	点字、ボランティア	
17	男	49	大学中退/専門学校	正社員(27年)		0	0	なし	理学療法士	手話	
18	男	49	大学	正社員(5年)	アルバイト(1年)	4	0	1年、1種類			
19	女	49	大学	正社員(2年)	契約・派遣・嘱託(7年)	0	0	7年、1種類			
20	男	49	高校	正社員(1年半)	自営業(独立)(3年)	7	0	なし		剣道	
21	男	49	専門学校	正社員(7年)	自営業(20年)	1	0	なし	クレーンの玉掛け作業者、酸素欠乏作業主任者	PTA会長、子供会会長	
22	女	49	専門学校	正社員(14年)	無職(1年)	0	0	3年、1種類		経理事務、珠算3級、筆道	
23	男	50	短大	正社員(公務員)(25年)		0	0	なし			
24	男	49	大学	正社員(27年)		0	0	なし	宅地建物取引主任者		
25	男	50	大学	医師(勤務医)(20数年)		0	0	なし	医師免許	歌	
26	女	50	大学	正社員(約3年)	自営業(コンビニ)(10年)	2	0	なし			
27	男	50	高校(商業)	正社員(18年)	正社員(14年)	1	0	なし			
28	女	49	高校(商業)	正社員(3年半)	パート(8年)	0	0	27年、3種類		PTA役員、町内会役員、子供会役員、ボランティアなど	
29	男	49	大学	正社員(26年)		0	0	なし		法律関係の通信教育	
30	男	50	大学	正社員(4年)	自営業・フリーランス(独立)(4年)	3	10ヶ月	なし	社会保険労務士	三味線	
31	男	50	大学	正社員(公務員)(27年)		0	0	なし			
32	女	49	大学院中退	正社員(2年)	パート(2年)	0	0	2種類、各々2年		PTA役員、町会の手伝い	
33	男	50	高校(工業)	正社員(公務員)(32年)		0	0	なし		法律の勉強、スキー	
34	男	50	高校(商業)	正社員(12年)	正社員(20年)	1	3ヶ月	なし	大型2種運転免許、簿記		
35	男	51	専門学校	アルバイト(3年)	自営業・フリーランス(独立)(20年)	2	0	なし			
36	女	51	短大	正社員(教員)(32年)		0	0	なし	教員免許	日舞、着付けの免許	
37	男	50	大学	正社員(26年)	正社員(公務員)(3年)	1	0	なし		パソコン、ゴルフ	
38	男	50	大学	正社員(25年)	自営業・フリーランス(独立)(3年)	1	数ヶ月	なし		e-ラーニングで株為替の読み方の勉強	
39	女	50	中学	正社員(半年)	パート(6年)	2	0	17年、4種類(家業と並行期間あり)			
40	女	50	高校	正社員(2年)	内職・パート(19年)	1	0	22年、3種類		テニス、映画	
41	男	49	専門学校	その他(往診して回る)(2年半)	自営業・フリーランス(26年)	1	0	5年、1種類(本業と並行)	鍼師、灸師、あん摩・マッサージ指圧師		
42	男	49	大学	正社員(2年)	正社員(教員)(22年)	1	0	なし	教員免許	英会話	

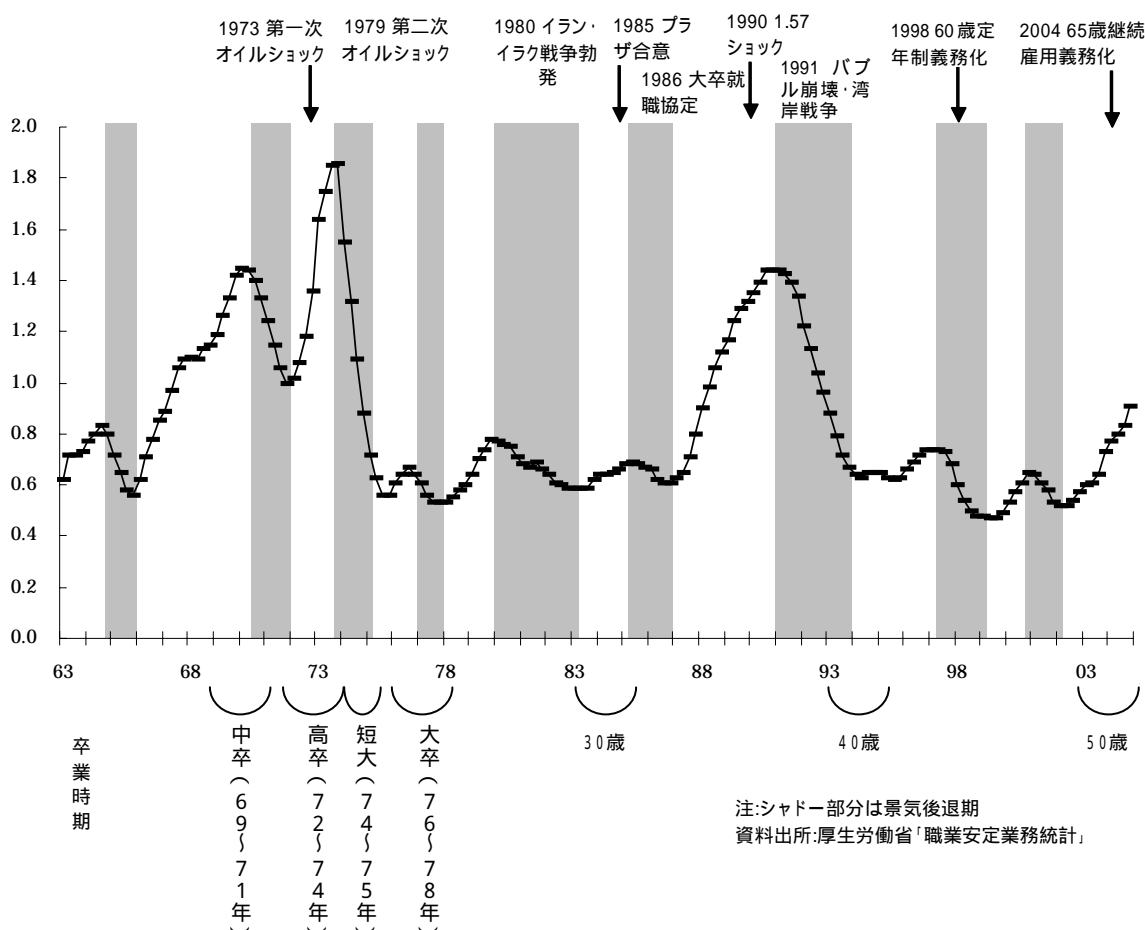
No.	性別	年齢 (満)	学歴	初職(年数は およその継続 期間)	調査時(2004 年)(年数はおよ その継続期間)	転職の回数 (パート・ア ルバイト除 く)	失業経 験	パート・アルバ イト期間合計 (学生時代は除 く)	職業にかかる資格	その他の活動、 学習、趣味・教 養	備考
43	男	50	大学院	正社員(9年)	正社員(教員)(21年)	1	0	なし			
44	男	51	高校(工業)	正社員(33年)		0	0	なし	危険物取扱者、ボイ ラー技師、高圧ガス 製造保安責任者	ボランティア	
45	女	49	短大	家事従業(4年)	正社員(保育士)(26 年)	1	0	1年、1種類	保育士		
46	女	50	短大	正社員(5年)	パート(8年)	1	0	11年、2種類		ハレーボール、公 民館運営委員	
47	男	50	大学	正社員(9ヶ月)	市議会議員(10年)	2	0	なし			
48	男	50	大学	契約(2年)	正社員(17年)	2	0	なし			8年前から出向 先の代表取締役 を担っている
49	男	50	高校(工業)	正社員(公務員)(32年)		0	0	なし		テニス、社交ダンス	
50	男	50	大学	正社員(?)年	自営業・フリーランス (独立)(4年半)	3	0	なし	建築士(1級)		
51	男	50	専門学校	正社員(15年)	正社員(16年)	1	0	なし	自動車整備士(2 級)、保険普通資格		
52	男	50	大学	正社員(9年)	正社員(1年)	4	10ヶ月	なし		地域学芸員の養成 講座	
53	男	50	大学	正社員(2年)	パート(1年)	3	2年	約2年、2種類		占い	
54	男	50	大学	正社員(13年)	正社員(15年)	1	0	なし			
55	男	50	大学	正社員(教員、教育委員会)(27年)		0	0	なし	教員免許		
56	男	50	高校(工業)	正社員(31年)		0	0	なし	情報処理技術者	ゴルフ、筋力トレ ニング、登山、山ス キー	
57	男	50	高校(農業)	正社員(2年半)	正社員(23年)	2	0	2年、2種類	ボイラーに関する資 格、危険物取扱者	ハイキング、登山、 ゴルフ	
58	女	50	短大	自営業・フリーラン ス(ピアノ/教師)(2 年)	自営業・フリーランス (ピアノ/教師)(18年)	4	0	なし	音楽教室の音楽能力 検定	ピアノ、エアロビ	
59	女	49	高校(商業)	正社員(2年)	家事従業(自営業の 従業員)(15年)、 パート	1	0	数種類、各々1年 (本業と並行)		和服着付け1級	
60	女	50	短大	正社員(1年)	家事従業(自営業の 従業員)(29年)	1	0	なし		手芸、料理	夫のサポート程度、 育児に専念
61	女	50	大学	正社員(3ヶ月)	正社員(教員)(27年)	1	0	数ヶ月、1種類	教員免許		
62	男	50	高校(実業)	正社員(2年)	自営業・フリーランス (代表取締役)(25年)	0	0	なし		簿記	父親の会社に入社
63	男	49	大学	正社員(27年)		0	0				
64	男	50	大学	正社員(9年)	自営業・フリーランス (独立)(3年)	2	0	なし		麻雀、海釣り、軟式 野球、ゴルフ	
65	女	50	大学/専門学校	自営業・フリーランス(独立)(20数年)		0	0	なし	鍼師、灸師	登山、お寺巡り	28歳で開業
66	男	50	高校(工業)	正社員(2年)	正社員(30年)	2	0	0		ゴルフ、ソフトボ ール	
67	男	51	専修学校	家事従業	自営業・フリーランス (独立)	1	0	数ヶ月、1種類(本 業と並行)	理容師、美容師	剣道	
68	男	49	大学	正社員(公務員) (数ヶ月)	(障害者の作業所) (11年)	3	3年	2年、3種類		映画	

除く)が15年前後の者は3ケースであり、バブル景気と重なる時期に転職し、そのまま定着している。

現職経験年数が10年以内の人は、40代に仕事をかわったことになる。彼らは労働市場が悪化した90年代以降に転職している。こうしたケースは市会議員になっている人を除いて10ケースある。転職の内訳は、自営業への転身が4ケース、残る6ケースの中には正社員を希望しながらパート・アルバイトで働いている者も2ケース含まれる。これらは分析編で詳しく検討されているが、ほとんどが企業の倒産やリストラなどをきっかけにした転職や自営業への転身である。

高等教育卒(高専・専門・短大・大学)女性については、14ケースのうち、教員をしている2ケースが初職を継続している。また、初職ではないものの、若い時期に教員や保育士に転職した2ケースも仕事を継続している。他の10ケースは、子供が手を離れた時期に、家業手伝いや自営・パートなど様々な形態で仕事に復帰している。

図表1-2 有効求人倍率(季節調整値)の推移



本調査は事例研究であるが、これらの知見からは、以下のような示唆が得られる。

第一に、通常もっとも転職の少なく、安定しているはずの大卒以上の学歴の男性の転職が目立つ点が挙げられる。40代後半になって、意に染まず仕事を変えるケースも、高卒男性よ

り多く見られた。もちろん転職の意味は個々のキャリアによって大きく異なるため、詳しい吟味が必要である。

とはいえ、日本の特徴として、初めて仕事についた時の労働市場の状況が職業選択やその後の賃金などの労働条件に大きな影響を与えることが指摘されている。この人たちが大学を新規卒業して労働市場に参入したときはかなり厳しい労働市場状況であった。同年齢であるが、労働市場状況が良いときに新規参入した高卒者は、その半数が定着していることと比較すると、大卒者には新規参入したときの厳しい労働市場状況の影響を受けた者が一部にいる可能性は否定できないと思われる。

しかし、それよりも、もっと大きく影響したと考えられるのが、日本の雇用管理制度・慣行のあり方とその変化及びその原因である社会経済の状況である。70年代以降、2000年代初頭までの日本を眺めると、全体としては、70年代から80年代までは、一時、景気低迷の時期があったものの、その後急速な経済成長があり、やがて、バブル経済の時期を迎えた。その頃は、企業経営が拡大し、起業も多く、その一方で挑戦的な経営が破綻する倒産も多かった。全体としては、転職に必ずしもマイナスのイメージを持たない労働市場が存在した。当時は、転職者には専門性などの能力を生かして自らの可能性を試そうとする積極的な理由から行動を起こす者も少なくなかった。

ところが、調査対象者が40歳を超える90年代に入ると、バブル崩壊といわれる急激で大規模な景気の後退があり、日本経済の全体的な縮小がみられた。その結果、多くの民間企業では人員面の合理化策がとられた。これに少し先立つ時期に行われた公共企業体の分割民営化が労働者に与えた影響も見逃せない。折しも、少子・高齢化社会の到来が強く意識され、とくに製造業での高度技能の継承が重要だと唱われる一方で、各企業では従業員の年齢別構成が賃金やポストなどの処遇の問題とともに経営上の重大問題とされるようになった。また、「失われた10年」といわれる不況がその後も続き、雇用情勢は悪化したままであった。そのなかで、民間、公共を問わず多くの職場で中高年齢者の賃金抑制や管理職ポストの削減などが行われた。高卒で新規就職していた人は、この頃、既に熟練技能者となっていたり、技能継承のための指導的地位におかれていたことが多いのに比べて、大卒者の場合は、まさに初級から中間の管理職に到達した時期に当たるという時代の巡り合わせがある。いわゆる終身雇用制度と称された長期継続雇用を前提とする雇用管理制度が揺いだことが、全体としての大卒者の転職の回数に影響しているといえよう。

つまり、初職の選択がどうであったかという以上に、その個人が生きる社会の状況と所属する企業の雇用管理のあり方が個人の職業キャリアにいかに関与するかということに注目すべきだとの示唆である。

第二に、一般的なパネル調査に対する見方と、今回の調査対象者のイメージが異なっている点である。通常こうしたパネル調査に協力し続けて頂ける人というのは、安定した人生を送ってきた人ばかりであると想像される。

今回調査に応じて頂いた対象者は、現在の自分の状況を受け入れ、それぞれに折り合いをつけたり、納得している例がほとんどであった。だからこそ調査にも応じて頂けたのだろうと思われる。しかし対象者の職業キャリアや人生を詳しくうかがってみると、転職回数や安定しない現職について語る例があるように、平穩無事なキャリアや人生を歩んできた事例ばかりではなかった。調査を継続して承諾して下さった対象者の特徴は、世間一般に評価の高いキャリアを形成してきたというよりは、人生や生活を自己評価して総括的に肯定している方々であった。人それぞれ自分の生活やそれまでの人生の歩みのなかで、職業が占める価値の大きさや意味は異なるが、その大きさや意味に応じて人生と生活の現状を受け入れている状態にあり、調査協力を求めたのに対して援助的態度をとることができたと考えられる。詳しくは、次章に示すテーマごとの分析をご参照頂きたい。

第三に、職業資格の取得の状況にはどの学歴で就職したかによって特徴がみられる。一言でいえば、高卒までの学歴の場合は、機械・設備等の運転操作・管理に関する能力について技能検定等を受けるなどして、技能水準を証明するための資格を取得することが多い。一方、大卒以上の場合は、教員免許や医師、社会保険労務士、建築士等の職業につくための資格を取得した以外は、職業に関する資格が挙げられていない。しかし、これをそのまま単純に受け止めてよいかどうかは、さらなる慎重な検討が必要であろう。

これに関しては、まず、いわゆる、会社や官公庁勤めの事務系や営業系のサラリーマンが職業に関する資格を所持しているかどうかを質問されたときに、どのように回答する傾向があるかという問題がある。たとえば、ある時期に配置された職場で、現場作業者に急な欠員が発生し、危険物取扱いに係る資格を緊急に誰かが取得しなければならない切羽詰まった状況になったため、たまたま自分が当該資格を取得するということがあったとしても、それは現在の自分の事務的・管理的職種本来の業務とは関係しないと評価しているために取得資格として回答しないということもある。この点については、面接調査の中で、厳密に洗い出す方向での質問をしていない。

また、サラリーマンに最も重視される職業能力が資格制度に馴染まないという考え方もありうるし、ホワイトカラー向けのビジネスキャリア制度などが、まだ、一般に普及していないからという見方もあるであろう。

ただし、現時点で把握されているのは、対象者のうちの大卒のサラリーマンは、職業能力の開発は職場での業務経験が最も有効で、転職するにしてもそれまでの職場での実務経験が重要だと言う人がほとんどだということである。この点からみれば、職業に関する資格についてこれらの人々が有効性をさほど、あるいは、まったく認めていないために取得しなかったということがあると思われる。

以上の点については、今後、面接記録の詳細な分析を加えていくこととしたい。

なお、職業に直結しない学習活動や趣味・教養については、領域や分野においては、とく

に大きな違いはみられない。ただ、その内容や活動の動機についての分析をまだ行ってないので具体的な違いがあるかどうかまでは把握できていない。

第四に、全体としてみると、どの学歴でも転職経験と失業経験は連動しない傾向がみられる。失業期間のない転職がほとんどである。一般的には、日本人の転職には、準備期間が短く、不本意な失業を伴うようなイメージがあるが、転職回数が3回以上であっても失業経験がないという例も多い。この点は、これが在職者を含めた調査であることによるのか、特別な例であるのかどうかは明らかでない。仮に、失業中の者に限定した調査であれば、より長期の失業経験が全体傾向として把握されるのかどうか、今後、面接記録を詳細に分析するなどにより、慎重に検討する必要がある。

第五に、パート・アルバイト（生徒・学生時代の経験を除く。）に関して、性別の特徴が顕著である。女性の場合はどの学歴でも、パート・アルバイトの就業経験があり、しかも複数職種の経験を挙げる人が多い。男性では、わずかに、正規就職までのつなぎや本業を持ちながら副業などの例があるにすぎない。女性は、パート・アルバイト就業について男性とは異なる就業動機や働きがいを見出している傾向がみられる。この点についての具体的な内容はテーマごとの分析をご参照いただきたい。

注

大企業：公務すべて/卸売・小売・金融・保険・不動産・サービスは 100 人以上/左記以外 500 人以上

中企業：卸売 30 人以上 100 人未満/小売・金融・保険・不動産・サービス 5 人以上 100 人未満/
左記以外 30 人以上 500 人未満

小企業：卸売 30 人未満/小売・金融・保険・不動産・サービス 5 人未満/左記以外 30 人未満

第2章 分析編

第1節 調査から見えたコーホート特性

1. 1950年代半ばに生まれた人々が備えたコーホート特性

聞き取り調査を通じて、対象者一人一人の職業人生の多様さがクローズアップされることは言うまでもない。しかしその一方で、「1950年代半ば生まれ」というコーホートに固有の特徴が備わっていることも見逃すわけにはいかないだろう。この調査結果をまとめるにあたっては、このコーホートの職業能力の開発や職業キャリア展開の特徴が、いつ頃どのような社会・経済環境の下で為し遂げられていったのかについて、大まかであっても把握しておく必要があるように思われる。そこで以下ではまず、1950年代半ばから現在までの半世紀の特徴を駆け足で見ておく。

1950年代半ばといえば「もう戦後ではない」と高らかに宣言された時期に相当する。したがってこのコーホートは「高度経済成長期」の真っ只中で学校教育を受け、幼年期や思春期、あるいは青年期初期をすごしていることになる。それはまた白黒テレビが放映されだして後のことであり、わが国社会が「団塊の世代」を受け入れて、社会環境が急激に整備される中で育っていることでもある。

1970年代に入ると、このコーホートの一部には義務教育を終えて就職する者が出てくるが、ほとんどは高校に進んでいる。そして高校卒業後もさらに専門学校や短大、あるいは大学に進む者も少なくない。だから彼らの多くは、第一次石油危機の到来により高度経済成長期に終止符が打たれた時期に就職し、職業キャリアをスタートしている。換言すると、彼らの初期職業キャリアは「経済安定成長期」の中で育まれたわけである。

1970年代末に専用コンピュータによる文書作成機（ワードプロセッサ）が開発された。80年代に入ると電機メーカーがこぞって「ワープロ」を開発するようになり、その結果ワープロは、比較的短期間にそれまでのタイプライターに取って代わり、仕事の世界には必要不可欠の機器になった。ワープロはパーソナル・コンピュータの一種であるから、表計算機能など、使いこなすと便利な様々な機能も組み込まれるようになったこともあり、一部の専門家が扱うに過ぎなかったパーソナル・コンピュータがワープロとしても使える道具として普及してゆく。したがってこのコーホートは、学校を卒業した後の20歳代後半に情報処理機器やそれを駆使するソフトの習熟が求められるようになっている。

1980年代の後半、このコーホートの年齢は30歳代半ばに至る。自らが担当する仕事の世界も一通り習熟するようになっているし、また職務の遂行能力も十分培っている。この職業的に油が乗った時期に、わが国は「バブル」経済期に入った。この時期はわが国において物づくりが疎まれた時期であり、若者の「理工系離れ」が顕著となった時期でもある。そして、

わが国経済のサービス産業化が一挙に加速した。また、若年アルバイトに対する豊富な需要を背景に、求人情報誌発行会社が「アルバイトで暮らしを立てながら自分のやりたいことに突き進むのは、まさに若者であることの証明である」として「フリーター」なるキャッチコピーを生み出したのも、まさにこの時代であった。

そのバブルも 1990 年代初頭にはじけた。超優良企業といわれた金融機関は軒並みバブル期に抱え込んだ膨大な不良債権で首が回らなくなった。経済のグローバル化が進展し国際分業化がすすむと、わが国を代表する大手メーカーも高騰する人件費を嫌って物づくりの基盤を海外に移転させるようになった。長く日本の経済発展を担ってきた製造業の「空洞化」に伴って、人々の雇用は多様化し、パートやアルバイトなどの非典型雇用に従事する者が増加し始め、新規学卒者であっても学校を卒業するまでに正規雇用の職を得られない者が多数出現するようになった。それとともにひとつの企業に長期にわたって勤続しつづけることで得られる経済的なメリットも急速に低下していくようになった。そして 90 年代も後半になると、大手の金融機関をはじめ、これまで倒産することはあり得ないと信じられていた大企業すら倒産し、あるいは合併・吸収される事態が頻発する。すなわち、1950 年代半ば生まれのこのコーホートでは、職業キャリアをスタートさせてから 20 年以上経て、40 歳代に入ってから、勤め先企業の倒産や「リストラ」による失業のリスクの急上昇を経験するようになっている。

2. コーホートの特性とみなせる具体的な職業キャリア

以上のように、急ぎ足で極めて荒っぽい素描を試みただけでも、過去半世紀にこのコーホートが経験してきた社会・経済環境の変化は極めて大きく、しかもそれらは彼らのライフコースの節目の時期と重なり合っていることも多いことがわかる。聞き取り調査の対象者は、彼ら自身が意識しているか否かにかかわらず、こうした大きな時代の潮流の中に居たわけである。

では、聞き取り調査を通じてこのコーホートが共有する職業キャリア上の特徴は実際に見出せるのであろうか。それは、具体的にはどのような様相をとるものなのだろうか。

まず第一に指摘できることは、このコーホートは「新規学卒労働市場」を経由して学校から仕事への極めて円滑な移行を果たしていることである。今わが国では、学校を出ても働こうとしない「ニート」が多数存在することが社会問題化しているが、聞き取り調査対象者たちが初回就職していった 1970 年代半ばのわが国では、高校であれ、専門学校であれ、短大であれ、大学であれ、若者は誰もが学校を卒業すると就職するのが当然のことであった。四半世紀前のわが国では「ニート」は全く問題になっていなかったのである。のみならず、このコーホートが新規学卒就職した時期には「フリーター」もまた問題にされていなかった。わが国では 1990 年代末から、学校を卒業しても必ずしも「正規雇用」の職に就けない（ごく一部は「就かない」）フリーターを多数生み出すようになり、社会問題化してきた。しか

し今回の聞き取り調査の対象者は、学校を卒業すると直ちに「正社員」として就職しているのである。もちろん、対象者達の中には第一希望の会社に就職できなかった者もいる。とりわけ大卒者の場合は、長く続いた「高度経済成長期」が「石油危機」により終止符が打たれた後に就職しているから、就職口探しに奔走した者もいる。しかし、彼らは職業キャリアをスタートさせるにあたって「正規雇用」以外の雇用形態など全く念頭に置いていなかったことがうかがえるのである。四半世紀たった現時点から彼らの初回就職行動を眺めるとき、彼らが極めて手厚い雇用保障を受けつつ、学校から仕事へと移行していたことが理解できる。1970年代半ばにあつては、若者が仕事の世界に参入するにあたって新規学卒労働市場こそが唯一正統と認められた入職経路であったし、若者をそのように移行させることを当然のこととする認識が社会全体に広く共有されていた。そこに現在との際立った違いが認められる。

若者を新規学卒就職市場経由で正社員として就職させる仕組みを維持するためには多種多様な、社会的・経済的コストあるいは犠牲が払われていたはずである。例えば、新規学卒者は職業的には極めて未熟であるにもかかわらず、学校卒業と同時にそのほとんどは「正規雇用」される。そして、初回就職した企業に長く勤続する中で能力開発も継続することが期待された。こうした雇用と能力開発への保障を得る代償として、新規学卒者は自由な進路選択が規制され、あるいは職業選択の自由を大きく制約されてきたことになる。生徒・学生の新規学卒市場経由の就職を唯一正当化し若者の雇用先の配分に大きな役割を果たしてきた学校の進路指導や就職指導の内容は、新規学卒市場が与える方向性に沿ったものとならざるを得ないからだ。しかし、こうした社会的・経済的コストや犠牲を、誰がどのような形で担い、あるいは支払っていたか、まだ十分な考察はなされていない。しかし、毎年多くのフリーターが送り出されていくようになった現在、若者の学校から仕事への移行に対して新規学卒市場が果たした役割を検討し直すことが重要と思われる。

特徴の第二は、対象者は30歳代後半に「バブル」を経験している。急激に加熱・膨張するわが国の経済社会にあつて、そうした時代背景の後押しを受けながら、しかし「主体的」に職業キャリアの転換が図られたケースが結構見出せるように思われることである。

第三の特徴は、バブルがはじけた後の深刻な不景気をもたらしたものと見えるが、勤め先企業の倒産やリストラにより、否応なく職業キャリアの転換が迫られているケースが目につく点である。

第四の特徴としては、40歳代も後半になると、子供の進学・就職問題以上に「親の介護」問題が彼らの職業人生に大きく影を落とし始める点である。親と同居している者や、近い将来に同居を考えている者もいるし、配偶者も含めて親の介護負担の重さを痛感している者もいる。高齢化が急速に進む中で、聞き取り調査対象者は自らの老後に思いをはせる余裕はいまだなさそうである。

これ以外にも、情報化・サービス産業化の潮流がこのコーホートに固有の職業キャリアの

展開にも強く影響しているであろうことが十分予想できる。いずれにせよ、新規学卒として入職した企業で勤続すること、そしてその職場の内部で職業キャリアを発展させ続けることこそがもっとも望ましいとするキャリアモデルが大きく揺らぎ、あるいは崩壊していく中で、50歳代以後の職業人生を新たに切り開いていくことが要請されていることになる。このコーホートの職業キャリアの展開過程の実態や、それに対する評価、あるいは今後のキャリア形成方針などを明らかにすることの中から、現代の若者がキャリア形成していく上でもっとも必要としている支援が何か明らかにされるように思われる。

第 2 節 職業選択は人生模様

1. 概観

1.1 担当部分全体を通して体験した職業人生に関する感動、感慨

調査対象者は男子 5 名、女子 3 名の 8 名。今年、2004 年で人生 50 年を迎えた人達である。学校を卒業し、自分の進む道を定め、世の中に出て約 30 年の歴史を刻んできた。今は人生 80 年時代を迎え、50 年はまだまだ中間点であるが、それぞれの方にお会いして、その容貌や雰囲気から歩いてきた歴史の片鱗が窺えるように思われた。失礼ながら、対象者をマラソンランナーに例えると、まだ自分のペースが掴めず、必死の形相で走っている人、ペースをつかみ、レースの距離配分を考えながら淡々と走っている人、ジョギングを楽しむように柔らかな表情で走っている人、3つのグループに分けられるように思えた。学歴は様々で、実業高校中退、普通高校、工業高校、実業高校、商業高校、女子短大、商科大学、女子大と 8 人 8 様である。時代背景を見ると、成人となった 1975 年は、完全失業者が 100 万人を突破した深刻な時代であった。厳しい環境ではあったが、各自自分の道を選択し、青雲の志を持って世の中に飛び出したはずである。それから約 30 年、オイルショック、バブル経済、その崩壊と荒波の中を頑張ってきたに違いない。現在の状況は、学校を出て就職したその会社で 31 年目を迎えたもの、転職が成功し、順調に働いているもの、不況の影響を受け転職を繰り返し、今も仕事が定まらないでいるもの、さまざまである。しかし、みな家庭を持ち、子供を育て、良き父親、夫となり、あるいは良き母親、妻として立派に家庭を守っている。ライフ・ワークバランスを見ても、結婚までは仕事人間だったが、結婚後は家庭優先と変わった人が多い。仕事に関しては、同じ会社で 31 年間ひとつの仕事を根気よく遂行してきたものがある。その粘り強さ、一徹さに頭が下がる。大学を中退し、専門学校に入りなおし、成功したものもある。一方、高校中退者と大卒者は今も苦労している。初職を辞めた後、会社に恵まれず転職を繰り返し、バブル崩壊後の今も仕事が定まらない。見栄や外聞も無く、家族を守るためにアルバイトで生計を立てる必死な姿は、不本意な世の中と闘っているように見える。心から「頑張ってください」とエールをおくりたい。3人の女性は元気いっぱいである。子育ても終わり、自分の時間を取り戻し、マイペースで楽しんで働いている。生き様は、3人3様だが、男性には無い生きるしたたかさと頼もしささえ感じられる。生きる上で必要な知識や経験を吸収し、仕事や趣味に活かすことが本能的に男性より優れているように思う。人生の自己評価に関しては、二人を除いて、おおむね「満足」しているという評価であり、心から拍手をおくりたい。

1.2 キャリア形成にかかわる特徴と問題

調査対象者が高校を卒業した 1974 年は、前年に第一次オイルショックが起こり、経済成長率がマイナス 0.5 パーセントという、戦後初のマイナス成長を記録した年だった。翌年は

さらに不況が深刻化し、完全失業者が100万人を突破している。このような社会環境の中で、対象者は工業高校の機械科や専門学校、短大の幼児教育科、商科大学の商科等に進学し、技術や資格を目指していたことが窺われる。保護者に会社員が多く、手に職を持って安定した職業人生を歩ませたい親心がそこに見える。社会不安が募る中で職業選択を迫られた年代で、そのためか仕事の選択に、安定志向、守りの姿勢が見える。親元から通える仕事を選んでいるのもこのグループの特徴である。キャリア形成にかかわる転機として、進学、昇進、資格取得、結婚、生協活動等を挙げている。ドラマティックな転機や派手な出来事は見られない。この世代は、オイルショックによる2度の不況、バブル崩壊後の不況を入れると3度の不況を体験している。安定志向がこの世代の生き方の特徴かもしれない。唯一冒険とも思える人生経験をしたのが、「進学」をキャリア形成上の転機として挙げた彼である。勇気を持って行動を起こし、自分の関心ある分野に方向転換し成功している。オイルショックの真只中で、世の中に将来への不安感が広がっていた。親に高い入学金を払ってもらい入学した大学だったが、自分の求めている方向性と違うことに気づき中退を決意した。興味のある専門学校に入り直し、病院で働くために国家資格を取った。親は何も言わず支援してくれた。その後のキャリアも自身の描くキャリアマップに乗って順調にしているように見える。「昇進」をキャリア形成の転機として挙げた彼にとって、最初の昇進が、自己の成長を確信し、自信につながる契機となった。それから組織や仕事の全体が見えるようになった。「資格取得」を転機としてあげた彼女は、初職を3年半で退職した時、たまたま薦められて取った電話交換取扱者認定書が、その後の自分の人生を決めるきっかけとなった。現在も電話交換手として働いている。「結婚」を転機として挙げている人は多い。結婚を契機に、仕事への責任感や考え方が前向きになったことを挙げている。「生協活動」を転機として挙げた彼女はこのメンバーの中で、唯一の外向的なパーソナリティーに思えた。子供のアトピーの問題から生協の食品に関心を持ち、会員となったことがきっかけで、支部長・理事に選ばれ、ネットワークが広がった。活動が評価され、市議員にノミネートされるまでになった。一方、キャリア形成上の問題点として気づくことは、このグループは人生の中で、自己啓発や自己投資の時間が大変少ないことである。確かに、高卒の二人は、技術職に必要な技術訓練や資格取得をしているが、会社の指導や強制である。また、専門学校を出た病院勤務の彼も、その後放送大学で勉強している。しかし、その他の人たちにはほとんど自己啓発等が見られない。キャリア形成上でのもうひとつの問題は、子供の病気や教育の問題である。てんかんの息子を持つ母親と知的障害の息子をもつ父親がいる。職業選択の上で、大きな障害となっている。いずれもパートナーと協力して育てなければならず、時間や場所に縛られない仕事を選ばざるを得ない。もうひとつ、子育ては済んだが、子供が自立せず、ニートやフリーターで困っている問題もあった。

2．事例分析

70年代は深刻な不況があり、就職には厳しい時代であった。75年には完全失業者が100万人を突破した。しかし、前半は就職への影響も少なく、高校中退者および高卒グループにおいては、ほとんどの者が学校推薦や紹介で就職が決まった。ただし、このときの決め方がその後の人生に大きく影響しているように思う。他人の薦めるままに就職してしまった人と、自分の能力や会社の内容等を検討して選択した人の違いが、その後の人生の明暗を分けている。高校を中退して社会人になった彼の場合は、前者で、ほとんど自分で進路を考えることをせず、友人の誘いで流れるままに仕事を転々としてきた。今「もっと勉強しておくべきだった。仕事を慎重に選ぶべきだった」と反省している。大学（短大含む）卒グループは、第二次オイルショック等もあり、就職難の時代背景があった。そのため苦労しないで済む、安易に仕事を選択した。これが仕事のミスマッチや不安定な業種という結果になった。その後、会社がバブル崩壊後の不況をもろに受け、リストラの対象となり転職を繰り返し、今でも定まった仕事に就けないでいる。対象者全体の転職や異動の平均は約4回である。高卒で就職し、そのまま31年間、同じ会社（病院）で勤務している者も4回異動している。その他の人たちは、家庭の事情や、会社の倒産等で、転職を余儀なくされ、3人が5回転職している。転職が成功している人、上手くいかない人の差は、事前の準備にあると思われる。成功している人は前職をやめる前から情報収集や登録等の活動が見られる。上手くいかない人は会社を辞めてから就職先を探しており、失業の焦りから当面の打算で仕事を選択しがちで、ミスマッチに繋がっているように思われた。家庭の問題では、子供のことが挙げられた。知的障害の息子を抱える父親は、介護の時間を認めてくれるような人事制度や環境を持った職場が無いこと、てんかんの病を持つ男子中学生の母親は、甘やかして育てた報いが今出てきている悩み、フリーターの息子を抱える母親は、自立しない息子の不安等々。人生の自己評価では、家庭に問題がなく、現職が安定している人たちの満足度は高く、現職が定まらない人たちは過去の反省点が多く、やり直しがきくならやり直したいという発言もあった。

3．総括

対象者8名が歩んできた職業人生は、バブル経済の好況もあったが、3度の不況に見舞われた大変厳しい時代であった。それでも、それぞれの道を切り拓いて30年間頑張ってきた。地元を離れず、安定企業を求め、技術と資格を持って、堅実な人生を送っていることがこの人たちの特徴である。ひとつの会社で働き続けている者、転職はあったが、働き甲斐のある職場を見つけ順調に働いている者、会社都合から転職を余儀なくされ、いまだに定職がない者と、いろいろな人生模様である。しかし、今苦労している人も結婚し、立派な家庭を築いている。自信を持って欲しい。50年は、ゴールではない、人生80年時代では通過点ではない。これからの10年が大切。50代を如何に生きるかである。まだまだ成功する機会は十分ある。

第3節 職業人生における専門性の確立

1. 概観 - 職業の選択

インタビュー対象者の7人(男5人、女2人)は、全員が高等学校に進学した。学歴は高卒、専門学校卒、短大卒、大学卒と様々である。学歴は初めにどんな職業に就くか、どのような職歴を形成するかに関係している。

生徒や学生のと看になるうと考えていた職業に初職としてついた者は1人もいない。これは、経済的なことで思うように進学できない、志望する大学に入学できない、就職難で思う業種の会社が採用しない、入社試験を受けてもパスできない、また、運よく望む会社に入れても思っていた部署に配属されなかったなどの事由による。

7人のうち、初めて就職して、現在も同じ職業または同じ会社等に勤務している者は3人である。会社の勤務は辞めて、自営業や経営者になった者が3人、1人は専業主婦となっている。

これらの方々には共通した性格傾向がみられる。それは明るいことと元気なことである。明るさは、自分が好きで自己効力感を持っていることによる。元気さは心身が健康で仕事に生きがいを持っていることによる。各人は危機や転機に際し、場面を切り抜ける基礎的な能力を有し、次の場面に適応し、そこで職業人としての具体的な目標設定や行動計画を立て、実践してきた。様々な出来事に遭遇しても挫折することなく、職業を通じてキャリア形成をしている。

インタビューで感じたことは対象者の方々は、自己を語りながら、これまでの職業人生も反芻し、総括しようとしていたこと、聴いてくれる人を欲していたこと、もっと話したいと思っていることであった。話す事柄や感情表現に共感したり、同感することが多かった。

個人の職業人生はその人のものであり、個人が職業を通してどのように生き方を表現したかということである。インタビューをして、各人の職業人としての生き方、考え方、結果への責任感を聴いた。各々の方が一つの生き方モデルであり、仕事を通じて、真剣に自己表現をしている姿に「所を得たものは美しい」と感動した。

2. 事例分析

2.1 社会環境とキャリア形成

職業人生を通してキャリア形成をするには、職業人としての基礎的な能力、専門的な知識と技能、学校から職場への移行、職業についての訓練・研修、自己啓発、転機、転職などが関係する。また、本人のやる気、向上心とキャリア形成を支える環境条件が必要とされる。

7人の方が高校を卒業した1973年は、第一次オイルショックで物価が高騰し、物資が不足していた。その後、景気が落ち込み就職難の時期があった。大学入試も思うようにいかず、専門学校や短大に入学したり、浪人をして、大学へ入ったりした。卒業して社会人になる際

も希望する会社等には入れなかった。

1979年には第二次オイルショックがあり、エネルギー問題が再燃した。その後日本経済は立ち直り、バブル経済の時代となった。この間に自営業に転じたり、海外赴任、留学、外国の企業との取り引き、人事異動、転職等を経験した人もいた。

1991年にバブル経済が崩壊し、日本の産業社会は厳しい冬の時代に入った。

1995年1月17日に阪神大震災が起きた。神戸や淡路島に大きな被害が生じた。この時に現地で仕事をしていて人と復興工事のため建設会社の支店を立ち上げに行った人がいた。経済の低迷は続き、企業や組織は再構築を迫られた。この事は働く人々に様々な影響を与え、個人の労働観も変化した。

最近の産業社会は景気は回復したが、国際化の中で企業間の競争による構造変化が続いている。働く人にキャリア形成によるエンプロイアビリティが求められる時代になった。

各人は日本の社会や経済の変動、企業や組織の変革などの影響を受けながら職業人生を送り、自らのキャリア形成をしてきた。併せて家族を大事にして、仕事と家庭のバランスをとってきた。

対象の方々は、自分は「こうなりたい」という職業人としての自己像に向かって歩んできた。時系列で見れば、なりたい自分になるための挑戦の連続であった。そして、転機を配偶者の協力により、チャンスにした。おかれた職場環境や状況のなかで、将来の自己像に刺激され動機づけられて、自らの欲求を満たすために行動し、実践することにより実力をつけてきた。これまでの職業人生の自己評価は高く、100点満点として70点から90点の範囲に入っている。

このように自己に満足した姿で今日いられるのは、転機における選択や行動した結果に責任を持ち、結果が自らの満足か不満足かにかかわらず次の目標に挑戦するという共通の生き方である。職業人生には様々な出来事があり、苦難や困難を乗り越えてきた現時点の自分を肯定しているのである。

2.2 専門職としてのキャリア形成

対象者のうち4人が会社を辞めて、3人が経営者となり1人が専業主婦をしている。現在も勤務をしている3人は、1人が大企業の部長をしており、2人が専門職となっている。

ここでは、専門の分野で活躍している2人の事例について述べる。

事例1 内視鏡治療の専門医師（ケース25）

1年前から中規模病院に勤務し消化器科の部長をしている。内視鏡治療の専門医として、自分の技術、処遇に満足している。

高校時代は父親のように好きなことがやれる教師になろうと思っていた。尊敬する父から「お前は人前で話す職業は向いていないから、医者になって人のために尽くせ」といわれ、上京し、二浪して国立大学医学部に入った。医学部を卒業して、研修医となってから今日ま

で七つの病院に勤務した。これまで勤務した病院では、内科、精神科、心療内科、消化器科で修業してきた。内視鏡治療の専門医の道は自分で切り開いてきている。副院長、院長のときは権限もなく、価値観の相違により経営側と対立し、臨床医が自分に向いていると思った。臨床医としてのライフワークは第一が内視鏡の治療、第二を心療内科とし、今の病院で両方の治療を行っている。今でも、国立大学の精神科と心療内科に週1回行って修業している。

医学はサイエンスかアーツかと問うと、人間科学の分野から患者をみて、内視鏡の治療技術を大事にしているので両面が必要と答えた。山本夏彦のことは「人生は死ぬまでの暇つぶし」が好きだという。小さいときから絵と音楽が好きだった。高校時代は父と共に農村部の青年たちと歌をつくる運動をした。大学時代は合唱団に入っていた。病院に勤務してからはバンド活動をしてきた。好きな絵を続けてきたことが、内視鏡でみえる臓器の内壁をスケッチするのに役立っている。音楽はバンド活動で入院患者や地域の人達を癒すことになっている。音楽療法をやってみたいという。

医師は「病気だけをみないで病人をみる」との批判については、臨床医は技術がなければ一流にはなれないと自覚しており、患者を一人の人間として対等に接し、その人への生活への配慮のできる全人的な医療に心掛けている。内視鏡の分野では、日本の三本指に入る三人の医師に師事しており、学会や専門誌に研究成果を発表している。心療内科の診療にあたる医師でもあり、「医師に求められるのは人間愛の精神、手術のときの判断力と決断力、そして共感とか誠意を持って真剣に患者に接することである」という。

昨年、父親が死ぬ直前に生老病死をテーマとした本を出した。父の死を深く受け止め、自分が父親に縛られていたことを認識している。子どもの教育、家のローン、支えてくれている妻のことなどに配慮し、内視鏡治療における一流の医師を目指している。

事例2 農業改良専門技術員（ケース23）

2004年現在はA県の本庁の農業改良専門技術員として、農業環境保全教育を推進する係の責任者をしている。早く農業普及センター長となって現場に出たいと申告している。

大学は薬学部の農芸化学科に入ろうとしたが合格できなかった。浪人をするのが嫌で、短期大学農学部に入り、卒業後、地元の県職員となった。以降、農業改良普及員として、県下の農業改良普及所を何カ所か異動し今日に至っている。

30歳のとき、自ら研修企画書を作成し、上司の許可を得て、ある大学の農学部で1年間内地留学をした。その大学ではネギの障害予防を研究し、教授、助教授、助手の人たちから指導を受けている。研究成果を園芸学会で発表するなどしている。今では当時、助手をしていた人が教授となっていて良好な関係を続けている。

32歳のときに希望してアメリカの州立大学に留学して、農業の調査研究を1年間行った。ここでは環境汚染防止の研究と共同改良事業の実態調査として農家の経営状況を見て回り、多くの知見を得ている。

内地留学やアメリカ留学で得たのは、知識や技術の習得や情報入手よりも、大事なのは、いかに多くの人と知人になったかだという。その後の仕事で、これらの人々との人的ネットワークが役立っている。帰国してからも、同僚を誘って毎年、アメリカに7日～10日位、行って農家を回ったりしている。このことは知人との友好を深め、農業の変化をみたり、後輩の研修に役立ったと思っている。

阪神大震災では大きな被害を受けた。当時は住居、水道、交通機関等がやられ、食べるものもなかった。人は食べなければ生きていけない。10年もたつとそれを忘れ、物やお金に価値をおくようになってしまっている。地元の島には、大震災でできた断層が保存されている。島では水田にタマネギをつくり収穫したら、すぐに水稻を植える二毛作をしている。自分の開発したタマネギを植える器具、タマネギを掘る機械が断層の続く地域で農家の人々に使われている。これらの機具はアメリカ留学から帰って、農機具メーカーと共同で開発したもので、今では全国で使われているという。「すごい発明ですね」というと、農家の人々の腰痛予防や負担を減らすためにしたことですと答える。職住近接の有利な条件で余裕があったからできたことという。

今は片道2時間の本庁勤務。早く現場に出て時間をつくり、世界中の野菜市場を見て回りたいと望んでいる。また、妻や子どもと旅行するなどの時間が欲しいという。

3．総括

二つの事例の職業選択は学歴により決定されている。職業についてからも、この仕事は自分に向いているかどうかの吟味と適職探しをしている。

専門職になっていく過程では、幾つかの職場や研修の場を経験している。これは計画的なものもあれば、与えられたものもある。注目されるのは、自ら研修計画を立て周囲の了解を得て、それを実践したことである。キャリア形成においての上司のサポートについては語られていないが、組織や職場の同僚の支援があったと推察される。自発的にキャリア形成ができたのは、家族、特に妻のサポートによるところが大きい。これは二つのケースとも、妻や子どもを大切に、仕事と家庭のバランスを上手にとってきたことにも関係している。

こうして自らの可能性を探り、研修、見学、留学などにより、技術や技能を向上させている。一人は内視鏡治療と心療内科の臨床に携わる全人的医療を行う医師、もう一人は留学先の先生方の指導を受け続け、農家の指導や農機具開発に実績をあげた農業改良専門技術員となっている。

両者に共通する行動理念は、職業人生は自分の判断で進路を決め、専門性を身につけるということである。そして社会のためにとの思いが強く、出世欲や名誉欲が低いことである。

あたり前に生きてきたといい、専門分野で実績をあげたことは当然のことと認識している。仕事にのめり込まず、自分の専門性を高めたり、家族のために働いている。この根底にあるのは、現場主義であり、実践によってキャリア形成がされるという考えである。

第4節 就学期におけるキャリア形成支援教育の重要性に関する提言

1. 概観

70年代に職研が行った「進路追跡調査」の元対象者68名に対する調査プロジェクトの一環として東京および埼玉県在住の6名の元対象者(以下、対象者と記す)にインタビューを行った。

本調査プロジェクトは、68名の個々の職業人生を約35年間にわたって追跡した他に類を見ない調査という点で極めて貴重である。また、対象者が同一世代(1953年から55年の間に誕生した者)であり、成長過程の同一時点でインタビューされてきた調査という点で有用であると考えられる。なぜなら、同調査における同一世代という枠組みは、社会的環境の構成要素たる情動的環境¹⁾の中でも時代的に異なる教育場面や各種メディア、あるいは流行等を通して得られる一般情報を統制していると思なすことができ、これによって個人属性と同調査において統制されない個別情報(以下、個別情報と記す)との相互の係りによって影響されたキャリア形成のありようを規定する事象(以下、キャリア形成規定事象と記す)が浮かび上がることが期待されるからである。

このような観点から対象者が語った個々の職業人生から示唆されたキャリア形成のありようについて、以下に所感を記したい。本稿においては、キャリア形成²⁾³⁾を外的キャリア形成と内的キャリア形成とが交じり合ったものと定義して論を進めるものとする。

なお、わたしは対象者と奇しくも同時代の同士であり、インタビューを通じて語られた一語一句に自身の体験と重なることが多々あったため深い共感を覚えた。

2. 事例分析

2.1 対象者のプロフィール

表4-1は対象者の主なプロフィールであり、それにインタビュー内容を加えてプロフィール関連事項を整理すると次のとおりであった。

対象者は、1954年生まれ3名(全員男性)、55年生まれ3名(2名女性、1名男性)。最終学歴で分類すると大卒者4名(3名男性、1名女性)、高卒者2名(男女各1名)。高卒者は両者とも商業科を卒業していた。

対象者は全員新卒として初職に就いた。しかし、その際の就職環境について、高卒者(1973年、74年卒業)はどちらも希望どおりに就職できる状況であったと述べたが、大卒者は78年に卒業して公務員となったC氏がコメントしなかったことを除き、他の3名(1977年、78年、79年卒業)はいずれも就職難であったと述べた。特にE氏は78年に卒業したが、同年の大卒女子の就職環境は極めて厳しい状況にあったという。

また、初職に就いたその後の勤務の継続状況についてみると、対象者のうち女性は両者とも就職後3年以内に退職した。男性は転勤・配転を経験しつつも勤務を継続している者が2

名、勤務先企業を転職した者が1名、そして、勤務先企業を転職した後さらに社労士事務所を開業した者が1名であった。

表4 - 1 対象者の主なプロフィール

対象者	性別	年齢	結婚	最終学歴	職歴(初職/2職/3職)
A氏(ケース27)	男	50歳	既婚	大学工学部	電設会社(技術)/商工会/社労士開業
B氏(ケース30)	男	50歳	未婚	高校商業科	百貨店(売場/外商)/建設会社(営業/CS)
C氏(ケース31)	男	50歳	既婚	大学法学部	税務署(税務調査官/上席〃/統括〃)
D氏(ケース29)	男	48歳	既婚	大学商学部	電機メーカー(事務)
E氏(ケース32)	女	49歳	既婚	大学文学部	服飾メーカー(経理・秘書)/アルバイト(ホテル接客)/パート(食器洗)
F氏(ケース28)	女	49歳	既婚	高校商業科	証券会社(事務)/パート(銀行営業/生保営業/スーパー売場)

2.2 個人属性と個別情報との相互の係りによって影響されたキャリア形成規定事象

個人属性と個別情報との相互の係りによって影響されたキャリア形成規定事象という観点から対象者が語った職業人生を再構成すると表4 - 2のようにまとめることができると思われる。なお、キャリア形成規定事象は個人属性と個別情報との相互の係りに影響されると思われるものを記したが、これらの実証については分析の全ケースへの展開、および先行研究に対する文献研究に期待したい。

一方、キャリアを構築する個人を支援するサポートシステム設計にあたっては、キャリア形成規定事象に関係する個別情報の取扱いについて検討することが合理的な戦術として有効と思われる。これまで個人属性と個別情報との相互の係りに力点を置いて述べてきたが、サポートシステムの設計においては取扱いの可能性という観点から、ここより個別情報に着目して論を進めることとする。

表4 - 2 個人属性と個別情報との相互の係りによって影響されたキャリア形成規定事象

個人属性	個別情報	キャリア形成規定事象
能力、性格、興味、	(1)親固有の職業情報	初職選択
学歴、職歴	(2)地域固有の職業に関する情報	キャリア選択肢の拡大(転職)、自己の職業の展開
進路に関する願望、	(3)職種、職場固有の人材育成に関する情報	職業固有の人格への変化、キャリア選択肢の方向付け
個人の事情 等	(4)広義の仕事に関する情報	内的キャリア形成

以下において、表4 - 2に示したキャリア形成規定事象に関係する個別情報のうちサポートシステムのニーズが高いと思われる(1)および(4)にみられる特徴と問題の考察を試みたい。

(1)初職選択に関係する親固有の職業情報にみられる特徴と問題

対象者に見られたキャリア形成規定事象として初職選択を、これに関係する個別情報として親固有の職業情報を取り上げてまとめたものが表4-3である。初職選択に関係した親固有の職業情報は、程度に違いはあったが、6名全ての対象者が語った内容から確認された。

表4-3 対象者が語った内容にみる親固有の職業情報

対象者	親固有の職業情報
A氏	父親が勤務する会社での架線電気工事のアルバイト体験をきっかけとして将来電気工事の仕事に就きたいと志望するようになり、結果、高校卒業後は大学工学部電機工学科を経て、初職は同社に就職して電気工事業務を担当するようになった。
B氏	高校卒業後の進路選択に際し、両親の意向を汲んで就職を選択。さらに業種選択においても結果的には百貨店に就職したが、当初は父親が時計商であったことから輸入時計を扱う会社への就職といった漠然とした思いがあった。
C氏	同氏は公務員となったが、大学に進学したときから卒業後の進路について公務員としての就職をイメージしていたこと、その理由として父親が公務員であったことを取り上げた。
D氏	就職活動を行っている際、父親の関係で紹介してもらった会社を訪問した。
E氏	高校在学中、および初職の服飾メーカー退職後のアルバイト先は母親が勤務するホテルであった。また、同氏の大学進学の際の学部選択には親の意向が強く反映されているが、卒業後の就職場面では親の援助を断ち自身で就職先を決めた。
F氏	高校卒業後の進路選択に際し、両親の意向を汲んで就職を選択した。親は当初同氏に家業を継いでもらうことを希望していたが、家業の苦しさを子供にはして欲しくないという思いから同氏に就職して、サラリーマンと結婚することを勧めた。

表3から親固有の職業情報は次のように分類整理できると考えられる。

- ・親が職業に従事していることそのものの情報
- ・親が職業に従事していることによって得られる情報
- ・従事経験はなくとも親が間接的に入手した職業知識に関する評価、好みを含む情報
- ・親が子供に期待することによって生じる情報

さらに、これらの親固有の職業情報は次のような特徴を有すると考えられる。

- ・初職選択時に限らず普段の家庭生活、親子関係を通じて親から子に伝えられ、蓄積されており、子の初職選択というイベントをきっかけに顕在化するものである。
- ・顕在化が肯定された結果であるか否定された結果であるかは、子の持つ属性に影響されるものと思われる。

初職選択に関係する親固有の職業情報にみられる問題としては、現在の就学者の初職選択場面において必要な職業情報と親固有の職業情報の格差によって生じる機会損失等が考えられる。就学者の初職選択場面において必要な職業情報は、現在の方が対象者の当時よりも格段に多様化していることは自明である。よって、親固有の職業情報は対象者の当時よりも現実から乖離、不足しているということが十分に想定されることであり、初職選択において必要な職業情報との格差も拡大するばかりである。このことは、個人のキャリア形成という観点からは当然として、初職選択が成功したと評価しがたい就業者の増加に直結しており就業

人口減少状況下における労働政策という観点からも相当に深刻な問題である。

この対策としては、初職選択場面において必要な職業情報と親固有の職業情報の格差を縮小することよりも、初職選択場面に達する以前の就学期に何らかの手段で職業情報を教育することこそ重要であると思われる。これを就学期におけるキャリア形成支援教育と位置付けるならば、遅くとも小学校高学年段階から職業情報の提供等職業教育の開始と充実が望まれる。具体的には、次のようなことが当面の課題になると考えられる。

- ・ 現行の科目にキャリア形成に繋がる内容を盛り込む。
- ・ 教員養成課程においてキャリア形成支援教育の理論やスキルを必修とする。
- ・ キャリア形成支援教育の理論やスキルを未習得の教員に習得するための研修を実施する。
- ・ いずれにせよ、学校現場においてキャリア形成支援教育の理論やスキルの指導にあたるリーダーの養成は急務であろう。

2.3 内的キャリア形成に関係する広義の仕事情報の特徴と問題

2.1、2.2におけるテーマは、どちらかという仕事の分野、種類、職位など外的キャリア形成に関連するものであった。しかし、実際にキャリア形成を考える場合は外的キャリア形成のみならず生きがいや働きがいといった内的キャリア形成も併せて考える必要がある。このために横山は組織の中の仕事(狭義の仕事)ばかりではなく、広義の仕事²⁾³⁾にも注目することの重要性を指摘している。なお、広義の仕事について横山は次のように定義している：あらゆる社会活動、文化活動、政治活動、スポーツ活動、地域への貢献などを含む多様な個人的/組織的なボランティア活動。

さて、対象者に見られたキャリア形成規定事象として内的キャリア形成を、これに関係する個別情報として広義の仕事情報を取り上げてまとめたものが表4 - 4である。内的キャリア形成に関係した広義の仕事情報は、6名中5名の対象者が語った内容から確認された。しかし、広義の仕事情報を強く意識していたのは現在パートとして勤務中の女性対象者であった。

表4 - 4 対象者が語った内容にみる広義の仕事情報

対象者	広義の仕事情報
A氏	職務ではあるが、2職におけるミニ工業団地開発に関する自発的取り組み
B氏	初職におけるラグビー部での活動
C氏	特に語られなかった
D氏	現在も継続している大学時代の仲間達と設立したスキークラブでの活動
E氏	町会の手伝いもやっているが、「子供のために、子供のお返しという思いで」主にPTA役員を行ってきた。
F氏	多いときは、老人介護ボランティア、学校、町会、そして子供会と5つ掛け持ちで役員をやった。現在は子供が成人したので学校、子供会の役員はやっていない。最近、ビーチボールバレーを始め世話係りとしても活動している。

表4 4にみられた広義の仕事情報は次のように分類整理できる。

- ・職場組織内における社会活動、スポーツ活動。
- ・職場組織外における社会活動、スポーツ活動、個人的/組織的なボランティア活動。

内的キャリア形成に関係する広義の仕事に関する情報にみられる問題としては、対象者のうち現職の4名に共通してみられるように広義の仕事情報が内的キャリア形成にとって重要であることの現状認識が低いことである。これは現職中という状況が本来的に狭義の仕事の拡大上昇に価値の基準を置くものであるからと思われる。

3. 総括

内的キャリアのあるべき姿は個人の価値観と広義および狭義の仕事情報との相互の係りによって変化するものであるから、この問題に一律の対策はないと思われる。しかし、激しく変動する現在の産業社会においては、外的キャリアについて予期せぬ変化がいつ起きるとも限らないのが一方の事実である。よって、キャリアを構築する個人を支援するサポートシステムには、このような事態を支える意味から普段から内的キャリアの発達にも寄与する方策を取り入れる必要があると思われる。

注

1)大橋 力 (1989)『情報環境学』朝倉書店

2)横山哲夫 (2004)『キャリア開発/キャリア・カウンセリング』生産性出版

3)木村 周 (2003)『キャリアカウンセリング』(社)雇用問題研究会

第5節 キャリアの初期における支援者の重要性

1. 概観

本稿では6つの事例に基づき、職業キャリアがもっとも脂にのり、かつキャリアの終了が見え始めた50歳前後の人々の語る「影響を受けた人物」について分析を加える。これまでの彼らの人生において、仕事の面だけに限ったとしても、出会った人はかなりの数にのぼると推察される。しかし彼らは、自分のキャリアや人生に影響を及ぼした人物について尋ねられると、キャリアの初期に出会った先輩や上司について語るのである。こうした彼らの語りからは、彼らが学校から職業の世界に入っていくキャリアの初期において何らかの障害を感じ、これ乗り越えるための支援者を必要としたことが察せられる。それゆえキャリアの初期における支援者がどのような役割を果たしているのか考えることは、今後の日本社会のキャリアと職業能力形成について考える上で、重要な論点になると考えられる。

今回対象とした6例は、高卒ですぐ正社員となった者が3ケース・大卒ですぐ正社員となった者が2ケース・高卒後アルバイトを経て専門学校から正社員となった1ケースが含まれている。これらのケースについて、本人の語りを用いながら分析を加える。なお括弧内は筆者が内容について補った部分である。

2. 事例分析

6例の現在の職業は、自営2例・商社勤務・公務員2例・小学校教師と様々である。ここでは50歳になった現在から振り返って、どのような人物からどのような影響を受けたのかを本人の語りを用いながら探っていく。

ケース35は工業高校卒業後、すぐに就職はせず、レストランでアルバイトをしていた。その後写真の専門学校に通い、写真館勤務を経て、現在自営で写真館を営んでいる。彼に重要な影響を与えたのは、高校時代のアルバイト先の上司（経営者）である。彼が工業高校を卒業するときは景気がよく、引く手あまただったが、彼は尊敬するアルバイト先の上司といっしょに働きたいとアルバイトを選んだ。

「料理がしたかったのではないんですよ。そのマスター（経営者）。その人柄なりその人をものすごく尊敬できたんですよ。そこで雇ってもらえるなら、この人と仕事ができると思って、それがたまたま。僕、会社というものがどういうものかもわからへんかったし、そこで、アルバイトしいへんかみたいなことを（マスターに言われた）で、アルバイトしているうちにそのマスターがすごい立派な人だと思い出して、できたらここで一緒に仕事ができたらいいやろなとか思って。何か就職したいとかいう願望がなかったんでしょ、ちょっと何かこの人についていくぞみたいな気で。

言うこととかやることに一つ一つねらいがちゃんとあるんですね。ねらいがあってそれに対する理由づけもちゃんとあって、そういうことをするという。で、その結果どうやねんと

いう。その結果言うたとおりになったか、考えたとおりになったか、なってないか、そういう頭の中でシステムができてはる人。しかも、そういうアイデアがいろいろあって、それをちゃんと僕とかに説明してくれて、おれはこう思ってこうするねんとか言うて。そういうことがいっぱいあったんですよね。」

働きながらものの考え方を学び、ずっと上司の下で働きたいと思ったが、自分は商売人には向いていないと感じはじめ、昔から好きだった写真で身を立てようと決心する。この決心にあたって上司は心配し、写真家を紹介してくれたり、もしうまくいかなかったら自分のところに戻ってくるようになど助言をしてくれた。また給与を積み立てしてくれていたため、この貯金を元手に専門学校に入学し、学費はアルバイトさせてもらいながら稼いで学校に通った。

専門学校卒業後、写真館に勤めたが、その後も何か物事を判断する際には、アルバイト時代の上司の考え方に基づいて判断しているという。上司と一緒に働いたのはわずか3年だが、現在でも尊敬している（昨年亡くなった）。

「尊敬できる人やったんで吸収できるところも。こちらの入れ物は小さいんですけどね。まあ、なるべく入れたつもりで。たった3年ぐらいでしたけどね、勤めてたのは。でも、ずっとそれは。」

現在IT関連の自営業をしているケース38も、大学を卒業して勤めたアパレルメーカーの社長が現在のお手本となっているという。人をどのように動かすかが自分にとっては大きなテーマであるが、その手本となる社長の生き方を目指すと共に、デール・カーネギーが書いた『人を動かす』という本を正月に必ず読み直すという。

「社内を社長が歩くんです。一緒について歩く。何をするかというと、社長が小さい声で、『おい、あいつの名前何や』『』。社長が、『君、頑張ってるみたいだな』って。社長、すごいなと。あれは、言ったら『人たらし』。ある当時の大手アパレルメーカーの社長とうちの社長がニットの会社に仕事を頼むために新潟に行った。そこの社長はうちの会社と取引をすることにした。何でやねん。そのときに（ニットの会社の社長が）話してくれましたけど、要は、ニットの製品の作り方について説明しても、おたくの社長は知ったかぶりをせんと。偉そうにしていない。なつく。

だから、結局、言葉を遮って、そうじゃなくてここはこうこうこうでしょうと、それは応じるんやけど、人間はそれじゃ動きませんということをいうてるんでしょうね。」

これらは自営の例であるが、民間企業に勤務し続けていても同様の語りが見られる。

例えばケース34は、高卒でスポーツ問屋に就職し、30歳の時に商社に転職した。高卒で就職した会社の社長から物事の考え方を学び、業種は変わってもその後のキャリアの指針となっているという。

「そこの社長さんが言っていたのは、自分とこの会社を、社会大学だと言われていたんですよ。たしかに学校、大学はちょっと違いますが、中学、高校と教科書に書かれていることは、

答えがあることを教えていただいていますよね。大学から先で、社会で学ぶのは、答えがないことを全部探すということで、答えがあるようでも、答えが3つ4つあったりしますから、社会大学なんだと。だから、工夫して答えを見つける。右の人も答えを見つけているし、自分も見つける。これでも構わない。その中で、2人が答えを見つけても、行き着く先は一緒だ。じゃあもっと早く行けないかと。工夫をなささいというふうなことを随分教えられたというか、最初に。でも、そのうちに、それをやっていくと、まあまあできるとおもしろくなるんですよ。大変で、何度も音を上げそうなこともあるんですけども、成功すると非常に達成感があって、お金ではなくて充実感を味わえる。まさにそういうことかなと思います。

(転職についても)私の場合は、高校を卒業したてですぐに右も左もわからないところで、会社をやめるという意識はあまりなかったですから、このままずっと定年までいるのかなという時代で育ってきていましたから、それは当たり前だと実は思っていたんです。案の定やめるという考え方をするときも、ものすごい抵抗があったんですよ。逆に自分でそういうのをやってきますと、自分の意思で、これはやめてもいいんだ、やめたほうがいいんだと自分で決められるようになっていましたので。最初にいろんな基礎とかを教えてもらったおかげで、自分の意思というものを逆にはっきり持てるようになったと思います。」

現在公務員となっている次の事例(ケース37)も、大学を卒業して入った信用金庫の上司が仕事を教えてくれるとともに、入社間もない時期に離職を考えていた対象者を精神的に支え続けてくれたという。

「そうですね。一番、私に影響力を与えた方というのは、これも就職して、そのときの支店長は厳しい方だったんですが、直属の上司というか、すぐ上の主任をされてた方がおられたんですが、この方の影響がやはり……。その方がおととし亡くなられたんですよ。

その方には、入って当初、支店長がかなり厳しかったもんですから、その方が日になり、陰になり、いろいろ支えていただいていたんですよ。とにかく短気は起こすな。長くても3年我慢すりゃ、相手は転勤するなり、おまえが転勤すると。だから、今、短気起こしてやめてしまいたら、それでしまいだというような形で、仕事のこともいろいろ教えていただきましたし、私事ですね、遊びもいろいろ教えてもらって、その方もいろいろおつき合いが広い方でしたから、その方を通じて、非常にたくさんの人と知り合うことができ、その後においても、その方は比較的、豪放磊落というんですかね、そういうタイプの方でしたんで、あまり、上の受けはよくないんですよ。だから、あんまり出世はされない。だから、途中では私が職位としては追いついちゃったんです。でも、その方も全然、そんなこと気にもされずに、私もいつまでも、私は、自分の先輩という形でつき合ってきましたからね。いろいろ、何か悩んだときは教を請いに行くような形で、遊び仲間でもありましたしね。その方が一番、影響力が強かったかなと思いますね。」

この対象者の勤めていた信用金庫が40代後半になって吸収合併されその後破綻するというキャリアを見ると、対象者が様々な人物に会い、様々な経験をしていることは容易に推察

される。しかし影響を受けた人物として第一に語られるのは、まだ若いときに出会った人物なのである。

こうした傾向は、企業に勤める者だけに見られるわけではない。教師は若いときから「一国一城の主」であると言われることもあるが、次の例はキャリアの初期において熱心に指導されるとともに、支援を受けたと語っている。

ケース 36 は、短大卒業後に小学校教員となった。経済的な事情から四年制大学には進学できなかったため、教師となってから、通信制の大学で教員免許一級をとろうとしていた。当時の彼女の指導を受け持った主任は、授業記録についての指導をするとともに、彼女がスクーリングに通うために様々な助力をしてくれた。ちょうど研究授業が入ってきたため多忙となり、結局免許は取れなかったが、はじめに勤務した小学校では多くの支援を受けたという。

「4クラス、私、4年生を担当しまして、その主任の先生がすごくわかってくださった方で、そんなもん持たんでいいから(スクーリングに)行け行け言うて、通わせてもらったんです。それがすごくよかったなと思います。それで何とか1年しのげたんですけど、2年目になったら、そんなん学歴はいいわというのと忙しいのとで、教材研究がすごいやらんとあかんということで、研究授業も入ってきた。新卒は2人入ったんですけど、新卒に対してのいろいろなプレッシャーがあるんです。毎日の授業記録、あしたの教材研究、1冊持たされまして、きつかったですねえ。

そういうふうに毎日毎日の授業を記録して、そして、次の日に主任の判こ、教務主任の判こ、教頭の判こ、校長の判こ、全部赤線して返ってくるんです。またもってきたその日に反省を書いて。毎日、1年間したんです。それでも、私が(スクーリングに)行けたのはその主任のおかげやったと。」

その後彼女はキャリアを重ね、学級崩壊したクラスの建て直しにも関わり、現在は教頭になることを薦められるまでに至っている。

これらのケースと対照的なのが、次の事例である(ケース 33)。この場合は、勤め先が全部で60人程度の役場だったため、かなり早くから仕事を任されていた。一人で仕事を担当することも多かったため、上司はおらず、相談する相手もいなかった。同期も1人しかいなかった。はじめての仕事に取りかかる際には、法規集や資料集などを使って独学で勉強し、悩んだときや困ったときは、「流れ」で判断したという。彼は、影響を受けたり、困ったとき相談した相手はいないと語る。職業生活とは直接関わりはないが、キャリアの初期に彼の心の支えになったのは、所属していた青年団であった。

「昔、青年団ってあったのね。10年ぐらいいたかな、(高校卒業から)28まで。演劇というのをやっていた。それだけじゃなくて、青年団って組織でやっていたでしょう、全国組織で。最後の2年くらい、26、7のときだったかな、その2年間、(地区の)会長やってたの。だからいろいろ会議なんかもやってたのね。土曜日は帰ってこなかった。昔青年の家ってあつ

たんですよ。大体酒飲んで友達と。1年間で50回ぐらい泊まったんじゃないの。多いときなんか毎週とか。あと入ってくる人がいなくて衰退しちゃったの。寂しかったですね。」

彼は職場で支援者を得られない状況にあったが、職場の外に交流を求め、仕事とのバランスをとっていた。同じ職場に支援者を得られない場合、仕事とは無関係の仲間を得られることが、彼の仕事の継続に役だったと考えられる。

3．総括

以上から、キャリアの初期における影響を受けた人物とその具体的な内容は以下のようにまとめられる。

まず影響を受けた人物としては、はじめて仕事に就いた職場での上司や先輩が挙げられており、職歴や学歴、年齢を問わなかった。また上司であっても、比較的年齢の近い者であることが多かった。

影響を受けた内容としては、物事の判断基準と人との接し方について述べられていた。

対象者のうち、教師と役場の公務員を除いた4ケースは転職経験を持っていた。彼らは自営をはじめたり業種を変わったりしているが、勤め先が変わろうとも、物事を判断する基準だけは一貫していると語っていた。答えが決まっており与えられる世界から、答えが複数あり自分で見つけるという世界への転換という表現が見られたが、キャリアの初期においては、それまで所属していた学校とは異なるものの考え方を身につけることを迫られる。そのときに身につけた準拠枠は、その後のキャリアにおいても準拠枠として作用し、物事を判断する際の基準となるのである。そしてその準拠枠をかたちづくる手本となったのが、キャリアの初期に出会った支援者である。また上司と合わずにやめたいという対象者に対して、将来のキャリアの見通しを示して説得し、離職を思いとどまらせていた事例があったが、長期的な視点を示されることも支援となっていた。

また年齢を重ねて管理的な立場に変わっていく中で、あるいは自営業に転身すると、部下をどう使うのが大きな課題となる。その時に、キャリアの初期に出会い、感銘を受けた上司の行動を思い起こし、ロールモデルとするのである。

以上のように、キャリアの初期において、不安定な立場にある若者を擁護し、育ててくれる支援者は、その後の安定したキャリアの継続において重要な役割を果たしている。しかし若者が安定した仕事に就くことが難しくなっている現在、同一職場内で若者の立場に立った支援を行える大人は少なくなっている。職場内だけではなく、社会的に企業外の支援者作りを仕掛けていくことも、今後の日本社会のよりよいキャリア形成のために検討される余地がある。

第6節 早期に就きたい仕事を決めたケースのキャリアと職業能力の形成

1. 概観 - 在学中の職業希望の決定とその実現

ここで取り上げる3つの事例は、中学や高校在学中に将来就きたい職業を決め、50歳前後の調査時点まで、一貫してその思いを持ち続けたケースである。

自分の就きたい仕事が決まらない、何をしてもいいか分からない。現代の若者たちの多くがそうした迷いを持ち、中にはそのために、卒業を先延ばししたり、就職活動をはじめることが出来ずにいたり、あるいは、とりあえずアルバイトに就いてしばらく考えてみようとしたりする者がいる。

その迷いは、今、50歳前後になろうとしている対象者たちの世代でも、無縁のものではなかった。中学や高校卒業時の進路分岐は、1970年代にも当然あったし、当時の若者たちもそれぞれに進路を決めていった。確かに、現在と比べると、そのおかれた環境は異なる。第一に、親の家計水準が全般に低かったため進学という選択肢を選べない者も多かった。この世代では高校進学率が8割、大学進学率が3割程度であり、高卒後7割が大学・短大・専門学校に進学する今とは進学の意味が違った。大学進学を当然と考える家庭は一定範囲にとどまっていた。第二に、対象者の中学、高校卒の時点は高度成長の末期で、就職機会は豊富だった。ただし、大卒者はオイルショックの後が卒業時期となったために、就職は現在の状況にも似て難しかった。第三には、アルバイト・パートの市場は今よりはずっと小さく、卒業後の進路の選択肢として、ほとんど認知されていなかった。

こうした環境は進路の選択幅を限定することになるので、対象者たちの世代の方が今の若者より、将来の方向を決めやすかったといえるかもしれない。しかし、それでも進路選択という課題は同じように突きつけられていた。その中で、ここで取り上げる3例は、在学中に将来の職業をはっきりと決めて卒業していった人たちである。早期に迷いから抜け出した若者たちのその後のキャリア展開を追うことから、早い時期の職業希望の決定の意味を考えてみたい。

また、後に見るように、ここで取り上げるケースの職業はすべて専門職である。専門職におけるキャリア形成・能力開発という視点からもこれらのケースを検討してみよう。

2. 事例分析

2.1 思いと行動 ケース紹介

3つの事例における希望職業の決定とその実現についてみる。

事例1(ケース41)の場合は、高校在学中に鍼灸師を目標に定めた。中学時代にはデザインに関心があり、高校に入ってから、本人は大学に進学して広告業界で働きたいと思っていた。しかし、喘息で中学時代は欠席が多かったし、高校進学後もやはり病気がちだった。すでに大学を出て民間企業に就職している兄がおり、広告業界に入るためには一流大学を出

る必要があるし、また、非常に体力の要る仕事だと聞かされる。鍼灸師は、体力を心配した親からの提案であるが、高校の担任教師に相談すると、「親御さんのおっしゃるとおりだ、大学は後でもいけるのだから」と勧められた。本人もぎっくり腰で鍼灸治療を受けた経験があり、これはいいかなと思って志望を定めた。その後、鍼灸師養成の学校に進学し、針灸マッサージ師の資格を取り、病院勤務を経て自営にいたる。

事例2（ケース43）は、大学の先生が希望職業である。中学卒業後、理数系の科目が得意なことから、教師の勧めがあって高専に進学する。当初は公務員を志望して、高専の5年生になる直前に公務員試験を目指した勉強を始める。しかし、なぜ勉強するのかを考えると、公務員志望の理由は公務員なら時間があるって好きな勉強が出来るからで、それではその勉強は何のためかと考え出すと、勉強に手がつかなくなった。そのとき、中学の恩師が家庭訪問のときに言った、「大学の先生になったらどうだ」という言葉が思い出されて、これだと思った。その時点で大学の先生になることに決めた。その後、大学進学準備不足で私立の2部に進み、そのまま大学院に進んだものの、そこからは大学教員の道がつかず、いったんはあきらめた。意気消沈していたが、偶然、公募の機会を見つけ、卒業校の教授の後押しもあって念願の大学教員の職を得る。

事例3（ケース42）は医学を目指した。中学時代の希望職業はパイロットだったが、高校時代には医師をみざすようになる。研究医として先端医療の研究に取り組みたいと思った。家計状況から国立の医学部を目指し2浪する。3回目の受験時、親から浪人は許さないといわれて、理学部も受験し、結局、国立A大学の理学部に進学し、生物学を専攻する。大学の授業の多くに興味をもてず退学を考えたが、親にとめられ、親戚の大学教授から理学部からも医学にアプローチできると説諭され思いとどまる。その後製薬会社に就職して研究所勤務をするが、労働争議がらみで辞職する。卒業校の教授と相談して再起の道として教員を目指すことにし、理科教員として再出発して今に至る。医師への夢は現在も捨てていない。これまで、大学在学時から何回か医学部を受験し、教員になってからも試みている。現在は教員として仕事に忙しいため断念しているが、退職したらまた受験したいと思っている。

2.2 希望の形成と実現・職業能力獲得

3事例に共通することとして、高校(高専)卒業を控え、進路を真剣に考える中でそれまでの希望を覆して新たな方向性を見出している点が挙げられる。そこで、事例1の場合は親や兄弟、担任教師と相談し、事例2では、中学時代の恩師の言葉に光明を見出している。どちらも親や教師の側から具体的な職名を挙げている。「好きなことをすればいい」という言葉でなく、具体的な提案や現実的情報を提供するとき、周囲の大人は大きな役割を果たす。親や教師がこうした積極的な発言をすることが、実は若者の側の判断力を高めるのではないだろうか。現在、キャリアカウンセリングという形での進路選択のサポートが重視されているが、1970年代の若者たちは、こういう形で周囲の大人に支えられていたのだろう。

共通することの第2は、彼らが目指したものが専門職であることである。専門性に支えられた働き方は個人の力の発揮が分かりやすいし、また、職業としてのまとまりがあり、イメージが伝わりやすい。これは現在の若者でも同じだろう。専門的・技術的職業は近年増加傾向だし、今後の増加も予想されている。では、希望を集めやすい仕事が増えているのだから、若者の職業希望が決まりやすいのかということ、そうではない。おそらく、そこには専門性の獲得プロセスと獲得すべき専門性の内容の明示化が進んでいないことがあるのではないかと思う。医師や大学教授、鍼灸師などの伝統的な専門職はどういう教育機関に進み、どういう職業能力を獲得していくのかがかなり明示的で、若者たちの現在から、どのくらいの距離があるのかが理解しやすい。医師への希望を持ち続ける事例3の場合、学力試験ではかなりの成績を残しており、それだけ合格の可能性が高かったから、夢を持ち続けているのである。自分の現状との距離を測ることが出来れば、若者の希望は焦点を結びやすいのではないか。

第3は希望の実現やキャリア形成に教育が大きな役割を果たしていることである。彼らの目指したものが専門職であり、高等教育や専門教育を経由して就く仕事であったということであるが、それだけではない。事例2、事例3に見られるように、挫折を経験したときに頼ったのは出身大学の恩師であり、また彼らの師はそれに応えた。工学部、理学部等理系学部の親密な師弟関係の賜物という面もあるだろうが、キャリアチェンジにあたっても基盤となる職業能力を大学教育を通じて獲得していたからということもあるのではないだろうか。

第4に、専門職としての能力を大きく伸ばしたのは、どの事例でも、第一には就業の中で必要であり、そこで必死に努力したことだった。さらに、研修のうち身についたと評価されているのは、本人が必要を強く感じたときに受けたものであった。事例3では教員となつてから、何回か年次研修を受けているが、これまで有効だったのは、自分が十分知識がない最先端の研究に関するものだけだというし、事例1では、ある程度年数を経てからのものだという。知識・技術の獲得機会は個々のニーズに応じて設定しうる柔軟な体制が求められる。

最後に、個人の立場からみれば、就きたい仕事の選択と、高等教育機関等への進学、そこでの職業能力の基礎となる教育、就職への支援、職場での必要にせまられての仕事の中での能力形成、それを補う研修機会は一連の流れである。また、そこで形成されてきた職業能力も個人の中では一つながりのものだろう。それを通して見る視点がキャリア形成・職業能力開発支援政策には必要だろう。

3．総括

本稿では、3つの事例を通じて、若者の職業的方向付けや職業能力形成・キャリア形成のために、次の5つの点を考慮すべきことを指摘した。すなわち、若者の職業方向付けのために果たす親や教師など大人の役割、職業的方向付けに必要な職業能力獲得のプロセスと内容の明示性、高等教育・専門教育が職業能力形成で果たす意味、就業後の能力向上のための研修機会の柔軟性、教育と就業後の能力開発の連続性、である。

第7節 キャリア形成とリーダーシップの発達

1. 概観

「集団に目標達成を促すよう影響を与える能力」がリーダーシップの定義であるならば、今回の調査対象者はおしなべて高いリーダーシップをもつと感じた。キャリア形成の過程で人的ネットワークを拡大し、結果的に影響力を広げている。それは会社経営者であるか、技術者、主婦であるかという、職業的な地位とは関係ない。また本人がリーダーであることを望んでいるかどうかともかかわりなく、職場やコミュニティでかかわる人たち（集団）が共通の目標を達成するように、影響を与えている。

例えば、勤続 25 年になるベテラン保育士は、園児の母親や保育士との交流を通じて、子育てという家族の目標と、若い保育士による効果的クラス運営に、強い影響力を発揮している。初当選以来 3 期連続当選を果たした市議会議員は、議会活動を通じて行政に、また市民に直接働きかけながら、市民の生活と福祉に影響を与えている。パートタイマーとして検品の仕事に就く主婦は、10 名の部下を抱えるリーダーであるだけでなく、公民館の運営委員として行政の一部に影響を与えている。

そして彼らのキャリアに対する満足度は高い。効果的なキャリア形成はリーダーシップの発達に影響するのであろうか。人的ネットワークの拡大・深化、変化に対する適応、一貫した専門領域と学ぶ意欲、次世代の育成に取り組んでいる、など調査対象者に共通する特徴と関係があるかもしれない。

今回の調査対象者は、5 名中 4 名が出身地の都市で生活し、仕事をもっていた。残りの 1 名は、高等学校卒業後 30 年余りを同じ企業グループに勤務する従業員のための社宅地域で生活している。つまり、生活圏の移動がない、または少ない、きわめて安定した環境にあったといえる。この 5 名は、長く同じ地域に生活、就業することによって、人間関係のネットワークを広げるに有利な条件にあった。また 5 名中の何人かは、比較的安定した事業の世界にあったことも、一貫性を失わずに専門領域を深めることにつながったのではないかと思う。しかし、彼らの属する保育事業、電力業界、地方自治体は、現在、大きく激しい変化のただなかにいる。彼らが、今後 10 年間の変化にどのように適応するか、興味深い。

2. ケースの分析

今回の調査対象者は以下の 5 名である。

A 氏（ケース 45） 女性 保育士 短大卒業

B 氏（ケース 47） 男性 市議会議員 大学卒業

C 氏（ケース 48） 男性 会社経営 大学卒業

D 氏（ケース 46） 女性 主婦・パートタイム従事者（検品チームのリーダー） 短大卒業

E氏(ケース44) 男性 発電所技師 工業高校卒業

いずれも50歳前後の、既婚者である。彼らの職業はまちまちだ。1名をのぞき、2、3人の子供を育ててきた。5名中4名は出身地近くで生活している。D氏は公民館の運営委員やPTA役員として、地域の活動に貢献してきた。E氏は、自治会長、労働組合書記長として、団体と団体の運営に影響を与えてきている。B氏は当該市では、史上最年少の市議会副議長となった。C氏は、地域の業界団体の枠を超えて、新しい事業を開拓した。A氏は保育士として、親子と後輩保育士の指導に当たっている。この5名に共通する点は何か。

キャリア満足度・自己評価 共通点の第一は、自らのキャリアに対する満足度が高い、あるいは客観的に見て現時点の成功者であるという点にある。「まだ早いけど、いい人生だった」(E氏)と言い切れる。唯一C氏は、キャリアに対する満足度を「40点」と厳しく自己評価した。C氏は、ここ数年若者に人気のアパレルブランドの部材を扱い、事業を成功させた経営者。よって厳しい自己評価は、自分自身に課す要求水準の高さと、自給自足の農耕生活への願望ゆえと考えたい。

変化に対する適応 「転機」と呼べる大きなできごとは、いずれも本人の希望とは違ったかたちでやってくる。ところが彼らは、そのようなできごとから逃げることなく、学習、飛躍の機会としている。

B氏のケース B氏は、はじめて挑戦した市議会議員選挙で落選する。しかし、これを機会に、地域活動やボランティアに励み、地域で影響力のある「長老」との関係を改善した。その結果、地域の課題を理解すると同時に、議員としての仕事の仕方を理解するようになっていく。落選と保守的な「田舎」社会の現実を受け入れ、「目的(当選し町を変える)のためならなんでもやる」と心に決める。志望大学に3度不合格となったとき、父親の病気で好きだった東京の生活を断念し、故郷に帰らなければならなかったときも、それらを受け入れた。

A氏のケース 保育士の削減のため、ひとりの保育士がクラス全体をみなければならなくなりつつある現在、A氏はその変化に積極的にチャレンジしている。一方、体力的な限界も理解し、管理職への道も視野に入れている。

D氏のケース 夫が自分の姉を同居させようとしたとき、迷うことなく受け入れた。結果的に10年余りにわたって、姉に気遣う生活となったが、そのおかげで両親の介護や、職場でリーダーとなる心の準備ができた。

人間関係の広がりや深まり 仕事を通じて、知人が増えている。全員が同じ仕事を10年以上継続している。また5名中4名は地域活動を通じて、人的ネットワークが広がった、と述べている。自治会活動などで、役員となって活動している。

E氏のケース 九州南部の地方都市から九州北部の鉄鋼の町で就職したE氏は、その当時人

見知りして誰かと会話するのもすぐに赤面する恥ずかしがりやの青年だった。ところが、独身寮、その隣の社宅に生活し、同じ職場に勤務しながら、人付き合いの範囲が広がり、これまでに社員親睦会会長、自治会長（市の自治会役員会メンバー）、労働組合書記長を引き受けてきた。

B氏のケース 選挙のたびにかつての同級生が認めてくれ、手伝いに来るようになった。

子育てと次世代育成 苦勞しながらも自らの子育てに満足しているか、後継者の育成に携わっている。子供がいなくても、友人の子供の悩みを聞く役割を担っているものもある。同時に次世代の若者から学ぶことが多いと述べたケースもあった。

C氏のケース 息子が不祥事を起こしたとき、父として毅然とした模範を示した。会社では、後継経営者の育成を進めている。一方、取引先の会社の役員の息子の転居を助けたこともある。本インタビュー中も、若年者の就業教育・キャリア教育を進めるべきだと強く訴えた。

B氏のケース 友人の子弟の相談役になっている。自宅に呼び、共に食事をすると、だんだんと腹を割って話してくれる。彼らの親たちが若かったころの話をする、彼らに喜ばれる。

D氏のケース 仕事を辞めて、ふたりの子供に「べったり」よりそい子育てした。23歳の息子はとてもよい子に育っていると自負している。また公民館活動を通じて、青少年の育成にも力を尽くしている。

A氏のケース 若い保育士への指導役を担いながら、逆に彼らから新しい視点や保育方法を学んでいる。

専門領域と継続する学習意欲 自分自身の軸足が安定している。つまりそれぞれの専門領域で経験をつみ、その領域での自身の能力に自信をのぞかせている。また学習意欲と好奇心の強さも示している。

E氏のケース コンピューターを勉強していたので、発電設備が計算機化したときは、三交代勤務の運転係から、昼常勤の整備に異動になった。専門技術はメーカーの技術研修で学んだ、発電所の設備は、それぞれが固有のものであるので、社員でシステム全体を知っているのは社内にE氏ひとりだけ、という状態が長く続いた。発電設備のビルの計装関係全体をデザインし、導入したこともある。その際には運用面で困らぬよう、別にマニュアルを作った。

C氏のケース 全国に取引先を開拓していたおかげで、品質基準の厳しい、難しい取引にも対応できる製品を開発することができた。現在は顧客企業の若い企画担当者と仕事をすることが多いが、彼らが本当に達成したいことを理解していれば、難しくない。

B氏のケース 市内全域を歩き勉強してきた。そして友人を軸に人間関係を広げてきた。今では選挙戦3日目で勝利を確信できる。

D氏のケース 10名のパートの中で、職場全体を任されているのはD氏だけだ。彼女だけが職場全体に興味を持ち、上司に質問し教えを求め続けた結果、全体を把握したのである。

今後のキャリア展望 5氏ともに今後のキャリアに対しても前向きである。

A氏は、副園長になるための準備を検討している。B氏は県議会議員ができれば市長になりたい。C氏は後継者に経営をまかせ、5年後には自給自足の農耕生活に入りたい。D氏は定年まで今の仕事を続けようと決意している。E氏は労働組合の役員は早めに若い世代に引きつぎ、博物館でボランティア活動をする予定である。

今後見舞われる可能性のある危機として、親の介護（A氏、D氏 もっともD氏はすでに覚悟している）、活動地域の拡大による支持母体のきしみ（B氏）、後継者不在（C氏）、電力業界の急速な自由化による仕事への圧力の高まり（E氏）などが考えられる。ただし、この5名は、これまでに培った「リーダーシップ」を発揮して、これらの難局を乗り切ることができるだろう。

3．総括

今回の調査対象者である5名は、概ね自己評価が高く、効果的なキャリアを形成してきたといえる。その5名に共通する傾向が、「集団に目標達成を促すよう影響を与える能力」すなわちリーダーシップであるとしたら、興味深い。キャリアの形成を通じて、人間関係のネットワークを広げ、深め、一貫した専門性で貢献する。強い好奇心、変化への適応、後継者の育成。これらはリーダーの十分条件とはいえないだろうが、リーダーに必要な条件であり、しかもリーダーの地位にあるものが、必ずしもそろえていない条件である。

逆に各組織のリーダーがリーダーシップを学ぶうえで、キャリアの充実を考えることが役立つだろう。

参考文献

- ステファン・P. ロビンス 高木晴夫監訳(1997；2000)『組織行動のマネジメント』ダイヤモンド社
- ウォレン・ベニス、ロバート・トーマス 斉藤彰悟監訳(2002；2003)『こうしてリーダーは作られる』ダイヤモンド社
- E. H. エリクソン、J. M. エリクソン 村瀬孝雄ら訳 (1997；2000)『ライフサイクル、その完結<増補版>』みすず書房
- バーバラ M. ニューマン、フィリップ R. ニューマン 福富護ら訳(1975；1980)『生涯発達心理学 エリクソンによる人間の一生とその可能性』川島書店

第8節 組織における個人のキャリアアップの困難さ

1. 概観

本章では2つのケースについてみていくことにする。ひとつは初職への就職時におけるソーシャルサポートの重要性を感じさせるケースであり、もうひとつは会社閉鎖にも揺るがない志と資格の重さについて考えさせられたケースである。

2. 事例分析

Aさん(ケース49)は、親戚の人からの就職助言が初職へのきっかけになり、その後の実務経歴を積み重ねることになる。すなわち、単に就職斡旋にとどまらず、本人の工業高校機械科を卒業したという適性を考慮しての適切な進路指導に該当すると考えられる。

今年度で4年目を迎える業務課では、上水道同様下水道利用に際し、受益者負担の考えの下、料金係全般を担当し、市民の下水道とその処理の普及、理解に努めている。工業高校(機械科)卒業直後に下水処理関連事業に従事し、下水道事業に自信と誇りを持って取り組んでいる。しかし、下水道料金の支払をしない市民に対して理解し、協力してもらえようとする業務は困難を伴う世帯もあり困っている。

このように、下水処理場関連の仕事を中心にキャリアを形成してきた例といえる。

地方公務員という職業的性格上、いろいろな部署の経験をさせることで、幅広く市民へのサービスを提供しようという意図が見出される。いわゆるジェネラリストの養成である。これは、組織編成上、合理的発想であるように思われる。そこには職場の円満・良好な人間関係が個人を成長させると考えるのは、非常に日本的な視点とも言える。しかし個人の価値観の違いにもよるが、もし、ジェネラリストではなくプロパーとしての個人的成長を欲しよとするならば、このような多方面の部署の経験が個人のキャリアを必ずしも開発するとは限らないように思われる。

そして、本ケースから、以下の二つの問題点が考えられる。第一は、キャリアガイダンスにおいて、個人の適性を的確に把握し相談や助言でき、サポートしてくれる人物を確保することである。これは、今も行われているハローワークのキャリアカウンセラーを意味しているだけではない。個人を知る者の周囲の人的資源ネットワークを探索できるようにしておくことが肝要である。第二に、前述した個人と組織の求めるキャリア形成の問題である。もし自分が、個人として成長を望むならば、配置換えとなった部署における仕事に関連した研修や教育プログラムの積極的な受講参加の機会を求めていくことであろう。同時に、組織としてどのように個人のキャリア形成を考えていくのかが、より一層問われるものと思われる。現在行われている教育訓練受講費の一部補助やプログラムの充実を今後より一層促進していくことも必要であろう。

転機についてはどうだろうか。18歳で工業高校卒業時に市役所に勤務していた親戚の人が

ら市役所への就職を勧められる。同時に、局長自ら就職依頼の話をしにきた。そして、S・T下水道組合に就職。キャリア形成は、具体的には下水処理場における維持管理係に配属され、監理・運営・点検・修理・清掃など専門性を高めていくことになる。そして、31歳時に施設係へ配置換えとなり処理場建設、建設係では土木関係の専門知識実務を課される。39歳から2年間、出向先の道路管理課では下水管の監理にとどまらず道路補修、設計、監督までこなすことが求められる。その後、41歳時に水処理センターに配属され、維持管理全般を担うことになる。30代後半には、将来に導入されうる下水処理の生物資源の活用やバイオテクノロジーの開発、利用など新たな角度から下水処理の専門に関わる。

公的な研修としては、就職直後3週間の研修受講。この研修が後々実務の基礎を作ったと言える。また、中級者研修、管後（下水管理設後）研修などを順次受講する。

私的には、高校時代から続けていた英会話を就職直後2年間（夜間）で英会話専門学校に通学。また、45歳時にIT教育に乗り遅れまいとして1年間、パソコン教室に通学。その他では、ダンスやテニスをたしなみ社交的な一面をのぞかせている。

30代前半からは設計や下水道普及のため多忙を極める時期となり、不満を覚えていた。さらに当時は民間と比べボーナスの額が低かったことも不満感を強くしていた。しかし、今となっては夜間や休日出勤があり少々不満はあるが、民間の同級生たちが厳しい就労や失業、職探しの現状にあることを思うと恵まれている職場と思うようになっている。

Aさんのキャリア形成上の重要なポイントは、18歳時の初職に際して親戚の人からのアドバイスにより就職したことである。このことは、就職・進路相談ならびにその指導を受けたことになる。

39歳時に経験した出向が、これまでの実務から違う分野の仕事の展開となったようである。すなわち、下水処理そのものから下水管を埋設する道路の補修や設計、監督へと拡大し、下水処理を市民の生活環境全体から捉える仕事と変化して行った。そして料金徴収を行うまさに市民生活の中で下水処理関係の仕事に移行していくことになる。仕事の範囲が、意識の面でも下水処理場という機械関係の維持管理から現在は市民生活の最も近い存在である料金徴収係に代わり、仕事の仕方も変わらざるを得ない。当然ながら、必要とされる資質・能力、市民との協力関係、対話力などが求められるようになってきている。直接、市民と対面しながらの働き方に今までの自分とは違った能力の開発を迫られる。

また、年齢が上がり、指導する部下も抱えるとなると後輩の指導・教育も求められる。このような資質は急に備わるものではなく、普段から社交ダンスやテニスなど友人や住民と行事に参加し、地域社会の個人として活動する機会を得ていることが公務員としての役割を助けているものと思われる。

本事例は、被面接者の周囲にいた人物の助言が非常に有効に働いたケースと考えられる。初職へどのようなきっかけで就くのかはいろいろな要因があるものと思われる。この点からすると、ソーシャルサポートの重要性が改めて浮き彫りになる。初職を選択するかどうかは

最終的にその本人が決定することである。しかし、自分一人で思い描くキャリアイメージには自分の好みや偏りが生じやすい。そこで本人の適性を踏まえた客観的な視点からのキャリアガイダンスはより有効であることの証明である。そのような人物が身近に存在していることは非常に心強い。

具体的には、ハローワーク機関のキャリアカウンセラーは言うに及ばず、両親・親戚、学校教育の進路指導課教職員や担任教師などの人的資源を卒業後も活用できることが望まれる。進路指導、就職指導のための卒業生を母校へ継続的に受け入れようとする体制の確立は、見落とされがちだが大切な手段であろう。地域社会の活動拠点としての学校活用などが有効である。

また、少子高齢化社会の現在、活発に展開されているシルバー人材センターの利用により、高齢者の生きがいとしての働きを促進し、同時に子供達へのソーシャルネットワーク形成にも効果が期待できるのではないだろうか。

次のケースは、会社閉鎖にも揺るがない志と資格の重さを感じさせた。

Bさん（ケース 50）は、中学3年の頃から絵を描くなり何かを作ることが好きであった。高校卒業前に、才能があるわけではないが、自分の好きなものが作ることができ、しかもお金も儲かる、自分の作ったものがその辺にいくつかあるということになればなかなかいいと思い、もの作りへの興味から大学入学時には明確に建築設計への分野にしようかと決心する。そのときから今日まで、途中、転職3回を経てもなお初職への動機、志が一貫して継続していることが非常に感動を呼ぶ。

第2に、職場の仲間とともにこの会社を再起させようと努力したが、会社は閉鎖を免れず、結局、失業する。46歳にして就職活動をするも年齢の問題で就職先がなく、やむを得ず自分の設計室を立ち上げ独立をする。設計に施主が投資しようと考えていない風潮の中、決して楽ではない営業を昔の仲間の協力を僅かながらも受け、家族を支えるために東奔西走している。

Bさんは大学卒業と同時に建設会社に入社し、設計関係で仕事をしてきた。資格取得をする状況は、初職からキャリアを積んでいく中で会社の支援の下で獲得するか、仕事以外の時間を費やして独力で取得するかに分けられるのが現状であろう。資格試験受験勉強と仕事の両立は働く者にとって並々ならぬ努力を強いられる。就業時間のフレックスタイム制や年休の有効活用など会社の理解がある程度得られると資格取得に取り組みやすい。しかし、企業側にとって社員が仕事上要求される資格の取得ならば理解も得られるかもしれないが、まったく関連のない資格に対しては当然ながら、その有用性を理解はしてもらえない。資格の種類にもよるといえよう。幸運にも建築設計士におけるこの資格は、特に大きな意味を持つ。この資格を所有することは設計製図を仕事としていく上で必要条件となる。実際、会社からの支援はどうであったかという恵まれていたとは言いがたい。あまり、優遇はされなかつ

たようである。むしろ、取得できるのが当然という意識があり、そう簡単に支援を得られてはいないようである。このように会社側が社員のキャリアアップ援助の意識が希薄だと、ますます社内での閉塞感や人材育成面で遅れをとることになるであろう。一方で、資格取得者が社員としてそのキャリアを発揮して会社に貢献することができるとなれば、また会社全体の意識も変化していく。社員のキャリアアップが会社への貢献を保証するような仕組みとシステムを構築することがより求められる。

キャリア形成における危機に対しては、以下のような注目すべき時点と息があった。地元近くの望んだ設計会社に就職するも、46歳のときに会社が閉鎖となり、再就職も無理な年齢となる。自分でやらなければならない羽目になり、必要に迫られて独立を決意する。最初から独立を目指していれば準備もしていたが、突然やらなければならないなくなった。設計事務所や会社設立などは、簡単にできるが、最初からうまくいくとは思っていない。実質が伴っていないのが苦しい。先輩があちこちいるので、声をかけてはいるが、先輩もなかなか苦しいので、そう簡単にはいかない。

現実的には、建築設計に対してお金を払う意識が日本人はとても低いと嘆いている。設計料としてお金を払い納得してもらおうそのようなシステムが一般的になってもらえば非常に良いと、独立した立場から痛感しているようである。

このような状況にもかかわらず、自分の中学高校時代から描いていた建築設計という志を強く持ち続けている。他の道へ進むことができないと言えば言えなくもないが、あくまでも思い描いた自分の将来を見据えながら前進しようとしている。他の安易な選択肢を選ぼうとする言葉はこの面接中には一言も出てこなかった。むしろ、とにかく生きていければいいかな、と力まず、今、自分が成しえることに集中して一步一步進んでいる印象を持つ。抽象的で難しいのですが、単に家族に迷惑をかけているが、好きなことをしてやっているし、勝手なことをやっている・・・、と達観しているかのような気持ちでいるものと推察できる。今は、経済的に安定していないが、とりあえず安定が一番、と目標を据え、さらに、悪いほうに転ばないようにと自戒しつつ今を生きている。

自分の職業人生が、いつ何時どのような状況に陥るかは分からない。しかし、このケースは、自分の立てたライフデザインを信じて進むことで自分が生きていることを証明しているようにも思われる。とても強い人間である。自分が考えている理想的な仕事の仕方は、お施主さんと細かい部分まで相談しあい、一緒に喜べるような建物ができるのが一番いい、と話してくれた。このように自分の設計した建築物を通してお施主さんとともに喜び合えることを至上の幸せと考えている。

また、仕事の量を増やさないといけないのでアルバイトでも何でもして仕事を回転させている。具体的にこうなりたいということでは、今は実績作りをしている状況である、と冷静に自分の置かれている状況を分析し、将来設計のために歩んでいる。あたかも自分の将来の設計図が途中で会社の閉鎖という形で修正を余儀なくされたにもかかわらず、またはじめか

ら次の一本の線からひき始めているようである。

特に、本ケースの志を支えているものの一つには、おそらく「一級建築士」という資格があるように思われる。本ケースの被面接者は苦勞して遅くにこの資格を取得した。資格がなくても資格所有者の代表者がいれば建築物を設計することはできるが、この資格は、設計士の確固とした自信の拠り所であろう。資格を取得していたために、必要に迫られて独立に踏み切ったことも予想される。

自分のライフデザインのためにどのようなキャリア形成が必要なのか、将来的な目標と展望、それに必要な有意義な資格は何かをともに考慮することが必要であろう。資格取得がすべてではないが、しかし自分の将来を方向づけることのできる資格取得が重要のようである。

3 . 総括

Aさんは、望んでいた建築設計士になり、Bさんは、親戚の人に言われるがままに公務員試験を受験して合格し、そのまま生涯的に公務員として就労し続けるという、いわば両極的な職業の選択をしたお二人であった。初職の選択はいろいろな理由からなされたとは言うものの、本来問題とするべき視点は、初職からキャリアを積み重ねてはいったとしても、職業生活を送りながらライフプランのなかでキャリアプランを検討しつつ、どのようなキャリアを形成し、さらに自分を高めていくことができるかとなると、難しいように思われる。したがって、教育・研修支援プログラムを準備し提供することはできても、それを、職場内で受講しやすくする支援体制やそのシステムを構築していくことができるようにすることが重要と考える。

第9節 流されるままの職業生活から主体的な職業生活への転換

1. 概観

1.1 担当部分全体を通して体験した職業人生に関する感動、感慨

企業人となった4名の対象者は、我が国の経済状況や産業調整の影響を色濃く受けた職業人生を送っていた。勤務先の経営状態が良好な時は、長時間労働に耐えながらもそのなかに充実感を得て生活している様子が伺えた。企業が健全に経営されていると、そこで働く人も働きがいを持って充実した職業生活を送ることができるのではないかと感じた。企業の倒産とともに失職した対象者が複数あり、50歳を前に生活設計を立て直すことの難しさをひしひしと感じた。言い古されたことではあろうが、変化の激しい社会では、勤務先以外でも‘つぶし’がきく職業能力を計画的に身につけていくことが大切であると思えた。面接した企業人全員が転職を経験していることも印象的なことであった。「就社」ではなく「就職」をするという考え方を進路選択時に持つことが大切になっている。

中学校教員となった対象者は、以前からのメンターとの出会いによって人生観を転換するとともに、初職で取り組んだ仕事によってその後、長く取り組むこととなる職業上のテーマを見出していた。キャリア形成におけるメンターの重要性を改めて感じさせられ、感動を受けた。ひとつの職業を全うしていく「専門職人」の職業人生として、ひとつの理想的なパターンではないかと思った。

1.2 日本社会におけるキャリア形成にかかる特徴と問題

初職に就く理由が、「何となくずるずると」、「成り行きで」、「安定した仕事なので」と述べた対象者が大半であり、職業を通して自分はこのようなことを成し遂げたいとか、このような仕事をしたいというはっきりした理由や目的を持たないまま就職している実態にあった。自分の職業生活を振り返り、「何となく流されてきた」、「もっと高い目標を持って生活すべきだった」、「もっと主体的に職業生活を送るべきだった。」という後悔の言葉を述べられた方が複数みられた。これらのことから、働くことの意味や意義、自分の人生にとっての職業の位置け、自分に適した職業の探求などを義務教育の段階から行うべきではないかと考えた。

企業人である対象者は全員が転職やリストラを経験しており、ひとつの企業や職業のまま職業人生を全うすることが難しくなっている実態を表していた。

2. 事例分析

2.1 各ケースの面接記録から読み取れること

Aさん(ケース52)は、「安定した職場」がよいという周囲の価値観を受け入れて、自分の興味とか好みとは無関係の大企業に勤務し、その後はIT化の波にうまく乗って働いてきた。しかし、50歳を前にして解雇の対象となり、新しい職業を検討するなかで、幼少時に培

った自然と関わって生きるという職業意識が再び沸き起こってきた。幼少時から培われた職業意識は、長じてからもその人の職業人生を彩って行くようである。Aさんは、元来仕事一途のタイプではなく、趣味を楽しむために働いてきたところがあったという。仕事一途の同僚・上司が多い職場の中で、Aさんは職場の人間関係に軋轢を生むこともある存在でもあったようだ。ITバブルがはじけてリストラの対象となったため、現在は郷里に帰り、不本意な仕事で収入を得ている。現在は、将来への不安を抱きながらも新しい仕事についての夢を暖めている段階である。

Bさん(ケース55)は、学生時代は、弁護士、教師、公務員を将来の仕事として考えていたが、弁護士や公務員は難しかったので、あきらめて教師になったということである。職業決定にあたって大学の先輩の影響を受けた。また、初職における役割モデルとなった上司との出会いや人権教育との出会いが、Bさんの職業人生を決定した。人権教育に取り組む中で、それまで嫌っていた両親の生きざまを理解することができ、この体験を自己開示することによって、生徒やその親達との信頼関係を築くことができるようになった。教育に魅せられ、情熱を傾けて過ごしてきた教員生活であった。教員になる切っ掛けとなった先輩の存在がBさんの職業生活の礎を築いたとあってよいだろう。Bさんは、教師となって7年目の失敗体験(自分では大変うまくいったと評価していた子ども達への関わりが、結果としては子どもに裏切られる形となった体験)をとおして教育観の変換を迫られたという。教育を教師が子どもを教えるという一方向的な活動ではなく、教育活動を通して教員も変わらなければならないという相互作用の教育観を持つようになった。手痛い失敗体験をその後の職業生活にどのように活かしていくかということも、キャリア形成上のひとつの課題ではないかと考えた。

Cさん(ケース51)は自分が「こうありたい」とか「こうなりたい」という強い欲を持たず、自分に与えられたことを自分らしく無理せずに行いたいという人生観を持っている。職業に対してもその考え方は一貫しており、仕事は家庭がうまくいくためのものだと考えている。大企業(自動車製造販売業)の中で厳しいノルマを課せられていても、「しょうもないことをしているなあ。」とどこかで会社の方針を冷めて見ている。子育てをする時期には高収入を望んでいたが、子どもが自立した現在は、顧客との人間関係の中で自分が役立っているという手応えを得ることに充実感を得ている。仕事を介しての充実感をどこから得るかは、働く人のライフ・ステージや人間的成長とも関連しているようである。

Dさん(ケース54)は、銀行員を目指していたが果たせず、先輩がいた縁で日用医薬品小売販売業の従業員となった。接客は自分に向いていると思い、店長を目指して働いた。就職後7年目には店長になったが、休みがとれない、収入は思うように上がらないなどのジレンマから、食品製造販売業へ転職した。メーカーの方が利潤を上げやすいし、収入が少し良いというのが転職先を決めた理由であった。転職後の仕事は、収入的には不満だが、資格を沢山持っているわけではないので、もう転職は考えられないと言う。職業生活を振り返っての評価は『普通』で、「もっと高い目標を持って生活すれば、収入や昇進ももっとやれたのでは

ないかと思う。」ということである。再就職先を探すために、ハローワークに通うのは時間的に難しいので、就職情報が入手しやすい仕組みを望んでいた。

Eさん(ケース53)は、初職(医薬品卸売業)に就いてから2年2ヶ月後に、仕事に対する理想と現実とのギャップが大きいことに嫌気がさし退職した。次の会社は大学の先輩が声をかけてくれたので、何となくずるずると就職したということである。阪神大震災の影響もあり、会社が倒産する直前に肩たたきを受けて退社。2年間の職探しの末に、現在はホームセンターでパートタイマーとして勤務している。「もっと強い気持ちで将来のことを具体的に計画して、仕事に役立つような勉強をしておくべきだった。何となく流されていたと思う。」と話された。失業という経験を通して行政に望むこととして、長時間労働を避ける政策の推進、再就職につながる職業能力獲得のための支援強化、雇用保険支給期間の延長、本当に職を探している人には手厚い雇用保険手当、企業は求人情報を本音で出すこと、高校・大学でこの仕事をするためにはこういう勉強が必要だとか社会保障について教えて欲しい、などと話された。

3. 総括

初職の選択にあたっては、選職理由が曖昧なケースが目立った。それが、生涯を通じての職業生活にも影響するため、早い段階(義務教育からが望ましいと思う)から職業と向き合う取り組みを行う必要がある。そして、職業生活をどのように送るかを主体的に考えられるようにして行くべきではないだろうか。

初職でのメンターとの出会いは、職業人生に大きな影響を及ぼす。

再就職支援のための就職情報提供システムの構築(手近に情報を得られるために)や求職期間の生活支援の強化が必要である。

産業構造が激しく変化する時代の中では、職業能力の獲得のための教育支援体制の構築が必要である。

第 10 節 初職の影響を受けつつも以後のキャリア形成にみられる自分らしさ

1. 概観 - 職業を選択するということ

職業を選択するということは、どういう意味があるのだろうか。

特に学生から社会人になる節目の初職の選択は、中高年期の退職に匹敵する程の意味があり慎重にすべきであるが、最近の学生にとっては必ずしもそうではないように感じる。初職の時期を人生のうちで大切な節目であることの認識も薄い。就職活動において得た情報と入社後の現実とのギャップが大きいというのも、人生の大事な時期である初職選択のあり方に進路指導も含めて何らかの問題があるのではないかと思う。なぜならば選択した職業によってライフスタイルが決まってしまうのである。例えば生活全般、生活環境、人間関係など大袈裟に言えば職業選択は人生の選択そのものであると言っても過言ではない。

最近の調査では厳しい就職戦線を勝ち抜き晴れて就職した大学生の約 3 割が、高校生に至っては約 5 割が 3 年以内に転職をするという結果が得られている。この事実からも初職の選択は将来の職業生活及びキャリア形成に大きい影響を及ぼすことは間違いない。

今回の調査対象となった 3 事例に限ると、その時代背景もあるものの初職の選択が以後の人生そのものに大きい影響を与えているものである。事例 1 (ケース 57) は高校卒業後は父親の失業の辛さを家族の一員として体験したことにより安定性があり倒産のリスクの少ない有名和菓子屋というブランド企業を初職に選択した。そして 2 年半で退職することになるが三十数年経過した現在もこの和菓子屋での良好な師弟関係の成立が支えとなり、ここで取得した資格が活用され公務員という仕事に繋がっている。事例 2 (ケース 56) は大学に進学してコンピューターを学びたいと希望していたが突然の父親の病気により断念することになった。残念ながら大学への進学は叶えられなかったがコンピューターの仕事がしたいというイメージが頭の中に浮かび大手電機メーカーに就職した。高卒という理由で辛い時期もあったが努力と実力が認められて SE の仕事を通じてキャリアアップを可能としていく。事例 3 (ケース 58) は中学時代から音楽教師 (ピアノ教師) を本人、両親ともに希望し音楽短大に進学する。卒業後は学校で教師となることはなかったが自宅でピアノ教室を開いた。結婚してからは夫のイラクやタイの転勤先への同行により一時的に中止することもあったが、三十数年経過した現在もピアノ教師を続けている。3 事例ともに意識、無意識のいずれかによって行われた初職の職業選択であったが、いずれも後々のキャリア形成に大きい影響を与えている。

自分に、よりふさわしい職業に出会い選択していくということは将来の豊かなキャリア形成をしていくために必要である。

2. 事例分析

2.1 初職に影響を及ぼす事柄、特に親の影響について

次に重要である初職の選択に影響を与えた人物や事柄などについて各事例を通じて具体的に考えたい。

事例1は倒産した会社に勤めていた父親の失業が初職選択に影響を及ぼし、以後の転職においても影響を続けているという事例である。

父親の勤める会社の倒産で家族が路頭に迷い、大変な時期を体験したことで、子どもの頃から就職するなら「安定性のある大企業」と決めていたという。高校卒業後に有名和菓子屋を初職先として選んだ理由は「自宅から徒歩圏内だったから」と述べるが、やはり父親の失業が彼の初職選択に大きく影響を及ぼしていると考ええる。

その理由は、初職先は2年半で退職し一定期間のフリーター期間を経ているものの仕事を継続していない時期はまったくない。さらに後の転職先は大手スーパーであったり、郵政省や消防庁(合格したが行かなかった)や現職の市役所など すべて「安定性のある大企業(組織)」である。さらに転職の決意をしても感情的に退職することはなく、次の就職先を決定してから退職をするという念の入れようである。

事例2は、突然の父親の病気により経済的な事情が生じたために大学進学を諦め、学問として学ぶ予定であったコンピューターシステムを就職という実践の場で働きながら学ぶことを初職として選択したことが同一企業でのキャリア形成に大きく影響を与えた事例である。

中学、高校の成績は優秀であり、大学へ進学して将来はコンピューター関連企業に就職したいという希望を持っていた。しかし父親の突然の病気により、心ならずも大学進学を諦め就職をしなくてはならなくなった。どうせ就職をするならコンピューターシステムの仕事ができる企業にしたいという希望で最後に外資企業と日本企業の大手コンピューター企業の2社が候補となった。彼は、外資では高卒では定年まで働くことができないのではないかとという予測があり、日本企業を選択した。途中では高卒であることで補助的な仕事しか与えられずに転職も考えるが、徐々に彼の能力と誠実な仕事ぶりが評価されるようになり、内外ともにキャリアアップを順調に果たし、一時期は大企業のコンピューターシステムを管理する立場にまでなった。

以上2事例は男性の事例であり、しかも父親の会社の倒産や病気という家庭の事情が初職選択へ大きい影響を与えている事例でもある。30数年前と現在では時代背景は随分と違ってきているが、不況によるリストラや倒産などの経済的理由及び両親いずれかの病気などの理由により進学を諦めざるを得ない場合や不幸にして倒産やリストラの対象となった両親の姿を垣間見ることにより対象となる学生の初職選択の影響は大きいと予測される。

事例3は、教師という両親の職業が初職選択に大きい影響を及ぼした事例である。

本来は音楽の教師となって両親と同じ教員の道を進む予定であったが、仕事をしている母親の希望もあり教師にはならず自宅ピアノ教室を始めることを初職として選択をした。

学校の教員になるか自宅でピアノ教師をするのかという形の違いこそあれ「教え、伝える」という両親と同じ職業を初職として選択をすることになる。結婚し夫の赴任先であるイラクやタイに同行することになり一時的にはピアノ教師という仕事から離れることになるが、帰国してからは、自宅と別の教室においてピアノ教師の仕事を継続することになり、現在は週に2回のピアノ教師の仕事が彼女の支えとなっている。実際には自宅でのピアノ教室が別の教室を持ちさらに発表会を開催するなど、家庭の仕事と両立するという彼女の守備範囲の中でキャリアアップを果たしている。

事例3のようにキャリア形成の途中において結婚、出産、子育てさらには配偶者の転勤などの事情により一時的にキャリアを中止することがあってもトータルで働く意志を継続することができるのは初職選択の影響が大きいと考える。

2.2 初職先での円滑な人間関係の影響

3事例の共通点を指摘するならば、初職において人間関係が円滑であったことが事例1ではその後の転職の支えとなった。事例2では高卒を理由に重要な業務に就くことができなかったが、上司が努力を認めて抜擢してくれることが社内でのキャリア形成に大きく影響を及ぼした。事例3においては、夫の赴任先に同行するために自宅のピアノ教室を閉鎖することを友人に告げると帰国するまで代理でピアノ教師をしていくことになり、閉鎖することなく帰国後すぐにピアノ教室に戻ることが可能となった。能力が十分であっても職場の人間関係で自信を失い本来の能力が発揮できない事例があるが特に事例1では能力の問題よりも、円滑な人間関係により能力以上のものが引き出されることになる。

2.3 初職の進路指導のありかた

以上3事例の面接を通じて、人生の転機である初職選択は重要であり教育現場での進路指導の役割は大きいと認識をした。事例1についても学校での進路指導は何の役にも立たなかったと述べ、特に事例2では成績が優秀にも関わらず父親の病気のために大学の進学を諦め就職をした。就職して暫く経過した頃に知人から奨学金制度があることを知らされた。高校の先生が情報の提供をしなかつたことを残念に思うことがあったという。もし知っていたらどんなアルバイトをしても進学をしていたと後悔を残している。学校で行う進路指導は先生にとっては恒例のことであり何ともないことであっても、始めて就職を決める学生や生徒それに親にとっては一生の大きい節目の問題である。それに立ち会う教師は、一人一人の人生と向き合い最善の情報を提供する役割があると思う。

近年ではテレビや情報誌さらにはインターネットを通じて就職の情報は溢れる時代となり反対に氾濫している情報から本当に必要な情報を選択することに苦勞する時代となっている。個人が必要な情報の提供を学校としてどのように提供することができるのかも課題であると思う。

3．総括

3事例の面接を通じて現代も変わらずに、卒業直後の初職が以後のキャリア形成に影響を及ぼすということを理解することが可能となった。従って初職選択に関わる学校関係者は適切で妥協のない情報提供に努める必要がある。冒頭にも述べたが職業人にとって初職は退職にも相当するくらい大きい節目であるにも関わらず、本人はもとより両親、学校ともに重要視するという認識が薄いとなれば問題である。2事例は父親の会社の倒産や父親の病気が初職選択に影響を及ぼし、残りの1事例は教師という両親の職業が初職選択に影響を及ぼしていた。

3事例は初職選択の動機は様々であったが、その後のキャリア形成に何らかの影響があるという点においては異論のないところである。また、初職以後の職業人生は、それぞれに紆余曲折があったが、ある意味での成功を納めた人たちであった。

第 11 節 ライフ・キャリア形成のポリシーを「家庭との調和を基軸」とする生き方に確立した女性モデル

1. 概観 - 既婚女性としての行動

現代を生きる女性で、職業活動とまったく無縁に過ごす例はほとんどないのではないかと。今回の調査対象となった3つの事例は、ア．自営業の夫を支える専業主婦を自認する者（ケース 60）、イ．もともと何かをやっているのが自然と思いついたアルバイトやパートタイムなどをしながら自営業の夫の助手をする者（ケース 59）、ウ．学校教師を長年にわたり勤めてきた者（ケース 61）といったそれぞれ職業と自己との関わりについての自己評価は異なるが、いずれも日常的な行動として職業にかかわる活動をさまざまに行っている。

たとえば、夫が自営業を営んでいる例が2つあったが、それらは、家業への関わり方については、実態も関わり意識も異なっており、一方は日常活動として家業への参画をしていない例であり、他方は日常的に具体的な参画を行っている例であった。この2例は日常的な参画のしかたという面では対照的であったが、いずれにも共通して、夫の指示に従って自営業で必要とされる業務行動に当たっていることを強調するという特徴がある。さらにもう一つの共通点として、そうした夫の指示に従うという行動は依存心によるものではなく、また、自己の生活能力への不安によるものでもなく、自主的判断によると考えている点あげられる。つまり、そうすることが「生きやすい」ことであつたり、「そうする方がうまくいく」ことであるとの判断から、自発的に選択した生き方であり、生活の方法であると考えている。このことは、家庭との調和を基軸とした生き方を選んだ女性が、夫という経営者から信頼されている強力な経営補助者として経営実務の重要な一部を担ってきた実態を踏まえてのことである。20年以上のライフ・キャリアから確信されたものなのであろう。

2. 事例分析

2.1 家庭経営の実務責任者としての理念

1 例ごとに具体的にみると、まず、日常的に参画をしないという例では、専業主婦を自認しながらも結婚前に勤務経験がある銀行との取引をこなしている。しかし、本人によれば、それは夫の指示により、言われたとおりにしているだけということである。むしろ、自分の能力が発揮される仕事は夫の健康や従業員に対する悩み事の相談などきめ細かい家庭的な配慮をすることで経営者である夫を支えることであり、それが妻の立場にある者としての役割だと考えている。そうした中では、業務遂行能力を向上させるための職業能力開発を行う必要はとくに感じられず、一つ一つの仕事をこなして行く中で問題に直面すると、自分で工夫したり夫の意見を求めて解決することが実務処理の上で効果的であったのであろう。

なお、子供の教育についても実際の日々の出来事への対処はそのほとんどを自らの判断で行っているが、それも自営業に関わる職業行動と同様に夫の方針に沿ってやってきたという。

そうして、夫婦でよく話し合っていくことが家庭生活の実務責任者としての自らの役割を全うすることに通じるとしている。

つぎに、もう一方の日常的に夫が自営する仕事に参画をしているという例では、参画の仕方は顧客への対応やトラブルへの対処などの具体的な重要業務の遂行である。この場合は、結婚以前から大人の生活として、いつでも職業的活動を行っていることが自分の自然な生活の形であると考えてきたといい、実際にもこれまでのライフ・キャリアをみると、就業形態や就業期間は多彩であるが、新規学校卒業以降はいつもなんらかの職業活動を行ってきたりしている。

現在行っている自営業に関する職業行動については、夫の指示がありそれに従って実行することが基本であると自己評価している。とはいえ、実際の職業行動は自己の判断でその場で最も効果的だと思われるものを選択・決定・実行しているし、とくに顧客への対応などは、収益よりは社会に誠実でありたいという自己の職業観を貫く行動をとっている。本人の言葉によれば、それも夫の考え方に調和するものである。見方によれば、上司である夫の指示に従う部下の行動だということになるが、夫婦の関係が基盤にあるためか、実態としては単なる部下である以上に多くの業務処理を自己裁量で行いながら、家庭経営と自営業を担う役割とのバランスの中で自己の職業観を貫いている様子がみられる。この例の場合は、自営業に関係する職業資格の取得を目指した経験があるが、業務上の必要性は夫の資格所有で既に満たされており、自らには資格取得の絶対的必要性がなかったこともあって、目標を達成せずに終わっている。また、業務遂行能力の向上は実務経験を重ねることで解決することが基本である。中型コンピュータやパソコンなども夫の援助を受けながらであるが、基本的には実務経験の中で工夫しながら必要技能を習得してきている。

さらに、さまざまなアルバイトやパートタイムの仕事を自営業とは別にこれまで経験してきたが、それらは生活費としてではなく、自分で自由に使える金銭を職業活動によって得るのが自然であり、「生きている証」だという生活観であって、それ以上の収入を上げるという考え方をしていない。すべて、家庭経営の実務責任者としての生活の一齣であって、家庭経営の役割をこなす上での付帯的な活動として行っていると思われる。

以上の2例とも、職業に通じる能力開発はかなり積極的に行ってきた。ただし、経験した能力開発は趣味・教養に属する分野だと位置づけており、その種類は、料理、手芸、和服の着付け等幅広く多彩である。共通しているのは、職業的自立に通じる資格取得のレベルにまで技能が到達すると、資格取得の費用やその他のことを直接の理由としながら、実際には家庭責任を優先したいという理由から、その当該種類の能力開発の取り組みを中断・終了して、他の種類の取り組みに移っていることである。

学校教師を長年にわたり継続してきた例については、教師としての職業キャリアについては当然ながら明確な自己評価がある。しかし、そのなかで、注目されるのは職業活動を夫等の周囲の理解者に支えられてきたと認識している点と、結婚によって職業活動を含めたその後の生き方全般にある種の開眼をし、その結果が結局はこれまでの職業キャリアの形成につながったとする点である。教師としての道も管理職その他いくつかの選択肢があるが、この例では職業生涯を現場の教師として位置づけようとしている。これは職業上の適性やキャリア・アンカーから発した思いである部分はあるにしても、家庭を軸に自己の職業行動を展開していこうとする姿勢が本事例の職業キャリア形成のもととなっていることは否定できないであろう。

2.2 転機のあり方

3つの例に共通する点は、さらにもう1つ把握できている。すなわち、キャリア形成の転機のあり方である。いずれも自分を含めた家族の問題に遭遇したことを転機としてあげているが、それらは、一旦は「とくにない」と前置きしながら、転機にふさわしい何かを見つけようとして探し出してきている。むしろ、実際はそのほかの多くの事柄に出会いながら、その時々にとりおりの対処によって問題を自力解決して実力を蓄積してきており、それによって形成された能力がある一定の水準に達した頃に、ある種の家族の問題に遭遇し、それへの対応を転機として取り出したという様子がある。この3例とも家庭経営の実務責任を負っている「家庭」そのものに家族構成や経済基盤整備等に、途中、大きな変更はなかったことを考慮すると自己の行動の基軸となる家庭経営との調和という面では、積極的に転機とする明確な出来事は「とくにない」という評価が率直なところであったと思われる。

3 . 総括

以上の点を考慮して、今回の対象事例の面接記録を検討すると、対象者は家庭経営の実務責任者であるという点から、長年にわたって結婚後のライフ・キャリアを組み立ててきている。職業と家庭との両立という言葉があるが、両立というよりは家庭経営の実務責任を果たすこととその他の行動を調和させることがライフ・キャリア形成のさまざまな部分で基本的な行動原理となっているように思われる。それは、専業主婦をより強く意識する者であれ、自営業への参画を意識する者であれ、また、専門的職業を継続就業している者であれ共通する。ただし、その「調和」へのアプローチが継続就業をしている者とそうでない者で異なっていたとみられる。しかも、自分のおかれた環境と生活の条件を自分自身で総合的に判断した結果としての生き方の選択である。環境と条件が異なれば、それに応じた行動を自発的に模索していったはずの人々だと思われる。今回の対象事例は、ライフ・キャリア形成のポリシーを「家庭との調和を基軸」とする生き方に確立した女性のモデルであったといえよう。

終章 調査研究から得られるインプリケーション

1. 調査対象者の全体的特徴

全体を通じた概観の分析によれば、本調査の対象者は、はじめて労働市場に参入した時期によってキャリアが大きな影響を受けている点が第一の特徴である。また、それ以上に大きく影響を受けたと考えられるのが、日本の雇用管理制度・慣行のあり方とその変化及び原因である社会経済の状況である。少子高齢化による人口構造の変化は、経済情勢と絡みつつ、既に、現在の労働者に影響を与えていた。その個人が生きる社会の状況と所属する企業等の組織の雇用管理のあり方が個人の職業キャリアにどれほど大きく影響するかを痛感させられる結果が得られている。

第二に、一般的なパネル調査に対する見方と、今回の対象者のイメージが異なっている点である。こうしたパネル調査に協力し続けてくれる人というのは、安定した人生を送ってきた人ばかりであると通常想像される。しかし、今回の対象者の特徴は、実際には、キャリアの安定性や世間一般からの高い評価を得た職業的ステータスではなく、人生や生活を自己評価して総括的に自分を肯定しているという点であった。人それぞれ自分の生活や人生全体の価値に職業が占める大きさや意味が異なり、その大きさや意味に応じて現状の自分自身を受け入れている状態にあることが見出されたといえよう。職業は個人の社会参加や社会的自立の基盤となる重要な営みではあるが、しかし、個人の生活や人生にとっては、その一部でしかない。その一部分を個人が自分の納得する形でみつめることができるかどうか、職業キャリアを形成していく上での最も重要な要素であることを今回の調査結果は示唆したと考えられる。もちろん、その納得の理由には、その時々の中で生きる個人の選択の結果が反映される。職業キャリアに対する自己評価にも、社会経済の状況と所属企業等の関係組織・集団のあり方が影響すると考えるべきであることはいうまでもない。

第三に、職業資格の取得の状況は、新規就職時の学歴によって異なるという特徴がみられた。高卒までに新規就職した場合は、機械・設備等の運転操作・管理に関する能力についての技能水準を証明するための資格を取得することが多くなっている。一方、大卒以上で新規就職した場合は、職業能力の開発は職場での業務経験が最も有効であり、能力の評価には職場での実務経験が重視されるという考える傾向があった。したがって、職業に関する資格については、教員免許や医師、社会保険労務士、建築士等の職業につくための資格以外は、有効性をさほど、あるいは、まったく認めていないということがみられた。

これは、ホワイトカラーの能力開発と能力評価のあり方について、これまでの日本の社会における職業能力開発事業や施策の現状にあらためて痛烈な批判を加えつつ、今後のそれらのあるべき方向を示すものとも考えられる。

このような結果が得られた理由のひとつには、資格や検定で能力の水準を示すことについては、ホワイトカラーの場合は一定の条件が整わなければそれほどの効果を期待されていな

いということがあろう。いわゆるホワイトカラー職種のサラリーマンが、OJTと実務経験については職業能力開発と能力評価の効果を高く認めるということは、いいかえれば、どういう企業でどのような立場でどのような仕事をしたかという複合的な条件のもとで、その個人の能力が評価されなければ本当の能力は判断できないという主張があると思われる。各職場で日常的に出会う多くの問題発生場面では、チームワークを原則にしながら自分の判断で対処しなければならないため、それに必要とされる融通無碍ともいえるような臨機応変の対処能力といったものは、仮想ゲームでは計り得ないという実感があるとみられる。経験から得た実感として、ホワイトカラー職種のサラリーマンの職業能力は職業経歴と実務経験という実践の結果で伸長され、また、評価されるものだという考え方になるのであろう。

また、そのことは、能力水準というよりは、その個人の能力がどのように構成されているかという視点を持つ必要性を示していることでもあると考えられる。その意味では、学歴を要件とする医師の資格や教員免許、あるいは社会保険労務士や建築士等の職業につくための資格は、能力水準の証明であるよりも、その職業を行うために必要な知識・技能を総合的に習得していることを選別されて取得する資格である。これは専門性についての見方にも関係する。

いずれにしても、大卒ホワイトカラー向けの職業能力開発と能力評価は、能力水準の証明と学習実績の証明に止まるものについては、当事者である大卒ホワイトカラーからは良い評価は得られていないということが把握された。

第四に、どの学歴でも、転職経験と失業経験は連動しないという傾向がみられた。失業期間のない転職がほとんどであったことが対象者の全体のはっきりした傾向として捉えられた。しかし、何故、このような状況がみられたのかについては、現時点では分析が十分でない。これが在職者を含めた調査であることによるのか、特別な例であるのかどうかは現時点では明らかではない。仮に、失業中の者に限定した調査であれば、より長期の失業経験が全体傾向として把握されるのかどうか、今後、検討を深めていくこととする。

第五に、パート・アルバイト（生徒・学生時代の経験を除く）に関して、性別の特徴が顕著で、どの学歴でも、女性はパート・アルバイトの就業経験があり、しかも複数職種の経験を挙げる者が多いことが概観されている。

これについては、女性は、パート・アルバイト就業について男性とは異なる就業動機や働きがいを見出している傾向があるとみられる。個別の状況は、今後、さらに丁寧に分析・整理していくこととするが、今のところは、大きく2つの理由でこの現象を説明しておくことがよいと思われる。すなわち、日本の社会慣行と雇用慣行が既婚女性の就業形態に影響した結果であるということと、女性自身が生き方の選択として家庭経営の実務責任を果たすことを優先し、その行動と職業行動を組み合わせた生き方をしているということである。これについては、ジェンダーや雇用均等の視点からだけでなく、職業は、生活や人生の一部であり、職業キャリアについては「個人が自分の納得する形でみつめることができるかどうか」が職業

キャリアを形成していく上での最も重要な要素である」という前記第二の特徴で述べた知見に立つ視点や、これまでと今後の産業・職業の構造、形態等がどうかという視点も組み入れて総合的な検討をしていかないと、十分な分析と評価ができないと思われる。総合的な検討は今後の課題としておくこととする。

最後に、職業キャリアについてみる際には、個人が職業に関わっていくための個人的な要件に的確な注意を払わねばならないことが把握されたといえよう。

パネル調査の性格をもつ本研究及び関連研究で実施した一連の調査において、中学3年時点での学業到達度、基礎学力、保護者の教育方針、経済的その他の生活状況、人格や行動面での傾向といったものに関しての情報が本人の発言等から不完全ながら把握できている。その情報をケースの分析に組み込むと、初職以降の職業選択と職業キャリア形成は、それらの個人的要件の影響を受けて行われていることが見出された。とくに、初職の選択が進学の有無を含めてそれらの影響を強く受けて行われたことは明らかである。また、第二職以降の職業キャリアの形成には、個人の基礎学力と知的能力の傾向が支えとなり、人格や行動の傾向が方向付けとして行われている。

初職がその後の職業に影響するという指摘は、初職が始めての本格的職業経験であって、いくなれば、その職業の窓を通して他の職業をみていくことから、次職以降の職業的連鎖が始まったり、長期継続雇用に根拠地を置いた自らの職業キャリアを形成していくことになっているという現象を説明しているものであろう。

たとえば、中学3年生当時、学業到達度及び基礎学力が高く、前向き思考（いわゆるポジティブ・シンキング）をする積極的な行動傾向の者であったことが本人等からの情報で把握されている例では、初職においては、家庭の経済的な状況の制約があったため、良い条件に恵まれた職場や本人の資質に見合った最適な職業とは到底言い難い選択を行っている。

しかし、その当時は、その「就職」が実現可能な就職の中で最も必要とされる条件を満たすものであった。その観点から職業選択を行い、そして、その後の転職等を経て、納得性の高い職業キャリアを形成していった。

この例では、初職は経済的な制約の中で選んだものであって、本人の学業到達度及び基礎学力などから推察される知的能力の高さを満足させる職業ではなかったが、初職に就いて後には、その時々置かれた環境の中で遭遇するさまざまな事柄から職業人としての対応を学び、本人がより良いと考える行動の選択を繰り返しながら、納得性の高い職業キャリアを形成していったものと考えられる。

こうした例が不自然でなくいくつか存在するという事実は、個人のキャリアにおける職業連鎖の始点としての初職の重要性を強調しすぎることへの警告になるであろう。初職の役割の重要性を強調するあまり、個人的要件の異なる多くの人々のキャリアを総攬して、一度の職業選択がその後の職業人生を決定づけるかのような事象のみをつかみ出すことは、個人の

キャリアを理解するうえでも、キャリア形成支援をする基本的態度としても、適切でないことを示しているといえよう。今回のいくつかの事例が示しているのは、職業キャリアの形成には個人が力をもっているのであって、人生における職業連鎖の始点である初職をどのように価値を与えて利用していくかについても、職業行動を統制する個人的要件が基盤になっているということだと思われる。個人的要件に大きな変更があった場合は、初職は第二職以降には影響を与えていない。

これらのことは、いくつかの自営や非正規雇用の例をみると、新規学校卒業時点で職業を選択しなかった、あるいはしえなかった者についても無縁のことではないと思われる。職業キャリアの形成のあり方や支援方策について考えるとき、この点をしっかり見据えておく必要がある。

同時に、これらのことは、さまざまな要件の違いが個人ごとにあっても、初職の選択を支援する場合には、次の点を捉えて個人の職業選択の意欲を喚起し、判断を促すことが重要であると示唆していると考えられる。すなわち、その時に支援される個人がおかれた環境が選択になんらかの制約をもたらすものであること、個人が備えている適性・能力が職業キャリア形成の基本的な推進力であり、原動力であることを現実の影響要因として捉えること、の2点である。

以上のことを総括すると、本研究の結果からは、職業キャリアは一度の選択で運命的な形を決定づけられているのではなく、個人が社会や組織の影響を強く受けながらも、適性・能力や家庭の経済事情及びその他の個人的要件をもとにした日常的な職業的行動選択を繰り返すことにより形成されていくものであることが把握された。そして、社会や組織が個人のキャリア形成に与える影響はきわめて大きい。しかし、職業選択という行動は、その行為を行う個人の個人的要件が支えるものであることから、職業キャリアの形成は、中年期の中盤(対象者は49歳から51歳の年齢に到達している)までには、その人らしさや人生や生活全体についてのその個人の考え方を反映するものになるといえるであろう。

なお、個人は、自分が築いてきた職業キャリアに対して生活や人生全体の中で納得できる位置や価値を与えることができれば、自らの職業に対して冷静な落ち着いた評価が可能になるばかりか、職業生活以外の生き方全体の安定にもつながるといえることが見出されたと考えられる。

2. 分析編の要約

続いて分析編を整理する。

「調査から見えたコーホート特性」は、彼らの職業能力とキャリア形成がどのような背景のもとに展開されていったのかを素描している。対象者が属するコーホートは、新規学卒時に学校から職業へ円滑な移行を果たすことができた世代であり、30歳代後半に起こった「バ

ブル」の時には、職業キャリアを転換する機会を得ることができるという状況にあった。しかし 40 歳代後半には企業の倒産やリストラの影響を受け、否応なしに職業キャリアを転換せざるを得ない者も少なくなかった。第 1 章でも指摘されているが、コーホートが経験した状況を考慮することの重要性が示唆される。

「職業選択は人生模様」においては、調査対象者が石油危機、その後バブル崩壊と不況を生き抜いてきた姿が描かれている。厳しい環境をくぐり抜ける中で、ひとつの会社で働いている者、転職はあったが、働き甲斐のある職場を見つけ順調に働いている者、会社都合から転職を余儀なくされ、いまだに定職がない者もいる。こうした転職の成否を分けるのは、事前の準備である。成功している人は、前職を辞める以前に情報収集を開始しているが、うまくいかない人は会社を辞めてから転職活動を開始しており、失業の焦りから当面の打算で仕事を選択してしまう傾向が見られる。

また 50 歳前後という対象者の年齢から、子供の自立に悩む者も少なくなく、自分のキャリアについて考えているだけでは済まなくなってくる。いずれにしても職業の選択が人生そのものの過ごし方、生き方に及ぼす影響の大きさがさまざまな人生模様から見出される。

「職業人生における専門性の確立」においては、新しい分野を切り開いた、専門的な職業についている対象者を取り上げ、仕事に就いたあとの教育経験をたどっている。彼らの特徴として、職場から研修の機会を提供されてきたことももちろんだが、自ら研修計画を立て、周囲の了解を得て、異なる分野や海外、大学などで新しい知識や技術を身につけている。これが可能になったのは、職場のサポートがあったこともあるが、仕事にのめり込まず、仕事と家庭のバランスをとりながら、実践によってキャリア形成を行ってきたことが大きな要因であると推察している。

「就学期におけるキャリア形成支援教育の重要性に関する提言」は、キャリア形成を考える際には、仕事の分野や職位など経歴だけでなく、生きがいや働きがいをもたらす広義の仕事に基づいた内面的な体験の積み重ねとしてキャリアについても着目すべきだと指摘する。

就職の履歴としての初職選択においては、親の持つ職業情報の影響が大きいことが見いだされるが、産業構造の変化が激しく、職業が多様化する現在においては、親世代の情報が子供の初職選択において有効でないケースも多い。この乖離を埋めるためには、初職選択に直面する以前にキャリア形成支援教育が必要であるが、特にキャリア形成支援教育を担当する教員に対する教育・研修を充実させる必要があると提言する。また男性のケースにおいては個人の内面に視点を当てたときに、職業との関係性の安定や職業と個人生活の調和などが不十分であると、将来、外的キャリア形成の計画に変更を余儀なくされる場合に対応できない可能性も示唆する。したがってキャリア形成への支援においては、職業経歴としてのキャリア形成だけでなく、個人の内面での職業との関わり方も支えるサポートが必要である。

過去の、26 歳時点での調査によれば、学校卒業後の最初の仕事は、その後の職業的な生き方や見通しに対して重要な役割を持っているという知見が得られているが、50 歳時点におい

ても初職の影響は見られるのだろうか。「キャリアの初期における支援者の重要性」においては、キャリアの初期において、不安定な立場にある若者を擁護し、育ててくれる支援者の存在は、その後の対象者の安定したキャリアの継続において重要な役割を果たしていることが見出された。支援者は同じ職場の先輩や上司であり、主に物事の判断基準について影響を受けていた。キャリアの初期においては、それまで所属していた学校とは異なるものの考え方を身につけることを迫られる。そのときに身につけた準拠枠は、その後のキャリアにおいても準拠枠として作用し、物事を判断する際の基準となっている。

「早期に就きたい仕事を決めたケースのキャリアと職業能力の形成」においては、主に専門職に就いた事例を取り上げている。対象者の世代は現在と比べると親の家計水準は低かったが、正社員としての就業機会は豊富であった。ただし自分の就きたい仕事が決まらない、何をしたいかわからないという現代の若者たちが直面している問題は、現在 50 歳前後になろうとしている対象者たちの世代でも無縁のものではなかった。

いくつかのケースから伺えるのは、親や教師などの大人による職業的な方向付けが進路選択に対して大きな影響を及ぼしたことである。「好きなことをすればいい」という言葉でなく、具体的な提案や現実的情報を提供するとき、周囲の大人は大きな役割を果たしていた。

また就きたい仕事の選択と、高等教育機関等への進学、そこでの職業能力の基礎となる教育、就職への支援、職場での必要にせまられての仕事の中での能力形成、研修機会という一連の流れを通して見る視点の必要性が提起されている。

「キャリア形成とリーダーシップの発達」においては、キャリア形成における人的ネットワークの拡大・深化による影響力の拡大に着目している。ここで捉えられるキャリアとは、職場だけでなくコミュニティも含んだ、広い意味でのキャリアである。

一般にキャリア形成について捉える場合には、仕事内容の変化や昇進などの指標が用いられることが多いが、こうした指標では職場におけるキャリア形成を把握するにとどまる。そのため、ここでは、「集団において目標達成を促すよう影響を与える能力」である「リーダーシップ」という概念の導入をはかっている。その視点からのキャリア形成のあり方は、職業活動を含めて社会における個人の活動の成熟、とりわけ集団内でどのように行動するか、他者に影響を与えうるかといった個人の力であるリーダーシップの発達に影響があることを示唆している。

「組織における個人のキャリアアップの困難さ」においては、初職からキャリアを積み重ねていっても、長い職業生活の間に思いがけないことに直面するさまが描き出されている。ライフプランのなかでキャリアプランを検討し、さらに自分を高めていくことはそれほど簡単ではない。したがって、教育・研修支援プログラムを準備し提供するだけでなく、職場内で受講しやすくする支援体制やそのシステムを構築していくことが重要ではないかと指摘されている。

「流されるままの職業生活から主体的な職業生活への転換」は、会社都合で離職を余儀な

くされた対象者を中心とした分析になっている。初職の選択にあたって選職理由が曖昧であることは、生涯を通じて職業生活に影響している。在学中の職業選択の積極性は、26歳時点での調査においても、仕事に就いた後の積極性に影響を与えていたが、50歳時点でも同様の傾向が確認できる。

また仕事上の失敗体験への対応によって、キャリアや職業能力がより深められるようになること、仕事の上での充実感をどこで得るかは、働く人のライフステージや人間的成長とも関連していることが述べられている。

「初職の影響を受けつつも以後のキャリア形成にみられる自分らしさ」においては、初職の選択について論じられている。対象者の初職の選択の背景には、両親の勤め先の倒産や病気などの状況があったが、彼らの事情を深くみ取るような情報提供や進路指導はなされなかった。その後彼らは自分なりにキャリア形成を行っていった。情報が氾濫する現在では、個人に必要な情報を選択することが難しくなっているため、個人が必要な情報の提供を学校としてどのように提供することができるのかが課題であると指摘している。

「ライフ・キャリア形成のポリシーを『家庭との調和を基軸』とする生き方に確立した女性モデル」においては、女性に焦点づけた分析がなされている。

対象者は家庭経営の実務責任者であるという点から、長年にわたって結婚後のライフ・キャリアを組み立ててきている。職業と家庭との両立という言葉があるが、両立というよりは家庭経営の実務責任を果たすこととその他の行動を調和させることがライフ・キャリア形成のさまざまな部分で基本的な行動原理となっているように思われる。それは、専業主婦をより強く意識する者であれ、自営業への参画を意識する者であれ、また、専門的職業を継続就業している者であれ共通する。ただし、その「調和」へのアプローチが、継続就業をしている者とそうでない者と異なっていたとみられる。しかも、自分のおかれた環境と生活の条件を自分自身で総合的に判断した結果としての生き方の選択である。環境と条件が異なれば、それに応じた行動を自発的に模索していったはずの人々だと思われる。ここの対象事例は、ライフ・キャリア形成のポリシーを「家庭との調和を基軸」とする生き方に確立した女性のモデルであったといえよう。

3. 政策への示唆

以上の分析から、以下のような政策への示唆が得られる。

在学中の職業選択への取り組み

本稿の知見によれば、在学中の職業選択への取り組みが、若いときだけでなく、50歳時点のキャリア形成にも大きな影響を及ぼしていた。

こうした知見からは、在学中の取り組みの重要性は明らかだが、どのような取り組みを行うことが望ましいのだろうか。現在の進路指導は「自己選択」を尊び、本人の「やりたいこ

と」を基準に職業選択をさせる指導が主流であり、日本社会においても同様の価値観が共有されている。しかし本研究の知見によれば、教員を含む周囲の大人による「具体的な」提案や現実的情報の提供が有効であった。また現実にその仕事に就いている大人のアドバイスも役立っていた。在学中の進路選択には、周囲の大人による「積極的」な支援が求められる。

キャリアの初期に対する支援の充実

キャリアの初期によい支援者やメンターを得ることは、安定した移行を達成させ、その後のキャリア形成に目標を持たせていた。しかし若者が安定した仕事に就くことが難しくなっている現在、同一職場内で若者の立場に立った支援を行える大人を得ることは難しくなっている。こうした若者のために、職場内だけではなく、社会的に企業外の支援者作りを行っていくことは、今後の日本社会のキャリア形成に役立つことが予想される。

社会経済や所属組織のあり方が及ぼすキャリア形成への影響に着目する支援の充実

キャリア分析を行う際には、その世代が背景としている社会経済環境や雇用環境を考慮することが重要である。

本調査では、労働市場に参入した時期がその後のキャリアに影響を及ぼしていることが伺われたが、それ以上に、キャリア形成の各時期にその時の社会経済や所属組織のあり方が大きく影響していることが認められた。とくに、長期継続雇用等の雇用管理制度や少子高齢化による人口構造の変化は社会全体の変化であるが、一人ひとりの労働者に実に大きく直接の影響を与えていることがみてとれる結果であった。その意味でも、キャリア形成への支援が社会一般の制度であるかどうかは別としても、メンターや職場のOJTその他の教育機能による支援を中核とした個人に対するキャリア形成への支援に対しては、労働者の職業生涯を通じたニーズが潜在していると思われる。同時にまた、所属組織の状況や個人の職業経験の具体的な内容など個人的要件の違いを十分に踏まえたきめ細かい支援でなければ、十分な実効性は期待できないと考えられる。

したがって、所属組織とは別のいわゆる外部の専門家等によって提供される専門的な支援機会や制度の充実も必要であるが、労働者が日常の職業活動の中で得られる支援がより重要になるであろう。すなわち、企業等の雇用管理の一環として行われる支援がきわめて有効な支援となると考えられる。そのために必要と考えられる国等の施策としては、近年、経営の合理化等を理由に低調になっている中長期的視野に立った労働者の教育訓練等について、各企業等が実際に実施可能でかつ効果的な事業を整備するように促すことと、そのために必要なノウハウを開発・提供することであろう。

「キャリアと職業能力形成」研究の視野の拡大

職業的なキャリア形成は、家庭や社会生活・人的ネットワークなど周囲の状況と深く関わ

っている。女性においては、家庭生活との調和に端的に現れていたが、男性の場合であっても、職業キャリアに対する家族・周囲の深い影響がうかがわれる。

たとえば、仕事と家庭とのバランスをとることが、自発的な研修に対する家族の理解を高め、家族のサポートを得やすくしていた。また家族のために当面の生活費を得ることが最優先課題となってしまう、じっくり転職・再就職支援に取り組む余裕がない男性の姿が描き出されていた。家庭や社会生活・人的ネットワークなどは、キャリアや職業能力形成をサポートするが、制約もするのである。

しかし、職業的なキャリアだけに着目した分析では、こうした部分がしばしば抜け落ちてしまう。個人のキャリアや職業能力形成について論じる際には、個人を取り巻く環境を含んだ分析を行うことを通じて、実態をより把握できる可能性がある。

職業能力開発と能力証明のあり方を再検討する必要性

職業資格の取得の状況には、どの学歴で就職したかによる特徴がみられた。とくに、大卒のサラリーマンである対象者は、職業能力の開発には職場での業務経験が最も有効で、転職するにしてもそれまでの職場での実務経験が重要な鍵だと考えているものがほとんどであった。それを踏まえると、ホワイトカラー向けとされる職業の資格や能力証明については、能力水準の証明や学習実績の証明に止まるものであるよりも、今後は、つぎの2つの方向で、既存のものを見直し、または新設を検討することが社会の実情に即するものとなると考えられる。第一に、その職業を行うために必要な知識・技能を実務経験に組み入れた形で総合的に習得していることを、選別した結果で得られるような資格を検討すること。第二に、あるいは、実務経験について、どういう企業・職場でどのような立場でどのような仕事をしたかという複合的な条件のもとでの個人の能力を的確に評価してもらえよう自己アピールやアサーション（自己主張）の訓練の機会の整備を検討することである。

4. 今後の課題

本研究において、調査対象者から頂いた情報は、25年間にわたる日本人の生き方、人生の歩みという実に膨大なものであったため、この報告書においては、その豊富な情報を十分に分析し切れていない。個人の青年期から壮年期にかけての25年間の人生は、職業キャリアに焦点をしばってみても、分析の多角性、慎重さ、投入する時間等々すべてにわたって本研究で費やし得たものを凌駕する。今回、整理しきれなかった事例も存在する。今後は、これらの貴重なデータをさらに緻密に、しかも広い視野のもとに分析していくことがきわめて重要である。

ケース記録

ケース 1

男性 51 歳

家族形態 妻、子ども 2 人

現在 営林署勤務

現状と今の仕事

営林署に勤め森林の巡視・巡検をしている。

これまでの主な経歴

高卒後、航空自衛隊に入隊、燃料科に配属された。（親戚に自衛隊勤務者がおり、ごく普通の進路選択であった）。勤務先は第 1 希望通り出身地に。自衛隊入隊早々、先輩隊員の除隊で順番待ち期間をほとんど経験せずに大型自動車運転免許を取得した（入隊時には自動車免許は取得していなかった）。

3 年の満期時に父親が病気で倒れ、長男でもあり家の面倒を見なければいけなくなったために除隊。除隊後、自衛隊で取得した大型自動車免許を生かしてトラックの運転手を 1 ヶ月半ほどしていたとき、近所の人から教えられた営林署の採用試験を受けた。高倍率であったが見事採用され、翌年 3 月から営林署に勤め、現在に至る。この間、勤務先の営林署の統廃合があり、転勤も経験したが、ずっと自宅から通勤可能な地元の営林署で働いてきた。親の面倒を見ており、住居は移してこなかった。

初職への移行

親戚のすすめで自衛隊に入隊。

仕事内容

初職 自衛隊

2 職 トラックの運転手

3 職 営林署に勤務

トラックに積んだ材木の量の測定、国有林や畑の巡検・巡視を行う。

自分にとっての転機とは何か

近所の営林署勤務者から、採用試験があると教えられ、応募して採用されたこと。

教育・訓練経験・自己啓発など重要な活動

現場で木の長さ、直径、立木数のはかり方を教わる。

自衛隊にいたときに大型免許を取得。そのために 3 ヶ月ほど陸上自衛隊で実地訓練を行っ

た。

影響を受けた人・本など

営林署に勤務するようになって数年たった後、地元のソフトボールチームに参加。以後、主要メンバーとして県大会などに出場し続けてきた。ソフトボールを通じて仲間のつながりが広がった。

自分にとっての仕事の位置づけ

体を動かす仕事が向いている。地元で暮らし続けるつもりでいたから、転勤などをしながら昇進することは考えなかった。

これまでの職業経歴を振り返っての評価

仕事については、何も不満はない。

将来・今後の展望

65歳の定年まではたらく。

健康について（本人と家族）

健康である。しばしば仲間と近隣のゴルフ場に出向くが、仲間のつてを使えるから、経費は安い。

ケース 2

男性 50 歳

家族形態 子ども 2 人

現在 県信用保証協会 課長

インタビューの場所 自宅（勤務先のある神戸ではアパート暮らし。金帰月来）

現状と今の仕事

現在は、A 県信用保証協会にて信用調査、管理回収、債権回収の仕事をしている。

これまでの主な経歴

高校卒業後、1973 年に現在の職場に入社。

初職への移行

高校の進路相談室で現在の職場と農協を勧められ、現在の職場に入る。就職時には民間でも何でも構わないが、ある程度大きなところで、いったん都会で働きたいという希望を持っていた。転勤がつづき実家に帰れないので、辞職して父親の会社（漁業関連機材販売業）を継ぐことを考えるが、父親に継がなくていいと言われる。

仕事内容

融資を申し込んだ企業に対する信用の保証業務。信用力の調査と審査業務や、融資期間中の管理・回収、金融機関に払う代理弁済後の管理業務や債権管理など、信用保証業務全般に関わる。

入社 5 年間ほど総務課で、信用保証申し込みの受付。1978 年末に A 県の B 支所に転勤し、管理業務に携わる。1980 年くらいから債権回収保証業務で訴訟や信用力調査にたずさわる。その後、C 支所に転勤し、管理・回収業務。本社に帰ってきてからは、信用調査・管理回収・債権回収にたずさわる。阪神大震災のときには C 支社の応援に行き、つぎに本社の応援にまわった。

自分にとっての転機とは何か

高校の先生の薦めで、今の会社に就職したこと。（地元の農協への就職も魅力はあったが、今になると、この会社にして良かったと思っている）

教育・訓練経験・自己啓発など重要な活動

研修は会社が全額負担。入社後、D 県の連合会で総務関係の研修、保健公庫で保険関係の研修、さらに 1987 年ごろ実際の財務分析の研修のために D 県の中小企業学校に 1 ヶ月に一

度行っていた。これらは会社からの指名によるもの。そのほか、自分の希望で通信教育も2，3回受けた。入社時と20代後半から30代前半にかけて集中して研修。バブル期には法律知識を勉強会で学ぶ。数年前に海外における機関業務についての研修を受ける。

影響を受けた人・本など

公私ともに、ちょっとしたアドバイスをしてくれたり、陰で見守ってくれたりしている職場の先輩がいる。

健康について（本人と家族）

23歳のとき、父親が55歳で死去。そのため妻が第1子を妊娠中にA県の実家から別のところへ単身赴任。

ケース 3

男性 50 歳

家族形態 妻、子ども 3 人

現在 製鋼所に勤務

現状と今の仕事

A 県の製鋼所に勤務。現在は隣県の B 県の工場で極細の溶接棒を巻いて製品化する作業をしている。人材派遣会社から派遣されてきた十数人の教育も担当。

これまでの主な経歴

高卒で現在の製鋼所に勤務。最初の 4 年半は A 県の工場、23 歳からは B 県の工場勤務。25 歳で結婚、社宅に入る。平成 4 年に家を見て B 県の町に転居。2003 年 10 月に製鋼所が合併し生産量がこれまでの倍になったことにより、休日出勤と残業で週 60～70 時間勤務となる。

初職への移行

友人のおじの勤務先であった製鋼所に友人と共に試験を受ける。恩師の父親がその製鋼所の課長であった縁で採用される。A 県の工場に 4 年半ほど勤務。

仕事内容

製鋼所の A 県の工場に 4 年半ほど勤務。23 歳のとき B 県の工場に転勤。10 年ほど前から溶接棒を機械で糸巻き状に巻いて製品化する作業をしている。0.6 ミリの極細の溶接棒を巻く仕事はベテランしかできず、現在、氏が単独で行っている。

自分にとっての転機とは何か

A 県から B 県の工場に移ったこと。

教育・訓練経験・自己啓発など重要な活動

現在の会社の方針とは異なり、新しい技能は現場で覚えた。0.6 ミリの溶接棒を巻く作業は経験によって上達した。新しい機械は若手に担当させ、ベテランは今までの機械を使う風潮がある。

将来・今後の展望

定年まで残り 10 年を平穩無事に過ごしたい。

ケース 4

男性 49 歳

家族形態 母、妻

現在 失業・求職中、会社配送員

インタビューの場所 自宅

現状と今の仕事

失業中。時折、配送のアルバイトをしているが、介護関連の仕事を目指して求職中。

これまでの主な経歴

公立商業高校を卒業後、栄養専門学校に進み、栄養士の資格を得た。修了時、学校の紹介で国立大学付属小学校に栄養士として就職。出産による退職予定者の補充として正規雇用含みの臨時雇いであったが、当該者が復職することになったため、約 2 年弱で退職。1978 年、祖父の家の一階を借り受け、店舗に改造してお好み焼き屋を開業、母親の助けを得ながら約 10 年間続けた。しかし、昼夜逆転の生活が次第に苦痛になり、新聞広告で見つけた青果市場の高級果実専門の荷受会社（中卸会社）に応募し、採用された。そこでの仕事は、トラックで搬入されてくる果実を小売店に搬出するための積み下ろし作業。果実は昼夜を問わず搬入されてくるため、対象者は主に夜 10 時から明け方 6 時まで作業を担当するようになり、残業手当を含めて月収は 60～70 万円に達した。青果市場が移転するのに伴い、勤務先の荷受会社も移転したが、バブル期が過ぎたこともあって高級果実への需要が激減しており、移転半年後には勤め先が倒産、失業した。丁度家を新築して結婚したばかりでもあり、住宅ローンを返済するため、同じ青果市場の他社に再就職したが、そこでの仕事も青果の積み下ろしで、ここでも 3 交代制の夜間勤務を主として担当した。しかし 2003 年 7 月、夜勤中に意識を失い卒倒し、入院したが原因不明であった。職場復帰後、自宅で夜間手洗いに立ったときに再度失神して 2 階から階段を落ちて倒れているところを家人に見つけられたため、退職して自宅療養に入った。その上、同居中のアルツハイマーの母親（現在 76 歳）の病状が顕著となり、付き添いが必要となったこともあり、妻が働きに出ている。本人は、体調に注意しながら、ときおり印刷会社の商品配送のアルバイトをしているが、その間、将来介護の仕事につくことを目指して、4 ヶ月間研修を受けてヘルパー 2 級の資格をとった。

現在、求職中。

初職への移行

専門学校で栄養士の資格をとり、学校紹介で、小学校の栄養士として就職。出産による退職予定者の補充として正規雇用含みの臨時雇いであったが、当該者が復職することになったため、約 2 年弱で退職せざるを得なくなった。退職がはっきりした段階で、祖父が自宅の 1

階を貸し店舗にするという話があり、そこでお好み焼き屋を開業。そのため、学校に勤務しているところから其処このお好み焼き屋を食べ歩き、研究した。

仕事内容

初職 国立大学付属小学校の給食担当の栄養士（臨時職）

出産による退職予定者の補充として正規雇用含みの臨時雇いであったが、当該者が復職することになったため、約2年弱で退職。

2職 お好み焼き屋を開業（はじめのうちは母親が手伝ってくれた）。

お好み焼き屋は昼夜逆転の生活であり、拘束時間の割に収入があがらず、また、他の人との付き合いがなくなることに嫌気をさし、10年間で廃業。

3職 青果市場で荷物の積み下ろしの仕事。

新聞で見つけて就職。丁度バブル期に入るところで、職探しは一発で決まった。勤めだして3年目に父親が死亡。中卸会社で10年間働いたが、専ら夜間勤務。しかし、バブル崩壊後の不景気で会社が倒産し、失業。

4職 同じ青果市場のほかの会社に再就職。

前職と同じく青果物の積み下ろし作業を、もっぱら夜間に担当。夜勤中に失神し入院するも、原因が良くわからないまま退院、復職。しかし自宅でも夜間に失神し、階段を落ちる事態に至り退職。

5職 現在失業、求職中。

時折、印刷会社の配送のアルバイトをしている。できれば将来は介護関連の仕事につこうと、4ヶ月間介護会社の講習を受け「ヘルパー2級」の免状を得た。（病症の進展したアルツハイマーの母親を抱えている。）

自分にとっての転機とは何か

- ・小学校の給食担当の栄養士としての正規雇用の地位を得られなかったこと。
- ・お好み焼き屋を廃業して、青果市場で働き出したこと。
- ・原因不明の失神で卒倒し、入院したこと。
- ・母親のアルツハイマー発症とその介護。

転機に対する家族・周囲の反応

アルツハイマーの母の病症の進展と原因不明の失神による失業により、妻が働きに出るようになった。

教育・訓練経験・自己啓発など重要な活動

民間の介護サービス企業の研修を4ヶ月受けてヘルパー2級免状を取得。

影響を受けた人・本など

特になし。

将来・今後の展望

介護関連の仕事をしたい

健康について（本人と家族）

40歳台後半になって、夜勤中と自宅で2回、原因不明の失神・卒倒で、頭部などに傷害。それによりそれまで働いていた青果市場の中卸会社を辞めた。また、母がアルツハイマーで徘徊するようになり、目を離せなくなった。

ケース 5

女性 51 歳

家族形態 母、子ども 2 人

現在 養護教諭

インタビューの場所 ファミリーレストラン

現状と今の仕事

養護教諭

これまでの主な経歴

高校の担任のすすめで A 県の短大で養護教諭の資格をとった。出身県の養護教諭採用試験は合格しなかったが、B 県の採用試験を受けて就職。その後出身地の A 県で再度採用試験を受け直して、無事採用された。A 県のなかで中学校 3 校、小学校 2 校を異動。

初職への移行 大学の推薦やネットワークの利用等 家族の意向など

A 県で教職の試験を受けるも不合格だったが、姉が東京に住んでいたので B 県で教職の採用試験を受け就職する。

仕事内容 仕事内容と昇進・昇格などの関連も含む

ある中学校で、子どもに振り回されながら勤務した経験から、「養護教諭の仕事は救急処置が主ではなく、担任に援助したり子どもに援助したりすることだ」と考えるようになった。学校には保健室があり、教科の評価をしない先生がいるのも大事なのかなという考えをもっているため、これまで教壇に立つことはなかった。

現在の学校は僻地の学校で教職員の人数が少ないので、保健便りを書いたり保健指導したりする資料をつくるほかにも、給食の発注、献立の受け渡し、給食指導、来客の対応など、給食関係のことや用務員のような仕事もしている。

自分にとっての転機とは何か

高校の先生の勧めで養護教諭の資格を目指す進路を取ったこと。

第 1 子が小 6、第 2 子が小 3 のときに市役所勤務の夫が亡くなり、人生の設計が変わった。それまでは仕事も嫌になればやめればいかなと考えていたが、「やっぱり生活していかないと、何が何でも、嫌でも、この仕事を続けていかなければいけない」と考えるようになった。

教育・訓練経験・自己啓発など重要な活動

組合活動のなかでの養護教諭部会の研究、市内の小学校の養護教諭の研究。

自分にとっての仕事の位置づけ

夫が亡くなってから仕事のウエイトが大きくなった。

将来・今後の展望

あともう1校くらい勤め、55、6歳で退職し、免許をとってリフレクソロジーを始めたい。
今年の夏休みに1週間ほど講習を受けに行った。

ケース 6

女性 51 歳

家族形態 母、子ども 3 人

現在 家事従業 雑貨店の店番や仕入れ

インタビューの場所

現状と今の仕事

雑貨店の店番や仕入れ

これまでの主な経歴

A 県の短大卒業後、B 県の私立幼稚園に就職。2 年後 C 県に居住し保育所に勤務。結婚して辞職。1982 年ごろ A 県に戻る。離婚して養鶏場、スーパー、保育園でパート。30 代半ばに、叔母の薦めで火災保険の勧誘員に就職するが、病気入院で退職。その後、保育園で月 15 日パートで 4 年間はたらくが父が亡くなり辞職。2 年間ほど家にいて、また 2 年ほど保育園に勤め、その後 42 歳くらいから家にいる。その間、役場のいろいろな手伝いをしている。現在は、母親が 50 年以上やっている雑貨店の店番や仕入れをしている。

初職への移行

学校に掲示されていた求人の中から決めた。

仕事内容

幼稚園教師の仕事が面白かったが、園長との人間関係に問題が生じて離職。

自分にとっての転機とは何か

離婚したこと。

教育・訓練経験・自己啓発など重要な活動

レクリエーションのインストラクター資格を取得。パソコンの講習も受けたことがあるが、身につかなかった。

これまでの職業経歴を振り返っての評価

特に悔いはない（人生全般）。

将来・今後の展望

のんきに旅行したり食べに出かけたりしたい。

ケース7

男性 50歳

家族形態 妻、子ども2人

現在 小学校教諭

インタビューの場所 ビジネスホテルの食堂

現状と今の仕事

小学校教諭の職を使命感をもって勤めている。小学校教師の職に満足し、やりがいを感じている。4月から教頭に昇進すること決まっている。県の教育委員会の行っている「民間企業での就労体験プログラム」を地方の新聞社で経験。

これまでの主な経歴

大学受験に失敗し、2年間A県の予備校に通うが合格せず、B県に移ってバイトをしながら受験勉強を2年間続けた。22歳で仏教系の大学に入学し、4年間で卒業。大学卒業後は、高校卒業時ころから抱いていた夢である童話作家になることを目指して書店でアルバイト。また、通信教育で教員資格を取り、臨時教諭をする。29歳のとき、非常勤教諭をしていた学校で正規の教員になることを勧められた。採用年齢制限の30歳になるまでを目途に教員採用試験の勉強に取り組み、2回目の採用試験に合格、出身地の小学校に赴任するとともに、結婚。その小学校には12年間勤務したが、初任配属先の学校長はつづり方教育の権威でもあり、新米教員であった対象者の授業の進め方を親身になって徹底指導してくれた。39歳から41歳の時、県の国語科の指導員を勤めた。43歳のとき、現在勤務している小学校に転勤。次年度から教頭として別の小学校に赴任することになっている。

初職への移行

大学入学が22歳で、卒業が25歳。卒業後は書店でアルバイトをしながら童話作家を目指す傍ら、通信教育で教員免許を取得。臨時教諭をしているときに正規の教員になることを勧められ、29歳から正規の教員採用試験にチャレンジ。採用年齢制限の30歳で合格し、小学校に配属。

仕事内容

小学校教諭。とりわけ国語教育には自負。

自分にとっての転機とは何か

採用年齢制限ぎりぎり教員に採用されたこと。初任配属された小学校の2番目の校長により、授業の進め方を徹底的に仕込まれたこと。

転機に対する家族・周囲の反応

4年間にわたる長い浪人生活中や、大学卒業後の不安定な暮らし振りに対し、親は何も言わずに受け入れてくれた。

教育・訓練経験・自己啓発など重要な活動

- ・高校卒業時から童話作家になる夢を抱いて創作活動をしていた。
- ・40歳台後半に、教員の民間企業の職場体験プログラムにも積極的に参加。

影響を受けた人・本など

- ・20歳台の終わり、臨時教員の時に、正規の教員採用試験にチャレンジすることを勧められた人。
- ・初任配属先の小学校の2代目の校長による個人指導を通じて、教師の仕事に開眼。

自分にとっての仕事の位置づけ

教師の仕事に使命感を持って取り組んでいる。

これまでの職業経歴を振り返っての評価

教員になるまで、紆余曲折の人生だったが、それも含めて後悔することは何もない。

将来・今後の展望

いい教師を育てるようになりたい。

健康について（本人と家族）

健康である。

その他の特記事項

「子供は、教え方次第で、いくらでも変わるのです」。

ケース 8

男性 50 歳

家族形態 妻、子ども 3 人

現在 地方公務員

インタビュー場所 自宅近くの喫茶店

現状と今の仕事

地方公務員（町役場の職員）として、公共土木工事の設計と現場監督。目下、隣接する町とつなぐトンネル工事開発担当として、町議会における説明や隣町の関係者との連絡調整、環境問題等地元住民への説明会などに追われている。

これまでの主な経歴

普通科高校を卒業後、A 県の私立大学の土木工学科に進学。大学卒業と同時に結婚し、役所に就職。平成 8 年に係長に昇進し、現在は課長補佐兼工務係長。

初職への移行

大学 4 年の時、地元の町役場の土木職に応募するが、願書の締め切り日が過ぎており、受け付けてもらえなかった。そのほか、県や国の公務員（土木職）も受けたが不採用であった。民間企業にも応募したが、長男でもあり、父親のつてでいったんは地元の建設会社に就職が内定した。しかし、2 月ごろ、応募を断られたその町役場から再募集の連絡があり、試験を受けて採用となる。

仕事内容

入職後、主に下水道工事の仕事に携わる。平成 11 年度までは建設課の水道部門で町内の下水道敷設に携わり、組織変えで都市開発課の水道係となった後も、専ら下水道部門の仕事に携わる。おもな職務は下水道敷設の基本計画の立案や補助金の交付申請など。その後、町内の下水道整備が一段落した後は建設課に戻り、都市計画担当となった。現在は H 市と Y 町を結ぶトンネルの工事を担当。町議会における説明や隣町の関係者との連絡調整、環境問題等地元住民への説明会などに追われている。職務上、工事を実施する民間企業の人と共同作業をすることも少なくない。現在、課長補佐兼工務係長。

自分にとっての転機とは何か

父親のつてで内定していた民間の建設会社にゆかず、町役場へ就職したこと。

教育・訓練経験・自己啓発など重要な活動

行政研修を入所後すぐに1週間研修所で受ける。下水についての研修は昭和63年からこれまでに3回受ける。

測量士、1級土木施行管理技士、1級管工事技術管理者、日本下水道事業団の技術検定2種、3種をもっている。

今年の4月から、町議会での説明や住民説明会用の資料作成のために、ワードやエクセル、パワーポイントなどをよく使用するようになった。下水道敷設工事の設計にあたっては、特にCADは必要なかった。

影響を受けた人・本など

かかわったいろいろな人が「助っ人」となった。

自分にとっての仕事の位置づけ

現在担当している仕事は、やりがいがある。仕事柄、民間企業の技術者等との共同作業があり、それが面白い。

これまでの職業経歴を振り返っての評価

今はやりがいがある仕事だが、冒険した仕事をしているので、しんどい面もある。

将来・今後の展望

60歳が定年だが、建設会社やコンサルタントなどの仕事をまたすると思う。

健康について(本人と家族)

健康。

ケース 9

男性 49 歳

家族形態 子ども 2 人

現在 営業の会社

現状と今の仕事

2003 年 2 月より現職。

これまでの主な経歴

A 県の公立高校を卒業後、B 県の大学の法学部に進学。卒業後は A 県に戻るつもりで就職活動した。海運会社が第一志望であったが叶わず、他に何社か就職活動を試みた。最終的には母親の知人の紹介により、A 県の従業員数 100 名ほどの中堅印刷会社に、将来を期待されて就職。会社の業務の総てを覚えなければということで、工場の業務から営業まで、一通り経験。いい会社ではあったが同族会社であり、将来のキャリアに疑問を覚えるようになった（今思えば若気の至りだったと考えている）。

そこに 8 年ほど勤めた後、営業職として自分で開拓した取引先の広告代理店の社長に誘われて転職。そこは従業員数名の小さな会社であったが、クライアント（客）の意向に沿って広告プランを作って納めていく面白みに惹かれたためであった。時代は丁度バブル期に入り、広告代理店業は極めて好況であった。外資系の会社が日本で展示会に出展する仕事を担当した際にアメリカに出張し、アメリカではどのようなコンセプトでブースを作っているかを視察に行った折に、アメリカの商業印刷がマッキントッシュ（ミニ・コンピュータ）を使うことで成り立っていることを知った。前職の経験から、それがいかに革新的なことであるかを知り、帰国後直ちに会社にマッキントッシュを導入させた。（小さな広告代理店では、きわめて高額の投資ではあった、社長を説得した。）それは丁度わが国でも、デザイナーやアートディレクターが紙と鉛筆でしていた仕事がマッキントッシュ（パソコン）による DPT に取って代われようとしていた時期で、自らもマッキントッシュを用いたレイアウト技術をいち早く習得した。時代は丁度バブル期に入り、広告代理店業は極めて好況であった。クライアントから予算を預かり、販売促進計画を立案して、どんな媒体を用いてどんな表現に作るか、デザイナーやコピーライターに指示してまとめ上げるアカウント・エグゼクティブの仕事をしていた。

しかし「バブル」が終わると広告の仕事が減り、倒産しかかった会社の面倒を見させられそうになったのでやめた。今度は友人の紹介で、当時日本でも広まりだしたテレマーケティング（電話による販売促進）の会社に営業職で転職。経営コンサルタントのような仕事を担当。しかし、一時期は隆盛を誇ったこの会社も、経営に問題が生じ、2002 年 12 月にリストラされた。担当していたクライアントに辞める旨を挨拶にいった際に、その会社の社長に

誘われて、2003年2月に再就職。

居住地は最初に結婚したときにC県に住み、それから近隣を3ヵ所と移動。

初職への移行

B県をベースに就職活動をするが決まらず、母親の知人の紹介でA県の印刷会社に就職。

仕事内容

初職 A県の印刷会社

8年間ほど勤めたうち、5年間ほどが工場勤務。ほかには大手生命会社の座付き営業も経験。

2職 広告代理店

販売促進の提案をし、客の意図を表現するためにデザイナーやコピーライターに指示をする（アカウントエグゼグティブ）。自分でコピーライティングをすることもあった。アメリカに取材のようなしごとで出かけ、アメリカの印刷会社や製版会社を見学する機会もあり、それをきっかけにマッキントッシュを使うようになる。

3職 テレマーケティング（ベンチャー企業）

見込み客の開発のため、いろいろな企業に電話をかけて、その企業のキーマンを発掘する営業のしごとを担当。そこでエクセルとアクセスを使用。給料は安い、売りに応じて賞与が多くもらえた。また海外旅行もあった。経営悪化で他の会社に買い取られるが、その後1年でリストラにあって2002年12月に辞める。最後はマネージャーをしていたがベンチャー企業の熱気がなくなりモチベーションが下がっていた。

4職 現在の会社（経営コンサルタント・IT教育・人材派遣業）営業部長

2003年2月から勤務。営業を担当。以前の会社の部下にも来てもらい10人くらいを配下においている。

自分にとっての転機とは何か

転職。第一の転機は、印刷会社から広告代理店への転職し、指示された通りに印刷物を作る仕事から、自らが印刷のデザインを企画・作成するようになったこと。印刷会社での経験を生かし、DPTの重要性をいち早く見抜き、それを用いて販売促進業務を展開しえたこと。

第二の転機は、広告代理店から、日本の草分け的コールセンターへの転職。

第三の転機は、コールセンターをリストラされるにあたり、担当していた顧客企業に挨拶に行った折に、就職するよう誘われ、現職にいたったこと。

教育・訓練経験・自己啓発など重要な活動

テレマーケティングの時代に、半年ぐらいの期間のセールスプロモーションの講習やシティープランナー養成コースの研修に夜間、参加。研修費は会社が負担。この時代にインターネットにも取り組む。

影響を受けた人・本など

印刷会社で営業をしていたとき、会社のお目付け役のような人から働きぶりを認められたこと。

広告代理店勤務時代にアメリカに出張し、DPT 技術にいち早く注目する機会をたこと（印刷会社勤め時代の知識があったからこそ、その技術の革新性が理解できた）。

健康について（本人と家族）

印刷所勤め時代、地元のラグビークラブに所属。

ケース 10

男性 51 歳

家族形態 独身

現在 生協の経営監査室室長

インタビューの場所 職場

現状と今の仕事

生協の経営監査室室長。

これまでの主な経歴

貧しい農家の 6 人兄弟の長男として生まれ、地元の国立大教育学部に入学。在学中は学資を稼ぐために真剣にアルバイトに取り組んだ。大学卒業後、在学時に関わっていた大学生協運動の先輩に声をかけられ、従業員数がまだ一桁であった地元の生協に就職。以後、一貫して生協活動に没頭。

就職早々は配達が主な仕事。26 歳ごろ、経営に問題の生じていた近隣の小さな生協に出向し、4 年で建て直した。出向から戻るとの経理部の責任者に抜擢され、まもなく総務・企画部門の責任者（部長）となる。以降、「生協加入者が今必要としているサービスは何か」を常に問い続け、そうしたなかで、これまでの生協活動では取り組まれてはこなかった旅行サービス分野を新規開拓し、その事業化を成功させた。現在、経営的に成功している全国でも有数の地域生協として従業員数 700 人余を擁し、毎年、新規学卒が多数応募してくる、地元でも有数の企業体の経営責任者として、生協活動に情熱を燃やし、経営全般に目を光らせる立場になっている。

初職への移行

大卒後、在学時代の先輩のついでに生協に、正規職員として就職。親の面倒を見るため地元で家から通える範囲で就職しようと考えていた。教員になるための就職活動は特にしなかった（親は教員になって欲しいようであった）。就職した生協は、従業員数がまだ一桁の小さな組織であった。

仕事内容

大卒後、地元の生協に就職。初めは配達が主な仕事。26 歳ごろ、正社員 2 人とパート 4 人の、赤字続きの近隣のごく小さな生協に出向を命ぜられ、ドンブリ勘定で行われていたその生協の経営建て直しに取り組む。経営改革に関わるさまざまな試行錯誤を通じて、自らバランスシートを考案して経理の健全化を図るなど、生協経営全般に必要な知識・ノウハウを修得していった。4 年間でその生協の建て直しに成功し、出向元の生協に吸収合併させた後、

出向元の生協に戻り経理担当者に抜擢された。半年後、生協の経営に問題があり、混乱を収めるにあたってリーダーシップを発揮、総務部長に昇進する。91年から旅行のしごとをする。航空会社がつくっていた航空券の家族割引カードを生協でもつくれるようにし、それまでどの生協でも旅行の部門が黒字になることはなかったが、これを3年で黒字にする。現在は経営監査室室長で部内のコンサルタントのようなしごとをしている。

自分にとっての転機とは何か

- ・ 出向して、問題のあった小さな生協組織を再建したこと。
- ・ 時代の変化に即して、生協加入者が必要とする新たなサービスを発掘・事業化することに成功したこと。

転機に対する家族・周囲の反応

親は、大学卒業時、教員になるという進路を選ばなかったことを残念がってはいたようだ。

教育・訓練経験・自己啓発など重要な活動

パソコンは、仕事を処理しなければならない状況に直面していくなかで、自分で覚えた。

自分にとっての仕事の位置づけ

仕事に没頭していて、結婚する間がなかった。

(「生協組織(生協活動)と結婚した」というのがインタビューアの率直な印象であった。)

将来・今後の展望

年金の仕組みなど、不安。

健康について(本人と家族)

父親は他界、5年間母親は病院で寝たきりの状態。

ケース 11

男性 49 歳

家族形態 妻、子ども 1 人

現在 大手重電メーカーの研究所勤務

インタビューの場所 駅近くの喫茶店

現状と今の仕事

大手重電メーカーの研究所勤務。部長職にある。

これまでの主な経歴

国立大学理学部を出たのち、他大学の大学院の工学系に進学。大学院時代の専攻に直接関連する分野に、先生からの推薦で現職に就職。

初職への移行

修士のときの研究テーマであった重電関係、エネルギー関係の職を目指し、大学院時代の先生からの推薦で就職。

仕事内容

電気機械会社の研究所で原子炉や核燃料などエネルギー関連の研究・開発をしている。研究開発職は自らテーマと時間と予算を獲得し、一人あるいはチームで研究を行う。勤めながら博士号を取る。現在は人に研究をやらせるのが仕事になってきている。1年前から部長となり経営に携わるようになった。

自分にとっての転機とは何か

博士号の取得。

教育・訓練経験・自己啓発など重要な活動

入社後 5 年程度週に 2 時間くらい英語を自分で勉強した。30 歳前後までは専門的知識を上司の研究者から教わる。40 代前半からは会社のなかで MBA の勉強をする。

自分にとっての仕事の位置づけ

コンピューターは仕事に不可欠。コンピューターがなければ仕事ができない。

これまでの職業経歴を振り返っての評価

30 代におこなった核燃料の濃縮の仕事が比較的成果を出したと思える。この仕事の成果を

まとめて博士号を取得した。

将来・今後の展望

この先も研究職でいくのか、経営職に就くのかについて現在揺れている。好ましい機会があれば大学に転出することも考えている。

その他の特記事項

自分と戦って絶対負けないものと基礎科学を身につけることが重要。

ケース 12

男性 49 歳

家族形態 妻、子ども 2 人

現在 軽貨物業に登録 手配された品物の配達と内職の手配業

インタビューの場所 駅最寄の喫茶店

現状と今の仕事

現在、軽貨物業の団体に属し、手配された品物の配達と内職の手配業を行っている。

これまでの主な経歴

実業高校を 2 年で中途退学。友人の父親の紹介でダクトの製作所に就職、設備工として 1 年 6 ヶ月働いた後退職。新聞のチラシ広告で見つけた LP ガス卸業（灯油、食品ス - パーも扱う）に入社、運送担当、13 年勤務。友人の紹介で葬儀社を相手にするお茶の販売会社に就職、3 年勤務。同僚 6 人で同じ事業、お茶の販売会社を設立。行動を共にするも 1 年で退職。軽貨物取り扱いおよび内職手配の自営業。

初職への移行

将来は、調理士かコックになることを夢見ていた。実業高校に入学し、手に職をつけようと思った。しかし、勉強の意欲が湧かず、ついてゆけなくなり中途退学。将来の方向性が固まらないまま、友人に勧められ、その友人の親が働くダクトの製作会社にアルバイトで入社。

仕事内容

初職 ダクトの製作会社、設備工

従業員 15 名の会社。空調の設備の製作および設置業務。ブリキの板からダクトを製作し、顧客の空調設備の大きなファンに取り付ける。従業員はとび職や、やくざ上がり等多様な人たちの集まりで、仕事に関しては厳格で、プロ意識の高い人たちだった。バブルの時期で非常に忙しく、突貫工事が続き、夜も遅くまで働くことが多く、休みも取れず、疲労が重なった。就業規則もあいまいで、続けてゆく自信をなくし退職。

2 職 LP ガス卸業、配送員

新聞の募集チラシで見つけた LP ガスの卸の会社に就職。事業所は社員 27 名、配送員 7 名の小企業。仕事は、毎日、工場（LP ガス充填所）より LP ガスボンベを 4 トン車に積み込み、納入先の販売店（15 社）に届け、空容器を引き上げてくる。業務は一人で行う。13 年勤務。車の運転に関して、経験をつむ。

3 職 お茶の販売会社、営業担当

友人に紹介され、友人が働くお茶の販売会社に就職。仕事は葬儀のとき会葬者に配る「お

清め」用のお茶のセットを葬儀社に販売すること。飛び込みで、社長レベルの人にとってセールスする。そのほか、葬儀社の手伝いも多かった。葬儀の際、飾り付けから後片付け、自分の商品を礼状と一緒に紙袋に袋詰めする作業、会葬者への手渡し等の手伝い。販売が過当競争になり、葬儀社に対するサービスがエスカレートしてきた。礼状の印刷や写真の準備までお茶会社がサービスで行うようになった。同僚が独立することになり、一緒に退職、3年勤務。

4 職 友人が独立して設立したお茶の販売会社に入社、課長

同僚6人と新会社を設立。当初獲得できると踏んだ大手顧客が取れず、営業成績が上がらなかった。半年ほどがんばったが、働く気力を失っていった。業界のサービスのエスカレートに嫌気がさしてきたこと、知的障害者の息子の問題等で精神的なストレスが重なり糖尿病が悪化した。1年勤務。

5 職 軽貨物業（自営業）と内職および手配業務

働く意欲をなくした時、長い間慣れ親しんだ車を活用する仕事なら出来る、という気になった。軽貨物の団体に登録。車を手配してもらい、営業ナンバーを取って、配送業務をする。始めのうちは仕事も手配してくれたが、だんだんそれが少なくなり、収入が少なくなっている。内職の手配業務。プラスチック製品（トランジスタ等）の検査やボールペンの組み立ての内職。プラスチックに異物が入っていないか、印字がついているかどうかチェックする。1個やって1円とか2円の収入。複数の人に配ってやってもらう。仕事が不安定で、季節によって仕事の量に変動がある。

自分にとっての転機とは何か

最初の転機は、葬儀社相手のお茶の販売会社に就職したこと。営業経験をつむことで、コミュニケーションのとり方や営業の仕方を覚え業績向上につながったこと。世の中が開けた。誠実に、粘り強く、あきらめないことを学んだ。2つ目は今の仕事、軽貨物業を決意したとき。前の仕事で働く意欲を失った。家族のために生計を立てなければいけない。何ができるかを考え、車を活用した仕事ならできると思った。

転機に対する家族・周囲の反応

転職について、妻はいつも協力的だった。食べていければよいと、楽観的に考えてくれた。

教育・訓練経験・自己啓発など重要な活動

初職、ダクトの製作に従事したとき OJT で多くを学ぶ。図面の見方や現場の環境に即して図面を変えてゆく現場主義の柔軟性、道具や機器の使い方、納期を厳しく守るプロ意識等。

影響を受けた人・本など

特定の人に強く影響を受けたことはない。親を含み転勤した各部署の人たちから少しずつ影響を受けている。

自分にとっての仕事の位置づけ

自営業になってから仕事のウエイトはかなり大きい。家族のために行っている意識が強い。

これまでの職業経歴を振り返っての評価

もうちょっと勉強しておけば良かった。学校で学ぶような、基礎的なことをもっとやっておけばよかった。高校を中退しないで、ちゃんと卒業し、大学にも行ってみたかった。

将来・今後の展望

自営業の内職の手配業務に将来性を感じている。

後輩へのアドバイス

健康管理をきちんとすること。自分は若いときに暴飲暴食や睡眠をとらずに無理な生活を続けた報いで健康を害した。また、若いときの勉強の必要性、基礎知識をつけるべきときにやっておくこと。

健康について

糖尿病である。コントロールしながら生活をしている。

ケース 13

男性 50 歳

家族形態 妻、子ども 4 人

インタビューの場所 駅の喫茶店

現状と今の仕事

現在、造船会社の原子力機器部門に勤務、作業長。20 名の部下を統率しながら工数管理の業務を担当。

これまでの主な経歴

工業高校の機械科を卒業後、造船会社に就職。1 年間、会社の技能訓練校で技能訓練を受ける。その後原子力機器部門に配属され、重板金溶接の仕事に従事。以降 20 年余り同じ業務一筋でやってきた。39 歳のとき監督 1 級の資格を得て、技能、技術指導の業務を担当する。7 年間従事し、副作業長に昇進。その後、監督 2 級の資格を取得し、作業長となり、現職に就く。

初職への移行

母一人子一人の生活環境であったため、高校卒業後すぐに就職し家計を助けるつもりであった。当初、就職は航空機関係の仕事を希望していたが、学校推薦で紹介された造船会社に決めた。母体が大企業であることから、安定性を買った。オイルショック前のまだ景気の良い時期で、300 人ぐらいが採用された。母校の工業高校からも自分を含め 10 人ぐらいが入社した。

仕事内容

初職 重板金構造物の溶接工

1 年間、会社の養成所である技能訓練所で溶接技能の訓練を受けた。その後、原子力機器部門に配属され、溶接業務一筋に 20 年間勤務。重板金溶接は 150 ミリとか 200 ミリという厚さの鉄板を溶接するので、技術者は高い技能が要求され、まず始めに JIS (日本工業規格) の資格を取らなければならない。その後、通産省の認定が求められる。通産省の検察官の前で技術テストを受け合格しなければならない。当時、会社としては、原子力機器部門の立ち上げの時期で、業績も順調に伸び、会社の中で比重が重くなり、スポットライトが当たっていた。

2 職 溶接工として全国の原子力発電所の保守保全に携わる

原子力発電所は運転に伴い、老朽化するので、定期検査を受けなければならない。

そこで、保守保全や修理業務が発生する。電力会社は当社に保守保全や修理を外注してく

る。全国ほとんどの原子力発電所の保守保全にかかわり、古い原子力機器を新しい物に変えてゆく作業に従事した。その際、通産省の検査である RT 検査や超音波検査を 1 回でパスすることが溶接工としての誇りだった。

3 職 技能・技術指導業務

部門は変わらないが、監督 1 級の資格で、部下に仕事の周辺知識や技術の伝承および指導に当たる。溶接工として自分が経験してきたこと、特に失敗した経験を教えるようにした。教えたことの半分でも身に付けてくれたらよいと思った。技術職は、技術の進歩・向上が要求され、他人から教われる部分と自分で工夫せざるを得ない部分があること。外国に進出するためには、外国の規格や事情も勉強しなければならないこと。日本における溶接技術の常識が外国では通らないこと等々。

4 職 工数管理業務

工数管理は、仕事の効率アップの為の業務。いかに無駄な時間を省いて効率を上げるかというのを考える仕事。そのため現場に出て観察し、指示する。部下との良好なコミュニケーションを心がける。海外需要が増えて、休日が取れないほど忙しい。一方海外生産と競争する上でコストダウンが求められ、工数管理は重要な業務となっている。

自分にとっての転機とは何か

1 つ目の転機は、27、8 の頃、後輩に技術を指導する立場になったとき、自分の成長を実感した。前向きに仕事を捉えるようになった。

2 つ目は 30 歳で結婚した時。独身のときと違って、働く責任感が実感されたこと。生活を崩してはいけないこと、そのために一生懸命がんばろうと決心した。

転機に対する家族・周囲の反応

あいつに任せておけば大丈夫という同僚や周囲の評価が上がったこと。

教育・訓練経験・自己啓発など重要な活動

初職のとき、技能訓練所で 1 年間、重板金溶接の技術習得。その後、JIS の溶接技能資格、通産省の溶接技能検定に合格。その他、クレーン運転免許、有機溶媒使用免許等々社内講習により 10 分野ぐらいの技術や技能資格を習得している。

影響を受けた人・本など

影響を受けた上司は、どちらかというところと厳しい人で面倒見のよい先輩だった。時に厳しく、ある時は飲み連れて行ってくれる。仕事で引っ張ってくれ、今の立場になれたのもその人のおかげ。

自分にとっての仕事の位置づけ

結婚前まで(30歳)は、人生の80パーセント、結婚して70パーセント、今はまた、元に戻って90パーセントぐらいのウエイトになっている。なかなか休みが取れない状態にある。

これまでの職業経歴を振り返っての評価

与えられた仕事は十分こなしてきた自信があるので、80点ぐらいの評価はできる。20点のマイナスはもっと人間関係が上手くできたらという反省点。

将来・今後の展望

溶接の仕事に未練はあるが、老眼になったこと、後輩に道を譲る時期等を考えると今が勇退の潮時で、別の仕事で頑張るしかない。

後輩へのアドバイス

仕事をする上で、勉強は不可欠。担当業務はもとより、周辺知識の勉強と自分の業務の一つ上の知識や技術の勉強が成長につながる。

その他の特記事項

溶接工の資格取得は、時間と手続きがかかり、たいへん面倒である。自分は大企業に勤務していたのでいろいろな会社支援も受けられ助けられた。現状の制度では、中小企業勤務者は能力があっても難しい。行政的な改善が望まれる。

ケース 14

男性 50 歳

家族形態 妻、子ども 1 人

インタビューの場所 駅最寄の喫茶店

現状と今の仕事

現在、ベアリング製造会社勤務。包装工場で製品化されたベアリングの最終工程、出荷できるように製品の箱詰め作業に従事。

これまでの主な経歴

実業高校の機械科を卒業後、ベアリング製造会社に入社。ベアリング製造機械担当、20 年間ベアリング選別機械の運転に従事。次にミニチュアベアリング製造部門に異動し 5 年間勤務。さらに梱包部門に異動し 5 年勤務。現在の包装工場の仕事は 3 年前に異動。

初職への移行

実業高校の機械科を卒業。就職は学校任せで、毎年卒業生が就職しているつながりのあるベアリング製造会社に学校推薦で就職。製造業は地味だが、歴史のある会社なので堅実さと、安定性を評価して入社。

仕事内容

初職 ベアリング製造会社で製造機械の運転を担当

最初の配属は、機械科を卒業したということで、製造機械の運転を任命された。ベアリングは大きささまざまで、直径 0.3 ミリのものから 13 センチと大きいものまでである。油を使うので、大変汚い仕事という印象だった。機械操作にマニュアルはなく、見て学ぶことから始めた。その後ベアリングの機械選別の仕事を任せられ、選別機械の運転に 20 年従事した。後半、若い同僚との関係に苦労した。体力の違いや、スキルの差（新しい機械について行けない）で生産性において劣るようになってきていた。

2 職 ミニチュアベアリング製造担当

製造部門では生産性を上げるために、24 時間稼働を可能にする変則勤務体制を取っていた。勤務の交代制で、1 直、2 直、3 直、とあり、夜間勤務が多く、収入は増えるが体力的にもきつく、かねがね普通勤務である製造部門への異動を希望していた。その後、ミニチュアベアリング製造部門に異動でき、20 年ぶりに普通勤務となった。収入は減ったが結婚し、子供にも恵まれ健全な家庭生活を持つことができた。

3 職 製品の出荷業務

製品倉庫において搬入、搬出を行う業務で、30 人ぐらいの体制で行っていた。大変重いも

の運ぶ重労働だったが、普通勤務なので、支障なく働くことができた。その後、製品倉庫の改築に伴い、製品出荷体制が自動化になり、半分のメンバーで業務が可能となった。余剰グループは異動を余儀なくされ、包装工場勤務となった。

4 職 製品の箱詰め包装を担当

出来上がった製品はロット管に入れられ、包装工場に流れてくる。包装工場ではそのロット管から製品を取り出し、一個一個を紙の箱の小さな独立した部屋に詰め替える。この作業を包装機械の操作で行う。原則的には普通勤務だが、一部残業も復活し、収入も増えた。

自分にとっての転機とは何か

一つは、クリスチャンの妻と結婚し、クリスチャンになったこと。一冊の本、聖書と出合い、聖書を読むことによって、心が落ち着く場所、帰る場所が見つかった。仕事に対する姿勢や人生の生き方が変わった。

転機に対する家族・周囲の反応

家族は息子も含め、毎週教会に通っている。家族で聖書をよんで話し合うことも多い。

教育・訓練経験・自己啓発など重要な活動

初職のとき、25歳ごろ、職場で必要な各種の技術の研修や講習を受けた。高圧ガスを取り扱う丙種化学免許、基本的なボイラー取り扱いの技術、クラックインディケーター取り扱い資格等を取得。

影響を受けた人・本など

聖書に出会えたこと。聖書を読むことにより人生観が変わった。世の中の欲しいもの、魅力的なものを努力して得たとしても、本物の喜びは得られないことに気づいた。自分は昇進にも昇格にも無縁な万年平社員のため、年下の上司に仕えたり、後輩との人間関係の難しさもあるが、聖書を読むことによって克服できた。

自分にとっての仕事の位置づけ

結婚前まで(39歳)は、仕事が全てだった。自分の人生、生きがい仕事を仕事の中で見つけようと努力してきた。今は、その考えが無くなったわけではないが、仕事するためだけに自分は生きているのではないと思うようになった。若いときから背負ってきた重荷、仕事で、人に笑われないようにとか、人に認められるようにとか思い続けてきたが、自分のために一生懸命仕事をしなければならぬと変わってきた。

これまでの職業経歴を振り返っての評価

会社への貢献が少なく、月給泥棒かもしれない。しかし点数はつけられないが、個人的には満足できる人生を遅らせもらっている。

将来・今後の展望

30年お世話になったこの会社で、与えられた仕事を力いっぱいやってゆくこと。

健康について

搬入、搬出で重い荷物を運ぶ仕事から、腰を痛めている（椎間板ヘルニア）。時々起きるが休みながら仕事を続けている。

ケース 15

女性 51 歳

家族形態 義母、夫、子ども 2 人

現在 電話交換手

インタビューの場所 ファミリーレストラン

現状と今の仕事

現在、市の保健センターで電話交換手をしている。

これまでの主な経歴

普通高校を卒業し、彫刻会社に入社。会計事務担当、3 年半勤務。退職し、電話交換手の資格取得。建設会社に勤務、電話交換手。結婚。夫の実家に、舅、姑と同居。子供が出来退職。2 年勤務。その後子育てをしながら専業主婦。2 番目の子供が 3 歳のとき、保育園に入園させる資格を取るため就職決意。契約社員として市の保健センターに就職、電話交換手。以降現在まで、同じ職場で電話交換手として働く。

初職への移行

普通高校から彫刻会社に就職。当時余り将来のことを考えていなかった。一般事務ができればどこでもよかった。

仕事内容

初職 会計事務担当

社員数、260 名の彫刻会社で、捺染用ロール彫刻加工の部門で会計事務を担当。その後経理に加え一般事務も担当。電話交換手の資格を取るため退職（講習および試験）。

2 職 建設会社、電話交換手

社員数 560 名の建設会社に入社。正社員として採用される。電話交換手。

3 職 結婚、専業主婦

2 職の時、結婚し夫の実家に入る。子供ができ、2 職を辞める。長女出産。子育てと専業主婦。2 年後 2 人目の出産。

4 職 市の保健センターに勤務、電話交換手

下の子が 3 歳になり、保育園に入園させる上で、働いていることが必要条件だった。以前電電公社に登録をしておいたので、電話交換手のアルバイトの口を紹介してもらえた。市役所の出先機関、保健所（保健センター）だった。交換手は 2 人で、こじんまりした気楽な職場だった。公務員だから残業もなく、子育てに障害が少ない理想的な職場だった。1 年毎の契約で、以降現在まで継続、20 年以上になる。

自分にとっての転機とは何か

最初の転機は、電話交換手の資格を取ろうと思ったこと。講習会を受け、試験にパスし、電話交換取扱者認定書を取得したこと。2番目の転機は、長男を保育園に入園させるため、就職を決意したこと。自分にとって理想的な現職に就けたこと。

転機に対する家族・周囲の反応

働くことについては、姑が協力的で、家事一切を引き受けてくれた。夫は何も言わなかったが、反対をしなかった。

教育・訓練経験・自己啓発など重要な活動

講習を受けて試験に合格し、電話交換取扱者認定書を取得。

影響を受けた人・本など

子供が小学校、中学校、高校と進学した際、そのつど、役員を担当してきた。その中で交流した人たちにいろいろ教えられた。

自分にとっての仕事の位置づけ

家庭の主婦であることが第一で、仕事は二番目。

これまでの職業経歴を振り返っての評価

子育ての反省はあるが、そのほかは何の問題もなかった。

将来・今後の展望

契約社員なので、将来はどうなるか不明だが、このまま毎年契約してくれれば、非常勤職員の定年、65歳まで働きたい。

健康について

何の問題もない。ママさんバレーをはじめて10年以上になる。週2回、夜の練習に参加している。最長老としてがんばっている。

その他の特記事項

子供の将来に不安を抱えている。25歳の長男はフリーターで定職を持たず、半分遊んで暮らしている。27歳の長女は介護福祉士として働いているが、自立の様子がない。

ケース 16

女性 51 歳

家族形態 父、夫、子ども 3 人、

現在 私立病院・整形外科勤務、看護助手

インタビューの場所 駅近くの喫茶店

現状と今の仕事

現在、市立病院、整形外科の看護助手として、看護師の指示の下、リハビリテーションの患者の援助をしている。

これまでの主な経歴

A 県の私立の女子短大、幼児教育科を卒業後、A 県の市立幼稚園に就職、幼稚園教諭。5 年間勤務し、結婚のため退職。結婚して B 県の実家に入る。次女出産のころ、市民生協で活動をはじめ。5 年後理事に選ばれ 3 期目の途中で、生協の経営方針とあわず退職、10 年勤務。会員は現在もつづいている。その後、豆腐屋のアルバイト、4 年間。3 年前から、市立病院、整形外科の看護助手。

初職への移行

短大卒業後、A 県の市立幼稚園に就職、教諭。短大では小学校の教員免許を取得し、B 県の教員採用試験を受けるも採用されず。B 県は当時、国体の主催県で教員が余っていた。浪人して就職する余裕はなく、すぐ就職できる A 県の幼稚園を選択。

仕事内容

初職 幼稚園の教員

教員数 28 名の市立幼稚園。園児が好きで、楽しい教員生活を送る。労働組合があり、役員を任命され、労働条件、保育条件の改善を求めて活動。園児や同僚のために、正義感を持って積極的に活動。

2 職 B 県の市民生協理事

グループを作って、牛乳や卵、野菜等の無添加物食品の共同購入や学習会、特に子供の食べる食品について勉強。また、生産者との交流や野菜の産地見学会等を実施し、良い商品の確保を目指した。理事として、B 県における毎月の理事会に出席し、地域代表として会員の声を中央に伝え、決定事項は支部および班に報告した。

3 職 豆腐屋のアルバイト、専業主婦

子供の同級生の家で、豆腐屋のアルバイト。午後だけの仕事なのでもの足らず、いつかフルタイムの仕事をとと思いながら、4 年働くことになった。

4 職 B 県の市民病院の看護助手

予め、市立病院に看護助手の仕事の希望を登録していたものが実現。仕事は看護師のように医療行為をするのではなく、患者を検査やレントゲン、リハビリ等の際に案内したり、シャワーやベッドでの体の移動を手伝ったりするもの。

自分にとっての転機とは何か

B 県の市民生協の活動を始めたとき。動機は子供に無添加物の食品を食べさせたかったことだが、いろいろな活動が認められ支部の理事に任命され、ネットワークが広がった。福祉の活動への道が開け、市会議員の立候補を勧められるまでになった。

転機に対する家族・周囲の反応

市民生協の活動は忙しく、ほとんど毎日外出しなければならなかった。父親、夫にできるだけ迷惑をかけないように、家事を済ませてから活動するよう心がけた。会合には必ず、子供をつれてゆくようにした。そのうち、生協は若いお母さん方が多いので、保育制度ができた。父親も夫も家事のできる分野は担当し、協力してくれた。

教育・訓練経験・自己啓発など重要な活動

生協の活動をしていた時期、福祉の委員会に属し、点字の勉強をした。点字で商品説明をするサービスを目指した。点訳は、その後のボランティア活動につながった。また、豆腐屋にアルバイトしていた時期に、パソコンスクールに通った。B 県の就職支援活動の一環で、女性参画のプログラムだった。毎日 5 時間、合計 100 時間のコースだった。

その他の活動

次女が小学校の時、4 年間、PTA の副会長を引き受けた。老人クラブと協力して、もちつき大会、アユつかみ会、その他、親子料理教室、バザー等の行事を取り仕切った。ボランティア活動としては、小学校に点字の指導に行った。

影響を受けた人・本など

女子短大の時、学生運動を一緒にした友達から影響を受けた。彼女達は、A 県で落ちこぼれの集まりと呼ばれる高校を卒業した。しかし、素晴らしい先生と出会い、素晴らしい教育を受けてきた。彼女達は、卒業した学校を誇りに思っていた。多様性を受け入れ、差別のない、民主的な考え方を身につけていた。もう一人は、B 県の市民生協の理事長、大学の経済学部教授だった人との接し方が、男女平等で差別をしないこと。ものの見方が上から見下ろすのではなく、素朴な疑問も誠意を持って対応するなど素晴らしい人物だった。

自分にとっての仕事の位置づけ

今は、仕事優先だが、父親の介護の必要性が生じたら介護を優先する。

これまでの職業経歴を振り返っての評価

小さな悩みは繰り返しあったが、楽しい人生を送ってきていると満足している。子供の病気も、世の中にはもっとひどい病気の子供もいるし、これぐらいで済んでよかったと考えれば救われる。

反省点

子育てについては反省がある。17歳の長男を甘やかして育ててしまったこと。喘息、アトピー、てんかんの病を持っているため、過保護に育ててしまった。特にてんかんに関しては一番心配で、薬を欠かしたら発作の心配があり、自立させたい気持ちと、親元に起きたい気持ちが乱れている。

将来・今後の展望

今の仕事を続けたい。自分にあった仕事であること、資格がなくても働けること。年金や年休も保証され、将来の生活が安定していること。非常勤職員の定年は長いので、夫の定年くらいまでは、一緒に働きたい。

ケース 17

男性 49 歳

家族形態 妻、子ども 2 人

現在 公立児童福祉施設 係長

インタビューの場所 駅最寄の喫茶店

現状と今の仕事

現在、公立の児童福祉施設（重症心身障害児の施設）で、訓練課の係長として 14 名のスタッフをまとめている。

これまでの主な経歴

地元の普通高校を卒業後、私立大学の理学部・生物学科に進学。まだ将来の目標が定まっていなかった。1 年生在学中、家庭の医学書で理学療法士のことを知り、これが将来の仕事だと思い定め、大学の中途退学を決意。改めてリハビリテーションの専門学校に入学。3 年間の課程を修め、公立病院に就職。整形外科理学療法室に配属される。約 10 年間理学療法士として働く。31 歳で結婚。その 2 年後、転勤希望が叶い、別の公立病院に転勤。リハビリテーション科に配属され 3 年勤務。昇進試験の主任試験に合格し、公立の精神病院・リハビリテーション科に転勤を命ぜられ 4 年勤務。係長に昇進し職員共済組合病院・リハビリテーション科に転勤を命ぜられ 7 年勤務。3 年前から現職の公立児童福祉施設、訓練課勤務、係長。

初職への移行

理学療法士を目指し、一度進学した私立大学を中途退学。リハビリテーションの専門学校で学び、理学療法士の国家資格を取得、公立病院に就職。病院が自宅と同じ区内にあり、近かったこと。当時、リハビリテーションはまだ社会的にも認識が浅く、病院においても独立した機能ではなかった。整形外科に属することが多かった。資格を持っていれば、就職もそれほど難しくなかった。

仕事内容

初職 整形外科理学療法室勤務、理学療法士

整形外科に属し、体の障害を持つ患者の基本的な動きを獲得するための治療と援助に従事。寝返り、起き上がり、座る、立つ、歩く、走る等の基本動作に障害がある人に、その障害に即した治療や援助作業を担当。1 人で複数の患者を担当したが、勤務もそれほど過酷でなく、やりがいを感じながら働く。

2 職 別の公立病院に転勤、リハビリテーション科勤務

リハビリテーション科として、独立した機能を持つ組織だった。30名ぐらいのスタッフがいた。理学療法士の仕事としては変わらず。

3職 公立精神病院に転勤、主任

主任試験に合格し、転勤。昇進した場合、転勤することになっている。精神障害者の理学療法、リハビリは対応がむずかしく、ストレスが多かった。統合失調症の患者の場合は、胃の痛くなるような出来事を何度も体験した。

4職 職員共済組合病院に転勤、係長

係長に昇進し転勤。リハビリテーション科に属し、8名のスタッフとリハビリテーション支援業務に従事。理学療法士の仕事に加え、係長として計画書や企画書の作成、会議のまとめ等を担当。

5職 児童福祉施設、訓練課勤務、係長

児童福祉施設で重症心身障害者のリハビリ支援業務を担当。患者の平均年齢は37、8歳。知的障害と身体障害、両方の障害を持つ患者を担当。リハビリ支援の担当は、理学療法、作業療法、言語聴覚療法の3つの領域からなる。係長として3つの領域担当の14名のスタッフをまとめている。

自分にとっての転機とは何か

1つ目の転機は、私立大学を中途退学し、リハビリテーションの専門学校に入学し直したこと。自分にとって適職である今の仕事に出会えるきっかけとなった。2つ目は、主任試験に合格したとき。役付きになって、仕事への考え方が変わった。自分の仕事をしていればよかった時代から、職場全体を考えたり、後輩の面倒やアドバイスをするようになった。

転機に対する家族・周囲の反応

大学を中途退学したときの親の態度に感謝。高い入学金を支払って入学した私立大学を中途退学することには不満や不安があったと思われるが、何も文句を言わず賛成してくれた。

教育・訓練経験・自己啓発など重要な活動

初職のとき(29歳)、大学で通信教育を受講。一般教養学部学ぶ。大学を中途退学し、専門学校では一般教養を学ぶ機会がなかったため。大学では、卒論で「妊産婦に関する因習や言い伝えの研究」をまとめた。42歳のとき、手話スクールで学び、以降3年間、手話の講習会に週一回参加し学んできた。

影響を受けた人・本など

特定の人に強く影響を受けたということはない。親を含み転勤した各部署の人間関係で少しずつ、影響を受けている。

自分にとっての仕事の位置づけ

結婚前までは、人生において、仕事のウエイトはかなり大きかった。しかし、結婚してからは家庭が一番と考えるようになった。家庭があつての仕事と考えている。

これまでの職業経歴を振り返っての評価

理学療法士の仕事に就けてよかった。今は、自分の能力を活かしてくれる天職だと思っている。

将来・今後の展望

理学療法士を続けていきたい。昇進試験を受け課長になりデスクワークをするより、現場で働ける現役を続けたい。

後輩へのアドバイス

専門の勉強は当然として、さらに、自分が興味を持った分野の勉強や、幅広くいろいろな経験を通し人間性を豊かにすることが大切。自分の仕事と異なる分野の人たちとの交流も大事。

その他の特記事項

理学療法士には業務独占がない。国家資格であるにもかかわらず、理学療法士でなければこのことをやってはいけないという分野がない。そのため素人が介入できる。その辺の法律的整理が望まれる。

ケース 18

男性 49 歳

家族形態 妻、子ども 2 人

現在 宅配の下請け

インタビューの場所 駅最寄の喫茶店

現状と今の仕事

現在半失業状態。宅配の下請けで収入を得ている。今後は友人が製造販売している化粧水（成分として絹が使われている）の販売代理店を始める予定。

これまでの主な経歴

商業高校から商科大学に進み、簿記や経理の知識を取得。大学在学中に高校時代の先生の経営するビジネス塾で先生（珠算）のアルバイト。大学卒業と同時にアルバイト先の塾に正規の教員として就職、約 10 年勤務。生徒が減少し、教室が閉鎖されることになり退職。生徒の就職指導でコネのあった不動産の管理会社に就職。経理を含む労務事務を担当。1 年後、会社の将来が不安で退職。半年間失業。就職雑誌で見つけた簿記の専門学校に教師として就職。授業のカリキュラムを組む等事務担当。学生数の減少から、経営不振となり、事業転換（リストラ）が行なわれた。処遇が不本意で退職。9 年間勤務。1 年半無職の後、新聞の募集広告で探したコピー会社に就職。4 年勤務。平成 14 年秋、会社が身売りし解雇され失業。以降就職活動をしながら、宅配便の下請けで生計を立てている。

初職への移行

商科大学を卒業後、簿記や経理の基礎を教える大人のビジネス塾に就職。きっかけは、大学在学中、高校の先生の経営するこのビジネス塾でアルバイトをすすめられ、そのまま正社員として就職。その時は就職活動の苦勞もいらず、一番安易な選択だった。現在、人生を振り返るとき、この選択が間違っていたと後悔している。

仕事内容

初職 ビジネス塾の先生

珠算、簿記の基礎、経理の知識等を担当。生徒は商業高校の高校生から 30 代のビジネスマンが多く、税理士の資格を取ることを目的としていた。最盛期には、学生が 40 人くらいおり、6、7 人の先生と昼夜交代で教えた。仕事は気楽で、楽だったが、他の会社に就職した仲間に比べ給料が安く、年金や社会保険もなかった。

2 職 不動産管理会社経理担当

会社が小規模で、社員が 20 人足らずと少なく、はじめ経理担当ということだったが庶務

全般を任かされた。社長がワンマンで、わがままが多く、対応に苦労した。税務申告等のノウハウを取得。経営者が自社ビルを売りに出し始め、経営に将来性が見えず見切りをつけ退職。

3 職 簿記の専門学校で教務担当

ビジネス塾での経験を買われ、試験免除で簿記の専門学校に採用された。8学科あり、1学年1,000人の大規模専門学校。情報経理学科に教員として配属されたものの、教務の仕事が中心で、カリキュラム編成や時間割を組むことが主な仕事だった。専任、非常勤合わせ90名の講師陣の時間割作成は、コンピューターでもむずかしく、パズルのようなものだった。阪神大震災の直後には、学科長代理となり、学生の安全確保のために、震災時のマニュアルを作り上げた。その後、学生が減少し、経営の見直しが行われ、新規事業として、教材を書籍として販売することになった。管理職も営業活動が課され、4県を担当し、2年間学校や本屋にセールスして回った。さらにリストラが進められ、管理職の降格人事が行われ、抗議のかたちで7人の管理職が退職の意思表示をし、自分も行動をとらした。一年半失業が続いた。

4 職 コピー会社で事務・営業

小さな会社のため、時間があれば何でもしなければならなかった（経理、総務、管理、営業）。印刷のノウハウや紙についての専門知識を習得。経営者が会社を身売りし、給料の高いものから人員整理された。

5 職 宅配便の下請けをしながら化粧水の代理店準備

友人が製造している「水に溶ける絹」の入った化粧水の販売（卸）を始めている。需要先の市場調査等を行っているがあまり期待できない現状。生計はアルバイトではじめた宅配便の仕事で立てている。精神的には半失業状態にある。

自分にとっての転機とは何か

今から考えると、大学を卒業し、安易に、ビジネス塾に就職したことが人生の躓きに思える。もっと慎重に仕事を選ぶべきだったということ。もうひとつの転機は、簿記の専門学校を辞めた43歳の頃。何か自分で商売をと考えたが次男が生まれたばかりで、悩んだ末に安定した就職する方を選択したこと。

転機に対する家族・周囲の反応

第2の転機のとときは自由な選択ができなかった。

商売を始めようと思ったが、次男が生まれたばかりなので、リスクが負えなかった。

教育・訓練経験・自己啓発など重要な活動

簿記の専門学校時代（30代）毎年1回、ミドルマネージャー研修や上司・部下の人間関

係研修等を受講。阪神大震災の後、学生の安全を守るために震災避難マニュアル作成の責任者となった。東京都の災害対策や、参考書で都市型災害時の避難対策について勉強した。

影響を受けた人・本など

高校の先生で初職の経営者と不動産管理会社の社長。特に不動産管理会社の社長からは、反面教師で多くを学んだ。ワンマンでわがまま。人のいうことを聞かない。盲目ながら活動家で頭が切れた。ビジネスに強欲で、守銭奴のようにお金に執着する。記憶にある印象深い言葉として「人間ミスはする。それをどのように処理するか、その処理能力が大切だ」。

これまでの職業経歴を振り返っての評価

躓きが多いので、50点。最初の職業選択の甘さを後悔している。

将来・今後の展望

これからはしたいと思ったことはチャレンジするつもり。

健康について（本人と家族）

特に問題なし。

後輩へのアドバイス

仕事探しでは最初の見極めが大事。頼りになる人に相談して、慎重に決めてほしい。転職には早目早目の決断が大切。決断したら即実行。

ケース 19

女性 49 歳

家族形態 夫、子ども 1 人

現在 大手市中銀行の契約社員 月に 10 日くらい出社

インタビューの場所 デパート内喫茶室

現状と今の仕事

現在、大手市中銀行勤務。法人部門の問い合わせ業務。フル業務でなく、月に 10 日くらい出社の勤務形態。

これまでの主な経歴

高校受験で志望校に入れず(2校失敗)心の傷となる。滑り止めの高校に入学。高2の時、将来結婚する男性と同じクラスとなる。大学受験も志望校に入れず第2志望校に入学。大学ではESSで活動し、他大学のESSのグループ等と交流する等、楽しい学園生活を送った。大学卒業後、銀座の画廊に就職。勤務して2年後、結婚のため退職。以降、専業主婦となり子育てに専念。長い現役からのブランクの後(約20年)、子どもが高校2年生の時、新聞広告で求人していた大手市中銀行のテレフォンバンキングにアルバイトで就職。その後、テレフォンバンキングがフルタイムしか雇わないことになり、同銀行内で異動を希望し、現在の法人部門の問い合わせ業務となる。

初職への移行

女子大を卒業後、大手商事会社の就職試験を受けたが失敗。親は積極的に就職を勧めず、本人も意欲的でなかった。しかし、親戚に陶芸家があり、その方のコネで銀座の画廊に就職することにした。

仕事内容

初職 画廊勤務・事務

社員 100 人程度の会社で、新入社員が 3 名。担当は字が上手ということで、絵の出入を記録し、管理する仕事を与えられた。当時はコンピューターもなく台帳に手書きで記入していた。日本画家の作品が多く、絵の情報やそれぞれの画家の作品が号、幾ら等の知識が身についた。

2 職 専業主婦

一人息子の子育てに専念。幼稚園で父母会の副会長を引き受ける。毎月の行事や年間行事に積極的に参加し、先生方や父母と交流。幼稚園でのわが子の行動や成長が観察でき、役員を引き受けて良かったと思った。小学校の進学で、私立小学校を勧められたが、近くの公立

に進ませた。小学校では子供が1年生のとき広報委員を、6年生のとき学級の役員を引き受けた。中学進学問題では公立か私立かで迷った。迷った末、私立の有名校を受験させたが失敗した。自分が高校受験で失敗した苦しみを、子供に味あわせてしまったことに大変後悔した。結局近くの公立中学校に進学。子供の在学中、毎年役員を引き受けた。1年生の時学級の役員、2年生の時クラブの役員、3年生の時卒業の対策委員。専業主婦の役員も仕事を持っている役員もいたが意見の食い違いもなくスムーズに協力し合えた。

3職 銀行に就職・テレフォンバンキングのオペレーター

銀行における金の流れやシステムの理解、銀行・金融の用語や広い商品知識が求められた。電話で顧客情報を一字一句確認する作業の煩雑さと、いろいろなタイプの顧客に対応する難しさも体験した。

4職 法人部門の問い合わせ等の業務

中小企業の顧客に対し、融資情報を説明したり、問い合わせに答える業務で、平均して月10日程度の勤務。電話の対応や適切なコミュニケーションのスキルが要求される。

自分にとっての転機とは何か

一つは、受験の失敗(2度)。大変ショックを受けた。心の傷としていつまでも癒えなかった。しかし、そのため夫と出会える恵みも与えられたこと。2つ目の転機は、息子が中3の時、夫が病気で長期に入院した。彼がいなくなったら自分の人生はどんなにつまらないものになるか気づかされたこと。

転機に対する家族・周囲の反応

高校受験の失敗の時、両親はプレッシャーを与えない気遣いをしてくれたこと。第2の転機ときは、自分が改めて夫に対する評価、存在の大きさに気づかされたこと。

教育・訓練経験・自己啓発など重要な活動

子育ての中で、学校の役員を沢山経験し、リーダーシップや対人関係等を学ぶ機会となったこと。

影響を受けた人・本など

テレフォンバンキングでいろいろなタイプの顧客に出会い、学ぶことが多いこと。

これまでの職業経歴を振り返っての評価

点数はわからないが、幸せな人生を送ってきていると実感している。同窓会などで他の人たちの抱えている問題などを聞くと、自分は何の問題もなく、順調なのだなと気づかされる。

ケース 20

男性 49 歳

家族形態 妻、子ども 3 人

現在 会社の代表取締役

インタビューの場所 機構事務所

現状と今の仕事

ポスティングをする有限会社を 3 年前に立ち上げ、代表取締役となった。事業内容は主婦の方々を組織して、メール便を、戸別の郵便受けに入れることである。年間の売り上げ 5 億円。

これまでの主な経歴

中学 3 年のとき県の剣道大会で個人戦で優勝し、地元の普通高校に特待生で入学。母子家庭で経済的な理由から大学進学を断念した。高校卒業後、友達の父親が経営する測量会社に 1 年ほど勤めた後、運送会社に半年勤務。20 歳のとき船舶会社に入り、遠洋のイカ釣り漁船の甲板員となり、1 年で船を下りて数ヶ月間、配送サービス会社の運転手をして、再び前と同じ船舶会社に入り、24 歳までイカ釣り漁船の甲板員をした。このまま一生、船乗り生活はしていられないと思い船舶会社を辞めた。

25 歳のとき職安の求人広告を見て、船舶の部品を扱う会社に就職し、船用品の積み込みをし、2 年位たってから営業に回った。28 歳のとき得意先の韓国系の水産会社に引き抜かれて、水産物輸入の業務を 9 年間担当した。

韓国系の水産会社を 37 歳で辞めてから、日本の水産会社に入り、中国との貿易業務を 1 年半ほど勤めた。

高校のときの先輩に誘われて、メール便を扱う会社を設立した。途中から親会社の社員になり 6 年くらい働き次長になった。この会社は妻に経営をまかせた。

3 年前に今の会社を起業し現在に至る。

初職への移行

大学に進学し、体育の教師になりたかった。経済的なことで進学できず、高校卒業後、高校のときにアルバイトをしていた測量会社に入った。

仕事内容

初職 測量会社の社員

測量の手伝いを 1 年半ほどした。

2 職 イカ釣り漁業の甲板員

20歳の時に遠洋のイカ釣り漁船に乗りニュージーランドに行った。成人式も船の上でやった。1年で船を下りたが数ヶ月後にイカ釣り漁船に乗った。通算4年間、遠洋に出る船員をしていた。仕事は肉体労働で、睡眠時間も3時間位しかなかったりしたが、すごい収入があった。一生、この仕事はできないと思った。

3職 船舶部品販売会社の配達・営業

25歳の時、職安の紹介で船舶部品を販売する会社に入った。初めは商品を船に配達し、2年くらいたってから営業に行った。得意先は韓国の会社が多かった。

4職 韓国系水産会社の輸入業務担当

28歳で前の会社の得意先企業から引き抜かれて入社した。主としてアフリカからイカを輸入する仕事をした。アラスカにサケの買い付けに行った時は1ヶ月くらい船に乗っていた。輸入した水産物は日本の商社や水産会社に販売した。この仕事を9年間、行った。

5職 水産会社の貿易業務

中国との水産物貿易をしてる会社に入り、アサリの輸入を担当した。1年半で辞めた。

6職 会社設立から社員に

40歳になったとき、高校時代の剣道部の先輩から「水産物輸入なんてリスクな商売は辞めて、ダイレクトメールを扱う会社をつくろう」と言われ、共に会社を設立した。途中で親会社から、社員になって仕事をしてくれと要望され、社員として6年間くらい働いた。

7職 会社の代表取締役

3年前、今の会社を設立し社長となった。親会社はどんどん成長し、昨年には株式を上場した。自分の会社の業績もそれなりに上がり、年商5億円位になった。社員は4人だが、親会社がサポートしてくれるので人手がかからない。親会社から特別に許されて事業をやっている、リスクがない。利益をあげるために事業をやっている。

自分にとって転機とは何か

高校時代の先輩に誘われて、メール便の事業に転換したこと。

転機に対する家族、周囲の反応

妻は全然気にしなかった。仲良しの剣道部の先輩とその方の人的ネットワークが支援してくれた。

教育・訓練・自己啓発など

- ・イカ釣り漁船の仕事は一生できないと思い、海技ゼミナールの航海科で3ヶ月勉強した。外国との取引については貿易実務の本を自分で読みながら、商社や銀行の人に知らないことは何でも教えてもらい実践で身に付けた。
- ・剣道ができていい仕事ができると思い、ずっと修業をしている。今は六段で秋には七段の

昇段試験を受ける。

影響を受けた人

高校時代の剣道の先生。人生の師匠として今でも尊敬し、「何事も真面目に取り組みなさい」という教えに従っている。

今後の展望

剣道をずっと続けたい。あとは、会社を株式会社にすること。他のことは考えていない。

健康について

- ・ 高血圧症と糖尿病、今年の8月に心臓の冠状動脈のバイパス手術を受けた。剣道は止めろと言われたけれど前より快調にやっている。
- ・ 妻や子ども3人の健康状況は問題なし。

ケース 21

男性 49 歳

家族形態 妻、子ども 2 人

現在 家族と一緒に造園業を経営

インタビューの場所 インタビュー対象者が経営する造園会社の応接室

現状と今の仕事

20 年前から実家で造園業をやっている。父のしていた植木販売を引き継いで造園業とした。自分と妻、父、弟の 4 人で造園業を分担している。主として妻が経理、父が造園、弟が販売を受け持ち、自分は現場打ち合わせ、設計、施工、集金などを行っている。

これまでの経歴

実業高校電気科を卒業後、電気工事の専門学校に進学。卒業後、電気工事業の会社に就職した。20 歳から 27 歳まで電気工事士として、電力の地中配線工事を担当した。27 歳のとき、父がしていた植木栽培と販売を引き継ぐため会社を辞めた。それから 48 歳の今日まで、約 20 年間、造園業を自営してきた。

初職への移行

本当は大学へ進学したかったが、経済的な理由で電気工事士になるための専門学校に入った。これで電気工事業の会社に入ることが方向づけられ、電力会社の協力企業である中規模の電気工事会社に入った。

仕事の内容

初職 電気工事士

電気工事士として、高層ビルの地下や共同構の配線工事、電力ケーブルのジョイントの圧着・ハンダ付けの作業をした。25 歳のとき 4 人組の副班長に昇進した。工事の作業はきつく、現場の人々は気の荒い人が多く、一生やる仕事ではないと思っていた。配電工事時、高圧 6,600V の活線工事で火傷し、全治 1 ヶ月の労働災害を受けた。これがきっかけとなり、父の植木屋を引き継ぐため会社を辞めて、実家に帰った。

2 職 造園業見習い

A 県の有名な造園会社に、造園のプロセス、技能、接客などを習得するために 1 年間見習い修業をした。収入は小遣い程度であった。

3 職 造園業の経営者

28 歳で父の植木栽培・販売の仕事を引き継ぎ会社の経営者となった。会社が所在する地域内に本社を置く造園会社は 15 - 16 社あり、外からも同業者が入ってくるので競争も激しか

った。

会社をつくって十数年は、公園造成、管理、街路樹の植栽、民家の造園など大きな仕事を請け負って売り上げも多く、仕事の充実感があった。

最近は公共工事の入札も工事金額が少なく、請負単価も下がっている。個人住宅の造園も10万～20万の仕事しかない。

現在の事業比率は、役所 40%、個人 40%、下請け 20%となっている。「天気に事業が左右される会社は、大きくなれない」といわれる。大きくすることでなく、今の会社を存続させるために、誠意を持って仕事をし、お客様を定着させるようにしている。

自分にとって転機とは

電気工事会社を辞めて、造園業を始めたこと。

転機に対する周囲の反応

会社は引き止めようとしなかった。両親は長男が家業を継ぐので喜んでいて。

教育・訓練・自己啓発など

- ・電気工事会社では、クレーンの玉掛け作業者と酸素欠乏作業主任者の資格を取得させてくれた。
- ・造園業の見習いは、真剣にやった。A県にあるその会社に、今でも分からないことがあると教えてもらっている。
- ・役所の仕事はパーソナルコンピューターでメールを送ったり、デジタルカメラの写真を送るようになってきた。いずれ入札も電子化されるので、必死になってこれらのスキルを身に付けようとしている。

影響を受けた人

信用金庫の支店長、税理士、行政書士の人達には、人格、専門能力、知識などで影響を受けた。特にこの人という人はいない。

これまでの職業経歴を振り返っての評価

百点満点の90点、マイナスの10点は一級の造園技能士の資格をまだ取得していないこと。

将来・今後の展望

生産緑地にしてある土地の管理と、今は使っていない2階建て社屋の活用を考えたい。将来的には不動産管理の事業もしてみたい。

健康について

自分も家族も健康だと思っている。高校1年の息子が障害を持っているが、自分のことは自分でやるといっている。

ケース 22

女性 49 歳

家族形態 夫、子ども 2 人

現在 専業主婦

インタビューの場所 インタビュー対象者の自宅

現状と今の仕事

会社員の夫の妻、長男中学 2 年生、次男小学 4 年生の母として専業主婦をしている。

これまでの主な経歴

普通高校卒業後、洋裁の専門学校に進学。卒業後、海運会社に就職した。始めは受付と庶務の仕事をした。その後、経理に移り、給与、保険を担当した。25 歳で結婚、長男を出産する時、勤続 14 年で会社を辞めた。この時 34 歳、38 歳で次男を出産、専業主婦として現在に至る。

初職への移行

昭和 51 年 3 月に専門学校を卒業し、ベビー服の製造会社でデザインをしたかったが入社できなかった。オイルショック後の不景気で就職難だった。卒業後、新聞広告をみて 3 - 4 社の入社試験を受けた。

結局、洋裁関係の会社に入れず、珠算 3 級の資格が評価され、商船会社に入った。

仕事内容

初職 庶務

入社後の仕事は、受付を含む庶務の仕事であった。2 年間ほど庶務をし、後輩にその仕事を引き継いだ。

2 職 経理事務

庶務をしている期間に、会社は経理の講習会に行かせてくれた。22 歳のとき経理に移った。仕事を通じて知識を覚えた。例えば、字の上手い先輩の字をまねてペン習字をした。給与計算、保険等を担当した。

25 歳のとき高校時代から交際していた彼と結婚した。結婚後も働き続けた。

経理の仕事も小切手を切ることや、銀行回り、金庫管理に変わってきた。仕事の関係で何カ国かの大使館に行く仕事もすることになり、名刺を作ってもらって、うれしかった。名刺は今でも大事に持っている。

海運業は、一般の企業のような経理事務でないので苦労した。事務も手書きからワードプロセッサ、そしてパーソナルコンピューターを使用するようになり、新しいことを身に付

けることができた。しかし、眼の疲れや首筋が張るなどの症状を覚えるようになった。

遠洋漁業の衰退により、社員数も減ってきた。経理事務も一部が外注されるようになった。赤字の経理にも嫌気がさしてきた。

産前・産後の休暇を取って勤める可能性もあったが、両方の母親には頼れないので長男の出産を機に会社を勤続 14 年、34 歳で辞めた。

3 職 専業主婦

34 歳で長男、38 歳で次男を出産した。主婦として育児と家事に専念した。

4 職 ポスティングのアルバイト

44 歳から、チラシを戸別の郵便受けに入れるアルバイトをした。今年の秋に長男が野球で大怪我をし、続いて夫の父が亡くなって、この仕事を辞めざるを得なくなった。

5 職 専業主婦

実の母が 10 年前に脳梗塞で倒れ、左半身が麻痺している。実家を改造して父が母を看ている。しかし、ケアマネジャーとの交渉、書類の作成は自分でないとできない。母の介護のことで不定期に実家に行かなければならない。これが制約となり、仕事が見つけれないでいる。実母は 80 歳で痴呆がでていいる。実父は 83 歳なので施設のショートステイを増やすように考えている。

自分にとって転機とは何か

経理の仕事についてきたことと長男を出産したこと。

転機に対する周囲の反応

経理の仕事につくことは、会社が事前に講習会に行かせてくれ知識もあった。上司や先輩からも温かい指導を受けた。

長男の出産は周囲の人達のサポートは得られず、仕事を辞めなければならなかった。

教育・訓練・自己啓発などの活動

経理事務は事前の講習会に会社が行かせてくれた。経理の事務能力は、OJT により仕事をしながら身に付けた。

珠算 3 級の資格を持っていたのが入社試験で評価された。華道草月流の先生に付いて修業した。月謝は会社が持ってくれた。草月流参与の資格を取らしてもらった。

影響を受けた人

夫。高校時代から交際し、25 歳で恋愛結婚。共働きを 11 年間できたのは夫の理解による。

自分にとって仕事の位置づけ

会社での仕事により自分は成長した。仕事か家庭かの選択は、女性ということもあり、迷わず家庭を選んだ。

これまでの職業経歴を振り返っての評価

100点が満点とすれば70点。マイナスの30点は、職業にもう一步、専門的に踏み込めなかったこと。

今後の展望

夫の両親は亡くなっているので、自分の両親の介護をすること。子どもの教育は、夫と大学に入学するまではみることにしている。

健康について

自分と夫、子ども2人は健康。実母に身体障害と痴呆がある。

ケース 23

男性 50 歳

家族形態 妻、子ども 3 人

現在 公務員 課長補佐

インタビューの場所 インタビュー対象者の勤務先の会議室

現状と今の仕事

現在、県の課長補佐として、農業従事者の社会教育をする係の責任者をしている。

これまでの主な経歴

地元の普通高校を卒業後、他県の短期大学農学部に進学。卒業後すぐに地元の県職員となる。農業改良普及所の職員として 25 年間勤務、その間、5 カ所の改良普及所に勤務した。26 歳で主任、30 歳で主査となり、46 歳で本庁の課長補佐となり、現在に至る。

県職員となり他県に半年間、研修に行った。2 年目に同県の農業試験場に溶液栽培の研修を受けに半年間、行った。その後、30 歳のときに、ある大学の農学部にて 1 年間、内地留学をして、ネギの障害予防の研究をした。32 歳のときにアメリカの大学に農業の環境汚染防止の調査研究のため 1 年間、留学した。このような研修は、すべて自ら企画書をつくり認められて外部で受けた。

初職への移行

大学は薬学部に入りたかった。農芸化学を受けたりしたが、浪人はしたくなかったので、それから募集のあった短大農学部に入ったことが、地元の県職員になる道を選ぶことになった。

仕事内容

初職 農業改良普及員

県の地方にある農業改良普及所に配属された。改良普及員として、農家や農協を訪問して、農業改良のコーディネーターの仕事をした。3 年後に県内の他の改良普及所に転勤して、2 年間、同じ仕事をした。

2 職 主任

26 歳のとき主任に昇格し、他の改良普及所に転勤した。農家を回って社会教育的な指導をした。

3 職 主査

30 歳のとき主査となり、次の改良普及所に転勤した。希望してある大学の農学部にて 1 年間ネギの障害予防の研究をした。

32歳のとき法律に基づく、農業改良専門技術員の国家資格を取得した。この資格を取っても、農業改良普及員という県職は変化がなかった。勤務地は自宅から車で10分の職住近接のところで、ここに11年間勤務した。

この間、アメリカの大学に1年間留学し、農業の環境汚染防止の調査研究をした。できるだけ現場を見せてくれと依頼し、大学の研究室や東海岸、西海岸の農家を見学した。アメリカの農業は、西海岸が規模が大きく、企業経営のようなやり方をしていた。兼業農家が多く、大学教授をしながら、自然の中で子どもを育て、自分たちの食べるものをつくるのがステータスシンボルになっているのにはびっくりした。

アメリカから帰って、タマネギを掘る農機具をメーカーと共同で開発した。この機械は、農家の方々の作業の効率化と腰痛予防に役立った。その後、タマネギを植え付ける機械を開発した。

農家の方々の重いタマネギを掘る作業は、自分で身をもって知っていた。また中腰になってタマネギを植える作業を何とか改良しようと考え、農機具メーカーを回ってコンペをして、メーカーを決定して製品化した。これらの機械は、全国で使われている。

ここでの充実した勤務を終え、42歳のとき他の改良普及所に異動になり、そこで4年間勤務した。

4職 本庁 課長補佐

46歳になり本庁の課長補佐として着任した。県下の22改良普及所（現在はセンターという）の農業環境保全教育の推進をする係の責任者をしている。6時45分に家を出て片道2時間かけて通勤している。勤務時間も長いし窮屈な思いをしながら3年になる。地方のセンターで現場の仕事をしたいとずっと希望を出している。4月の異動を指折り数えている。

自分にとって転機とは何か

ずっと同じ職場なので転機はなかった。考え方の転機は、アメリカの大学に留学して、農業の実態を知ったこと。

転機に対する家族・周囲の反応

- ・妻と両親が賛成してくれ、子どもの教育を含む実家の生活を守ってくれた。
- ・勤務先は自分の留学希望を受け入れ、留学についての配慮をしてくれた。

教育・訓練・自己啓発など

県の研修体制は非常に充実していた。職員採用されて、すぐに他県に半年間の研修に出してくれた。その後は自分でテーマを決めてつくった研修企画を上司が認めてくれた。特に大学農学部へ1年間の内地留学、アメリカの大学に留学して調査研究で視野が広がった。この二つの大学で知り合った人達との交流が続いており、出会いに感謝している。

自己啓発は夜間の簿記学校に通い企業会計の勉強をした。これはアメリカのように農業を企業経営のような形でやる時代がきているからだ。

影響を受けた人

大学に内地留学をしていたときに助手をしていた人、専門分野の指導をずっと受けてきた。今は教授になっており、園芸学会などで共同研究をしている。

これまでの職業経歴を振り返っての評価

農業改良普及員の仕事を一筋にやってきた。自分の思うように留学等をさせてもらい満足している。

今後の展望

早く現場に出たい。できれば農業普及センター長になって60歳で定年退職したい。

健康について

家族の健康は今のところ問題がない。

ケース 24

男性 49 歳

家族形態 妻、子ども 2 人

現在 大手建設会社の部長

インタビューの場所 インタビュー対象者の勤務先の応接室

現状と今の仕事

現在は営業部部長として、マンション建設等の営業を主に行っている。

これまでの主な経歴

私立普通高校卒業後、内部進学で経済学部に入學した。大学卒業後すぐに大手建設会社に入社し、経理の事務員として7年間働く。会社では事務部門は低くみられているので、希望して中近東に2年半駐在する。帰国して海外本部の係長となる。希望して営業本部に異動し課長代理に昇進する。阪神大震災後、支店の立ち上げのため39歳で単身赴任、営業担当の課長として4年間勤務。その後、営業本部に戻り副部長から部長になり現在に至る。

初職への移行

大学時代は商社を希望していた。今の建設会社しか受からなくて、海外に行けるかと思い入社した。

仕事内容

初職 経理事務

入社してから6年間は、財務本部で経理事務を担当した。最初の4年間は国内経理、後の2年間は海外経理に関わる。国内経理の業務は不満足であったが、海外経理事務には満足していた。

2 職 海外駐在（経理、輸出入担当）

海外で仕事をしたいと大学の先輩である人事課長に話し、中近東に2年半駐在することになった。夫婦2人で中近東で生活することになり、妻はペルシャ語を勉強して買い物をした。中近東ではダムとかトンネル工事に係る事務をしていたが、工事半ばでイラン・イラク戦争が始まり社員では最後に撤退した。近隣の国が飛行機を出してくれたので、脱出することができた。

3 職 経理・輸出入事務

中近東での工事代金回収は、3年間くらいかかった。代理人を通して、その国の政府と交渉したが、お金がないというので商社と組んで石油を引き取り、それを売って代金の回収をした。係長として全責任を持たされた交渉は、言葉の問題もあり苦労した。会社はこの仕事

について全く評価してくれなかった。

4 職 営業本部事務職

希望して営業本部に異動し事務の仕事をした。課長代理に昇進し、満足していたが1年半で出された。

5 職 支店営業職

3年間の約束で阪神大震災後の支店立ち上げのために単身赴任した。営業本部に移ったばかりで、得意先も持っていなかったのが左遷されたと思った。支店の課長になったが満足感はない。子どもの教育のこともあり、やむを得ずに単身赴任をしたが、40歳近くになって、寮の部屋に帰って一人で食事をしたりして寂しい思いをした。自分はいつも家族と一緒にいたい性格なのだと考えた。

6 職 営業本部 営業、開発、不動産

本社に帰り関東の大規模土地買収を2箇所行った。この件は現在、評価されている。副部长から部長に昇進し、現在、部長職での仕事には満足している。近く別の土木工事に強い会社と合併が予定されている。リストラで1,000人位の人員削減をすることになっている。自分で希望して営業に異動し実績をあげているので、55歳の役職定年までは残れると思っている。

自分にとって転機とは何か

中近東に2年半駐在したこと。イラン・イラク戦争の中で残務整理をしてから脱出して人生観が変わった。

転機に対する家族の反応

妻は現地に付いてきて、言葉が通じないと食料品を買うことができないので、ペルシャ語を勉強して生活を支えてくれた。

転機に対する周囲の反応

中近東での仕事は、会社や関係先と上手くいっていた。中近東からの脱出は、近隣国政府の出してくれた飛行機に頼った。帰国してからの会社の評価は低かった。

教育・自己啓発などの活動

中近東に行く前に半年間、会社の英語研修を受けた。

一級建築士の資格を取得しようと思い3年間、夜間の専門学校に通って勉強した。海外に行くことになり、結局、一級建築士は取れなかったが自己啓発になった。

入社して7ヶ月後に宅地建物取引主任者の資格を取得した。現在、この資格が役に立っている。

影響を受けた人

1 番目は母方の祖父、電力会社の偉かった人。その人のように企業の中で立派になりたいと思っていた。2 番目は仲人をしてくれた親の友達で企業の役員をしていた人。人格的にも非常にすぐれた方で、今でも家族ぐるみのつき合いをしている。

仕事関係の人では、ある大企業の社長、その方はすごく尊敬している。会社の上司にはあまりいないと思っている。

考え方、ものの見方、判断力とか人間関係の作り方とかにこれらの人の影響を受けた。自分に素直に生きるということを教えられた。

自分にとって仕事の位置づけ

一つの会社に 27 年間、勤務した。建設会社は普通あんまり人事異動がないが、自分は転職がすごく多かった。もう会社を辞めようかと何回も思った。海外赴任も今にしてみればいい思い出となっている。

これまでの職業経歴を振り返っての評価

入社して国内経理を担当した時はやりがいなかった。海外経理の仕事は満足した。中近東に駐在した時は、希望して海外に出たが普通だと思っている。中近東での生活は大変で妻に負担をかけた。

帰国して海外本部での中近東での滞在国政府との工事代金回収の交渉は苦労した。この仕事を会社が評価してくれなかったのが不満である。その後、営業本部に異動し、阪神大震災後の支店設立に係わった。単身赴任の悲哀を味わった。3 年間の支店勤務を終えて営業本部に戻り、今の仕事には満足している。役職に付くのは同期と比べて 5、6 年遅れていたけど今では取り返した。

将来・今後の展望

海外駐在に係る人脈と国内で培った人脈で人的ネットワークができている。今、会社を辞めても何とかなると思っている。役職定年は 55 歳なので後 7 - 8 年、会社にいるつもりでいる。それからは、誰かと協力して不動産の会社をつくろうと考えている。人間関係が財産だと思っている。

本人と家族の健康について

自分も家族も健康である。

ケース 25

男性 50 歳

家族形態 妻、子ども 2 人

現在 医師、病院の消化器部長

インタビューの場所 インタビュー対象者に指定された駅前の喫茶店

現状と今の仕事

病院に勤務、消化器科の責任者として 1 年前から部長職にある。

これまでの主な経歴

地元の普通高校卒業後に上京し予備校に 2 年間通学する。国立大学医学部に進学、卒業後、研修医、医長、診療所長、内科医長、外来診療部長、副院長、院長を幾つかの病院等で歴任して現職に至る。

18 歳で地元を離れ、31 歳まで別の県に住み、それからは現在の県に在住。

初職への移行

高校時代は哲学や心理学、あるいは精神医学に興味を持っていた。父も母も教師で、父をみていて、好きなことをやっているみたいだから教師になろうと思っていた。父親に、お前は人前で話すのは向いていないので医師になれと言われて、医学部に進学した。医師免許を取得してから A 病院の研修医となった。

仕事内容

初職 研修医

院内研修として、循環器、腎、リハビリ、一般内科を 2 年間で回った。同時に B 大学病院第三内科での研修を受けた。収入はまずまずであった。病者や苦しんでいる人のために働けて満足度は高かった。

2 職 出向

勤務先の病院より経営危機になった病院の医療支援のため、C 病院に半年、D 病院に 2 年、出向した。助けてくれといわれるとすぐ行きたくなるタイプである。C 病院は町中の病院で実践的な内科の診療ができた。D 病院は倒産状態にあった。最後の病棟が閉鎖するかどうかの時、銀行に陳情団を組んで乗り込んだりして、何とか病院を存続させた。途中、A 病院に戻って救急病棟の医長をやったりした。C 病院に内視鏡をやるために出向した。

人の体内は美しいもので、絵が好きなのでスケッチしたりするうちに内視鏡の道に入ったことが進路決定になった。

3 職 D 病院病棟医長

34歳のとき出向していたD病院の病棟医長になった。関東の総合病院に日本の大腸ファイバーでは3本指の1人という先生がいて、毎週、その先生のやり方を1日ずっと見せてもらうことを1年位、続けた。その後も一流の先生について修行をした。

D病院も消化器の病棟を新しくつくり、ベッド数は130から250床となった。その後、病院の医局が分裂するようなことがあり、分派的な人達が出て行ってしまった。この事で精神的に疲れてしまい、幹部がしっかりしていないことが不安となった。「すぐあなたも副院長をやらしてもらわなければいけない」と上司に言われたことがきっかけとなり、D病院を辞めた。

4職 E病院勤務医

36歳のときにE病院に勤務し一般内科をやらされた。内視鏡をやらせてもらえなかったので不満だった。

38歳から2年間、団地の診療所長をした。住民の方たちと健診活動や話し合いの会をついたり、健康祭りでの交流は楽しかった。その地域の方々から親しくして頂いて、いまだにいい関係が続いている。5年で一仕事と思っていたのに、E病院の内科医長に呼び戻されたのを恨みながら外来の責任者となった。その後、外来診療部長を務めた。

5職 F病院 副院長 院長

同じ病院系列のF病院に45歳で異動し副院長として2年間、院長を1年間した。建て直した新しい病院の院長には人事権も事務の決裁権もなく、出来事の責任だけ追及されるし、制約も多かった。父の死もあり、改めて自分の人生をもう一度考えてみようと思い院長を辞めることにした。子どもたちの教育のこともあり、もう少し収入のいいところで自分の専門を活かそうと思い辞表を出した。病院の理事長のすごい反対に遭い、3ヶ月ぐらい辞められずに、針のむしろに座って耐えた。

6職 G病院 消化器部長

G病院は消化器の専門医が3人いたが、全員が辞めて困っていて、タイミング良く就職できた。天才と呼ばれる医師が月に1回来てくれて一緒に消化器がやれることと収入の面でも配慮してもらったことでG病院に勤めて1年弱となる。現在49歳。

自分にとっての転機

父親に「人間は創造的でなくちゃいけない。医者になって真面目に人のために尽くせ」と言われて、医学部に進学したこと。

次に医師としてある分野を専門に選んだこと。その分野は日本が世界で一番進んでいる。その第一線で活動し、学会での発表とか、医学雑誌に書いたりして、ちょっとは知られてきている。病院を変えることも転機であった。

転機に対する妻の反応

33歳のとき結婚した。妻はD病院でのバンド活動で知り合った。そこにキーボードで入っ

てきた元患者。大学とか医者とかにこだわらない人で長男、長女を出産してからは強くなり、医師としての転機を支えてくれた。

転機に対する周囲の反応

ある分野の専門医となった時、病院を辞める時には周囲の反応は冷たかった。結局、自分の職業人生は自らが判断し選択するものだ。

医師としての技術等の習得

臨床医は技術が優れていなければ一流になれない。自分はある分野において日本の三本指に入る医師の3人を師匠として修行してきた。

臨床の能力や主義、判断力、決断力、そして医師として大事な共感とか誠意が大事だと考えてやってきた。父に言われた「先ず技術をしっかり身に付けなさい。その上で幅を広げて人間的に深めることが大事だ」ということは、いまだに思っている。

医師としての成長は、患者さんを通して、元気づけられることが根底にある。結局、歌とか、絵とか好きなものを手放さずに来たことが医療につながっている。

影響を受けた人

医師になったのは、父の教えが大きかった。母の影響も強く、精神科を望んだことがあったのは母から逃れたいためだったと思う。母は自分が戦争中でできなかった研究活動をして欲しいと言い、大学で研究する道に進むことを望んでいた。

山本夏彦が言った「人生は死ぬまでの暇つぶしだ」という言葉が好きだ。名誉や地位を求めたって人は必ず死ぬ。それまで一生懸命生きて、自分でやっぱり良かったなと思えたらと、人生を歩んできた。

これまでの職業経歴を振り返っての評価

人生というのは生きるに足るものだと考えて、キャリア形成をしてきた。今までの職業人生は百点満点の90点ぐらいと思う。マイナスの10点は現在までにずいぶんと回り道をしてきたこと。

今後の展望

子どもたちが社会人になるまでは、一定の収入が要るので今の病院に勤めていたい。それから先に開業するかどうかは今考えていない。先日、本を出したので、本をもう1冊は書きたいと思っている。

健康について

自分と子ども2人の健康については問題がない。妻は精神的にも体力的にもあまり健康な方でなく波があり、家に帰って医者をやったりしている。

その他の特記事項

今日はいろいろ聞いて頂いて、カウンセリングを受けたような感じで、気分が高揚していると話していた。

音楽を通じて患者さんや地域の人達とふれ合いたいと考え行動している。

「私もどこかで自分のこれまでの人生を誰かに話したいと思ってました。どうもありがとうございました」と言われた。全人的な医療をしている医師の良心が伝わってきた。

ケース 26

女性 50 歳

家族形態 夫、子ども 2 人

現在 コンビニエンスストアの経営者

インタビューの場所 デパート内の喫茶店

現状と今の仕事

現在は、1994 年に始めたコンビニエンスストアを夫と 2 人で経営している。

これまでの主な経歴

地元の女子校を卒業後、私立大学経営学部に進学。卒業後すぐに大手企業の秘書課に勤務。秘書として 3 年間働く。その後、家業の酒屋の仕事を手伝うため地元に戻る。30 歳で婿取りをして結婚をした。40 歳のときに父が酒屋を廃業し、夫と 2 人でコンビニエンスストアを始め、9 年目の今日に至る。

初職への移行

大学時代は経営学部で、A 社の営業に入ることになった。入社式の前に本社の秘書課にどうですか、と会社が言ってきた。営業をやって、いろいろな会社に行って、ばりばり仕事をしようと思っていたので戸惑ってしまった。姉に、自分なんてどれだけ役に立つかわからない、未知数なのに、会社で使ってやろうというところへ行きなさい、と言われて就職した。

仕事内容

初職 秘書

A 社の秘書として 3 年間働き、大企業の社長、専務の働き方、生き方から教えられることが多かった。最初の 1 年間は社長の秘書として、スケジュール管理を主として担当した。社長が会長になり、後の 2 年間は専務の秘書をした。専務の個人的なスケジュール管理をしながら、社会的に地位の高い方の行動を目の当たりにして、いい勉強になった。

2 職 実家の酒屋での仕事

姉が 26 歳で結婚して家を出た。両親 2 人で酒屋を続けていると、結局どちらかが倒れるのではと思った。両親のことが心配で、店を手伝うことにして、25 歳で会社を辞めた。

30 歳で婿取りをして、家業を継いだけれど、父と夫の男同士の対立があり大変だった。

33 歳で長男を、36 歳で次男を出産した。子どもが上が小学校、下が幼稚園に入るのを待って、転業を決意した。

3 職 コンビニエンスストアの経営者

40 歳のとき家業の酒屋を廃業して、コンビニエンスストアを開いた。地元では酒屋からの

転業が一番最初だった。父も夫も私を頼りにしていた。酒屋の道路向かいに 145 坪位の土地があったので、そこに店舗を建てることにした。酒屋としては売れていたし、父は酒屋を続けたいと思っていたが、夫の活躍する場所を提供しなければ、彼が仕事することなく終わってしまう。本業を夫と共に死ぬ気になってやらなければ、生き残れない。父は酒屋の組合役員をやっていて業態変化はできなかった。

夫と2人でストアを開くには、いろいろなしがらみがあって大変だった。もう二度とあの苦労はしたくないと思う。公庫からお金を借りるなどは、全部2人でやった。コンビニエンスストアを始めて、もう10年になる。今では成功したと思っている。

自分にとって転機とは何か

コンビニエンスストアを開店したこと。

転機に対する家族の反応

父は家業の酒屋を廃業することに反対した。夫は婿養子として中途半端な生き方に満足できないでいたので、コンビニ開店に賛成だった。まさに離婚するか新しい店をやるかという選択でもあった。40歳でこれからばりばり働く夫と、もうすぐ70歳になる父の意見を選択するうえで、迷わず夫の意見に従った。

教育・訓練などの活動

教育・訓練などは受けていない。コンビニ経営は実践しながら学んだ。

影響を受けた人

第1は両親。両親の面倒をみることを切り離して、自分の幸せはないと思った。酒屋の廃業についても、父は私の意見を聞いてくれた。2番目は夫。夫が協力してくれなければ今日の幸せな生活は得られなかった。

自分にとっての仕事の位置づけ

A社における秘書の仕事は社会勉強であった。実家の酒屋での仕事は手伝い。コンビニエンスストアの経営は、夫と2人で全力をつくした。これが私の仕事人生のすべてだと思う。

これまでの職業経歴を振り返っての評価

恵まれていた。ひたすら単純に努力した。一生懸命、夫を活かそうとしてきた。その場、その場で仕事をしながら自分も活かしてきたと思う。

将来・今後の展望

コンビニエンスストアの契約は 15 年なので残り 5 年。それが過ぎると契約更新は 1 年ごとになる。結構ハードな仕事なので、いずれ店は止めると思う。その後のことは、今考えていない。

健康について

自分と夫、子ども 2 人は健康。家業、そしてコンビニエンスストアの仕事、子育てと心身が健康だから楽しかった。幸福だと思う。

ケース 27

男性 49 歳

家族形態 母

現在 建設関係の株式会社に勤務、係長としてカスタマーサービスを担当

インタビューの場所 対象者の居住する地方都市にある駅に近接するホテルの喫茶コーナー

現状と今の仕事

氏は、建設会社において社員数、売上面から上位にある建設関係の株式会社（以下 A 社と記す）に勤務、係長としてカスタマーサービス（以下 CS と記す）を担当している。そのため、車を使用して北関東一円の顧客を随時訪問することが同氏の日課となっている。7 月上旬の金曜日の夕刻、顧客訪問予定を調整してインタビューに応じてくれた同氏であったが、当日の夜は 7 時から会議が予定されているとのことでインタビューが終わると同氏は再び会社に向った。

これまでの主な経歴

氏は地元の公立商業高校（男子校）を昭和 48 年に卒業後、新卒で当時大手百貨店の株式会社（以下 B 社と記す）に就職した。同氏は、入社時の配属以来 16 年間、本店の食品部に在籍。その間、入社 14 年目に主任に昇進し和菓子部門の責任者となった。平成元年、別の店舗に転勤。同店にて主任として外商業務を担当していたが、2 年後の平成 3 年 3 月に同店を退職した。2 ヶ月後、同氏は地元の A 社に再就職し、現在、勤続 13 年目である。同氏は本社にて 1 年間、営業所にて 8 年間、主任として営業を担当した。そして、他事業所にて半年間資材管理を担当後、再び本社勤務となって今日まで約 2 年間、係長として CS を担当している。

職業生活への移行

高校時

氏は前述のとおり地元の公立商業高校に学んだ。同校は男子校で蛮カラ、加えて、地元の商店街で 2 代目、3 代目として商売をしている OB が大勢おり、その中には仕事を終えるとクラブ指導のため学校に駆けつける人もいたような校風であった。

同氏は、同校に進学した当時、卒業後に就職すると漠然と思っていたこと、そして、これは父親の商売の状況も影響していたことを語った。同氏の父親は修理を生業とした時計商であったが、同氏が高校生のころは、クォーツ時計が出てきたことによって昔の時計職人の修理が要らなくなりつつある時期で、加えて、父親は目が悪くなったこともあって、自営を止め、知り合いの店で働くようになっていた。

このような背景で始まった同氏の高校生活は、成績中位の勉学よりも主将を任されたラグ

ビー部での活動が中心であったという。

就職活動

氏が就職を決心するまでの間、同氏の心内では、ラグビーを通じて生じた大学への進学願望と同氏に就職を望む親の意向に沿おうとする意識との葛藤があった。他方、同氏が就職活動した昭和 48 年の就職環境は大抵の場合希望どおりに就職できる状況であり、果たして、同氏は高校 3 年生の夏休み前に B 社に就職内定していた。

同氏は、次のようにして就職先会社を選択した。最初に抱いた銀行への志望は「大変だろう」との父親の助言を受け入れ断念。父親が時計商であったため輸入時計なども扱う会社への就職といった漠然とした想いがあり、取扱う商品数がより多いことから次第に百貨店への志望を固めていった。その際、百貨店の仕事内容についての同氏の理解度はリクルート雑誌を見たといった程度であったが、同校に来た百貨店に勤める先輩の説明を幾つか聞き、同じく百貨店を希望していた友人の会社評に同調するようにして B 社の就職試験を受けることを決めた。この決定については、同氏の親も賛同してくれた。

就職後の職務と生活履歴

初職

氏が B 社を受験した昭和 47 年は国内全体が好景気に沸いており、同社は創業 300 周年と重なったことも手伝い一層の活況を呈しており、多店舗化、大量採用を進める最中であった。このような状況の中で、同氏の入社した年における同社の新規採用数は、その翌年に横浜他に 2 店舗新規オープン予定であったこととも相まって入社式会場となった定員 1,000 人以上の会館が新入社員で満席になるほどであった。入社後、同氏は直ちに本店食品部に配属された。部員数 200 人の同部に同氏と一緒に配属された新入社員数は 20 人であった。

(仕事内容)

B 社の食品部における社員の仕事は概ね売場の管理と運営であった。具体的には、レジの管理および販売の計数管理、売上目標額に応じた商品の売場価格の設定、売上動向に応じた商品の入替え等売場構成の調整、そして人員管理である。なお、売場に立っての販売は、社員も行うこともあったが、ほとんどの場合、社員の約 2 倍に当たる人数の販売員（メーカーの派遣員やマネキン等で構成される）が担当していた。

(社員としての成長過程)

以上のような仕事を一とおりできるようになるには経験が重要な要素であったと、氏は勤務していた当手を振り返る。この意味から学歴は別にして 1 つのサークルを任されるようになったことは重要な経験であった。サークルは売場を構成する単位であり、例えば菓子売場はメーカー 5、60 社からなる和菓子サークル等幾つかのそれから構成されている。高卒者の場合、早い者は入社 10 年目でサークル責任者になっているが、同氏は、売場、通信販売、催事の担当を経て入社 14 年目でサークル責任者となり、主任に昇進した。

この間、仕事上の教育訓練はOJTを中心に行われた。新入社員に対しては、約半年間、部単位で先輩社員が講師となって売場での実地、商品知識、そして礼儀作法の研修も行われたが、主体は会社のマニュアルを基に行われる職場における先輩の指導であった。当時の職場には昔ながらの縦社会が残っており、先輩社員は厳しく後輩を教えた。また、同社では社員が窓口となって優良な特定顧客に掛売りできるお帳場制度が実施されており、この顧客情報は先輩社員から後輩社員へ引継がれるものでもあった。加えて、この制度は担当できるお得意様のレベルによって自分の成長度を知る手がかりともなっていた。このようにして次第に中堅社員となっていく同氏であったが、25歳位までは未だ若手のような立場が続き、30歳を過ぎたころに先輩の立場になったという。

なお、同氏在职当時のB社におけるOFFJTは、研修方式ではなく通信教育方式で実施されていた。同氏は会社選定科目の中から販売士の講座を選択受講した。同講座受講は資格取得に繋がった訳ではなかったが、同氏は先輩から教えられたこと以外の仕事上の基本知識を学ぶことができた。

(同氏の生活ぶり)

6人兄弟の中で一番年下の氏の直ぐ上の姉が東京に通勤していたこともあって、同氏はB社に在職中、途中の2年間を除いて同氏は約2時間かかる実家からの通勤を続けた。同社の就業時間は9時45分から18時15分までであったが、普段、同氏は9時過ぎに出社し、6時半から7時位に退社する毎日であった。また、休日は毎週2日あったが、ラグビーの練習をするか、あるいは疲れているため寝ているかというような過ごし方であった。

2職への移行

平成元年、氏は当時ギフトハウスと呼ばれた小規模の店舗に転勤(自宅からの通勤は楽になった)となり、同時に仕事も役職は主任のまま外商担当に変わった。同氏の仕事は同店における新規顧客の開拓と、沿線都市への新規店舗の出店準備であった。新規店舗のうち1店舗を建築したのが、同氏が現在勤務するA社である。

平成3年、同氏は給料が減収となることが分かっていたにも係らずA社に転職した。この理由について同氏は次のように語った。「同氏の地元で営業のできる人をA社が求めていること」「B社の当時トップが引起したスキャンダルによって気持ちが落ちていたこと」「父親が亡くなったため一人の母親の近くに居ることができたのが兄弟の中で自分であったこと」「転職について相談した上司を通して見えた会社への失望」「A社で予定される仕事への興味」。

2職

氏が転職したA社は、資本金3億8千万円、売上高160億円、社員数160人でその地域の建設会社では売上高、社員数において上位の企業である。初めに所属した営業本部の人数は約50名。現在所属するCS本部は12、3人である。

(仕事内容)

同氏はA社に入社してから約9年間は営業を担当した。具体的には、入札とそのための事

前活動を行う官庁に対する営業と民間に対する営業の両方を担当した。営業の仕事内容について同氏は建設会社と百貨店とでは扱っているものは違うが、折衝、計画、企画等営業の基本は同じと考えている。しかし、官庁に対する営業においては、個人能力ではなく例えば入札できる企業かどうか企業の能力を審査されることがあるため個人の努力が報いられないこともあったという。民間に対する営業において同氏は知り合いや先輩を頼って収集した家を建てる人などの情報を選別しながら仕事を進めた。また、同氏は建築の技術を全く持っていなかったため、この点については上司や若手に教えを乞い、自分自身では宅建資格の勉強をして専門性を高めようと努力した。

その後、半年間資材部に勤務した後、CS 本部に移り今日まで約 2 年間、係長として CS を担当している。CS の仕事内容は、顧客のリフォーム等の要望に沿った受注、業者の手配、そして現場での作業指示である。現在、同氏はこの CS 業務に関連してビルクリーニング技能士の勉強の最中である。学科試験は合格したが、実地試験は不合格であったため同氏は再チャレンジを予定している。

なお、同氏がこのように資格関連の勉強を行うのは、技術を紹介できることが仕事上重要というばかりでなく、同社においては仕事に関係する何らかの資格取得を昇進要件としていることにも関係している。

(同氏の生活ぶり)

現在は約 40 分かけて車通勤している。同社の就業時間は 8 時から 17 時までであるが、CS 本部では 7 時から打合せがあるため、同氏は 6 時前には起床して同時刻に間に合うように出社している。退社時刻は 18 時ころである。

職業に対する想い

自信や誇りを持っている事柄

氏は自身転職したことをハンディキャップと捉えているが、その境遇にあっても辞めずに勤務を継続してきたこと、そして、前職においては一通りのことをやり遂げて辞めたことに自負を持っていることが、同氏の次のような発言から推察された。

「転職組ですけど、今の会社でも 10 年以上やっていますので、ほんとの気持ちは今言ってもあれなんです。それでも 10 年以上頑張ってきたので、どうですかね」「B 社も 18 年いましたし、まだ 2 件で落ち着いているので、ある程度の会社の中がわかって辞めたと思っているので」。

印象的な事柄

氏は、「初職の B 社が当時百貨店・小売業の中で売上が 1 位となったこと」「経営トップの不祥事」「それを乗り越えて店をリニューアルしていったこと」を印象的な事柄として記憶している。これらは、会社と一体となって同氏自身が明るくなったり暗くなったりした出来事である。

職業において求められる能力

氏は百貨店で求められる能力について次のように語った。「接客術、販売術はあって当たり前。取引先の協力を得られるほどの折衝能力、催物実施においては段取りのつけ方、企画力」、そして「興味を持つこと」、さらに「重なった複数の仕事をこなす能力」。また、建設会社の営業においてもこれらの基本的な能力は同じであると同氏は語った。

職業を通じた目標、希望

「定年までのあと10年間を今の会社でこのまま勤めたい」「現在、仕事関係の資格を持っていないが、宅建資格を取得して昇進要件を満たしたい」と氏は望んでいる。

人生における職業の位置づけ

氏の人生における節目は「転職」のときであった。就職して以降の同氏の人生は、時期によって多少の違いはあるがどちらかといえば仕事に重きを置いてきた。自身のこれまでを振り返って、同氏は「中くらい」と全体を評価した。自身をマイナスに評価しているのは「未婚であること」。

その他の特記事項

約束の時刻どおり、インタビューの場所に来られた氏は勤務先の作業服のままであった。インタビューに応じる同氏の物腰の柔らかさや丁寧な口調は、少し油染みの付いた作業服とは実際不釣り合いで、まさに顧客に対する百貨店店員の応答であった。

ケース 28

女性 49 歳

家族形態 夫、子ども 2 人

現在、スーパーマーケットの食品売場青果部のパートリーダー
インタビューの場所 対象者の自宅

現状と今の仕事

7年前から、氏は自宅から自転車で約 10 分の距離にあるスーパーマーケット（以下、A スーパーと記す）に勤務しており、現在、食品売場青果部のパートリーダーである。同スーパーは、ここ数年の業績不振を打開するため最近外資系スーパーマーケットの傘下に入り、現在、社員削減等の経営再建策を実施中である。この影響は同氏の仕事にも及び、以前は社員が行っていた、例えばパソコンによる発注事務等も同氏が担当するようになった。一方、同氏の私生活において、2 人の子供は両者とも成人したものの、夫は意識を回復しないまま長期間入院療養中である。また、インタビューを実施した9月上旬は、住んでいた団地の建て壊しのため転居を迫られていた同氏家族が、ようやく転居を終えたばかりの時期であった。

これまでの主な経歴

氏は昭和 49 年に公立高校商業科を卒業後、新卒として大手証券会社（以下、B 証券と記す）に就職した。同社における入社時から結婚退職するまでの3年半、同氏は一貫して営業推進部に勤務。退職後、同氏はアクセサリ作成の内職を行ったりするものの専ら家事を主としていたが、平成 2 年、長女中学校入学時からパート勤めをするようになった。最初のパートは都市銀行（以下、C 銀行と記す）において集金業務と商品販売を行う営業で、約 1 年半勤めた。その後、昼間は銀行で清掃業務を行った後、夜間は友人の店で接客業務を行うというパターンのパート勤めを3年間、次に、平成 7 年から生命保険会社（以下、D 生命と記す）の保険外交員を2年間行った。そして、平成 9 年から前述の A スーパーに勤務するようになり、現在も継続している。

職業生活への移行

高校卒業後の進路について、勉強好きではなかったものの、氏は、当初短大または専門学校への進学を希望していたが、実家の新居購入と重なったため進学を断念し就職を選択した。当時靴屋を営んでいた両親の同氏の進路に関する想いについて同氏は次のように語った。「母親は一人っ子である同氏に靴職人と結婚して家業を継いでくれることを期待していた。一方、商売の厳しさを知っている父親は同氏に苦勞をさせたくない思いからサラリーマンと結婚することを期待し、同氏に就職を勧めた」。

同氏が就職活動した昭和 49 年の就職環境は、同氏の学んだ商業高校において 8 割の生徒

が希望どおりに就職できる状況であった。同氏は、就職先会社の選択にあたって、職種や業種に特定の希望を持っていなかったため、友人と一緒に受験しようとしてくれたことや、通勤の便利さを考えてB証券の就職試験を受けることを決めた。実際のところ、同氏は同社や証券会社の仕事内容等を全く知らない状況であったが、同氏は同社受験希望者5人の中で学校推薦枠2人のうち1人に入ったため、同社を受験した。

就職後の職務と生活履歴

初職

B証券に入社後、氏は営業推進部に配属された。同部は本社にあって、3課で構成されており部員数は約40人。同氏の同期新入社員のうち男性は株式部に配属され、営業本部や人事部等の本社に配属されたのは女性のみで同氏を含めて8人であった。その学歴をみると、高卒は同氏を含め5人、他3人は短大卒、および大卒であった。

(仕事内容と研修内容)

B証券営業推進部で勤務した3年半の間に同氏が担当した仕事は概ね次のとおりであった。同証券は、当時、入社後の半年間を学歴に係らず新入社員研修期間としていたが、同氏も入社後半年間は研修を受講し、その後に新聞スクラップ、コピー、お茶だし、そして掃除などの雑務をこなした。その後、先輩社員のアシスタントとして支店長会議で使用される新商品の企画資料等の作成を担当した。この仕事は知識のない同氏にとって難しいものではあったが、同氏はいろいろな人の協力を得てやり遂げることができたという。なお、当時、事務機器を用いた業務といえば、ファクシミリを使って全店に資料を伝送するくらいであった。

また、同証券は、同氏の職層に対して自社研修所を使って1泊2日の研修を年2回実施していた。その内容は、実務研修といよりも事業所の異なる社員同士が交流しながら「今後どういう営業をすべきか」とか「社員としてのあり方」といったテーマを一緒に考えるような内容であった。

(同氏の生活ぶり)

仕事に慣れてくると忙しい日が続くようになり、帰宅するのが午前1時、2時ということもあり、加えて早朝出勤するときは2、3時間の睡眠で午前6時には家を出るようなことも経験した。また、当時、同証券の休日は日曜日と隔週の土曜日であったが、休みの日ともなると同氏は友人と連れ立ってサーフィンに出かける等いろいろ遊んだとのことである。

同氏は前述どおり入社後3年半で結婚退職したが、当時、同証券広報推進部の業者担当者が取り持った縁によって同部の出入業者であった夫と結婚したとのことであった。

2職(パート)以降

B証券退職後から長女の中学校入学までの間、同氏は家事を主としながらアクセサリー作成の内職を行った。これは、同氏がリーダーとなって供給材料を各人の作業ペースに応じて作業員5人に配分して指定された期日までに商品を完成させ納品するという内容であった。

2 職

同氏は平成2年からパート勤めを始めた。最初はC銀行における集金業務と商品販売を行う営業。同氏は、担当区域が生まれ育った場所であったことや、仕事内容が人と係る仕事であったためこのパートを面白く感じたという。しかし、同パートの賃金（当時）は扶養範囲内を前提としていたため、より多くの収入を希望していた同氏は約1年半勤務して辞めた。

3 職

その後、昼間は2時間ほど銀行で清掃業務を行った後、夜間は友人の店で接客業務を行うというパターンのパート勤めを3年間行い、次に、平成7年にD生命の保険外交員となった。保険契約に関する月々のノルマを常に達成する同氏にとって保険外交員の仕事は極めて順調であったが、平成9年、同職を辞し、現在も勤務するAスーパーで勤務するようになった。これは、この時期に現在も入院中の夫が発病したため、夫の容態が変化したら直ぐ帰宅できるように自転車通勤できる区域内での勤務を同氏が希望したことが理由であった。

4 職

Aスーパーにおいて、同氏は食品売場青果部のパートリーダーとして勤務している。職場は、同氏のみが40歳台、他は50歳台の7名で構成されている。これらの人々の勤務時間は始業から12時半までの人、17時までの人に分かれており、同氏は18時、あるいは遅くなった場合20時まで勤務することもあるという。

前述のとおり社員削減等による経営再建を進めている同スーパーの雰囲気について、同氏は「店舗全体の雰囲気はよいとはいえないが、自身の職場は連携よくやれている」とみている。また、同スーパーの経営再建策の影響は同氏の仕事内容にも及び、商品ディスプレイを売れ行きに応じて変更するエリア管理、パソコンを用いた発注事務等かつて社員が担当していた業務も同氏は行うようになり、加えて、会議へも出席するようになった。このような現状について、同氏は、大変であるが自身で売場を作れることを楽しく感じながら仕事をできると評価している。しかし、サービス残業が禁止されていること等決められた以上のことをしていけないという同スーパーの方針について、同氏は納得できない状況にある。

職業に対する想い

自信や誇りを持っている事柄

同氏は「どんな仕事にも誇りを持っていたい」と語った。以前同氏が1ヶ月間入院したため同スーパーを休み、その後職場復帰した際に同氏に寄せられた「姿が見えなくてやめたのかと心配していた」、あるいは「1日1回あんなの顔を見ないと、わしゃ元気でないよ」等のお客様の言葉は、青果部に勤めていることに対する同氏の誇りの支えになっている。

印象的な事柄

同氏は、子供の学校における役員、町内会の役員、子供会の役員、そしてボランティア等仕事以外のことにもいろいろ係ってきた。これらの係を通じて、同氏は、「リーダーになれば

責任を負わなければならないが、自分なりに時間の配分ができるようになる。そして、一所懸命にやった役員の人たちとは長く付き合うことができる」と考えるようになった。

また、パートの仕事を長く続けられた理由を同氏は次のように考えている。一つは、パート勤めを始めたころ、同氏は時間配分をつかめなくて子供との交流も難しくなったとき、それを補うために交換日記を始めたこと。同氏は子供からの返事の有無に係らず毎日欠かさず日記を書き続けた。他の一つは、仕事と家庭だけの生活に埋没しないように、チームを作ってビーチボールバレーを始めたこと。連盟に所属する同チームは、日々トレーニングを行い試合に臨んでいる。このことは、パートから帰宅した同氏が直ぐに練習に向うためには、食事準備等のすべきことを片付けなくてはならないため愚痴を言う暇をなくした。また、練習が同氏の気持ちを「明日も頑張ろう」と切り替えるのに役立った。

職業において求められる能力

職業場面に応じて自分なりの工夫をすることの大切さについて同氏は語った。例えば、アクセサリー作りの内職において、余った材料を使って作ったものを納品の際に添えたことによって、それが商品化されたこと。スーパーのパートリーダーとして楽しみながら主婦としての自分のアイデアをもとに売場を作り「斬新でいい」と言われたりしていることなど。

職業を通じた目標、希望

同氏は「人を頼りにするのではなく、人に頼りにされる自分になりたい」と語った。また頼りにされるということについて「何かあったときに、悩んでいることを分かり的確にアドバイスできることである」と同氏は語った。また、現在、同氏は老人介護のボランティアを行っているが、これは同氏が介護福祉士のスーパーバイザーの仕事に将来就くために実務経験を積むことを考えてのことであるという。

人生における職業の位置づけ

同氏は職業について「生きていくための糧であり、自分の能力を発揮できるような職業に出会えば自分を高めることができ、人生観を変えることができる。また、そういうチャンスの中にもある。このような職業にめぐり合えるかどうかは自分の努力次第だと思っている」と語った。また、同氏は、満点を100点とすればこれまでの自分の人生を80点と評価するという。足りない20点はやり残している部分であり、これからこの部分をやることによって、自分が亡くなる時に100点をつけたいと同氏は語った。

その他の特記事項

Aスーパー内で社員に対して発信された経営トップからのメッセージ「会社のためとかいう日本的な考え方が会社をだめにした」について同氏は次のように感想を漏らした。「日本的な考え方っていうけど、あなたも日本人じゃないの」「いけないんですって、会社のために仕事をしたら。そういうのが日本的な考え方だって」。同氏の率直な感想は、労働者のメンタリティーが国毎に異なることを的確に突いているのかも知れない。このことは個人のキ

キャリア形成にも大いに影響する事項と思われる。

ケース 29

男性 49 歳

家族形態 妻、子ども 1 人

現在 カーナビ、カーステレオ等を製造販売する A 株式会社 課長

インタビューの場所 対象者が居住する町にある私鉄駅近くの喫茶店

現状と今の仕事

氏はカーナビ、カーステレオ等を製造販売する A 株式会社（以下 A 社と記す）の CSR 推進室に勤務する課長である。同部門は、社長直轄の部門として平成 15 年に新設されたコンプライアンス推進室が 1 年を経て発展的に改組された部門である。同氏はコンプライアンス推進室においても課長として設立当初からコンプライアンス関連業務を担当してきたが、CSR 推進室においても同業務を引続き担当している。インタビューが行われた 7 月上旬は、同氏の名刺に記された所属と役職が前職のコンプライアンス推進室課長のままというような改組直後であった。

これまでの主な経歴

氏は大学附属高等学校を経て、四年制大学商学部に進学し、1 年留年して昭和 54 年に同大学学部を卒業した。大学卒業後は新卒として A 社に入社し、同社において現在勤続 26 年目である。この間、同氏は一貫して同社の本社管理部門に所属し、平成 15 年にコンプライアンス推進室に転出するまでの約 23 年間で総務部にて勤務してきた。総務部においては当初総務課に配属され庶務業務や取締役会事務局、そして法務業務を経験して入社 17 年目 40 歳のときに総務課長に昇進、2 年後同部法務課長に異動、約 5 年間契約法務を主に担当してきた。その後の経歴は前述現状のとおり。

職業生活への移行

高校卒業時から大学在学中まで

氏は、前述のとおり高校がほぼ全員の生徒が附属の大学に進学する高等学校であったため、必然的に同大学に進学した。同大学進学時における学部の選択と決定は進学する生徒の同高校在学時の成績に関係している。同氏の本来の進学希望学部は文系の中でも政経学部であったが、結果的に商学部に進学することになった。

大学に進学した際、同氏は「とりあえず大学に上がったし、やれやれ、しばらく遊べるかな」と思ったが、卒業後の進路について何も考えなかったという。

学生生活

大学生の頃の氏の生活は勉学よりもスキーの同好会中心で、在学中、同氏が最も親しく付き合ったのもこの同好会の仲間達であった。卒業後、同氏と同好会の仲間達は大学時代の同

好会とは別にスキークラブを設立、同クラブとこの交友関係は現在も継続している。また、同氏はアルバイトも行っていたが、これで得た給料のほとんどをスキーで使い果たしていた。同氏が一番多く行ったアルバイトは家庭教師で、それを1週間に4件こなしたときは給料を月額10万円以上もらっていた。

一方、同氏の勉学状況であるが、同氏は経営事務管理論（マネジメント・インフォメーション・システム）ゼミで学んでいる。同氏が同ゼミを選択した理由は、当時、同氏は大学1年生時に受講したフォートランの講義をきっかけとしてプログラミングに興味を持つようになり、それが経営にどのようにして生かされるかについて学びたいと思ったことであった。

就職活動

氏が就職活動した昭和53年は特に文系学生にとって厳しい就職状況であった。当時は就職協定（企業の新卒者採用内定を10月1日以降とする）があったので就職活動者の内定時期から就職状況を推測できるが、同氏の周辺において理工学部の学生の多くは6月には内定していたが、文系学生は夏休過ぎでまだ半分も内定していない状況であった。同氏自身は留年した翌年であったので卒論を早めに仕上げ、4月になる前から父親等の縁故を頼って就職活動を始めていたが、それでも他の文系学生と同様の状況であった。

果たして、10月、どの企業にも採用内定していなかった同氏は就職部に相談に行った。同部において、同氏はA社の二次募集を知って早速応募。11月、同社を訪問したその日のうちに同氏は筆記と面接の両方の試験を受験するところとなり、3日後に内定の連絡を受けた。「ああ、やっと拾われたな」というのがそのときの同氏の実感であった。

なお、就職先としての人気が高かったことや給料がよさそうとの理由から、同氏は第一志望を保険業界、第二を銀行として当初就職活動を行った。また、職種別採用がなかったこと、入社したら何でもやらされると想像していたことから、同氏は職種について「ゼミで学んだ関係から、経営企画や経理、そして総務等の仕事であれば多少知識も生かせるかな」と思っていた程度で、これにこだわった就職活動をしていない。

就職後の職務と生活履歴

入社から課長昇進前まで

氏は昭和54年に新卒としてA社に入社して以来これまで一貫して管理本部の総務部門で勤務してきた。同社の事務部門は管理本部として括られており総務・人事系、経理系、そして経営企画系によって構成されている。これらの中でも総務、経理の社員は同氏のように異動が比較的少ない。（同社における人事異動について、同氏は「2、3年毎に異動する社員がいたり、異動がない社員がいたりすることから職種よりも個人の特性や属性に基づいた扱いがなされている」と考えている。）

総務部門にあって同氏の仕事は新入社員のころは庶務関係であったが、徐々に法務関係のもの割合が増えていった。また、同氏の退社時刻を見ると入社当初は定時であったが、徐々

に時間外が増えていった。同氏の職務において最初のエポックとなった年は入社5年目の昭和58年であった。この年は大変に忙しく、大きな仕事が二つあった。

一つは、同社会長が叙勲を受けるための手続業務。これは同氏と課長とで関係方面の資料を集め功績調書（申請書類）を作る仕事であった。当時は未だワープロがなかったので、調書作成には業者に和文タイプしてもらうしか方法がなかったため、申込締切日間際の2日間、同氏と課長は印刷所の現場に机を借り、打ちあがってきた和文タイプ原稿を校正し、打直してもらおうという作業を行った。両日の徹夜作業の結果、申込締切日当日の朝、功績調書は完成。2人はそれを印刷所から直接叙勲局に持ち込み、やっと間に合わせることができた。

他の一つは、商法改正（昭和56年）に対応するために行った定款変更。具体的には、同社と子会社の事業目的の照合とそれらを整合させる手続、定款に新しく盛込む事業の表現の検討、および株主総会にかける議案書の作成を行った。特に定款に盛込む事業の表現については1つの言葉を捜すのに2週間以上かけたことは同氏にとって初めての体験であった。

以上のように重要な仕事を担当するようになってきた入社6年目の昭和59年、同氏は結婚した。きっかけは同氏の同期の社員の友人紹介であった。結婚を期に、同氏は実家から独立、転居前の実家近くにあり母親の知合いがオーナーのマンションの1室を賃借して新生活をスタートさせた（現在は7年前に購入した住居に転居している）。また、結婚当時、同氏の妻は政策投資銀行に勤務しており、現在も勤務は継続している。このため、同氏と妻の関係はそれぞれ独立した良きパートナーとして一緒に暮らしているといった雰囲気であり、平成4年に誕生した長女に関しても一緒に子育てをしてきたと同氏は自負している。

同氏の職務において2番目のエポックとなったのは、統合OAシステム構築委員会の委員になった入社15年目の平成6年であった。OA機器に関する同氏の素養は、ワープロの導入初期の頃（昭和61年）に空いたそれを自ら操作して機能を覚えてしまうほどであったが、同委員となって他部門から教えを請われるほどに高まった。これは、同委員となってサーバー、PC、アプリケーションの講習会の受講機会を得たこと、サーバー管理者、OAリーダーとなったこと等によると思われる。なお、同年、喘息を患って療養中であった同氏の父親（74歳）が逝去された。

課長昇進時から現在まで

平成8年、氏は総務課長に昇進した。当時の同社の人事処遇は資格等級制度に基づいて運用されており、職制職位に就く者は資格等級（1～8等級）のうちの8等級以上の社員から選抜されるのが原則であった。同氏においては7等級であったが、上司の本部長の強い推薦を受け、課長に昇進することになったという。同氏がこのような課長登用推薦を受けた理由について、同氏は次のように考えている。「総務の仕事は幅広いうえに他の部門からは見えにくい特色があるので、その全体をみることのできる知識とノウハウを持った人物が同課生え抜きの同氏をおいて他にいなかった。」

課長に昇進した同氏の仕事は課全体のマネジメント主体になったが、同課のマネジメント

においては、所属員 18 人のうち 12 人が受付、電話交換、事務を担当する女性であったため課内で生じる女性間のトラブル防止のためのコンサルティングに特徴が見られた。

平成 10 年、同氏は法務課長に異動となるが、同課では総務課とは違って変わり部下が 2 人となった。同課は契約法務業務と稟議書、決裁申請、議事録等の文書関係業務が担当であるが、同氏はプレイングマネージャーとして契約法務業務に関与した。

平成 15 年 7 月、同氏は社長直轄として新設されたコンプライアンス推進室に異動。これは、同年年頭に打ち出されたコンプライアンスへの取り組みについての社長方針を受けて、同氏が総務部内プロジェクトをつくりコンプライアンス行動規範草案作りを進めたが、それが取締役会で承認されるや、今度は行動規範の全社への展開・浸透の段階となり同氏にその役割が期待されたのであった。平成 16 年に入ると、同社では CSR (コーポレート ソーシャル レスポンシビリティ企業の社会的責任) 推進の機運が高まり、とりあえず総務部内の環境管理グループを組み込む形で、同年 7 月、コンプライアンス推進室が CSR 推進室に発展改組された。同氏も同推進室に異動し今日に至っている。

職業に対する想い

自信や誇りを持っている事柄

これまで暇なときがなく、忙しい仕事をこなしてきたこと、加えて冬になればスキーにも行っていたことから、氏は自身の体力について忙しさにも耐えられると自信を持っていた。「仕事は 1 日の時間の中でかなり大きい部分を占めますから、--- (途中省略) ---結構入り込むほうです。入り込むとそこそこ楽しいこととか見つかるものですね」という同氏の発言は、意識しないまでも仕事中心の生活であったことに対する同氏の誇り、そしてこなしてきたことに対する自信を表していると思われる。しかし、3 年前、同氏は風邪がきっかけとなって 2 週間も初めて寝込んだ。以来、同氏は身体をいたわるようになったとのことである。このことは、寝込んだことをきっかけに身体、すなわち自分自身を振り返るようになり誇りや自信がゆらいでいることを比喻していると思われる。

印象的な事柄

氏はこの 1 年間コンプライアンス推進室課長としてコンプライアンスマインドの社内展開を企画して実施する役割を担ってきた。ところが、同推進室はここへ来て CSR 推進室に発展改組されたため、同氏は何をやればいいのかといった暗中模索の状態に陥っている。コンプライアンスにおいては法令というより所や指針があったが、今度は自らが方針と取り組み方を決めなければならないのである。同氏は、今を自分にとっての転機と位置付け次のように語った。「転機というのか、確かに何かが変わり始めている。特に僕の周辺が変わっているから、僕自身が変わっていないので、ちょっとギャップというか、違和感というか、いまいち乗り切れていない部分があるなと感じています」。

職業において求められる能力

氏は、契約法務において求められる能力として折衝力、そして幅広い知識を取り上げた。知識を身につけるために同氏が行ったことは、まず課題たるそのことをよく知っている人に仕事を通じて聞いたことである。これは、学校には待っていれば知識が降ってくるような環境があったが、社会に出ると待っていたら何も来ないと同氏は想っていたからである。加えて、会社が定めた能力開発規定に基づく等級に応じた必須の通信講座を同氏も受講することで基礎知識を身につけた。法律関係の通信教育について同氏は 30 歳前に終え、ベースになる知識を習得した。その他個々の知識はその都度必要に迫られて勉強した。

また、同氏は「自分は与えられた目標があると楽に動けるが、自分で課題形成したり目標設定したりすることが苦手である」と最近意識し始め、この能力を向上させなければならぬと考えている。これは、同社において目標管理制度を取り入れた新しい処遇制度が導入された結果、同氏の年収が過去ピークであったころから 10% 以上下がったことも影響している。

人生における職業の位置づけ

就職以降これまでの氏の人生において、全ての時間を 100 とすれば仕事は 70~80 くらいを占めてきた。しかし、生活の中ではせいぜい半分程度の比重である。これは、同氏が仕事そのものに楽しいものが見つけられるようにしたいと思ってやってきたことの証でもある。このような職業生活を同氏は次のように評価している。「まあまあ、いい暮らしをしてきたんじゃないかと。そこそこ楽しいこともあったし、楽しんできたし、楽しめるようにしてきたし。悔しいことも幾つかあったけれど、それらは簡単に忘れるぐらいのことで。その時々に応じて仕事の達成感も味わってきたし。よかったですと思います」。

ケース 30

男性 50 歳

家族形態 父、母、妻、子ども 2 人、

現在 自宅に構えた事務所にて社会保険労務士

インタビューの場所 対象者が自宅に構える社労士事務所

現状と今の仕事

現在は自宅に構えた事務所にて社会保険労務士（以下、社労士）として約 30 社の労働・社会保険に関する手続業務を、加えて、そのうちの 10 社の人事・労務に関するコンサルティング業務を請負っている。

これまでの主な経歴

氏は地元の高校、大学を経て昭和 52 年に卒業後、すぐに A 株式会社（以下 A 社と記す）に就職した。同氏は同社を昭和 56 年に退職したが、在職中の 4 年間において、電車関係、ビル工事関係の電気工事業務、そして同社退職直前に内勤の製図業務を担当した。

約 1 年後、同氏は地元の商工会に再就職し、主に中小企業経営者を対象とする税務、労働・社会保険、融資等に関する経営指導員の業務を約 15 年間担当して退職した。

平成 9 年に同商工会を退職した同氏は、同商工会在職中に資格取得した社労士としての仕事を開始。同氏の社労士としての仕事は、当初、税理士事務所の仕事との兼業であったが、社労士の業務が増えてきた平成 12 年 8 月に自宅に事務所を構えて独立開業した。現在 4 年目である。

職業生活への移行

高校卒業時から大学進学時まで

氏は、地元の公立高校普通科を卒業後、四年制大学工学部電気工学科へ学校推薦により進学した。この選択は、同氏が高校時に文科系科目（特に古文・漢文）を苦手としていたことも一因であるが、架線電気工事のアルバイト体験をきっかけとして将来電気工事の仕事（デスクワークのような事務職でなく現場で働ける仕事）に就きたいと志望するようになったことも大きく影響している。なお、同アルバイトは同氏の父親が勤務する A 社における体験であった。

学生生活

氏は大学 3 年の 1 年間大学近くに下宿して通学したが、それ以外は実家から通学を続けた。大学入学後、授業に出席するようになると、同氏には大学内でも友人ができたが、むしろ通学で利用する電車で一緒になる他大学に通う地元の学生と遊ぶことの方が多かった。しかし、彼らは文科系であったため試験期間が異なる等の理由から理工系の同氏とは自然と疎遠にな

っていった。また、学生時代における同氏の遊びや趣味は、サークル等グループによるものではなく、ギターやスキーといった個人で楽しむものであった。なお、大学3年時に同氏が1年間下宿したのは、それまでの成績が芳しくなく留年の可能性すらあったので、勉強に集中するためであった。

4年に進学すると同氏は研究室に入り、卒業研究に取組んだ。卒業研究のテーマは電車の動力制御をスムーズに行うための交流チョッパーの研究。研究室や卒業研究テーマの選択は同氏のそれまで一貫した興味や志望を反映している。

学生時代において同氏のアルバイト経験はどれも長期休暇中である。同氏の印象に残っているアルバイトは、下宿していた3年生の冬休みに実家に帰らないために行ったガソリンスタンドでの店員の仕事、夏休みに行った鉄工所での鉄板切断の仕事である。特にガソリンスタンドでの店員の仕事について、同氏はそれまでに経験したことのない対人業務を行う客商売であったという点でつらかった印象を記憶している。

就職活動

氏の大学時代はやや就職難であったが、果たして同氏が高校時代にアルバイトをしたA社から大学宛てに募集があることを知るや同氏は早速応募し、大学進学の際からの志望どおり「電気工事関係の仕事」を担う同社に就職することが決定した。なお、同社は旧国鉄の下請会社を生き立ちとしており、電車を走らせるための電気関連機具・工事を総合的に請負う上場企業である。

就職後の職務と生活履歴

初職

A社における氏の同期入社は高卒30人、大卒10人の大よそ合計40人であった。大卒は全国からの採用で、卒業した大学からは毎年1人は採用があった。

同社において大卒社員は幹部候補生として位置付けられており、処遇も高卒社員と区分されていた。すなわち、大卒社員は入社後ごく短期間にいろいろな現場経験をした後、スタッフとなって勤続年数順に部長 - 課長 - 係長の役職に就くといった具合である。

同氏は入社後、2週間の研修期間を経て現場に配属された。現場勤務の3年間に、同氏は電車に関連する電気工事業務、新幹線トンネル関連電気工事、そして、ビル関連の電気工事を担当した。この間、同氏は先輩によるOJTを通じて現場におけるいろいろな種類の仕事に関する技術や知識を学んだ。このようにして現場経験を終えた同氏は図面作成担当のスタッフに異動となったが、現場に戻りたいと思っていた。その後暫くして会社から「次はアルゼンチンへの海外赴任」と言われたことが引き金となって同社を退職した。約4年間の勤務であった。

2職への移行

氏は、A社において内勤に配転となった頃から休日等の空いた時間があれば三味線の練習

に没頭するようになり、同社退職時には三味線を弾いて収入を得られる程になっていた。このような状況と将来設計を描かないままに退職したと相まって、退職後約 10 ヶ月、同氏は三味線を弾いて収入を得ながら就職活動を行った。民謡ブームで三味線で生活することはできたが、蓄えはできないと感じていたという。結果的に、退職から 1 年後、県庁に勤務する親戚の紹介により地元の商工会に就職した。商工会に就職するにあたって同氏はそこの仕事内容を理解していた訳でなく、勤務を一生続けるつもりでもなかったという。

2 職

商工会の仕事は前職と全く異なる内容のため、就職した当初、氏は大変苦労したという。しかし、例えば商業簿記など同氏が知らない実務知識や技術については、商工会自身が主催する勉強会や研修会に参加させてもらいながら自身でも勉強して身に付けていった。そのようにして、同氏が商工会の仕事を一人でできるようになるまでには 3 年ほどの期間を要した。なお、同氏が見合いで結婚したのもちょうどこの頃であった。

同氏が就職した商工会は局長 1 名、経営指導員 2 名、そして、補助員等 2 名の 5 人からなる職場であった。同氏は勤務 2 年目に経営指導員となった後、小企業経営者を対象とする税務、労働・社会保険に関する相談業務、そして、融資等金融公庫への融資申込受付業務を平成 9 年に退職するまでの 15 年間担当した。また、平成 2 年頃から 7 年間、役場の職員と 2 人でミニ工業団地開発業務にも取組んだ。退職直前の 3 年間、同氏はこの業務にほとんど傾注し、商工会の会員会社が 4 百数十社あるにもかかわらずこのミニ工業団地にかかわる 4 社にかかりきりであった。このことも商工会退職の要因となった。

また、同氏は商工会において以上のような仕事を行う一方で、就職した 5 年目頃から土業資格をもとにした自営を志向するようになり、幾つかの土業資格の取得のための勉強を始めている。その中で社労士が一番あっていると感じ、2 年間かけて通信教育や通学コースを受講し、在職中の平成 6 年に同氏は社労士資格試験に合格した。

3 職

平成 9 年に同商工会を退職した氏は社労士業務を手がけるようになった。当初、同氏は税理士事務所に場所を借りて同事務所の仕事を手伝いつつ自身で受けた社労士の仕事を行っていたが、社労士の業務が増えてきた平成 12 年 8 月に社労士業務に専念するため自宅に事務所を構えて独立開業した。

開業して 4 年目、同氏は約 30 社の労働・社会保険に関する手続業務を、加えて、そのうちの 10 社の人事・労務に関するコンサルティング業務を請負っている。同氏の就業は月から土曜日までであり、始業は午前 8 時から 9 時の間、終業は午後 9 時ごろというのが普段の日課である。また、他人に任せられないとの思いもあって、同氏は開業のために人を雇っていない。年収は 1,500 万円程度。同氏の固定的な収入の柱は手続業務のための毎月の顧問料であるが、やりたい仕事はコンサルティング業務である。顧問料は月 3 万円程度で単価を上げたいが、30 社しかなくお客さんを失いたくないので上げられない。同氏は社労士業務将来

の安定のためには退職金関係コンサルティングを請負うことが不可欠とみており、現在、同業務を柱にすべく努力中である。

なお、工作上必要な知識について、同氏は本で勉強した自分なりの解釈を勉強会で議論することによって習得している。社労士の勉強会が年間最大 15 回程度開催されるが、同氏は自分にとって価値があると思うものに出ている。

職業に対する想い

・仕事の嗜好

氏は、A社に勤務していたときに担当した仕事について想いを次のように語った。「電気工事においては、電車関連のそれは仕事を始めたら自分のペースで最後までやれる。しかし、ビル工事関連のそれは仕事に追いまくらわれるばかりで自分のペースで一つずつ片付いていかない。そこでストレスがたまってしまった。そして、内勤。図面書きは非常に嫌なんです。また、商工会に勤務しながら自営を志向するようになった同氏が取得した資格が社労士であったことについて、同氏は次のように語った。「社労士は自分に合っている。その仕事は一つずつその場その場で片付いていく。人に携わる問題を扱うからマルかバツの世界ではない。自分で働いて、苦労してそれなりの結果が得られる」。

・これまでの経験と社労士の仕事の関係

過去の経験は現在の社労士の仕事に全部役立っていると氏は考えている。理工系で学んだので数字に対する違和感がなく、社労士において数字を相当に用いる給料シミュレーションに役立っている。A社での経験によって現場を分かっており、顧客が工事屋の場合、現場や職人の話ができる。また、商工会での経験によって経営者について自分なりに理解し、彼らが抱える問題もある程度関与できたことは社労士の仕事に役立っている。さらに、法律の現場への適用という観点から、同氏は自身について職業経験のない社労士にないものを有すると自覚している。

一方、一人で行う社労士とサラリーマンの違いについて同氏は次のように語った。「独立して仕事をするというのは、仕事を見つけて、受注して、納品して、請求して、集金して初めてお金になるんです。それが大きな違いです」「開業した始めの頃は請求する金額の妥当性が分からず、30分で書ける1枚の書類を作るのに3万円請求することを悩んだ。しかし、これを一般の人が法的根拠も含めて納得して書くには調べたりする時間を含めて1日必要だという違いに気づき、自信をもって行えるようになった」。

・職業において求められる能力

職業において求められる能力について氏は次のように語った。「A社においては、体力、技術力、そして、学力・電気の知識。商工会においては、人と上手に付き合える能力、プレーンとなる人脈を多く持っていること。現在の社労士においては、特に判例に関する法律知識、そして、やはりプレーン」。同氏は税理士、弁護士、行政書士らと遊び等の交流機会を多

く持ったという。これらの人々間では質問に対して見返りを求めることなく誠心誠意情報提供が行われている。これが同氏の人脈へと繋がっている。

・職業を通じた目標、希望

現在、氏は例えば賃金、就業規則の作成等社労士の仕事に自信と責任、そして誇りを持って取り組んでいる。すでに手がけた就業規則・賃金・退職金制度は、今あるもので一番良いものを作ったと思っている。今後、このような仕事を通じて、何かあればまず自分に相談してもらえよう顧客との関係をもてるようになることを同氏は理想としている。

・人生における職業の位置づけ

氏の人生における職業の位置づけは、これまで状況に応じて随分変化してきたが、現在は充実している。社労士となるという目標を決めるまで氏には悶々とした時期もあった。例えばミニ工業団地のことを続けずに、試験に合格したら直ぐ社労士を始めていたら手続業務の件数がもう少し増えていたかも知れないと過去を振り返ることもある。しかし、同氏は過去の職業経験について総じて良かったと評価している。仕事と家庭に関しては、妻は仕事に対しては協力的で、会社を辞めるときも何も言わなかった。結婚してからも両親とずっと同居しており、現在も二世帯住宅に住む。

ケース 31

男性 50 歳

家族形態 妻、子ども 2 人

現在 統括国税調査官（課長）として国税局に勤務

インタビューの場所 対象者が普段の通勤に利用する乗換駅近接のホテルの喫茶コーナー

現状と今の仕事

氏は統括国税調査官（課長）として国税局に勤務、総務業務を担当。インタビューが行われた 7 月上旬において、氏は、人事異動により近々転勤（単身赴任）することが決まっており、その準備のために極めて多忙であった。

これまでの主な経歴

氏は生育地にある県下でも有数の進学校たる公立高校普通科（男子校）を卒業、1 浪（予備校通学）後、四年制大学法学部へ進学した。大学卒業後は、4 年在学中に合格した国税専門官として国税局に勤務。40 歳で調査官（課長）に昇進したが、50 歳となった現在に至る勤続 26 年の間に 9 回の転勤を経験した。

職業生活への移行

高校卒業時から大学進学時まで

氏は、前述のとおり県下有数の進学校を卒業した。同校は、伝統校ではあるけれど県内で初めて制服を廃止するといった自由な校風を有する男子校であった。また、ほとんど全生徒が大学に進学していたが、大学受験のためにクラス編成を行うような高校ではなかった。

同氏は現役の時国立大学一期校（当時）経済学部への進学を希望していたが、1 年間の浪人生活の後、四年制大学法学部に進学した。同大学に進学した理由について同氏は次のように語った。「文科系学部受験でも苦手の理系科目が入試に課せられる国立大学に合格できなかったことも理由の一つである。そのことより、むしろ、合格した複数の私立大学の中で（その）大学が父親の母校であったことが影響している」。

なお、大学に進学した際、同氏は卒業後の進路について公務員としての就職をイメージしていた。このことについても、同氏は当時父親が官庁（当時）に勤務する公務員であったことが一因と考えている。

学生生活

氏は予備校、大学とも実家から通学を続けた。そのためか、大学進学後においても同氏の交友関係は高校までのそれが継続している。なお、同氏の友人はほとんどが幼稚園、小学校時からの幼馴染で、しかも長男が多い。現在、彼らの職業は地元で自営業者や開業医、あるいは教員になっている者が多い。また、サラリーマンになっていても、ほとんどの者は都市

部の企業に就職しており、地元から通勤している。地元や都市部以外の企業に就職した場合であっても、就職して何年か経った後、結局のところ地元に戻ってきている者が多い。いずれにせよ、就職の際に全国各地に散らばった者も正月には必ず帰省してくるのが同氏の地元では当たり前のことである。

大学の学費については、同氏1年時は親が支払ってくれたが、2年以降は同氏自身のアルバイトで得た給与をそれに当てた。同氏が経験したアルバイトの種類は次のとおりである。夏休等の長期休暇中においては、友人と3人で牛乳箱の製造(1年時)、ドライアイス配送のトラック運転助手(2年時～)。普段においては、実家近所の小学生から高校生までを対象とした家庭教師を週1、2日。

就職活動

氏の大学生生活において大きなウェイトを占めていたのは、司法試験や公務員試験のための受験勉強であった。選抜試験に合格しなかったことにもよるが、大学内の司法試験受験のための団体やゼミに所属せず同氏は一人で受験勉強をした。3年生のときに司法試験を受験したが、受からなかった。

同氏は4年生に進級し、国家公務員甲種(当時)試験と国税専門官試験を受験した。同氏は国税専門官試験に合格したが、同試験は偶然友人に誘われて受験したもので、受験に当たって同専門官の仕事内容を理解していたわけではなかった。民間企業にも内定していたが、同氏は卒業後同専門官としての道を歩むことを選択し、現在に至っている。選択理由は、父親が官庁に勤務していたこと、親戚にも公務員の人があったこと、そして、公務員は民間企業と異なり「潰れることがないという安心感があるので、一生懸命働ける」と同氏が考えたことにあった。

就職後の職務と生活履歴

税務調査官のとき

国税局は全国11箇所の管轄区域に分かれており、同氏が入局した年はこれらのうち4区域で採用があった。同氏の同期入局者は400人、そのうち同氏が配属された地域の国税局における同期調査官は150人であった。

入局後、同氏は他の新入職員全員と一緒に約4ヶ月の基礎研修を受講した後、初任地にて実務に就いた。この研修の他、上席国税調査官に昇進するまでの間に同氏は6ヶ月間におよぶ集中研修を受講している。同研修は入局3年を経た職員全員が研修所に集合して業務の理論的側面を深めることを目的として実施された。

なお、国税局における業務内容は次の3つに大別される。法人および個人の税金や債務に係わる調査業務、職員の研修に係わる税務大学業務、そして、それら以外の業務を担当する総務業務である。また、国税専門官の職位は、税務事務官、税務調査官(一般) 上席国税調査官(係長) 統括国税調査官(課長)で構成されている。

入局後当初の 10 年間、同氏は税務調査官として調査業務を担当した。この間、同氏は 2 回転勤しているが、どの事業所においても法人を対象とする物品税、印紙税等の間接税に関する税務調査を担当した。

同氏は 31 歳で結婚するまでは実家から通勤していた。結婚後に初めて独立して実家近くに住居を構えた。なお、その後、平成 10 年から 3 年の間、家庭の事情のため一時的に実家に戻り両親と二世帯で同居生活したことがある。子どもの誕生は遅く、42 歳のときに長男が、46 歳のときに次男が誕生した。管理職（課長）については、土日は家庭にいれるようになった。

上席国税調査官昇進時から統括国税調査官としての現在まで

氏は入局 11 年目に上席国税調査官に昇進した。昇進と同時に同氏は 3 回目の転勤となり、総務課に配転となった。総務課における同氏の主な担当は折衝等対外業務であった。その 2 年後、それまでのような税務署間ではなく国税局へ異動する 4 回目の転勤があった。その後の転勤も配転もない 5 年間はある意味落ち着いた時期ではあったが、同氏の職業生活を振り返ると工作上最もハードな時期に当たる。「この間、ずーっと緊張して仕事に取り組んできた。」と同氏は語る。9 時 5 時の仕事ではなく、特に 7 月は忙しく何日も徹夜が続くこともあったが、「仕事はやりがいがあり、この仕事を選んでよかった」と感じていたという。そして、同氏 40 歳、入局 17 年目のとき、同氏は統括国税調査官（課長）に昇進した。同職位に昇進した時からこれまでの 10 年間に転勤が 5 回あったが、担当業務は一貫して総務であった。

職業に対する想い

自信や誇りを持っている事柄

仕事が山ほどあっても前向きに取り組んできたこと。仕事での立場上せざるを得なかったことにもよるが、必死になって勉強してきたこと。これが氏の誇りである。

職場において、普段の昼間の時間帯は電話への対応等に忙殺される状況であり、まとまった仕事は夜、あるいは休日に行ってきた。そして、これまでには何日も徹夜しなければならないほどハードな仕事もあったが、それらも何とかやり遂げてきた。そんなときの達成感は格別であった。このような状態を氏は仕事へのやりがいと感じている。総務のときのハードな経験が、現在役立っていると氏は総括している。

印象的な事柄

氏 30 歳、昭和 59 年頃、職場でワープロが使われ始めた。同氏は仕事上文書作成の機会が多かったため、ワープロの登場はそれ以前と比較にならないほど仕事効率を向上させたのを記憶している。しかし、当時、それは職場にまだ数台しかあったため順番を待って使うような状況であった。加えて、職場ではその使用法についての説明会や練習機会もなかったため、同氏はワープロを自身で購入、使い方を練習して、仕事で使えるようにした。暫くすると、

職場では全ての文書が当たり前のようにワープロで作成されるようになった。以上の体験から「ワープロの登場のように全部の仕事を変化させることが技術革新である」と氏は考えるようになった。

職業において求められる能力

税務調査業務において求められる能力について尋ねると、氏は「気づかないと仕事にならない」と回答した。同業務においては、様々な業種の特徴等の知識・情報を時代に遅れることなく分かっていることが必要である。そのためには普段からいろいろなことに興味関心を持ってアンテナをめぐらして置くことが大切である。

同氏が入局したばかりの頃は、いろんなことに首を突っ込みまさに職人のように仕事のことなら何でも分かっている先輩職員がおり、これらの人たちが若い職員の面倒をみてくれた。若い職員も先輩の姿をみて必要なことを身に着けていき、一人前の税務調査官となっていた。このような職員の育成風土が現状では徐々に見られなくなってきたと同氏は考えている。

職業を通じた目標、希望

税務調査業務は、公務員であるというだけからでなく仕事の性質上、いろいろな面で行動が制限されている。例えば、退職された先輩との付き合い方にも気を付けないといけない。「昔はこうだった」ということは通用しない。倫理観を徹底していくことは氏において職業を通じた目標の一つでもある。

また、同氏は近い将来税務大学にポジションを得て研修に係わる仕事に就くことを希望している。これは、最近入局してくる若い職員に対して「頭はよいが、もの足りなさ」を同氏が感じていることに起因している。

人生における職業の位置づけ

氏において就職してからの人生は仕事と家庭に大別できるが、これまで同氏はどちらかといえば仕事に重きを置いてきた。31歳で結婚し、現在、2人の子供に恵まれているが長男誕生は仕事がある程度落ち着いてきた42歳のときであった。これを後悔している訳ではないが、妻に寂しい想いをさせたことを反省している。これからは、仕事と家庭のバランスを保てるようにしていきたい。

ケース 32

女性 49 歳

家族形態 夫、子ども 2 人

現在 銀行施設レストランの洗い場でパート

インタビューの場所 対象者自宅近くにあるファミリーレストラン

現状と今の仕事

氏は現在 49 歳。同氏は結婚以来これまでの 19 年間、自身の家族と両親の二世帯で暮らす実家にて主婦として家事と子育て、そして、7 年前に父親が倒れてからはその介護も行ってきた。その父親が 2 年前に亡くなってから、同氏は子供達が学校に行っている時間帯に銀行施設レストランの洗い場でパート勤めをするようになり、現在も続けている。

これまでの主な経歴

氏は地元の私立女子高校普通科を昭和 49 年に卒業、同年四年制大学文学部に進学した。昭和 53 年に大学卒業後、同氏は従業員数約 50 名の服飾メーカー兼問屋にて約 2 年間勤務した（以降、同氏は正社員として就職していない）。同社を退職した昭和 55 年、同氏は在職中から大学の恩師に入学を勧められていた大学院へ進学したが、3 年間在学して中途退学した。

同氏のアルバイト経験は次のとおり。一つは、ホテルのレストランにおいて、最初は高校 3 年から大学在学中の 5 年間、次は大学院進学時から 30 歳で結婚するまでの 5 年間の 2 回行ったウェイトレスである。他の一つは、大学院在学中のスナックでのアルバイトである。結婚後 17 年間、同氏は主婦に専念していたが、前述通り 2 年前から銀行施設レストランの洗い場でパート勤務するようになり、これを現在も継続している。

職業生活への移行

高校卒業後の進路について、氏は、小学生のときから続けていた演劇関係の職業に就くか、動物園の飼育係になることを希望していた。結果的に、同氏は「普通に大学を出て、教師にでもなって欲しい」という両親の希望通りに四年制大学文学部国文科へ進学した。

学校以外において、高校 3 年時に大学進学が決して以降大学卒業までの間、同氏は当時母親が勤務していたホテルのレストランでウェイトレスのアルバイトするようになった。同氏がここでアルバイトするようになったのは、同氏の高校においてアルバイトは禁止されていたものの、アルバイトをしたいという同氏の強い希望に押された母親が、自分の目が届く場所であればよいと考えたことがきっかけである。

大学において、同氏は入学時点で目指していた教職課程を選択し教育実習も体験した。しかし、就職の段になって、同氏は非常に難しい教職試験に合格するのは自分には無理と考え、教職への進路を断念した。その他の進路について、同氏は父親の縁故を頼って就職活動する、

あるいは親が容認する就職しないという選択肢もあったが、自身で就職先を決めることに意義があると考え希望する営業職に就くべく自身で就職活動を行った。しかし、当時の四年制大学女子における就職環境は、同氏が希望していた服飾関係の中小企業にも応募が殺到するような状況で、同氏は試験さえ受けられず、企業選択の余地などなかった。同氏が希望した会社の応募状況はことごとく同様で、同氏は大きな挫折感を味わった。

そこで、同氏は就職活動対象の会社を零細企業まで広げ、実際、訪問を開始した。果たして、同氏は、最初に訪ねた服飾メーカー兼問屋に就職した。

就職後の職務と生活履歴

初職

氏が就職した服飾メーカー兼問屋の従業員は約 50 名で、同氏を除く他の全員が中途入社
のベテランであった。同社は新卒者を募集していなかったが、同氏は経理兼人事課長と面談
の機会を得ることができ、結果、まずアルバイトとして採用された。この理由は、同氏が大
学在学中であったこと、および入社後担当する経理事務を未経験だったことである。

同社に勤務した 2 年数ヶ月の間、同氏は経理事務を担当した。入社当初の同氏の仕事は簿
記の勉強をしながらでもこなせるほどであったが、そのうちに与えられたことをこなすので
さえ手一杯の状況になった。このような状況になっても、課長は、暇を見つけては、同氏に
簿記のテキストを使って経理実務を教えてくれた。しかし、相変わらず、同氏は仕事を仕上
げるために他人の倍の時間を要していたので、夜遅くになってようやくその日の仕事を終え
る状況が続いた。また、同氏が所属した部署は経理業務と秘書業務の両方を担っていたため、
一時期、同氏が先輩女性社員から秘書業務を引継いだことがあった。その際、同氏はその先
輩社員から同氏自身に関係ないことまで吹聴されて嫌な想いをしたという。このような状況
で、同氏は大学時代の恩師から母校に新設される大学院への入学を勧誘されたのであった。

大学院への進学

服飾メーカー兼問屋を退職後、氏は希望どおりに在職中から入学の誘いを受けていた大学
院に進学した。しかし、同氏は同大学院に 3 年間在籍したが、結果的に中途退学した。研究
室内の人間関係に嫌気をさしたことが退学の理由であったと同氏は語った。

大学院に進学後、同氏は高校 3 年生から大学卒業までの 5 年間勤めたホテルのレストラン
で再びアルバイトを始めた。週のうち 3 日から 4 日間、前回と同様、主として朝食時間帯に
ウェイトレスの仕事をして、終えたら学校に行くという生活が同氏の日課となった。ここは
アルバイト仲間や上司に恵まれたため、同氏にとっては居心地がよい場所であった。このア
ルバイトは同氏が 30 歳で結婚するまで 5 年間続いた。なお、大学院在籍中、同氏は午後
7 時から 12 時ころまでスナックでもアルバイトをした。

大学院を中途退学した 27 歳のころの同氏は、意気込んで就職したけれど 3 年も続かずに
退職、そして大学院も中退、と挫折体験が続き、進路について八方塞の状態にあった。いず

れにせよ最初の就職の際に同氏が味わった職場における嫌な人間関係は、会社は同氏にとって合わない場所であると思わせるのには十分であった。

結婚、その後

アルバイト先のスナックにおいて、同氏は、そこにいつも上司と一緒に来るお客であった夫と知り合い、30歳のときに結婚した。

ケース 33

男性 50 歳

家族形態 妻、子ども 2 人

現在 公務員

インタビューの場所 職場

現状と今の仕事

公務員。

これまでの主な経歴

工業高校卒業後、役場に公務員として就職する。

初職への移行

都市計画のしごとのある別の役場に勤めたかったが、親や周りの関係者に押し切られ、現在の役場に就職する。

仕事内容

役場に勤務。13 年間、建設課で測量や用地の買収など道路に関するすべてのしごとをする。30 歳を過ぎて総務に異動し給与と庁舎の管理、選挙管理委員会の書記を 8 年担当する。係長として再度建設課に戻り橋梁を 8 年担当。その後税務課に異動し徴収係長になる。その後課長補佐に昇進。

自分にとっての転機とは何か

31 歳のとき選挙管理委員会で事務局を 1 人で担当し大変だった。併任辞令なので普段の仕事と並行して選管のしごとをおこなったのは印象に残っている。

建設課から総務課に異動したときと、建設課から税務課に異動したときが転機。

教育・訓練経験・自己啓発など重要な活動

前任者の補充で異動するのでアドバイスしてくれる人がいなかった。総務に異動したときは公職選挙法の本を読んで勉強した。税務課に異動したときは税法は難しいので税務署と県に聞いて乗り切った。

子どもの学校の PTA のしごとにもたずさわり、副会長、会長も経験。土日や夏休みなどの休みの日は子どものスポーツの試合を見に行く。

高卒後 10 年くらい青年団に入り演劇をやっていた。26、7 歳のときに地区の青年団の会長も務める。多いときは週 1 で青年の家に泊まったりしていた。その後青年団が衰退し、や

める。

スキーは18歳のときから30年続けている。税務課が1、2月忙しく、ここ2年ほどはやっていない。

自分にとっての仕事の位置づけ

達成感はある。

これまでの職業経歴を振り返っての評価

並。公務員は上の人に仕えないと昇進できないがそういう気は全然ない。

職場の人数が少なく上司もいないので30歳を過ぎた頃から課長のように決断をしてきた。やりがいがあるというより決断しなくてはいけなかった。

将来・今後の展望

来年度3町3村が合併するので何課に配属になるか分からない。

定年後は農作業をする。

健康について(本人と家族)

平成8年ごろヘルニアになる。

ケース 34

男性 50 歳

現在 商社勤務

インタビューの場所 研究所の会議室

現状と今の仕事

商社の営業所長。

これまでの主な経歴

高卒後、スポーツの間屋に就職。スポーツ店を営業でまわる。5 年後本社に転勤。そこでは小売店のほか、大きな量販店のバイヤーとの取引も担当する。30 歳で辞職し、3 か月後に鉱産物を販売する商社に就職。8 年間勤務し、その後 4 年間ほかの地域に転勤、1997 年から戻って勤務。

初職への移行

高校に入るときに卒業したら就職しようと考えていた。自分の希望(レジャー関係の仕事)を進路指導の先生に述べて、先生に希望に添った企業を選んでもらったつもりだったが、先生が間違っただけで、自分の希望とは異なるスポーツ関係の仕事の試験を受けに行ってしまった。面接の時に間違っただけに気付いたが、子供ながら雰囲気の内定できたと感じたのでそのまま就職した。

仕事内容

初職 スポーツの間屋

当初は経理に配属になるが、前任者が事情で転勤しないことになり、はじめの仕事は小売のスポーツ店を営業でまわるものだった。次に社内の商品の整理などをする営業補助、倉庫管理といった業務を含めた営業の仕事をした。5 年ほど仕事の基礎を教わり、本社に転勤。そこでは小売店のほか、大きな量販店のバイヤーとの取引も担当し、部下ができる。仕事内容があまりかわらず、刺激を感じなくなったので、27 歳ごろ辞職願いを出したが引き留められた。お礼奉公のつもりで 30 歳まで勤めて仕事を辞めた。

2 職 鉱産物を販売する商社。

大手の企業に原料を納める仕事。8 年営業のしごとをする。ここで課長となる。その後 4 年間ほかの地域に転勤し業務、企画開発をおこなう。ここでは部長代理を務める。1997 年から戻って営業をし、所長代理を経て現在は営業所長をしている。しばしば原料探しと展示会で東南アジアに出張した。入社したときから部下がいた。現在は 4 人の部下がいる。

自分にとっての転機とは何か

仕事を辞めるときにとっても悩んだ。辞めるときは、何をやりたいかあまり決まっていなかったが、前職での仕事に海外との取引をする会社と接する機会があり、何となく憧れていた、前職で知り合った人から商社から誘われたので、業務内容は詳しく分からなかったがやる気はあったので思い切って飛び込んだ。

また前職の会社は企業規模が小さいせいか、分かり合えるところがあったが、現在の仕事は企業規模が大きいせいか分かり合えない部分も感じた。

転機に対する家族・周囲の反応

初職を辞める時には次の仕事を見つけておらず、失業期間があったが、妻が理解してくれた。

教育・訓練経験・自己啓発など重要な活動

もともと簿記は持っていた。3か月間の失業中にバスの免許をとった。

影響を受けた人・本など

スポーツ問屋の社長。スポーツ問屋ではコストを重視するだけではなく、客との対話も重視した。社長は大学から先は答えがないことを探すものであり、自分のところの会社は「社会大学」だと言っていた。はじめの会社で物事をどう考えていくかと学んだと思う。最初に基礎を教えてもらったおかげで、自分の意志というものはっきり持てるようになった。

いまの会社に転職するとき声をかけてくれた方も、仕事がすばらしく参考にさせてもらっている。

将来・今後の展望

いまお金があり、会社も辞めさせてくれるなら早く辞めたい。

リタイア後はあまり疲れるしごとはしたくないと思っている。55歳定年だが、定年後の仕事はあまり考えていない。

健康について（本人と家族）

特に問題はない。

その他の特記事項

出張の際の仕事に合間に寄って頂いたので、十分に時間がとれなかった。

ケース 35

男性 51 歳

家族形態 妻、子ども 1 人

現在 写真館（自営）

これまでの主な経歴

工業高校卒業後、調理見習い（アルバイト）となる。その後写真の専門学校へ行き、30 歳（1984）の 9 月末までスタジオに勤め、その後独立して写真スタジオを開く。1979 年 2 月に結婚。現在に至る。

初職への移行

当時は、学校卒業してすぐに就職することが当たり前というわけではなく、また、一旦どこに勤めてもいくらでも取り返せるという雰囲気だった。高校には 1 人当たり 10 社くらいの募集があったが、人柄を尊敬していた社長についていくという気持ちで、その商店が持つレストランのアルバイトをすることにした。

仕事内容

初職 調理見習い

高校時代のアルバイト先の食堂の社長を尊敬してアルバイトとして入り、調理見習いとなる。社長に商売人になれと言われたが、世間話もできず人に話を合やすこともできないので、商売人としてやっていけるかどうかと思い始め、3 年間アルバイトとして働いた貯金を元手に写真の専門学校へ行くことにした。貯金はアルバイトの間に社長がしてくれていた。

専門学校に行きながら日曜日はその商店のドライブインでアルバイトをし、平日は 4 時から 8 時まで DP 屋でアルバイトをした。

2 職 カメラ屋で勤務

カメラ屋で勤務するが奥さんと折り合いが悪かったので、先の見通しなく 3 ヶ月でやめる。

3 職 スタジオに勤務

専門学校の就職相談窓口の紹介で、写真スタジオに勤務する。学校の卒業アルバムの作成が基本的な仕事で、あとは修学旅行について行って撮影したり、個人写真の撮影に出かけた。またやめる 3 年くらい前に新入社員が入ってきたので、その人に仕事を教えた。8 年間勤めたが社長と衝突することが多かった。勤め先はお金をもうけることが目的だったが、自分としてはお金も必要だが、写真を撮ることを目標にしていきたいと思っていたので、価値観の違いが大きく、8 年でやめた。

4 職 独立して写真館

学校や幼稚園の卒業式やアルバムの撮影、建築写真などいろいろ撮る。15 年前から姉の縁

で、オペラ協会運営のオペラの写真を撮っている。公演のときに写真展をするためにゲネプロを撮り、白黒写真のときは徹夜して現像していた。一番多い仕事はスタジオの記念写真である。

影響を受けた人

高校時代アルバイトをした食堂の社長。人柄に惹きつけられこの人と一緒に働きたいと思い、高校卒業後そのまま就職せず、アルバイトを継続した。言うことややること1つ1つにねらいや理由付けをし、その結果が言うとおりだったかどうかについても考える人だった。今でもこのような物の考え方をしようと心がけている。

これまでの職業経歴を振り返っての評価

50点。いろいろな選択肢があったと思うが、後悔はしていない。

ケース 36

女性 51 歳

家族形態 子ども 3 人

現在 公立小学校教員

インタビューの場所 自宅近くのホテルの喫茶店

現状と今の仕事

公立小学校の教員。

これまでの主な経歴

高校卒業時には両親の経済的状況が厳しく、進学は難しかった。姉夫婦が学費を負担してくれると言ってくれたので、姉夫婦の家に住ませてもらいながら短大を卒業し、公立小学校に就職した。在学中は一生懸命採用試験のために勉強した。勤務しながら教員の 1 級免許を取るため夜学に通うが、仕事が忙しく続けられなくなった。この 1 校目のときに結婚、出産をする。子どもが生まれた時は、姉や母、姑が子どもを預かるなど様々なサポートをしてくれた。7 年後に小学校を異動し、その 3 年後くらいに再び免許をとるため、1、2 年間スクーリングと通信教育を始める。7 年後に 3 校目の小学校に異動。36 歳のとき家を購入するため、異なる県の教員の交換試験を受け直す。2 校を経て現校に勤務。

初職への移行

就職して姉夫婦の家を出なくては行けないと思っており、就職の際には住居の確保も重要だった。姉が教員をしていたため、市の教員寮が便利な場所にあることを知っており、市の寮に入りたいと考えて市の教員採用試験を受けた。

仕事内容

- ・公立小学校の教員

2 校目のとき学級指導で性教育を勉強し、市の研究員にもなった。国語もまた国語教育連盟に先輩の助手として参加し勉強させてもらった。3 校目の学校で生きがい、やりがいを見つけ楽しくなってくる。交換試験を受けて移った県で最初に勤務した小学校は 7 年いた。勤務して 4 年目から 3 年間障害児学級を受け持った。別の小学校に異動し、学級崩壊を経験した。後半 3 年間組合活動をし、女性部の部長も務める。2004 年度から現校に勤務。

自分にとっての転機とは何か

- ・ 2 校目の学校

学級崩壊を経験したこと。学級崩壊したクラスの建て直しのために入ったが、子供と心を

通じ合えずとても苦労した。

転機に対する家族・周囲の反応

黙って見守ってくれた。

教育・訓練経験・自己啓発など重要な活動

地域社会の活動をしている女性、県や全国の女性の集会に出かけ勉強した。

影響を受けた人・本など

2校目の同僚に恵まれ、国語と図工はいい先輩に出会った。勉強の仕方や、講座、研究授業を見に行ったりすることを教えてくれた。性教育と国語はずっと個人的にも勉強している。

自分にとっての仕事の位置づけ

人生の中では仕事がほとんどで、あとは子どもと趣味の着付けである。仕事ではいろんな人との出会い、教え、刺激があり、自分自身を磨いてくれた。着付けは姑が着物をたびたび買ってくれたことがきっかけで好きになった。

これまでの職業経歴を振り返っての評価

教員を続けたことで、いろんな人や子どもがいて、一面では絶対はかれない多面性があるということを経験し、続けてきてよかったと思う。

一生懸命やったが全体としては満足していない。

将来・今後の展望

校長には教頭試験を薦められたが、今年を受からなかった。自分としては教頭になろうという強い気持ちはなく、55歳で退職しようと考えている。もし話をするような場があったら若いお母さんを相手に話したい。日舞を習っており、着物が好きで着付けの免許をもっているので、結婚式場などで留め袖の着付けなどを手伝いたい。

健康について（本人と家族）

32歳で次女を難産で産んですぐ病気になった。

ケース 37

男性 50 歳

家族形態 母、妻、子ども 1 人

現在 官庁に勤務 金融機関の検査

インタビューの場所 ホテルの喫茶店

現状と今の仕事

官庁で金融機関の検査をおこなっている。

これまでの主な経歴

大卒後、地域の金融機関に就職。最初は預金係、2 年目から集金・勧誘といった渉外係、転勤後に融資関係のしごとに就いた。平成 6 年に勤め先の金融機関が事実上救済合併され、阪神大震災の影響も受けて平成 14 年に破綻する。破綻発表時に任された事務局において自分を評価してくれた人にアドバイスを受け、その後、官庁に就職。

初職への移行

長男なので、家から離れなくて済むような仕事を探していた。公務員試験は失敗したが、地元の金融機関は比較的安定した業種だと思い、地域の金融機関を選んだ。

仕事内容

初職 金融機関

最初は預金係、2 年目から集金・勧誘といった渉外係、転勤後に融資関係の仕事、不良債権処理専門の部署にも配属される。破綻する 1 年前には本部の総合企画で専門的な検査対応をおこなう。破綻を発表したときには破綻処理する際の事務局を任される。

2 職 公務員

地方銀行から信用組合までの金融機関の検査業務をおこなう。金融機関がどのような業務をどのようにしているかを調査する。コンプライアンス（法令等遵守）とリスク管理などの仕事をする。とくに預金等取扱金融機関を専門とする。年間 1 人あたり 5 件程度、5 - 6 人でチームを組んで金融機関を回る。検査した結果を持ち帰って報告し、それを見て上層部が判断する。

自分にとっての転機とは何か

- ・ 渉外から融資の仕事に移ったこと。
- ・ 勤めていた金融機関が倒産したこと。

教育・訓練経験・自己啓発など重要な活動

通信講座や検定試験を会社からすすめられる範囲でとった。費用は会社持ち。財務関係の勉強が実務に役立った。

影響を受けた人・本など

最初の直属の上司。精神的サポートはもちろん、仕事も遊びも教えてくれた。就職したばかりの時は配属された支店の支店長は大変厳しかったため、何度となく辞めたいと思ったが、励まされて何とか続けることができた。その後も何かあると相談していたが、最近亡くなり、精神的な打撃を受けた。

年上のいとも非常に人物的に高潔で、温厚で、尊敬している。

自分にとっての仕事の位置づけ

気持ちのなかで8割くらいが仕事。個人的に昭和50年代半ばあたりから始めたパソコンや、ゴルフなど趣味でやっているようなことも、仕事に役立つということから入っていった。

これまでの職業経歴を振り返っての評価

金融機関にいたときは上司は厳しかったが、仕事はうまくいき、成績として跳ね返ってきたので、それなりにやりがいを感じていた。渉外のごとについたあと、新規獲得件数や金額、顧客数などの成績が5年間くらいトップだった。

金融実務の経験が現在の仕事にも活かされている。現在の仕事は比較的自分の経験を活かしながらできるし、自分がやりたいと思っていた分野でもあった。

非常に恵まれた人生だったと思う。2年前まで同僚だった人のほとんどがいま苦しんでいるなか、公務員に就職でき、収入も低いわけではないので恵まれている。

だれかにいい影響を与えられたということを実感でき、自分のやったことがまったく無駄じゃなかったということを感じ取れたというのは、やはり嬉しい。

将来・今後の展望

このまま現在の仕事を続けていくつもりである。

健康について（本人と家族）

特にこれまで問題はなかった。

その他の特記事項

- ・自分の好きなことにいかに早く気づくかということが大事。自分のやりたいことをできているという満足感は結構変えがたいものだ実感している。

- ・ 民間にいと、本当はこうしなければいけないけれど、企業のことを考えればこうせざるを得ないものが多く、割り切れなさを感じたこともあったが、そういうことを考えずに本来あるべき姿だけを追い求めることができるというのは、自分の気持ちが楽になる。
- ・ 30 歳すぎから毎月ユニセフに募金し続けている。

ケース 38

男性 50 歳

家族形態 妻

現在 社員 7 人の会社の代表取締役 (IT 関係)

インタビューの場所 インタビュー対象者に指定された駅前の喫茶店

現状と今の仕事

現在は、2001 年に自ら立ち上げた、IT 関係の会社の代表取締役 (社長) をしている。社員は 7 人で、主にインターネットを通じて、携帯電話に貼るシールを販売している。

これまでの主な経歴

地元の工業高校卒業後、地元の理工学部に進学。卒業後すぐに、地元の大手アパレルメーカーに入社し、システムエンジニアとして働く。10 年働き、主任、課長に昇進する。30 代後半に、テーマパーク企画会社に 3 年ほど課長として出向し、会社に戻って社長秘書を務める。41 歳で関連子会社に役員として出向し、5 年ほど働いた後、事業を立ち上げる。現在は事業を立ち上げて 3 年目。

初職への移行

大学時代は理工学部でシステムエンジニアを希望していた。長男なので地元企業を希望しており、地元企業である就職先が採用していたため希望し、他にも 2、3 社受けて内定した (同じ大学から 3 人入社した)。同期は 7 人いたが、仲がよかった。

仕事内容

初職 システムエンジニア

最初の 10 年間は情報システム部に所属し、売り上げや原料の発注などのコンピュータ処理のシステムの構築・導入・運用に関わる。昼間は通常業務を行っているため、新しいシステムを作るとかテストをするのは夜になり、特に入ってから 2 年は徹夜続きであった。この時期勤務先の売り上げが 400 億から 1,100 億ほどへ増加し、アパレルメーカーが最も伸びた時期だったため大変だった。仕事は、現場 (開発とメンテナンス) と新技術の勉強が 8 対 2 くらいの割合であった。

2 職 テーマパーク企画

SE は会社にとって必要ではあるが、縁の下の力持ちという部分があったこと、また仕事を変えてみたくなったので、希望してテーマパーク企画会社に出向した。この会社は市が音頭をとって、その市の企業が出資し、景観中心のテーマパークを作ることを目的としていたため、各企業から人が集まっている会社であった。ここで違う企業の人と働き、異なる文化

に触れた。その後、バブル崩壊と阪神大震災などがあり、事業が縮小されることになったため、会社に戻った。

3 職 経営企画室・社長室の社長秘書

会社に戻ってからは、経営企画室・社長室の社長秘書となり、社長のプレーン兼使いっ走りになった。社長と行動を共にし、社長のために情報収集から手紙の代筆等まで幅広く仕事をした。

4 職 関連子会社の役員

勤務先企業が、アパレル企業で通信関連の仕事を立ち上げようと、携帯電話を着替えようという企画を立て、関連子会社(40 - 50人)を作るという計画を立てたので、希望してそこに役員として出向した。関連子会社の社長が同期で、自分が社長になる見込みは薄いと思われたため、自分もトップになりたいと思い、独立を決意し、円満に退社した。

5 職 独立

現在立ち上げている会社は、関連子会社の社員と高校からの同級生などで構成している。インターネットで、携帯電話に貼るシールを販売する傍ら、パソコン上でアニメを簡単に書くソフトを大手メーカーから技術提供を受けつつ開発している。収入は以前勤めていた企業の時の半分程度に下がっているが、やりがいはある。

自分にとっての転機とは何か

関連子会社に出向したこと。

転機に対する家族・周囲の反応

妻は独立に賛成してくれていたが、両親にはなかなか言えなかった。実の親には1年後に伝えたが、妻の両親にはまだ伝えていない。妻が現在の会社で経理をしてくれている。

教育・訓練経験・自己啓発など重要な活動

- ・入社当時はまだコンピュータが普及しておらず、大学でも勉強していなかったので、内定をもらってから会社の費用負担でコボルを3ヶ月勉強しに行った。
- ・マネージャーになるとき、3泊4日の研修を受けた。
- ・独立後、E-ラーニングで株・為替の読み方を勉強した(無料)が、とても役に立った。夜8時から9時くらいに自宅のパソコンでできて、参加者全員でチャットもできる。

影響を受けた人・本など

- ・以前の勤務先の社長。社長室にいたときに直接接する機会があったが、「人たらし」であった。人の使い方が上手く、尊敬している。例えば、まだそれほど大きくなかった勤務先と大手アパレルメーカーが、ニットの製造元を巡って争ったことがあったが、勤務先の企業

- が選ばれた。なぜかを尋ねたところ、「お宅の社長は知ったかぶりをしなかったからだ」と言われ、商売には人なつこさが重要だと強く感じた。また社内的にも、社長に付いて社内を歩いているときに、「あの社員の名前は何か」と自分に尋ね、社員に向かって直接名前を呼び、士気を高めていた。自分も社長になったあと、実践するように努力している。
- ・カーネギー著『人を動かす』は今でも正月には必ず目を通すことにしている。もともと本を読む方ではなく、なぜ出会ったかは覚えていないが、大事な本である。
 - ・中学校時代の恩師も、ほめるのがうまく、勉強するのが楽しくなった。

自分にとっての仕事の位置づけ

会社は好きだったが、すべてではなかった。人生を楽しむためのものである。仕事を楽しくしようといつも思っていた。自分も周りも楽しく仕事ができたらいいというのがモットーである。

これまでの職業経歴を振り返っての評価

すべてキャリアの節目は「自分で決めた」という気持ちがあるので、後悔はない。独立したいという気持ちは前からあったと思う。

将来・今後の展望

資金繰りが大変であるが、このまま何とか事業を続けていく。いずれは発展させていきたい。

健康について（本人と家族）

これまで特にトラブルはない。

ケース 39

女性 50 歳

家族形態 夫、子ども 3 人

現在 文具製造工場パート

インタビューの場所 自宅

現状と今の仕事

週 4 日ほどパートでボールペン等の検査工をしている。残りの日は自家用の農作物の栽培をしている。

これまでの主な経歴

中学卒業後、B 市の縫製会社に就職。半年後に辞職し実家に戻って近所の縫製会社に就職。20 歳で結婚し辞職。現在の住所に移る。嫁ぎ先は農家で、舅、姑とともに養蚕と畑仕事、山仕事に従事する。当時夫は、自営のダンプカー運転手。嫁として舅に仕える生活で、白といわれれば白で、反発することはない状態だった。

第 1 子が 4 歳で幼稚園、第 2 子が 2 歳になったころに近くの縫製工場にパートに出る。舅姑からは強く反対されるが、どうしても出たいと通した。近所のサラリーマンの奥さんたちがサンダルをはいてエプロンをしている姿に引き比べ、足袋靴を履いて農作業をする自分がひどく惨めに感じられたからだろう。しかし、子どもをお願いします、と言って出なければいけない上に、炊事だけでなく畑仕事もしなければいけない状態で、体が持たず、1 年程度でやめる。そのころ周囲でもほとんど養蚕はやめており、同家でも養蚕はやめたが、田んぼを含め農作業は 1 年中あった。夫は昭和 54 年ごろからはダンプカー運転の仕事は危ないので、勤め人になり最初は自動車解体業、その後自動車部品製造業に移る。

昭和 60 年ごろ舅が亡くなり農業は縮小する。長男が中学 2、3 年（平成元年ごろ）クリーニング工場へパートに出、1 年ほどで辞めて別のクリーニング工場でパートをはじめ。それも 1 年ほどで辞め、つぎにボールペンなどの検査工場でのパートについて現在に至る。パートに出たころから、畑では自家用の野菜だけをつくる。平成 9 年頃姑が寝たきりになったのでパートをやめて介護を半年ほどおこなったが、姑は他界した。その後元同僚に誘われてもとの職場に戻った。

初職への移行

中卒後、学校・職業安定所の紹介で B 市の 60 人程度の規模の縫製会社に勤める。1 年ほどで地元の同業の小企業（従業員 3 人）に移る。5 年ほどで結婚のため退社。

仕事内容

- 初職 B市の縫製会社(子ども婦人服製造)
- 2職 実家の近くの縫製会社(子ども婦人服製造)
- 3職 家業の養蚕、農業(田んぼ、畑、山仕事)
- 4職 縫製工場でパート、農業
- 5職 クリーニング工場でパート(このころから農業は自家用のみ)
- 6職 クリーニング工場でパート
- 7職(現在) ボールペンやシャープペンの検査工程の仕事をパート

検査工の仕事は奥が深くて面白い。なぜ不良品が出るか、どこの部分が巧く働かなくて不良になるのかを考える。自分のところで不良を出さないために、前の工程がどうなっているか、なぜ具合の悪いものが出てくるのかを聞かなければ気がすまなくなる。また、不良を出しやすい人がなぜ出しやすいのか、人を見ているのも面白い。

今の仕事には、たかがパートだが、プライドや自分の仕上げたものには責任を持たなきゃという気持ちがある。

自分にとっての転機とは何か

舅姑の反対を押し切ってパートに出たこと。それまで無口で自分の考えを表に出さない性格で、なんでも「はい、はい」と従ってきた。それを自分の意志を通して出てきた。それだけに、意地もあって仕事を覚えなければいけない。自分が「まあいいや」の考えでは済まなくなってきた。自分がこのままではいけないという思いで変わってきた。自分の考えを表に出せるようになった。一番の転機といえば反発心からのものだ。

仕事に対してどうしてだろうと思って取り組むようになった姿勢は、農業に対する態度にも出ている。今までは他所を見ながらの見よう見まねで、覚え切っていない状態だったが、今は自分で考えて、去年はこうしたから今年はこうしようというように考えて取り組むようになった。

転機に対する家族・周囲の反応

夫に「かあちゃん、変わったな」と言われる。また、仕事先の人にも「入ってきたころと随分違うね」と言われる。

姑が倒れてからは農業は自分にかかってきて、夫は農業を知らないから、私が次はこれだからこうしなければいけないと言うと、夫は一家の主として面白くなさそうにしている。でも、大型機械は夫の仕事として手を出さないようにしている。いくらか分担していないと、これから定年になって、周りの人と話しもできなくなるだろう。

教育・訓練経験・自己啓発など重要な活動

舅の傍らで、農業をいやいやながら、だがやってきて、大体のことはわかるようになった。今になって、同じ年代の人が農家を継ごうと戻って来ているのを見ると、これまでの経験も悪いことばかりじゃなかったと、そういうことはある。

将来・今後の展望

60歳ごろ、今のパートができなくなったら、また農業に戻るだろう。それなりに生活できればいい。子どもたちは、稲刈り程度は手伝うが、おそらく農業はしないだろう。農家をやらせようという気持ちはない。

子どもがひとり立ちしていけるだろうがそれに対する動揺はない。昔の容易じゃない時期があったから、些細なことでも喜べる自分がある。考えようによっては今が一番いいときかもしれない。

健康について（本人と家族）、その他家族状況

8年前に一緒に暮らしていた姑が亡くなるが、その前半年間介護をするためパートをやめ、病院と家の往復をしていた。

子どもは大きな病気をすることなく育った。ただ、長男が中学時代、一時学校に行くのを嫌がる時期があった。かつての私と同じ性格で意思を表に出さない子だった。しかし高校でいい先生に会って変わった。今は土木関係の技術の仕事で、勤め先は変わっても職種は変わっていないので、安心してみている。次男は高卒後最初の就職先をやめて、今はアルバイトで、就職先が決まらないのでちょっと心配である。

ケース 40

女性 50 歳

家族形態 夫、子ども 3 人。夫は単身赴任中。子どもも離家して、広い家に一人暮らし。

現在 水道の検針と花屋のパート

インタビューの場所 自宅

現状と今の仕事

水道の検針と花屋のパートをしている。

これまでの主な経歴

私立の普通科高校に進学。卒業後都内のデパートに就職。2 年後に結婚を前提に終業時間の早い保険会社に正社員として転職。半年後に結婚、翌年に子どもが生まれ、夫の転勤にともない退職。一番下の子どもが 2 , 3 歳のときに内職を始める。その子どもが小学校にあがったときに近所の人で紹介で水道の検針をパートでおこない現在も続けている。平成 3 , 4 年頃から友人の紹介で週に 1、2 日くらい花屋でパートもしている。内職と水道の検針、花屋のパートが重なった時期もあった。

初職への移行

高校に来ていた求人票を見て自分で決め、その 1 ヲ所のみを受験し就職。求人はたくさんあり、自分が行きたいと言えばだいたい入れた。工場は合わないと思っていたので、デパートのほうがいいと思った。また、決めたデパートは都心で通勤距離はあったが、始業が遅いので学校のときより少し早く出ればいい程度だったので通勤に不安はなかった。

仕事内容

初職 デパートで販売の仕事

音響関係の売り場で担当。そこで、納品業者からアルバイトで売り場に来ていた男性と知りあい、結婚を約束する。結婚となるとデパートは終業が遅いので、早く終わる仕事を探し、知り合いの紹介で保険会社を応募。

2 職 保険会社の事務職

事務の経験はなかったが、書類のチェック等、定型的な仕事で難しくはなかった。夫の転勤にともない 2 年で退職する。

3 職 内職

しばらくは育児・家事に専念していたが、一番下の子どもが 2 , 3 歳のころ、帰りの遅いと夫をただ待っていてもしょうがないと、内職で電気関係の部品組み立て。

4 職 水道の検針 (パート)

下の子が小学校に入学したのを契機に、水道の検針の仕事に就く。近所の人をやめるとい
うのでどうか、と持ちかけてもらい受けた。月 10 日までに水道の検針を行う。出かける日
数は月 5、6 日で、ある程度融通が利くので、いいと思った。数年前に 2 か月に 1 度の検針
となるが、担当地区が増え毎月仕事をしている。

5 職 掛け持ちで 花屋（パート）

知り合いの店で、忙しいときに手伝ってほしいと言われて手伝っている。週 1 日か 2 日。
子どもの行事などのときは融通がきくので、手伝ってきている。

教育・訓練経験・自己啓発など重要な活動

子どもが幼稚園のときからテニスのサークルに入っている。今は一人で、テニスや映画を
見に行ったり。仕事をして、生活費に全部当てようと思って働いているわけではなくて、
たくわえと自分の遊びは自分で払えればいいのかという範囲。

パソコンをやってみたいと思っている。パソコン教室に申し込みたいんだけど、なか
なか行くまでには行かない。いろいろ出来るというからやってみたい。

自分にとっての仕事の位置づけ

どうしても働こうというのではなく、「こういうのがあるからどうかしら」といわれて「あ
あそう」と言ってやっている感じである。無理はしないので長続きしている。長続きするのは、
ちゃんとやらなくちゃと思いつめるほうじゃないので、やればいいやという感じだから。大
変だという人は早く終わらせなくては、とか色々考えちゃうから難しくなるのではないか。

仕事は、やらないといけないもの。大変だが楽しみでもある。やっていることで何を得ら
れるというのではない。

いつやめてもいいと思いつつ、ずっと続けている感じ。

これまででつらかった時期

真ん中の子どもが学校に行かない時期があった。そのころが一番大変だった。中学校の前
で行くのがいやだということで、卒業証書を私がもらいに行った。家にいるのではなく、夜遊
びしてバイクに乗っていた。高校に行くのがいやだということで、仕事も色々探してやったけ
ど。・・・普通もっと悩むでしょうけど、時期が来れば落ち着くかなと思っていた。そのと
きはそれなりに悩んでいたが、子どもに言っても、素直な子だったら初めからそういう風にな
らない。・・・今は本人も仕事に就いて、夜遊んでいる暇はない。

将来・今後の展望

夫は定年後仕事をしたくないと言っているが、そのころのことはまだ考えていない。

健康について（本人と家族）

夫の系統が早死にで、夫も血圧が高く薬を飲んでいるのが心配。

ケース 41

男性 49 歳

家族形態 母、子ども 1 人

現在 鍼灸院を開業

インタビューの場所 鍼灸院内

現状と今の仕事

鍼灸院を開業している。最近、スタッフを 1 人雇い、寝たきりの人たちの在宅マッサージを始めた。

小学 4 年始の子どもと 89 歳の母親との 3 人暮らしで、自宅は鍼灸院から徒歩 12、3 分。母親は要介護で週 4 回ヘルパーに来てもらっている。昨年離婚し、今は主婦業も兼ねる。

これまでの主な経歴

喘息のため中学校は欠席が非常に多かった。兄も大卒であり、大学までの進学を希望し、私立普通科高校に進学したが、やはり病気がちだった。将来の仕事として本人は広告関係の仕事を希望していたが、体力を心配した親から鍼灸師を勧められた。自分もぎっくり腰で鍼灸治療を受けた経験があったし、また相談した高校の担任教師にも勧められて、大学進学でなく鍼灸の専門学校に進むことに決めた。高卒後 1 年の浪人の後、鍼灸の専門学校に進学し、2 年半の課程を終え、鍼灸マッサージ師免許を取得する。

卒業後は、知人の家を中心に往診で回り、月 10 万程度の収入になった。2 年半でアパートの一室を借りて開業する。開業資金 130 万円は、金融公庫からの借金と貯金、兄からの借入金で賄う。当初は客が来ない日が続いた。翌年には、平行して午前中は病院で鍼灸師としてアルバイトで働き始め、これが 5 年近く続いた。その間に、アパートからビルの一室に鍼灸院を移した。この開業資金は 700 万円程度ほどで、親に家を担保にしての借入れと付き合い合っていた女性から借りたりした。

結婚後、一旗上げたい気持ちで平成元年にマンションの 1 室を借りてマッサージセンターを開業した。しかし、半年でつぶれる。このときも借入金 700 万円。借金だけ残ってしまった。鍼灸院をつぶさないために、保険適用治療を行うことを考えそのために必要な医師の理解を得ようと（鍼灸に保険を適用するには医師の同意書が必要）地元の開業医を回ってお願いで歩いた。これが認められて、保険で治療ができるようになり、収入が安定した。

現在は B 市鍼灸マッサージ師会副会長。

初職への移行

初職から自営。治療院を持たず知人のところへ往診に行って収入を得た。しばらくアルバイトに入った病院は、自分が患者として針治療を受けていたところで、スタッフが一人辞め

たので来てくれないかと頼まれた。その後、正社員になることを勧められたが、自分の鍼灸院を続けたいので断った。

仕事内容

自営の鍼灸。現在はB市鍼灸マッサージ師会の副会長として、鍼灸の地位の向上を図っている。B市鍼灸マッサージ師会では、寝たきりの人たちを対象にした在宅マッサージ事業を進めており、その一員として、自分のところでもスタッフを1人雇って、在宅マッサージ事業をしている。

自分にとっての転機とは何か

マッサージセンターがつぶれた後、鍼灸院をつぶさないために、近隣の医師を訪問して鍼灸への理解を得るため説明して回ったこと。その後、当院からお願いする医師の同意書を周囲の医師が書いてくれるようになった。

教育・訓練経験・自己啓発など重要な活動

30歳を過ぎてから毎週日曜日に鍼灸マッサージ会や東洋はり医学会の研修会に参加してきた。

影響を受けた人・本など

病院に誘ってくれた先生が紹介してくれた鍼灸の先生のところに勉強のために週1回治療を受けに行った。その先生は日本で鍼灸を大きくした先生で、とてもやさしい針をうつ先生だった。いつも相談して知識や経験を分けてもらった。

将来・今後の展望

今後は美容関係もやりたい。

健康について（本人と家族）

昔からからだが弱く、中学時代は喘息で欠席がちであった。今も、尿管結石、痛風などの病気をもっている。昨年は自然気胸で8日間入院した。しかし、長期入院はない。

父親は昭和62年に脳梗塞で倒れ、以降、4回発作を繰り返し、平成7年に死亡した。今も同居の母親は要介護。週に1回は針治療をしている。

ケース 42

男性 49 歳

家族形態 妻、子ども 2 人

現在 公立中学校の教頭

インタビューの場所 駅前の喫茶店

現状と今の仕事

A 県の山間部の中学校で教頭をしている。妻も教員で結婚以来共働き。妻の実家が近く、子育てでは両親の支援を受けてきた。

これまでの主な経歴

B 県の高校を出て、医学部を目指して 2 浪する。3 回目の受験時、親からこれ以上の浪人は許さないといわれて、理学部も受験し、結局、国立 A 大学の理学部に進学し、生物学を専攻する。大学の授業の多くに興味をもてず退学を考えたが、親にとめられ、親戚の大学教授から理学部からも医学にアプローチできると説諭され思いとどまる。卒業後、2 年ほど C 県にある製薬会社の研究所に勤めたが、労働争議がらみで辞職する。他の製薬会社に応募するが組合経験を問われて採用されない。医学部再受験と教員免許の取得を考えて、A 大学の聴講生となり、その後 B 県に戻って理科の教員になる。3 年間 B 県で教員として勤務した後、結婚と医学部受験を考えて、A 県に転居し理科教員として採用される。中学では生徒指導に積極的に取り組む。2 年前に教頭になり、現在の中学に配属になる。A 県では 3 つ目の配属先である。医学部の入試は、大学在学時に 2 回、会社を辞めるときに 1 回、聴講生のときに 1 回、教員になってから 1、2 回、試みるが入れず、いまでもその点がくすぶっている。

初職への移行

大学 4 年のときも、医者になりたい気持ちがあり共通一次試験を受けた。ただし、同時に製薬や化学工業系のいくつかの会社の入社試験も受けていた。教授から「こういうのが来ているけど受けてみるか」と勧められた企業なので、多くの人と一緒に受験したが推薦もあった。採用されたのは製薬会社の研究職だった。大学で、電気生理学を専攻し神経の電位をはかっていたので、心電図等の担当者がほしかった企業のニーズと合っていた。配属された C 県の研究所では脳波と心電図を担当した。なお、大卒時には大学院受験もしているが、ドイツ語は白紙で提出しており「記念受験」だと言う。卒業時の進路の決定にあたって、親とは相談していないし、教授からも推薦をもらった程度で、基本的に自分で決めている。

仕事内容と転職過程

初職 製薬会社の研究所で研究職

新薬の毒性研究で犬の脳波と心電図を担当する。入社後すぐに、動物実験の結果の取り扱いについての会社の方針に対し労働組合が異議を唱えたところ新聞に取り上げられ、会社から研究費を切られる結果になった。組合の仲間の離反や研究部門を解体する人事異動など会社の嫌な面を見てしまい、また獣医の資格も持たず修士課程も出ていなかったのも同社内に留まっても先が見えていたと思い辞職した。その後、製薬会社2社の採用試験に応募するが、面接まで行っても組合関係の問題の影響があつてか採用されなかった。出身大学の恩師に相談して、公務員しかないということで教員を目指すことになり、A大学に聴講生として戻る。この年、医学部も再受験したが果たせなかった。

2 職 中学校教員

B県に戻るつもり教員採用試験を受けて採用される。B県しか受けていない。配属中学は生徒指導が大変な学校で、それはいい経験ではあったが「こんなはずではなかった」という思いをそのころから強くした。3年後、結婚とA大学の医学部再受験を考えて、A県に移り教員採用試験を受けて採用される。これまでA県での勤務校は3つ。高校時代に柔道部だったことから柔道部の顧問を引き受け熱心に指導する。2校目では全国大会に行けるまでに育てる。土日返上で部活指導だが、「これが楽しくて続いた」というところがある。生徒指導にも熱心で生徒からは「怖がられていた」。学年主任、教務主任を経験し、2年前に教頭になり現在の勤務校へ異動した。

職業を通じた目標

子供もいるしそれを育てる条件整備というような意味で、社会的責任としての職業だと思う。それに、生きがいがあれば一番いい。今の仕事に、生きがいらしきものは感じている。生徒といればやはり楽しい。

教育・訓練経験・自己啓発など重要な活動

教員になってからは、5年目、10年目研修があつたが、ほとんど役に立っていない。文部省の中央研修で理科の研修を受けたのは役立った。自分が理解してない物理分野の高い研修であった。自主的な研究会というようなものは参加していない。教員としての能力を高めたのは、指導の現場であり、警察にかかわった生徒が先生だったと言っていい。

また、指導を任せてくれ、自分がやったことを認めてくれる管理職がいたことはよかった。例えば、クラスの子が掃除をしないとき、掃除の大切さがわかるまで掃除をさせないという私の出した方針を、認めてくれた。こういう管理職との出会いが大事だった。

今は、教頭になって部活がなくなり土曜日に時間ができたので、今年から英会話を習いに行っている。前から英語は好きだが、受験のときに失敗したという思いもあって、時間がある今のうちに行っておこうと思っている。

印象的な仕事

- ・ 学年主任の仕事と教務主任の仕事、さらに生徒指導である。
- ・ 自分がその任に当たる以前に、他の先生が担当するのを見ていて、自分ならこうするのにと考えていることが多かった。それがきっかけになって勉強になっていたと思う。

職業キャリア上の転機

転機というなら、主任になったときである。こうしたいという思いがあったところに、主任になって、一番楽しい仕事になった。このまま続けていこうという気持ちになった。

これまでの職業経歴を振り返っての評価

認めてくれた管理職がいて、周りの仲間がいたことで、自分の人生に一応の評価は与えた。

将来・今後の展望

あと10年経って、子どもが大きくなったら、また医学部を受験したい。

健康について（本人と家族）

本人も家族も、両親も健康で今のところ心配はない。

ケース 43

男性 50 歳

家族形態 独身

現在 国立大学助教授

インタビューの場所 大学の研究室

現状と今の仕事

国立 A 大学工学部助教授。一人暮らし。

これまでの主な経歴

B 県の中学卒業。理数系の科目が得意なことから、教師の勧めがあって C 県にある高専を受験する。学校から 5 人受験し、1 人だけ合格した。通学できる距離でなく入寮する。土木工学科を選んだのは、機械だと自動車や電気だとラジオのイメージがあり、どちらも好きではなかったから。土木の勉強は面白かった。高専の 3 年で大学受験をする学生もいたので本人も受験勉強はしてみたが、大学へ行きたい気持ちは強くなく続かなかった。公務員を志望して、5 年生になる直前に受験を目指した勉強を始める。しかし、なぜ勉強するのかを考えると、公務員志望の理由は公務員なら時間があって好きな勉強が出来るからで、それではその勉強は何のためかと考え出すと、勉強に手がつかなくなった。そのとき、中学の恩師が家庭訪問のときに言った、「大学の先生になったらどうだ」という言葉が思い出されて、これだと思った。その時点で大学の先生になることに決めた。

そのためには大学に進学しなければならないが、高専の 5 年目は卒業研究で忙しく、受験は 1 年浪人してと思った。しかし、卒業直前にそれでは 3 浪と同じことになると思い直し、それから受験できる私立大学二部を受けて合格した。就職する気はなかったが、先生に二部なら就職もしないかと勧められて、紹介されるままに橋の設計会社に就職した。

「腰掛け」のつもりで就職で、2 度やめようと思った。1 度目は大学に通っていることを知らない上司が現場に泊り込むことを求めたときで、これは通学していることが理解されて撤回された。2 度目は国立の大学院に進学するために勉強に専念しようとしたときだが、これも慰留された。結局、辞めることなくそのまま大学院に進学し、会社は休職扱いになった。大学院を卒業したが、大学に残って助手になる道はなく、他の大学への就職も不可能に近かった。大学の先生になるという夢がこの時点で破れ、元の会社に復帰し設計の仕事に就いた。夢も希望もなく毎日仕事があるからしょうがなくしている状態だったが、偶然、A 大学で助手の公募があることを知った。締め切りが近く、あわてて手紙を書いた。

その年は採用されなかったが、A 大学は大学院が出来たばかりで卒業生が少ないので公募で採用されるチャンスがあった。3 回目の応募で採用が決まった。助手で採用され、その後、学位をとって助教授に昇進した。

初職・第2職への移行経路

初職は高専の卒業式の日、就職するつもりはなかったのだが、先生から紹介してやると言われ、1日か2日ですぐ就職試験を受けて決まってしまった。本人の意思とは関係なしに決まった感じである。

第2の勤務先であるA大学へは、学会誌で偶然見つけた公募のチャンスに応募した。3回目の応募で採用されたが、その背景に、大学での指導教官と大学院で研究の指導をしてくれた研究者がA大学の教授と知り合で、後押ししてくれたことがあった。

仕事内容

初職 橋梁の設計会社

最初の4年間は技術営業で、営業の手伝いと製品を施工する際の技術指導を担当。問題なく施工されているかをチェックする仕事である。大学院修了後に復職してからの仕事は設計で、専門に勉強したことを生かせる分野ではある。

2職 A大学土木工学の助手

30歳代後半には、内地研究員制度により他大学に行って学位取得のための研究に専念できた。40歳代初めには学位を取得して、助教授に昇進した。現在は、講義を2コマから3コマ分受け持ち、雑用ばかりであまり研究ができない。研究をしているときは趣味をやっているような感じである。助教授になってからは自分の研究はしたいが時間がとれず学生を指導する教育者という側面が強くなった。3年生のインターンシップの世話やJABEE(日本技術者教育認定制度)の認定申請の仕事もある。

自分にとっての転機とは何か

高専のときに大学の先生になりたいということが分かったこと。

転機に対する家族・周囲の反応

親に対して、大学の先生になりたいということは一度も相談していない。大学に行くことも自分で決めた。大学の学費は親が払ってくれると思い込んでいた。実際は、入学金は出してもらったが、授業料は自分で払った。大学院は入学金で貯金がなくなったので、授業料は親(代が変わって実際は長兄)に出してもらった。親の考えが「親の出来ることは金を出すくらいだ」というので、親に出してもらうことに全然抵抗はなかった。

教育・訓練経験・自己啓発など重要な活動

1年間の内地研究員での研究は指導教官について研究した。その後、ドクターをとるまで、自分の研究とドクターをとるための研究と両立させてかなりハードな時期があった。研究を一生懸命できた時期はこのころである。

影響を受けた人・本など

中学生のときの担任の先生から「大学の先生になったら」と言われたことが最も大きい。また、高専で数学の先生から地盤が今一番面白く難しい分野だと聞いたことが方向を決めるのに大きかった。一時、物理や歴史に進路変更ようと思ったこともあったが、大学で先生になるには、やはり土木だと思った。

自分にとっての仕事の位置づけ

仕事は、生活の糧を得るものだが、以前は、自分の能力を発揮できる場所というイメージだった。今はどちらかというと勉強だと思っている。人生という勉強。

人生のピークを自分の研究が一生懸命できた時期だと考えると学位取得あたりがピークだろう。今は縦軸が変わっている。言い表せないが違う軸をとればピークを過ぎたわけではない。

今も研究をしたい気持ちはあるが、業績を上げようとして研究しようとする、学生を自分のペースに引き込んでやらないといけない。そうすると学生は反発して、だから、本当に研究している人なんかは、いつも学生を怒鳴っている。そういう自分のペースに学生を合わせることになってきて、むしろ、学生がこれをやりたいと言って来たらそれを手助けするのがいいのではないかというふうに変ってきている。研究者としてはある意味、落ちこぼれだと思う。

将来・今後の展望

そんなに先のことは考えていない。

健康について（本人と家族）

健康。

結婚

結婚はしたかった。しかし、付き合った女性の家系にユタの人がいて、自分はすぐには結婚できないことを告げられて、それが理解できたから、今はぜんぜん焦っていない。時が来るのを待てばいいと思っている。

ケース 44

男性 51 歳

家族形態 妻、子ども 3 人

現在 会社員 火力発電所の管理技術者

インタビュー場所 対象者の自宅居間

現状と今の仕事

火力発電所の整備担当の技術者。勤続 32 年。

これまでの主な経歴

出身地の工業高校を卒業後、製鉄工場併設の火力発電所（鉄鋼・電力会社の共同運営）の技術者となる。三交代のメンテナンスから、現在は昼常勤の整備。

初職への移行

工業高校を卒業して、就職した。

仕事内容

発電所のメンテナンス技術者。三交代勤務。

その後発電所の計算機化（コンピューター化）の際に、制御系の整備に異動。定期修理や突発的な修理、ソフトウェアのインストール。計画、段取り、予算、材料の調達、伝票を切る、メーカーとの調整、工事を終らせる。

以前のシステムは高価で 15 年以上使う前提だったため、繰り返し修理調整を必要としていた。問題現象の再現、その影響度、使用可能性には、微妙な判断を求められる。社内で再現しなければ、メーカーで 1 ヶ月ぐらいテストさせる。

現在は、問題があるとなったらメーカーが交換部品を送ってくる。それをセットすることで対処する。

定期整備の頻度は、これまでの 1 年に 1 回から、近年は 2 年に 1 回。設備の休業時間を減らすため、1 回の整備期間も短くなる。そのために準備は 7 - 8 時まで、休日出勤も必要となる。

自分にとっての転機

インベーダーゲームに没頭し、なぜこのように動くのか、とコンピューターに興味を持つ。結婚した年にパソコンを購入。プログラムを作るなどの勉強をした。

影響を受けた人

入社間もないころのチューターの先輩。遊びに誘ってくれたり、よく面倒を見てもらった。

家族の援助

結婚1年目にはじめてパソコンを購入するにあたって、大きな出費であるにもかかわらず、妻は何も言わなかった。

教育・訓練経験、自己啓発など重要な活動

会社が導入する装置メーカーの研修プログラムに参加。例えば、コンピューターメーカーのハードウェア、ソフトウェア研修、計装装置のメーカーの、教育研修プログラムに、1年に1回ぐらい参加してきた。研修が直接役立つわけではないが、理屈がわかる。また資料ももらうので、のちに現場で確認することができる。判断の勘所は質問して、また現場で確認する。

若いときは、コンピューターを学ぶために、地元の工業大学の講座に通った。

発電の仕事は、経験しないとわからない。特に計装はその傾向が強い。10年で1人前と言われる。調査対象者も40歳ごろまで先輩と現場に同行し、指導を受けた。(最近の若い社員はそうやって指導を受けていない。)

また会社の方針で、危険物取扱者、ボイラー技師、高圧ガス製造保安責任者の資格をとった。

現在、ボランティアのための講習会に参加。ボランティアもこれまでの経験を生かすものではなく(例 パソコン講習の講師) 新しい知識を必要とするものに取り組む。

自分にとっての転機

- ・結婚したとき
- ・3人目の子供ができたとき
- ・三交代から昼常勤になったとき

何か流れてきたから乗ってみた。逃げてもよかったが、乗りかかった船だから行ってみよう、と考えた。常に「前のめり」。自分について来い、などと言うことはないが、前向きに取り組んできた。

仕事上の達成

最大の業績は、製鉄の機械が入っている100メートル四方ぐらいの建物の、保護装置の更新。すべての配線図をひとりで描き、運用のためにマニュアルを書いた。これによって発電所で事故が起こらない。

これまでの職業経歴を振り返っての評価

いい人生だったと言える。仕事では失敗もたくさんあり、やり直したいと考えないわけではない。しかしそれも含めて自分の人生だと考えたい。会社の仕事ではいい思い出がなくても、自治会活動を通じた地域でのつきあいがあってよかった。

10年ひとくぎりと考えている。会社の設備の計算機化によって、コンピューターに関する専門知識ゆえ、整備に異動することになった。しかし、この現実の背景には、人員削減があると気づく。会社はすべてではない、と見方を変えた。

その後40歳代では、地元自治会の役員（そのうち5年間は会長）となり、地域活動の責任者となる。調査対象者が住む地域は、鉄鋼メーカーとその系列会社の社宅（調査対象者の自宅も系列会社の社宅である）が広がるエリアである。「会社人間」が減り人々が個人主義的に変化するさまを体感する一方、自治会役員会に出席するなど、活動の幅も広がる。「この町はこんな人たちが生活しよったんや」と、町の人々の顔が見えるようになった。こういった活動は、出世、昇進せず、定時に家路につく生活だったからできたと思う。仕事以外に人生の幅を広げてきたことがよかった。

将来・今後の展望

- ・50歳代はボランティア活動に取り組みたい。博物館の説明員の研修に参加している。
- ・一方2年前にはじめて結成された労働組合の書記長になった。

健康について

問題なし。

両親はすでに死去。出身地とは両親の墓がある以外につながりがなくなっている。

ケース 45

女性 49 歳

家族形態 夫、子ども 2 人、実母

現在 公立保育園の保育士

インタビュー場所 インタビュー対象者宅の最寄り駅付近の喫茶店

現状と今の仕事

公立保育園（職員 20 名）の保育士。主任。15 名の保育士の中で、経験年数は中位。

これまでの主な経歴

高校卒業後、家業の縫製を手伝いながら、短大通信教育部保育科を卒業。短大在学中より、保育園での保育士のアルバイト。卒業後 1 年あまりの後、公立保育園に保育士として採用される。その後 2 回の転勤、2 回の出産・育児休暇。25 年。

結婚し母親とは別居したが、9 年前にふたたび同居。

初職への移行

実家は縫製業。デザインの勉強をしたかったが、親の反対もあり「とりあえず」実家を手伝う。ミシンやアイロンかけ。しかし家業につくと、家の外部との接触がなく「つまらない」。そこで目に留まった短大の通信教育のなかで、「いろいろなことが網羅されて」いそうな保育科に申し込む。この後 4 年間、短大生と家業を兼ねる。

仕事内容

初職 家業の手伝い（縫製業）

アイロンかけ ミシンがけの手伝い 9 - 17 時には手伝う

2 職 保育士のアルバイト

正規の保育士の補助。掃除や遊び場所を、保育士の指示で、子供たちに指示。当番では、親子への対応、申し送りを一人でこなす。

3 職 保育士

大きな住宅団地を抱える地域の保育園に所属。120 名ぐらいの子供がいる保育園。遅番・早番があり、責任感が必要。2 - 3 人でひとクラスを、遅番、早番は 1 名で担任する。クラスはゼロ歳児から年長まで。勤続 10 年で主任。クラスの進め方は、リーダーが考える。若い保育士でも交代でリーダーになる。リーダーになると、ベテランの保育士から指導されながら、チームとして仕事を進める。この積み重ねで、保育に深みが出る。現在は 14 名のクラスを一人で担任している。

自分にとっての転機

短大のスクーリング いろいろな境遇の同級生が全国からあつまっており、私は親元にいるのだからまじめにやらなければならない、と刺激を受ける。「目覚めた」。

26歳のとき、恋人と父が相次いで亡くなった。忘れるために仕事に打ち込んだ。そして3年後に結婚する。

幼稚園か保育園か

幼稚園の教育実習の機会を探しているときに、自分が卒園した幼稚園に、ピアノの先生の縁で手伝いに出かける。お泊り保育、日曜学校のボランティアなど。オルガン、ゲーム、お話を牧師さんに気に入られ、幼稚園で働かないかと誘われ迷う。しかし実習の経験から、保育園のほうが親・生活により密着していることに魅力を感じて、断る。保育園のほうが「言葉かけに深みがある」。

この時点でまだ公立保育園の職員採用試験の結果は出ていなかった。父は自分で決めろと言う。

その後10年ほどで、幼稚園は閉められた。

アルバイト保育士をしながら採用を待つ。4月の採用通知を受け、早く(12月)来てくれと言われたが、12月はスキーなどやりたいことがあったので、結局1月に就任する。

影響を受けた人

・最初の赴任先の園長先生

仕事の厳しさを教わった。例えば、保育士が不足して充当しようとする場合、保育士がラクをするためではなく、よりよい保育のために人をとるのだ、と強調した。当時は厳しいと思ったが、今ようやくわかる。働くということはこういうことだ。

恋人と父が同じ時期に倒れ、同じ時期に死去した。このときは、仕事することで紛らせていた。この際も何があっても仕事には集中するように指導された。

免許をとって、母とドライブし気を紛らせていると、いつまでもそんなことしていないで、結婚しろ、と見合いを勧めた。結局同僚の兄弟を紹介され結婚。

・短大のスクーリングに参加した同級生

他の参加者には、保母で幼稚園教諭を、また幼稚園で保育士の資格をとろうとする者がいた。いろいろな境遇の同級生が全国からあつまっており、私は親元にいるのだからまじめにやらなければならない、と刺激を受ける。

結婚・家族の援助

夫は、同僚の兄弟。よい人である。団体職員。

遅番、早番のときは助けが必要だが、そのような時保育園の送り迎えを手伝ってくれ

た。夫もできないときは、母が手伝ってくれた。

教育・訓練経験、自己啓発など重要な活動

高校卒業後 短大通信教育部保育科。ピアノ教室で初歩から5年間学ぶ。ピアノは保育科の単位に必須。自宅でも電気ピアノを買って、毎晩練習した。楽しかった。

保育の仕事には、細かな配慮が必要。経験の積み重ね。若い人からも学ぶことが多い。行政が研修会を催す。それぞれ年5 - 6回。NPOなど民間の講座もある。保育技術、心理などを学ぶ。年間3回ぐらい出席している。食事の支度、職員会議などあり、参加回数は限られる。

もっとも効果的なのは、経験の積み重ねであるので、若い人にはアドバイスする。その一方で若い保育士から学ぶことも少なくない。また街を歩いている、保育のことを考えていることが多い。ウィンドウディスプレイでも、学べる。

現時点での興味の対象は、子供の心を捉えること、独りよがり修正すること。

仕事上の達成

何か具体的にあるというよりは、父兄に喜んでもらえることが達成である。そしてやろう、という気持ちになる。

これまでの職業経歴を振り返っての評価

満足度は8割ぐらい。やればやっただけのことが、子供たちから返ってくる。「私が違っててもいいかないと」保育園は進まない。一方足りない部分もあるので8割。

将来・今後の展望

体力・心の健康、健康が必要。一人担任も増える。副園長になることを考えなければならぬかもしれない。よって気の進まない主査試験も受けなければならぬかもしれない。一人担任は昨年からの新しいチャレンジである。

健康について

問題ない。ただし、保育士は体力の増強が課題である。

その他の特記事項

声がかすれていた。平日は声をからして子供を見ている。肩肘張るわけでもないが、保育士としての誇りを感じさせる。インタビュアーとの対話の中でも、常に保育で使えるアイデアをさがしている。また、高校卒業時にあきらめたデザインへの興味が、現在保育園の仕事に役立っているのも印象的だ。

若いころと比べて体力が落ちていると繰り返した。子どもを相手にする仕事はきつい。望んでいるわけではないが、副園長になることを考えなければならない。

ケース 46

女性 50歳

家族形態 父、夫、子ども2人

現在 パート勤務

インタビュー場所 調査対象者の自宅居間

現状と今の仕事

主婦。週5日、9時から5時までのパート。

これまでの主な経歴

出身地近くの食品メーカーに勤務。ここでは工場、営業、会計など幅広い業務に就く。社内結婚をきっかけに、不動産販売会社に勤務。出産を機に退職、育児に専念。専業主婦として家事、育児、親の介護に従事する。後に工場の検品の仕事で復職。現在の職場ではリーダーとしてまとめ役に。

初職への移行

教員を希望し、女子大を卒業。教員採用試験に不採用となり、一度不採用となった場合2度は受験できないと思い、教員を断念。すでに新卒者の採用時期を過ぎており、出身地近くの食品メーカーに勤務。

仕事内容

初職 食品メーカー せんべいを作っている会社

総務事務。米やしょうゆの受け取り、銀行、社会保険事務所などへの遣い、売り子、社長の子供の子守まで。進物の箱の中の配置の見栄えなどを勉強した。どうやればお客さんが買う気になるかを考えた。

2職 不動産販売会社

マンションのモデルルームの売り出し期間に詰め、事務を行う。この仕事は「燃えなかった」が、同年代の同じように結婚しこれから子供が生まれようという同僚たちとの交際が楽しかった。

3職 電気部品メーカー

削りだされた材料の寸法が規定どおりかどうかを、コンピューターを使ってチェックする。パートだけの職場（10名ぐらい）のリーダー。フロア全体を、広く任され好きなようにやっている。

自分にとっての転機

夫の姉と13年間同居したこと。独身の姉を気遣う夫が、家の新築を機会に姉との同居を提案、それに同意し、同居生活が始まる。おかず一品に手を抜いていると思われたくなく、家事に努力する。姉が結婚して出て行ったとき、今度は父を看なければと思う。自分は誰かの世話をしながら生きていくんだ、と思った。

地域活動

市教育委員会から任命されて、公民館の運営委員になる。運営委員は各公民館に10名。各区から1名選ばれる。市内の運動会や作品展、5ヶ所の公民館の行事を決める。

このきっかけは、以前から公民館の活動に熱心に参加していたのを、前任の運営委員が知っていて、推薦したこと。

子供の幼児期から地元のバレーボールチームで活動する。その後バドミントン。子供の学校ではPTA役員、公民館活動から教育委員会にもかかわり、中学校のときのバスケットボール仲間とも最近は会うようになった。友人関係、ネットワークは広い。ネットワークの広さから、新しい役割を依頼される。例えば、6年生のときのPTA役員は、面倒が多く避けられがちだが、その前の実績から、2度とも任された。

影響を受けた人

特に述べてはいないが、多くの人間関係をもつことから、複数の関係者からさまざまな影響を受けやすかったと考えられる。

結婚・家族の援助など

結婚直後仕事を続けることを自由にさせてくれた。愚痴を言うと「やめたければやめれば」という程度。何をしてくれるわけでもないが、ああしろ、こうしろと言わない。

その他の家族関係

夫の姉との同居によって、家庭生活ではいつも気を働かせてきた。おかず一品できあいの品ではいけないだろう、とがんばった。その努力は、パートの職場で仲良くやっていく上で役立っている。つまり年長者がいる集団でやっていくことを、学んだ。

実母の介護、義理の母の介護のいずれにもかかわり、やり遂げた。

教育・訓練経験、自己啓発など重要な活動

初職では、社長夫人から簿記や給与計算を教わる。

基本的になんにでも興味を持つ。したがって仕事の全体像を知りたがり、何でも先輩に質問する。何でも知りたがり、徹底的に取り組む。

自己啓発は編み物、料理など。

これまでの職業経歴を振り返っての評価

8～9割満足。

将来・今後の展望

60歳の定年まで今の職場で働きたい。その後はまた別の場所で働いているかもしれない。夫はあと5年で定年。住宅ローンは残っているので、仕事を続けることを避けられないだろう。それ以上に働くことが好きである。隣接する実家に独居する父親の介護は、やがて必要になるだろう。その心の準備はできている。

健康について

問題ない。現時点で父も健康である。

ケース 47

男性 50 歳

家族形態 妻、隣家に両親

現在 市議会議員

インタビュー場所 対象者が市議会議員を勤める市役所応接室

現状と今の仕事

市議会議員 10 年。現在 3 期目。議員 22 名の議会で副議長。

これまでの主な経歴

地元の進学校、別の地方の私立大学を経て、専門商社勤務。実家（理髪店）の父親が倒れたため、1 年で地元に戻る。もうひとつの家業である喫茶店を任される。36 歳で市議会議員選挙に立候補。このときは落選するものの、4 年後、初当選。現在 3 期目。副議長。

初職への移行

私立大学を卒業。商品先物取引の会社に就職。

仕事内容

初職 先物取引の営業

4 月に入社して、父親が健康を害し 12 月に退社し、帰郷。

2 職 喫茶店の経営

新たに定食を出す、麻雀卓をおく、ビールを出すなど工夫する。ここに「友達」が集まってくる。地域の役員を引き受けて、地域のネットワークを広げ、選挙の準備をする。

3 職 市議会議員

地域の集会で話をする。そのために地域の状況を勉強する。3 分の話のために、十分準備する必要がある。この繰り返し。選挙に勝つ準備と、政治活動。地域の要望を聞いて歩く。地域でもめごとがある、会合がある、と言われれば出かけていく。出かけていけば、また市民と新しい出会いがある。それが契機に新しい仕事になる。すぐ帰るつもりが、夜遅くまで付き合う。

青少年の相談に乗るのも仕事である。食事に誘って、一緒に食べる。すると少しずつ心を開いてくれる。

3 期目となる今期は、副議長に。議長会にも参加して、ネットワークを広げている。

自分にとっての転機

36歳のとき、はじめて市議会議員選挙に立候補し、落選したこと。55歳にならないと選挙に出られないなんておかしいと言って選挙に出た。他陣営の関係者は「おまえらが町を悪くした」と追い出した。

しかし落選。その後は先輩や長老に筋を通したり、地元の役を引き受けたりすることになる。目的を達するには何でもやる。そうしてやってみると、自分はこうやりたいんだ、といえれば理解してくれる人がいることもわかった。

この選挙を支えてくれたのが、かつての同級生。「お前のこと嫌いだった」と言われ、そう思っていたのか、と思う。同級生の後押しは、1期、2期、3期と深く、広がっていく。

影響を受けた人

選挙に出るにあたっては、同級生（現市長）の父親（当時県会議員）からアドバイスを受けた。カネが必要である。

結婚・家族の援助

市会に立候補することに、父は泣いて反対した。恥をかかすなど。しかし、地主の娘だった母は、後押ししてくれ、資金援助もしてくれた。選挙の1年前には父も立候補を認め、頭を下げてまわってくれた。

元同級生の妻とは初当選のときに結婚。もともと選挙の手伝いに来ていたので、その後の選挙など政治活動には、積極的に手助けをしてくれる。会合に行く、と言うとそれは行くべき、と促してくれる。妻による喫茶店と下着店の収入もある。

教育・訓練経験、自己啓発など重要な活動

- ・本・データを読む。議長会や会派で視察に行く、など。
- ・喫茶店を始めるときには、関西でレストランを運営するおじのもとで、短期間修行した。

仕事上の達成

連続3期当選したこと。初挑戦では562票で落選。初当選1081票、二選目994票、三選目1200票（トップ当選）。

55歳になって区長を務めたあとでないと、市議会議員にはなれないのが常識だった。その地方都市で、40歳のとき友人のバックアップで初当選。友人や地域の和を広げて当選してきた。選挙事務所がどこよりも明るく、人が多い、と言われている。その後の実績は、市民から見れば当然の結果に過ぎない。

これまでの職業経歴を振り返っての評価

友人の力で選挙に勝ち、市会議員をやってこられたことを、高く評価している。

将来・今後の展望

まずは、合併新市で来年の選挙に当選すること。そして議長になる。これまでは、3期努めると、年金が受け取れる。それから引退するのがこれまでの常識。しかし年金受給年齢までまだ10年以上ある。まだまだ働きたい。

将来的には、市長か県会議員になりたい。政治のダイナミズム、おもしろさを知ったので、国会とは言わないがもっと上を目指したい。

健康について

- ・最近肺に水がたまり、2日入院したが、健康診断では、いたって健康。
- ・両親も隣家で健康に暮らしている。

ケース 48

男性 50 歳

家族形態 妻、子ども 3 人

現在 会社役員 鞆材料卸売会社 代表取締役

インタビュー場所 対象者の自宅応接室

現状と今の仕事

鞆の材料の卸売会社グループの中で、生地卸売会社の代表取締役社長。

これまでの主な経歴

出身地の農業高校、大学（経営学部）を卒業。損害保険の代理店研修生を経て、出身都市の鞆部材卸売りに会社に就職。仕入れを担当の後、生地卸のグループ会社に出向、現在はこの会社の代表取締役。

初職への移行

薬品会社を希望するもののかなわず、損害保険会社の代理店研修プログラムに。

仕事内容

初職 損害保険の代理店研修生

関西で営業活動に取り組むものの、成果があがらない。出身地近くで研修制度の手伝いにかかわる。

2 職 鞆部材の卸売会社

出身地である県のある都市で、鞆部材の卸売会社に就職する。（たまたま会社の現会長夫人が、同じ損害保険会社の代理店であったため、氏を知っていた。）ここで鞆部材の仕入れを中心に 7 年。入社当初はシステムができておらず、経理システムなどの構築にもかかわる。営業では連続 50% 増を達成した。この 7 年の前半は、こちらで企画したものがどんどん売れていく、「努力しなくても売れる」状態。これはおもしろくないので、後半は地元の問屋を飛び越えて、東京、大阪の卸業者との取引を始める。遠隔地への訪問は、費用効率を考えることに。そこで、新製品のネタを事前に作り上げてから訪問する、というパターンを築くために、仕入先を全国に開拓。

そのころ独立採算となっていた子会社の経営を「一か八か、やってみないか」と言われ、親会社に籍を残したまま出向。この当時役員候補として、部長待遇に。ここで営業、その後営業責任者になる。平成 9 年、社長に就任。

業績は芳しくなく、組織の縮小を繰り返す。コンピューターを使った刺繍の内職で収入を得る一方、土地家屋など抵当に入れて、資金繰りする。

現在は人気靴メーカーとのつながりが密になり、事業は拡大。十数人いる先方の企画部隊のメンバーと仕事を進める。彼らが何を求めているのか理解することが重要。よって聞き上手であることが必須。部下にハッパをかけながら、自らも全国の取引先を飛びまわっている。

自分にとっての転機

- ・子会社への出向 責任者としてやっていくこと

生地の事業を取り仕切るために、子会社の経営を引き受けたこと。そして、問題行動を繰り返す上司を、会社のオーナーに直接訴えて、やめてもらった。責任を持ってやるから、この人を外に出してほしいと。このときから、事実上経営の責任を担う。

- ・内職をやめて、子会社の経営に専念

妻が家計収入を補うために、コンピューターを使った内職をしていた。毎月本業から得る収入より多くを稼いでいたが、オーナーが自宅へ乗り込んできて、決断を迫り、本業をとる。お前がやる気なら、会社を譲ろう。ここで覚悟を決めて、妻も事務員として入社させた。1,500万円を自ら拠出。

影響を受けた人

- ・経営する会社の企業グループのオーナー

オーナーの影響で、リスクがともなっても、自分でビジネスをしたほうがよい、と考えるようになった。うまくのせられて、子会社を引き受け、やがて家も土地も抵当に入れて資金を借りることになった。

商売や取引先、部下に対する指示でも、腹が据わっていると感じる。「アメとムチ」の使い分けを学び、儲かったら社員で分け合う、ときには優しい声をかけるなどを実践してきた。また自分をさらけ出す、思いを伝える、そのうえでついていけるかどうかを判断させる、ということが、オーナーから学んだもっとも大きなこと。

家族の援助

妻は元同僚。支店への異動では相談相手であった。借金や内職で生活を支えた時期もあった。その後再び事務担当として入社し、仕事でも支えられている。

教育・訓練経験、自己啓発など重要な活動

社長会。グループ各社の社長の勉強会。他の社長の仕事振りを見ながら、「こうすれば部下はついてくる、ついてこない」と研究している。他の社長たちは、彼らが年上であるためか、自分の失敗談を話してくれる。

営業では、保険会社時代に学んだプログラムが役立っている。

仕事上の達成

常に最善を考え、変化をおこしてきた。地元の業界団体を抜けたことも、それがあたりまえだから、ではなく、ほかのやり方がないか考えた結果。それによって関東や関西の卸業者と直接取引ができた。これまでと同じやり方はやめて、違ったやり方にしろ、というだけで考えるようになる。これは個人も組織も同じことだ。

これまでの職業経歴を振り返っての評価

40点。自分はラッキーボーイだった。その場その場では苦しみ、もがいてきただろうが、結果的には周囲の人々に助けられて、達成してきたといえる。零細企業の社長は、会社の中のすべてを牛耳っていなければならないはずだが、自分にはそこまでの欲がない。本来は、榮譽も立派な家も要らない、自給自足の生活をしたい。今の生活がその理想とかけ離れているので、点数が低くなる。

地域活動

地区の役員（隣保長）。いろいろな考え方の人がいて、隣保をまとめることから学ぶところは多い。意見の違いを素直に受け止められるようになった。

将来・今後の展望

55歳で引退し、農業をしたい。そのためには、後継者が必要である。ところが後継者がなかなか育たない。

健康について

問題なし。母親も離れで健康に暮らしている。

ケース 49

男性 50 歳

家族形態 妻、子ども 3 人

現在 公務員管理職主幹

インタビュー場所 被面接者職場会議室

現状と今の仕事

現在は、市役所管轄の下水道組合において主幹補佐として業務課に配属され 4 年目。部下指導も行う管理職も兼ね料金関係全般を行い勤務している。

これまでの主な経歴

地元の工業高校を卒業後、下水道組合に就職。技師補として処理場の維持管理係に配属され、処理場の運転操作、監理、点検、修理、清掃に従事。その後、技師 5 年、主任として管理、設計、監督を 9 年、主査として処理場建設、監督を 10 年経験。39 歳から 2 年間、市の道路管理課へ水処理センターの維持管理全般、道路の補修、設計、監督のために出向を経験する。32 年間、下水道関係の仕事に一貫して従事している。

初職への移行

この下水道組合に就いたきっかけは、市役所に勤務していた親戚の人と就職先の人からの助言のもと勧められて公務員試験を受験し合格。昭和 43 年「下水処理場」の立ち上げでスタートし、タイミングも良かった。同時に、高校の工業科を卒業していた関係で技術者が求められている時代背景であった。

仕事内容

初職 技師補

昭和 48 年に技師補として下水処理場の立ち上げに伴い維持管理係（12 年間）に所属し、点検・運転操作・監理、修理・清掃に当たる。

2 職 施設第一係（5 年間）主任

3 職 施設第二係（2 年間）

処理場の建設関係に従事。

4 職 建設課（2 年間）主査

監督業務を遂行。

5 職 市役所の道路管理課に出向（2 年間）

道路の補修、設計、監督を行う。

6 職 水処理センター（6 年間）の維持、監理全般

最後の年に主幹補佐に昇任。

7職 主幹補佐

業務課に配属され、料金係全般と部下の指導を伴う管理職に就き、4年目を迎えている。

自分にとっての転機とは

これといってなかったが、強いて言うならば、市役所の道路管理課に2年間の出向を経験したこと。

転機に対する家族・周囲の反応

転機という転機ではない出向（自宅からの通勤）であったため、家族から特に出向に対する反応はなかった。

教育・職業経験・自己啓発など重要な活動

公的には、昭和48年次の就職直後の集中研修（21日間）、昭和59年次の管後研修（10日間）の2つであり、専門的知識が身につき、とても良かったと思う。特に、下水処理場の維持管理部門で水質管理、いわゆる微生物処理上の管理においては有益だった。また、下水管敷設後の維持管理はあまり知られていなかったために重要な研修になった。そのほかは、公務員の初級研修、中級研修を受講。

私的には、高校時代に英語クラブに所属していたこともあり、就職直後から2年間夜間の英会話学校に通学。もし役所に就職できなかったら、英会話を生かせるような会社に行きたかったという思いもあった。また、IT革命のあおりを受けて付いていくために45歳のときに1年間のうち何回かパソコン講習会に参加。場所は、近くの情報処理課程のある高校。

影響を受けた人・本など

初めての就職に際して親戚の人の勧めであったため、このときの親戚の一言が自分の人生を方向付けた。

自分にとっての仕事の位置づけ

仕事は、人生そのものである。ここ10年は特に長いようで短かった。ここで30年間仕事をしてきたが、正直、5年間ぐらいIT改革でパソコンの普及で新たに勉強せざるを得なくなり戸惑いを感じている。

これまでの職業経歴を振り返っての評価

「長いようで短かった」。良かったと思う。友人の中で失業中の者もあり、職を見つけているようである。安定していると思う。当時としては、今の選択というのは若いなりにいい

チャレンジだったし、誇りを持ってやってきたと感じている。しかし、ずっと同じ職場にいて仕事してくると最終的には人間関係が出てくる。1つのことを極めるのもいいが、どちらかと言うとどうしても視野が狭く見えるような傾向が出てきてしまう。視野を広げる意味でもいろいろな職場を経験することを大事に思っているようである。

将来・今後の展望

公的には、公務員としての倫理。それは、今後公務員に対して厳しい目が向けられるので自分および職場全体の綱紀粛正を図ること。指導的立場で部下を育成すること。

健康について（本人と家族）

普通に健康である。結婚が遅く、子どもがまだ小学校でありこれからが大変なので健康に気をつけたい。

ケース 50

男性 50 歳

家族形態 妻、子ども 2 人

現在 自営業（建築設計室）

インタビュー場所 地域コミュニティセンター会議室

現状と今の仕事

現在、4 年前の 2000 年に自分で建築設計室を興し、従業員なしで建築設計の自営業をしている。日本では、もともと設計事務所自体、苦しい。大工さんがすべてをやっていく傾向があるため、設計にお金をかけていく意識が低い。したがって仕事の話も少ないことが言える。どうしても友達の友達、親戚の親戚など仕事を請け負う関係が限られている。

起業する上での苦労は基本的には、設計にお金を払う意識がゼロで、設計料としてお金を払い納得してもらうシステムが一般的になっていない。

今は、実績作りをしている状況である。現実的には厳しいが、社会の認識（設計に金を払う）が変わってほしい。

これまでの主な経歴

高校卒業し 1 年間浪人生活を経て私立大学工学部へ進学。卒業と同時に建築設計会社に就職。倒産。転職、2 回目の転職。希望の会社で、そこで勉強したかったが会社が閉鎖に追い込まれる。再就職するために他の会社を探したが、年齢的に厳しくやむなく自分で会社を興すことになった。

初職への移行

高校卒業・大学進学を決めるときに中学・高校から図工で絵を描くことや何かを作ることが好きであった。初職への動機は、夏休みの宿題のテーマがいつも同じで面白みがなく、何か自分が好きで作れるものとはっきり描いている。ある程度お金も儲かり、自分の造った家を使ってもらえる、しかも自分の造った家がいくつかあるということになればいいと考え、建築学科を選択・進学した。大学（工学系）卒業、建築会社へ就職し設計を担当する。

仕事内容

初職 正社員として建築設計

2 職 建築設計を担当

3 職 出身地に近く、働き甲斐のある会社と考え転職するも倒産

4 職 建設設計（独立）

否応なく独立して自分の設計室を立ち上げる。一貫して建築設計に携わってきている。特

に換気系統の設計を主に行ってきた。空気の流れて冬は暖気を逃さず、夏は涼しい風を流すようにする。

自分にとっての転機とは何か

始めは、初職の会社の倒産・転職であり、次が、自ら転職し会社を移ったこと。会社倒産により就職活動をするも年齢的な問題で就職できず、否応なく独立せざるを得ない状況になった。

転機に対する家族・周囲の反応

「仕方ない」として受け入れてくれているようである。

教育・職業経験・自己啓発など重要な活動

初職の建設会社の研修に参加したくらいでほとんどないが、資格として1級建築士取得。そのほか、つい最近、「応急判定士」の資格を取得。しかし、職業的に具体的なメリットはないが、地震や台風による被害を受けた家屋の判定を行い、招集がかかれば手弁当で参加するボランティアのようなもの。

影響を受けた人・本など

建築会社の先輩設計士。

自分にとっての仕事の位置づけ

一緒の会社にいた先輩や他の人たちとも、若い人は別にしてほとんどがずっとこの会社でやっていこうという話はしていることはしていた。だから、30代頃は、なんとなく会社は会社、家は家。まあまあ土日が休みのところが多かったので、会社は、月曜日から金曜日まで、家に着いたら自分の時間、家庭の時間だという意識は大分強くあった。

しかし、今は、土日だろうが何だろうが、(仕事の)話しがあるときは関係ないという感じで関係なくやらなきゃいけないということがまあある。ちょっと厳しいといえれば厳しい。

これまでの職業経歴を振り返っての評価

1つの建物を作ることに於いて、一番上(総責任者)でやっていない、すべてのことを把握して責任者としてやっていない、細かいことと同様に全体を把握していきながらお客さんと相談・決定していくことの経験がなかった。今は、細かいことを全く知らなくても家はできる。

自分は甘い人間だから独立するのは無理だろうという意識はあった。基本的にやるつもりはなかった(独立)。そういう状況に追い込まれてしまったので、しょうがないなという感じ

でやっている。

将来・今後の展望

先が見えない。とにかく今精一杯仕事に向かっている。

最初から独立すると思えば、準備をしていたが・・・。設計事務所協会、会社設立・・・簡単には事務所登録関係などできるが、実質が伴っていないのが苦しい。

先輩があちこちいるので、声をかけてはいるが、先輩もなかなか苦しいので、そう簡単には仕事を分けてもらうことはできない。今のままではまずいので、もう少し仕事量を増やすのが一番。アルバイトみたいな仕事でもいいからいつも仕事があるように日常的に回転するシステムになれば少しは上を向いてくれるかなと考えている。

健康について（本人と家族）

家族皆健康を維持しているが、妻は、少し高血圧気味。

ケース 51

男性 50 歳

家族形態 義母、妻、子ども 3 人

現在 自動車の販売・整備

インタビューの場所 対象者が指定したホテルのロビー

現状と今の仕事

親戚が開業した自動車販売・整備など自動車のことを全般的に扱う会社に勤務

これまでの主な経歴

高校の農業科を卒業後、自動車整備学校に進み整備士資格取得。大手自動車会社で自動車整備工として働く。昭和 54 年からは販売業務を行う。平成元年からは現職。

初職への移行

出身地が山間部であり、成績もあまり良くなかったため実家から通える高校（農業科）に進んだ。バイクに乗ることや車のことが好きだったので、なんとなく成り行きで進路（自動車整備学校）を決めた。技術的なことは、あまり好きではなかったのだが、近所に同じ整備学校に進んだ知人がいたのも影響した。当時は様々な就職先が選べたが、「まあ、いいか」というような軽い気持で進路を決めた。氏が生まれて間もなく母親が亡くなって、祖母に育てられたので、実家から離れたくないという思いもあった。

仕事内容

初職 自動車整備工

自動車整備学校で学び整備士 3 級の資格をとった後、出身校の関連企業に自動車整備士として勤務した。整備士として働く間に会社の指示で整備士 2 級資格検定を取得した。元来、車の技術関係のことは好きでなかったので、「本音を言えば、しょうもないことをやるな」という気持で働いていた。自分ではそれなりの仕事はできたとは思うが、向上心はなかった。

2 職 自動車販売

4 年半自動車整備の仕事をしてから、会社の勧めもあり販売に異動した。その当時、丁度結婚して養子に入ったので、その婚家のある地域の人に自分を知ってもらうため販売の仕事は都合が良いと思ったことと、車を売ればそれだけ収入が増えるのが魅力だった。ノルマが厳しく夜中まで働く日々だったが、顧客とのつきあいを大切に働いてきた。11 年間勤務し、昭和 58 年からは販売課主任となった。収入は高く、仕事にやりがいや充実感を感じていた。

3 職 自動車販売・整備などの自動車全般についての仕事

平成元年、実家の近くで親戚の人が車関係の会社を興した際に誘われて異動した。大手自動車会社での仕事にも飽きてきた時期だったのでいいかと思った。当初は自分がこの会社を何とかしてやりたいという思いがあって張り切って働いたが、最近は窓際かなあと思うようになったということである。

自分にとっての転機とは何か

大手自動車会社を辞めて現在の会社に異動したこと

転機に対する家族・周囲の反応

長男が4 - 5歳の頃で、「大手自動車会社に勤めているお父さんが自慢だったのに」と言われた。

教育・訓練経験・自己啓発など重要な活動

勤務後、会社の指示で自動車整備士2級資格、保険普通資格を取得した。勤務先で、顧客心理をつかむための研修などを日常的に受けた。

影響を受けた人・本など

上司に恵まれ大事にしてもらい育ててもらった。いつも見てもらっていたんだと思う。落語が大好きで、特に枝雀が好きで、毎日テープを聴いている。この4 - 5年、仕事にやりがいを感じられなくなって、代わりの物を探しているうちに落語を聞くようになった。

自分にとっての仕事の位置づけ

家庭があって仕事があると思っている。家庭がうまくいくために仕事がある。

車が売れて利益があがることよりも、事故の示談がうまく進んだ時や顧客の悩み事の相談に乗り問題解決したときに充実感を感じる。

これまでの職業生活を振り返っての評価

それなりに給料ももらってきたし、健康で普通に暮らして来られたのでこんなものかと思う。最終的には、評価は他人がしてくれるものと思っている。

将来・今後の展望

あと10年か15年、このまま仕事をしないと行けないと思う。車屋であるかどうかはわからないが、自分に与えられたことを普通にやって行きたいと思う。あまり自分がこうしたいという欲はない。それよりも、子ども3人がうまくいくことを望んでいる。

健康について（本人と家族）

物心が見つからないころに大怪我をしたために片足が不自由であるが、生活に支障はない。

ケース 52

男性 50 歳

家族形態 父、妻、子ども 2 人

現在 機械組み立て工場の倉庫に勤務しつつ、地元の博物館学芸員として活動
インタビューの場所 駅近くの喫茶店

現状と今の仕事

平成 16 年から県内の機械組み立て会社（中規模）の工場（液晶をつくる工場にむけた機械組み立て）の倉庫に勤務している。その一方で、県の博物館学芸員として活動。

これまでの主な経歴

地元の普通科高校を卒業後、1 浪して近県の私立大学経済学部に進学。卒業後すぐに、日本国有鉄道に入社し、近県で 4 年ほど駅業務を行った。その後、6 年間情報通信・情報処理の業務に就いた。国鉄の民営化に伴い鉄道のシステム建設を行う企業に 3 年間勤務した。平成 2 年に転職し、情報通信・営業の業務に従事。平成 11 年には勤務先が外資企業に買収され、品質管理の業務に従事。平成 15 年にはリストラを受け退職、地元に戻り平成 16 年より現職。

初職への移行

知人の紹介があって国鉄に採用された。特に鉄道が好きというわけではなかったが、周囲の人たちが皆、国鉄は安定していると言うので入社を決めた。氏の実家は専業農家（耕地は広くない）を父親が営んでおり、住民の多くが農業をしながら国鉄に勤めている地域の出身者なので、そのことが職業選択に影響したのではないかと言うことである。

仕事内容

初職 国鉄駅業務（4 年ほど）

2 職 情報通信・情報処理

就職後 1 - 2 年目で国鉄が民営化されることが決まり、新規採用が無くなった。情報処理の仕事が増えてきたために、国鉄の職員の中から情報処理の仕事をする人を採用する動きがあり、駅業務から情報処理の業務に移った。情報処理の知識は会社内の教育で身につけた。元々経済学部の出身なので電気関係のことは詳しくなく、自分にはあまり向かない仕事だなあとは思っていた。

3 職 システム建設

関東のシステム建設をする部門への転勤の話があったので、栄転と受け止めて異動した。関東には地縁がなく、先輩もおらず、国鉄というぬるま湯の中で育ったので人間関係に苦労

した。

4 職 情報通信・電話局

社員を大勢募集していたので、これまでの仕事や資格を活かせると考えて異動した。自分は IT バブルの恩恵を受けたと思う。もともと経済学部出身なので、理論的な裏付けが無く仕事を見て覚えたという感じが強い。趣味（ジョギングや登山）を通じて知り合いになった友人達の支えなどがあってやってこられたと思う。

5 職 営業・品質管理

会社が外資系の企業に買収されることになった。英語があまり得意でなかったので、プレッシャーを受けた。徐々に世の中の通信の仕方が変わってきて、やりがいがある仕事ではあったが、かなり技術的に難しさを感じるようになった。上司が外国人というのもプレッシャーだった。英語が必要なので勉強をしたが、ちょっと始めるのが遅かったと思う。そうしているうちに会社の経営状態が悪化し、リストラ対象として肩たたきをされた。単身赴任が長くなっていたので退職して地元に戻った。

6 職 倉庫業務

10 ヶ月間の失業期間を経て現職に就いた。年齢も 50 歳近くなっているのに、現在の工場しか職場が得られなかった。液晶画面に使う薬液を作るための機械を組み立てる工場の倉庫に勤務しているのだが、20 代の人ほとんど占めており世代間ギャップを感じている。就職してから給料の遅配が多いので、今の仕事がいつまで続くのかという先行きが見えない不安を感じている。

自分にとっての転機とは何か

- ・ 駅業務から情報関係の仕事への転換
- ・ エコ関係への仕事の転換

転機に対する家族・周囲の反応

家族は安定した収入を望んでいる。結婚が遅かったので、まだ当分の間子供の教育にお金がかかるため。

教育・訓練経験・自己啓発など重要な活動

企業内教育を受けた。4 職に就いたときには英会話を 2 年間自己負担で学んだ。外資系企業に勤めていたときにも 6 年間英会話を自費で学ぶ。

平成 13 年には、将来地元に戻り、農業に就くことを想定していたので就農準備校に通った。平成 14 - 15 年には、法科大学院の受験を考えて大学の通信教育などを受けた。

地元に戻ってからは、地域学芸員の養成講座を受けた。

影響を受けた人・本など

実家が専業農家だったこと、親からも農業を継ぐように言われていたため、農業をやっていくんだらうなあと子供の頃から思っていた。大学に入る頃、母親が亡くなって農業ができなくなり、父親が勤めをするようになったので、農業から遠ざかったのだが、自然相手の仕事というのは小さい時から植え付けられていた。

農家で育ったため、自分で切り開いていくのではなくて、親の後を継いでいくという考え方に縛られていたところがある。祖父には世渡り上手になれということと言われていたので、世間並みの波に乗って生きてきた。また、新しい波に乗りたいと思っている。それが、自分の人生観である。

自分にとっての仕事の位置づけ

仕事人間ではない。仕事と趣味、半々でやってきた。趣味を楽しむために働いているというところがあった。

これまでの職業生活を振り返っての評価

時代のいい波に乗って来られた。

将来・今後の展望

博物館関係の仕事と農業をやって生計を立てていきたい。関東にいたときに、自然保護指導員の資格をとっていたので、地元に戻ってから里山関係の活動グループに入ってイベントに参加していた。県が去年くらいから、博物館構想を始めて、地域学芸員の養成を始めたのでそれに参加した。里山案内などのボランティアを続けながら、将来的にはエコ関係の仕事をしていきたいと考えている。博物館ができたときには、その事務局員として働きたいと考えており、現職はそれまでのつなぎという意識がある。

健康について（本人と家族）

- ・現在のところ、家族は健康である。
- ・自分は換気の悪い倉庫の中で働いていて、夏ばてを常時感じている。物事に対して、感動とか反発心とかを感じなくなっている自分がある。先行きの不安もある。

その他の特記事項

自分の子供には、自分がやりたいことにチャレンジして欲しいと思う。チャレンジして失敗してもいいんじゃないかと思う。

ケース 53

男性 50 歳

家族形態 父、母

現在 店頭接客販売（パートタイム）

インタビューの場所 駅前の喫茶店

現状と今の仕事

独身で両親と 3 人暮らし。48 歳からホームセンターのパートタイマーとして店頭接客販売を行う。

これまでの主な経歴

私立大学経済学部卒業後、医薬品卸売業の社員として倉庫での商品管理を行う。2 年 2 ヶ月後、家電量販店に転職。店頭での接客販売を主に行い 46 歳で退職。2 年間ほど求職活動を行って 48 歳から現職。

初職への移行

大学卒業当時、ロッキード事件があり、企業の社会的責任についてよく言われていたので、社会的に責任のある仕事がしたいと思っていた。しかし、就職活動の時から将来への考え方が頼りなく、何となくなるようになるだろうみたいな考えがあった。医薬品、食品関係、文具関係の企業を受験した中で、最初に合格通知が届いたところに就職を決めた。早く就職先を決めたかったこと、会社の内容も悪くは思えなかったのですと決めた。

仕事内容

初職 医薬品卸売業の倉庫での商品管理（2 年 2 ヶ月）

会社説明会では、当社は健康産業であって、非常に社会的責任が重い仕事であるということだったが、実態はそうでなかった。商品管理をやっていると薬害の情報が入ってくるが、絶対に口外しないようにという指示が入り、その後も取引先からの注文は続くという実態があった。医師から何種類かある薬の違いを教えてほしいという電話があっても社員は誰も答えられない。取引先の病院への多額な贈り物や接待をして、その病院から大量の注文が入るというような実態をみて、何となく嫌気がさし、辞めようと思った。ちょっと短気を起こしたと言うところもある。

2 職 家電量販店店員（主に店頭での接客販売 23 年間）

職探しをしている最中に、大学生時代にアルバイトをしていた家電量販店の社員に偶然会い、「来ないか。」と誘われて面接を受け、何となくずるずるとその会社に入った。1 年間は準社員で、1 年後に試験を受けて正社員になった。その間は、精神的にも落ち着かないし、

友人に顔を会わせても言いにくい面があった。大学時代にアルバイトをいろいろ経験していたので、仕事の内容には戸惑いはなかったが、週末働くのは気が重かった。職場は和気あいあいとしており人間関係が良く、全体的に見れば非常に楽だった。目標管理も甘くて、ぬるま湯のような会社だったと思う。

平成2年からは売り場のリーダーとなった。数字の追求がそれまでよりきつくなったことと、提出物が増えることはあったが、そんなにきついとは思わなかった。楽しくもないが、長時間勤務であってもそれをこなせると思えるところがあった。店舗改装プロジェクトのメンバーになり、売り場の計画や取引会社との折衝などが続いて、幅広く物が見えるようになった。

平成3 - 4年にかけて、会社が新規事業として、おもちゃ、雑貨などを取り扱うようになり、その担当になった。一番やりがいのある時期だった。きちんとした理念を持って仕事をすることが大切だということに気づいた。部下にも目標を持たせて、自主的に仕事をやらせようようにしなくてはいけないと思い努力した。

阪神大震災の少し前あたりに、創業者の長男が経営者になった。社長が煙たい人を追い出し、ピントはずれの指示を出すようになった。このあたりから、仕事のやりがいが薄れ、収入も減じた。阪神大震災の影響もあり、会社の経営が難しくなってきた。倒産の4ヶ月前に面接があって、辞めて欲しいんだなと感じた。このままいったら倒産するだろうと薄々感じていたことと、退職金が全額支給されるうちが良いだろうという判断で46歳の時に退職した。

3 職 現職

2年間の失業期間は、ハローワークに通ったり、就職試験を受けたり、両親の病気などがあり就職活動ができない時期もあった。最初の1年は失業保険がでているので気持の上での余裕があったが、2年目はお金が使えないし、友人つきあいも難しくなるし、本当にどうしようかと迷った。平成15年12月に知人の紹介で現職に就く。ホームセンターで商品の発注・陳列、接客などを行っている。パートタイマーとして勤務しているが、正社員にはならないほうがよいなと思っている。正社員はとにかく長時間労働で体を壊しかけている人もいる。新たに職探しをしなければいけないかなあという思いもあり、時々ハローワークに行っている。

パートタイマーとして正社員から仕事の指示を受けるのだが、指示がバラバラで困る。

自分にとっての転機とは何か

初職を退く決意をしたとき。

転機に対する家族・周囲の反応

色々な人から、退職理由について「そんな理由で辞めて良いのか」「世の中汚いですよ」

などと言われた。退職するには、自分だけでなく他の人も納得させられるような理由がないのだなあと思った。

教育・訓練経験・自己啓発など重要な活動

企業内で POP（広告宣伝物）、パソコンの研修を半年ほど受けた。

社会保険労務士の資格を取ろうと思って仕事をしながら通信教育を受けたが、合格できなかった。

影響を受けた人・本など

10 人程度の従業員でやっている店では、「いらっしゃいませ」と声をかけていても商売にならない。お客様が「家に来て、ちょっと見て欲しい」と言えばすぐに対応すること、自分が居ない日に来店したお客様が、「〇〇さんが居ないなら、また別の日に来ますわ」というような、家族的なつきあいのある客をどれだけ持っているかが仕事の楽しみにもなってくる。そういうお客様をどれだけ作れるかが仕事の楽しみにも、個人の実績にもつながるということを先輩社員から教えてもらった。非常にこまめに動いて、客の立場になって働くということについて大きな影響を受け、仕事が楽しい時期があった。商品を見る目を養うことについても、大きな影響を受けた。

自分にとっての仕事の位置づけ

時間で言えば仕事が半分以上を占めていた。しかし、仕事オンリーの生活ではなく、がむしゃらさが足りないと言われていた。仕事を充実してやっているときほど、よく遊んでいたと思う。

これまでの職業生活を振り返っての評価

もっと強い気持で将来のことを具体的に計画して、仕事に役立つような勉強をしておくべきだった。何となく流されていたと思う。

将来・今後の展望

学生時代から趣味で占いを勉強してきて、今は無料でいろいろ相談に乗っているのですが、開業してみようかという気持もある。しかし、知らない人の悩みを聞いていると嫌な気持ちになるので商売にするかどうかは踏み切れないでいる。職探しもしているのですが、初心に戻って何かできればいいなあとも思うが、現実には厳しい……。

健康について（本人と家族）

35 歳の時から緑内障の治療を受けている。母親は 7 年前に悪性リンパ腫になり、一応完治

したとは言われているが、しんどいようだ。父親は神経難病で手すりを持って支えてもらって何とか歩けるぐらいで、ほとんどベッド上での生活を送っている。

その他の特記事項

失業という経験を通して行政に望むことを次のように話された。長時間労働を避ける政策を勧めて欲しい。長時間労働だから体を壊すし、健康不安を抱えて生活している。労働基準法の範囲に押さえれば、雇用範囲も広がる。また、経済的な保証があるなかで就職につながる職業能力獲得のための支援をしてもらえると助かる。雇用保険の支給期間の延長も考えて欲しい。本当に職を探している人には手厚い雇用保険の支給をして欲しい。

企業は求人を出すときに年齢や性別を本音で出さない。実際面接に行ってみると、もっと若い人が欲しいとか、女性がよいとかいうことがある。職探しに余計な時間を使うことになるので、これは止めて欲しいと思う。

今勤めている会社でも、20歳代の人ほとんどがフリーターで、こんなことでいいのかなあと思う。高校・大学でこういう仕事をするためにはこういう勉強が必要だということをある程度教えておかないといけないと思う。また、学校で社会保障のことについても教えておいて欲しい。

ケース 54

男性 50歳

家族形態 妻、子ども2人

現在 佃煮製造会社の工場に勤務 責任者

インタビューの場所 駅前の喫茶店

現状と今の仕事

佃煮を製造する会社の工場で製品を梱包する部門の責任者をしている。

これまでの主な経歴

工業高校電気科を卒業後、電気会社に就職しようと思っていたが、兄2人が大学に進んだので親が大学進学を望んだ。2浪して私立大学商学部へ。大学卒業後、日用医薬品小売販売業で店頭販売を行う。13年間勤務し店長まで行ったが、労働条件の改善を期待して現在の会社に転勤する。佃煮を製造販売する会社で営業を担当する。5年後別の地域へ転勤し、9年間百貨店で店頭業務を担当する。3年前に戻り、佃煮製造部門に勤務する。

初職への移行

銀行員を志望していたが果たせなかった。大学時代にアルバイトをした会社のなかで、大学の先輩がいたのが縁で、日用医薬品などを扱う小売り販売業の会社に入社した。接客は特に好きな仕事ではなかったが苦手でもなく、薬に興味があったのでいいかと思った。

仕事内容

初職 日用医薬品小売業の会社で接客（6 - 7年）

入社してみて、接客業は確かに自分に向いていると思った。3年後には店長になる可能性があるというのでそれを目指し、世間でも言うように3年間は我慢しようと思って働いた。

2職 新店舗の店長（5 - 6年）

繁華街にできた新店舗の店長となった。自分の発想で、ディスクジョッキーを使って化粧品を売り、社内で売上の新記録をあげたことが自慢できることである。自分が考えてやったことが結果を出したので会社で評価され、ステップアップにつながった。当時、5人くらいのスタッフがいたが、人を使うのは難しかった。店長クラスが社内に百人くらいおり、競争だった。スタッフを上手に使う方法について先輩や同僚に聞いたり、店長会議で研修を受けたり、本を買ったりした。

3職 ブランド品販売店舗の店長（1年）

勤務先の会社が繁華街でブランド品を販売する新しい業態を立ち上げることとなり、自分に店長がまわってきた。働いてみたが、自分にはブランド商品を扱うのは向かないとわかっ

たので、もとの医薬品部門に戻らせてもらった。

4職 日用医薬品小売業店舗の店長（3年）

元の部門に戻った頃から転職を考え始めた。店長になってからは月に3 - 4日しか休みがとれない状態が続いたが、責任者としてはどうしても休めない。子どもができたにもかかわらず、収入はエスカレーター方式には上がらなくなり、子どもと遊んでやる時間もない状態だった。会社が設定するノルマに厳しさが増し、バブルがはじけるちょっと手前の時期だったので、先を見て今が一つの転機かなあと考えて転職を決意した。

5職 佃煮製造業の営業（4年）

現在の会社に転職し、営業を行った。しかし、休日が少なく、思うように子どもと遊べない日が続いた。

6職 都内の百貨店で佃煮販売（接客・8年）

会社から別の地方への転勤の打診があったので、一度はその地域に行こうと思って転勤に応じた。家族のなかに反対する者もいたが、妻も一度はその地域に行ってみたいというので、勤務先に1時間半ほどかけて通勤した。マイホームを持つことが長年の目標だったので、転勤する際に付く手当や帰省手当の分を貯蓄できそうということが魅力だった。

7職 佃煮製造工場で製品を梱包する現場の責任者（3年）

会社から生産部門に行かないかと打診があった時期と、長男の中学校進学時期が重なったので、帰るのなら今かと思った。長男が言葉のことでいじめにあうことがないように考えた。転勤後は、パート従業員を使う立場になった。自分より年上のパート従業員20人程を動かして、生産性をいかに高めるかということに苦労している。

自分にとっての転機とは何か

日用医薬品小売業から、現在の会社へ異動したこと。会社の目標管理が厳しくなり、系列店との競争を強いられるようになり、週休も満足にとれない日々が続いた。店長として努力してきたが、子どもが大きくなってきて外遊びをするようになっても遊ぶ時間もとれないこと、働きの割に収入は増えないことが原因で、39歳の時に転職した。兄2人が公務員なので、自分も公務員になろうと考えて学校の用務員の試験を受けたが、叶わなかった。小売業はいくら物を売っても限られた利益しかあげられない。強いのは公務員かメーカーだと思っていたので、転職するなら製造販売業がよいと考えた。ハローワークには出向く時間がとれないので、新聞求人欄を見たり、親戚や友人に頼んだりして転職先を探して、現在の会社が製造販売業だということ、年収も多少良くなるということで転職を決めた。

転機に対する家族・周囲の反応

妻は収入の点、子どもとの時間がもてない点などをわかってくれたが、親・兄弟は反対した。兄は2人とも公務員なので、定年まで勤めていればそのうちいいことがあるだろうとい

う考えを持っていた。妻や親は不安だったと思う。

影響を受けた人・本など

同期入社した7人と互いに励まし合い、協力し合ってやってきたこと。「おまえの場合はこういうところが弱いからこうした方がよい」ということをはっきり言ってもらえた。みんなでステップアップしていこうというところが良かった。

自分にとっての仕事の位置づけ

仕事に対するウェイトがほとんどで家庭の度合いが低かった。休日はいつも仕事だったので、子どもの運動会にも行ったことがない。これからは、家庭に少しウェイトを移して、少しでも家庭内での父親としての役割を持って行きたい。

これまでの職業生活を振り返っての評価

評価は「普通」だと思う。もっと欲を持って、目標を高く持って生活すれば良かったと思う。もっと高い目標を自分に課してチャレンジしなければいけないのだが、自分ではやれていないと思う。高い目標を持っていれば、収入や昇進ももっとやれたのではないかと思う。自分の意思の弱さが原因だと思う。

将来・今後の展望

収入的には不満だが、資格をたくさん持っているわけではないので、転職は考えられない。子どもの手が離れたら、夫婦でもう一度関東で暮らしたいと考えている。暮らしやすい所だったので、関東を終の棲家にして、小さなお店をやりたいと希望している。この夢を叶えるために、もっと働いて貯金をしたい。

健康について（本人と家族）

問題ない。

その他の特記事項

ハローワークがあっても出かけて行く時間がないので、再就職活動が難しい。気軽に身近で利用できるデータバンクのようなものがあると良いと思う。

就職のために動くのは本人、行政にはこんなところでこんな情報を得られるという情報提供をして欲しい。今の若者は「行政がしてくれない」等と言って自分から動こうとしないところがあると思う。

ケース 55

男性 50 歳

家族形態 妻、子ども 2 人

現在 市教育委員会課長

インタビューの場所 対象者の職場の会議室

現状と今の仕事

市教育委員会人権教育課長

これまでの主な経歴

近県の公立大学法学部卒業後、中学校教員として勤務。平成 5 年には両親と同居するために実家のある県内の中学校に転勤。市教育委員会指導主事、同課長補佐、中学校教頭を歴任し、平成 16 年度より現職。

初職への移行

弁護士になるつもりで法学部に入ったが、入学してすぐに難しいのであきらめた。公務員試験も法律がいっぱいあって難しいから、教師にでもなろうかなあと考え、大学 3 年の時に決めた。中学の教員をしている面白い先輩に知り合って影響を受けた。一般大学なので中・高の教員資格しか取得できなくて、中学社会科の教員試験を受け、採用された。

仕事内容

初職 公立中学校社会科教諭（17 年間）

長男なので就職は地元にするか随分悩んだが、けんかのたえない両親を見るのが嫌で、実家に帰るのを避けた。その頃はまだ親も若かったので、先輩の勤める県の中学校の採用試験を受け採用された。その中学は人権教育に熱心に取り組んでいる学校だった。教育学部卒業ではないので、毎日の授業を進めるのは大変だったが、学校って面白いなと思った。1 年目は学級担任をし、2 年目からは子供会担当になった。学校は主担任と副担任という複数担任制を取っていたので、昼間は学校で副担任として仕事をして、夕方から地域の青少年会館へ出かけて地域の子供達を集めて学習指導や遊びなどをした。この中学校に 15 年間勤務した後、都道府県間の人事交流制度を利用して実家のある出身県の中学校へ転勤した。面接の際、人権教育について熱弁を奮ったためか、人権教育の盛んな中学校に配属された。平成 2 年からは校外の仕事として、人権教育研究協議会の自主活動部会部門長を 3 年間担当し、「自主活動を創る」という冊子を作成した。

2 職（転勤により配属） 市教育委員会指導主事（8 年間）

実家のある県内の中学校で 2 年間教員をした後、転勤命令で市教育委員会に指導主事とし

て転任した。教育集会所に勤務し、子ども達が放課後から夜にかけて集まってくる「自主活動学級」で学習指導や自主活動に参加しない子どもの家庭訪問や相談などを行った。

3職 公立中学校教頭（転勤及び昇進。在職は1年間）

教頭として教員の指導、学校内部のとりまとめ、施設整備、文書作成などの業務を行った。

4職 市教育委員会人権教育課課長（転勤により配属。現職）

自分にとっての転機とは何か

小さいときから激しい両親のけんかを見て育ち、自分を無感動にすることでそれに対処してきた。人が泣いたり、喜んだり、そんなの自分には関係ないだろう、人間というのは結果が一番ではないかと思って育ってきた。学校の成績が良かったこともこのような考え方をすることに影響したと思う。

それを変えさせてくれたのが、教員になって2年目の出会いだった。赴任した中学校は大変荒れており、学校を修復するために子ども達が親と向き合うことができるための取り組みをしていた。この取り組みを勧めるためには、教員である自分自身が自分の両親と向き合う必要があった。それまでけんかばかりしている両親が嫌でたまらなかったのだが、けんかをせざるを得ないような時代の中で両親が生きて来たのが取り組みの中で見えてきた。その時に、両親のおかれた時代的背景が見えていなかった自分が情けなくて、子ども達に語りながら涙が止まらないという体験をした。同時に、人間って実績じゃあない、気持なんだと思うようになった。今、携わっている教育っていいなあ、あったかいなあと人のぬくもりを感じた。

教育・訓練経験・自己啓発など重要な活動

最初の職場は、新人に対する研修システムがしっかりした中学で、教員とは何かを教えられた。

影響を受けた人・本など

最初の職場の校長と教頭に可愛がられ、育てられた。最初に一緒に担任をした先生の保護者への接し方などは、自分の一つの目標になっている。

教員になって7年目に担当した子どもへの関わりを通して、教師の思いこみでいろいろやっても、それは勝手に教師がやっているだけで、自己満足に過ぎないと思うようになった。子どもがその取り組みを通してどのように変化したのか、また、教師自身も子どもたちと一緒にどのように変わって行ったということがない限り、教師の自己満足に過ぎないと思うようになった。

自分にとっての仕事の位置づけ

仕事の比重が大変高かった。休みの時は家族旅行をすとか、地区の活動には子どもを連れて参加するなどのことはしてきた。家族の支えがあって仕事ができきたと思う。

これまでの職業生活を振り返っての評価

結果的にはよい職業選択だったと思う。親が子どもにける想いとか、一所懸命生きている親の生きざまなどについて子どもや保護者と話し合える仕事は、今になってすごく幸せな仕事だと思う。満足感は大変高い。

将来・今後の展望

管理職として学校に戻り、若い教員を育てたい。生徒指導、学級集団づくりなど、自分が若手の時に先輩から教えてもらったことを伝えて教師の力量を高めていきたい。

健康について（本人と家族）

人間ドックで肥満など多少の指摘はあるが、他は問題ない。家族も健康である。両親は数年前に相次いで亡くなった。

ケース 56

男性 50 歳

家族形態 妻、子ども 3 人

現在 コンピューター関連企業の関連会社へ出向 営業部の課長代理

インタビュー場所 駅ビル内喫茶室

現状と今の仕事

平成 2 年から 5 年（既に随分と経過している）、この出向は片道切符だと理解している）の約束でコンピュータ関連企業から出向し製造メーカーの工場を立ち上げる時の SI（システムインテグレーター）の営業の仕事をしている（社員 200 名＜プロパー 10 名、残りは全員出向＞）。

これまでの主な経歴

学校歴

昭和 45 年に中学校を卒業後し当初は大学進学を希望していたので普通高校へ進学したかったが父親が病気になったので将来のことを考えて地元の工業高校の機械科に進学した。高校に入学してからも大学の理工系に進学してコンピュータ関係の仕事に就きたいと思っていたが、父親の病気が改善しないために諦め昭和 48 年に高校を卒業した。

職業歴

昭和 48 年に工業高校を卒業しコンピュータ関連企業に入社。1 年間の教育期間を経て昭和 49 年 5 月から平成 2 年まで近県の工場に勤務。1 年間は補助的の仕事をして昭和 50 年 6 月に公募で SE となった。

初職への移行

父親が病気であるために経済的理由で大学への進学を断念した。（後悔しているのは現在のよう進路指導が高校で行われていなかったので奨学金制度を利用して進学することが出来るという情報を高校の先生から提供してもらえなかったこと。）

就職してもいいという会社が造船や公団など 3～4 社あり、最後にコンピュータをやりたいという希望を叶えるために 2 社が候補として残った。どちらにするか迷っていた時に 10 歳年上の兄（28 歳くらい）から、現在の企業に仕事で行ったことがあるが、いい会社だと勧めてくれた。本来はもう 1 つの企業に行きたかったが高卒ではレベルが違い過ぎる。もし、運良く入社したとしても苦労するのは見えていたので諦めた。

両親は就職に関しては何も干渉をしなかったので影響はまったく受けなかった。

仕事の内容

初職 作業員（1年間の研修期間を経て）

昭和48年4月～昭和49年3月までの1年間は教育訓練を近県で受けたので研修生としてスタートした。

昭和49年5月～昭和50年6月まで別県の工場で作業員となった。

2職 オペレーター

昭和50年6月にSEの社内公募があったので応募したら合格したので、またSEとしてのOJTを受ける。しかし当時SEはオペレーター、プログラマー、SEと三段階になっているので高卒の自分はオペレーターしかやらせてもらえなかった。結局は28歳までの8年間オペレーターをしていた。独創性の高い仕事をやらせてもらえない。学歴の壁の厚さを思い知る。オペレーターしかやらせてもらえないので、転職するか大学に入りなおそうかと色々と迷った。

3職 プログラマーとSE

入社10年目、28歳の時に係長から抜擢されてプログラマーを経てSEとなった。

自社のノウハウを外に出さずに自社の営業システム、会計システム、物流システムを構築するという仕事。特に会計システムに10年、生産システムと物流システムに10年携わった。会計システムは会計の締め切りを月末でおこなえるようなシステムを構築した。出向前の仕事は物流システムが構築していなかったので外部のSEを50名くらい使って仕事をマネジメントしていた。コンピューターを内外に間違えて出荷することが多く、少なく出荷した場合には苦情があり、多く出荷した場合には苦情はないという状況であったので、このシステムを作り上げた。相当に苦労をして作ったシステムであり命がけの仕事でもあった。

4職 出向

当初は物流システムの継続の仕事をしていた。しかし3年まえから営業、SIという仕事をするようになった。いままではシステムを作っていたが、そのシステムを外部にも販売していくという仕事になった。顧客も不特定多数であり狭い鳥かごから放り出されて仕事をするという感じ。ビジネススタイルが変わった。1対1の商売ではなくコンソーシアムで戦っていかないとビジネスが獲得できないので、その企業と企業のコーディネイトの仕事をしている。交渉とか調整能力を必要とされている。

自分にとっての転機とは何か

- ・就職する前.....父親の病気が長引いたので大学に進学できなかった。大学に進学できなかったことで随分と人生が変わったと思う。
- ・1回目.....入社2年目に社内公募があり10倍の倍率にもかかわらず合格して作業員からオペレーターに職種転換できたこと。
- ・2回目.....26歳位の時にどうしてもオペレーターの仕事に創造性がなく充実感がなかった

ので転職しようとしてハローワークなどにも通った。取引先の会社ではあったが知っている会社に内定が出た。それを上司である係長に申し出ると止めてくれた。しかし内定まで出たので、どうしてもなくなって病弱の父親を車に乗せて、相手の会社の社長に謝りに行ってもらった。病弱で老人の父親が頭を下げてくれたことと結婚をしたばかりだと聞いて相手の社長は内定を取り消してくれた。

- ・ 3回目.....入社 10 年目、どうしても仕事がおもしろくないので転職するか大学に入り直すか再度迷った。その時に斜めの関係の上司から声を掛けられ子会社のプログラマーとして抜擢された。
- ・ 4回目.....平成 2 年の出向。
- ・ 5回目.....出向先の候補が 2 つあったこと。
- ・ 6回目.....平成 13 年に SI の仕事をするようになったこと。

転職に対する家族・周囲の反応

転職や出向はサラリーマンの妻として覚悟していることなので、特に反応はなかった。

教育・訓練経験、自己啓発など重要な活動

- ・昭和 48 年 4 月～49 年 3 月まで高卒の新入社員のうち幹部候補生だけ近県で研修があった。
- ・昭和 50 年 6 月に社内公募（SE=オペレーター）に合格した後に社内での OJT を受ける。
- ・SE になってからは毎年の講座を受講。

中堅社員教育、経理に関する教育、キャリアに関する教育

階層別、職種別と 2 階建の研修制度となっている。カリキュラムがしっかりしていて今までにどれくらい受講したかわからない。

教育訓練のシステムの評価.....数字的には 10 段階で 6.5 点であるが、相当にシステム化した教育体系であり、満足をしているという。教育訓練に救われたこともある。

- ・情報処理の国家資格を取得。
- ・システム監査という資格を取得したいと思っているが、監査の実務がないから合格するのは難しい。なかなか受からないので諦めた。合格率は 2% という狭き門である。
- ・それ以外は自己啓発として資格を取ることは仕事中心だったのであまりできなかった。大学への進学をしたいと思って勉強をしたこともあったが、仕事の疲れで長続きはしなかった。

影響を受けた人・本など

- ・オペレーターからプログラマーを経て SE に引きあけてくれた経理部長。

実際には直属の上司ではなかったが、経理システムの構築で関わりをもって仕事ぶりを見て推薦してくれた。しかし、当時は経理部長が推薦してくれたとは知らなかった

- が 40 歳くらいになった時に偶然に知った。自慢しないこういう姿勢には好感を持てる。
- ・転職しようと思って行動に出た時に止めてくれた係長。
 - ・両親から直接的には仕事の影響は受けていなかったが、仕事観とか人生観で両親の影響を受けている。転職の内定先の社長に黙って頭を下げてくれた病弱な老人である父親の影響は相当にある。

自分にとっての仕事の位置づけ

仕事は大好きである。すべてではないが命がけで行えるものである。

これまでの職業経歴を振り返っての評価

経理システム、物流システムを構築したという自負もある。よくやったと思う。周囲からは言葉などでの評価を受けたがノンキャリアは社内での評価を受けるかという別の話になる。例えば実績を上げれば昇格するかというと、学歴がものをいうので別の話である。従って、プロフェッショナルとしての評価は受けたと理解をしている。

将来の展望

- ・過去の人脈を含めたキャリアをベンチャーとかに生かしたい。支援したい。
- ・方法はわからないが若手を育てたい。

健康について

40 歳でストレス系の心筋梗塞で命が危なかった。残業を月に 100 時間を超していた。過労死寸前の仕事の仕方をしてきた。

46 歳か 47 歳の時に胆石で胆のうの除去手術をした。食事制限があるようになった。

趣味・スポーツ

- ・ゴルフ、筋力トレーニング、登山、山スキー
- ・興味をもっているのは農業とかバイオ、環境など、知識人と自主的なグループを作って勉強会をしている。

家族との関係

家族がいたからこそ、ここまで仕事をする事ができた。家族には感謝している。妻は最良のパートナーである。

ケース 57

男性 50 歳

家族形態 父、母、隣に妹家族が在住

現在 市役所の職員で市立病院の庶務課で病院の設備関係の保守点検等をしている。

インタビュー場所 駅近くのホテルの喫茶室

現状と今の仕事

市役所の職員として現在は市立病院の庶務課で病院の設備関係の保守点検をしている。具体的には病院の給排水、空調、病院施設の管理を含めた保守と点検。駐車場の配車係りなど雑用一般。

これまでの主な経歴

学校歴

昭和 45 年に中学校を卒業し、農業高校に進学した。

職業歴

昭和 48 年に高校を卒業し、株式会社へ入社した。昭和 50 年 8 月までの約 2 年半の勤務の後に退職。退職後は現在でいうフリーターとして昭和 52 年 6 月までの約 2 年間過ごした。

半年、婦人服印刷作業、自動車ワイパーの組み立てに 1 年アルバイトとして勤務した。残りの半年は旅行などをしていた。昭和 53 年 7 月～昭和 56 年 3 月までスーパーマーケットに勤務、昭和 56 年 4 月～市役所の市立病院に勤務

初職への移行

大学への進学は能力的な問題がありまったく考えていなかったのので、何の疑問もなく就職することを決めていた。当時は「金の卵」と呼ばれていた時代なので 1 人の高校生に数社の企業から誘いがあった。その中で選択した理由は電車に乗って働きに行きたくなかったのので徒歩圏内にある会社にしたという。

仕事の内容

初職 製造・梱包

昭和 48 年 4 月に株式会社に入社し製造・梱包の仕事を数ヶ月担当した。

2 職

その後はボイラーの資格を取得したこともあり営繕・保守管理の部署に異動し退職する昭和 50 年 8 月まで勤務。

昭和 52 年 6 月までの 2 年間はフリーター。

3 職 婦人服印刷作業

昭和 51 年 1 月からアルバイトとして婦人服印刷作業をして勤務をした。

4 職 自動車ワイパーの組み立て

昭和 52 年 10 月からアルバイトとして自動車ワイパーの組み立て作業員として勤務。

5 職 スーパーマーケットの青果部での店頭販売・発注・加工

昭和 52 年 7 月から昭和 56 年 3 月までスーパーの青果部に勤務。仕事の内容は市場から運ばれてくる商品（青果）の荷卸を 1 日 2 回、そして商品を店頭に並べて不良品がないかどうかの検品を丁寧に店頭で対面販売をする。という仕事が必要な仕事である。他店の偵察をしたり、広告を作ったり色々な仕事をした。

6 職 同スーパーの別の店舗に転勤 青果部の業務全般責任者

休み無く働いたので腎臓結石となり、2 週間の入院治療をしたために転勤となった。

7 職 市役所の市立病院 ボイラーマン

昭和 56 年 4 月から市役所の市立病院に勤務することになった。初職の時にボイラーの資格を取得していたので病院の施設関係の仕事特にボイラー担当となった。

8 職 設備関係

昭和 60 年頃にボイラーの仕事が外部への委託になったので現在は病院の給排水や空調、駐車場の配車、清掃、医者ポケベルの修理など雑用全般をしている。

自分にとっての転機とは何か

- ・初職を辞めたこと。
- ・安定を求めて 22 歳くらいから郵便局や市役所の試験を受けていた。両方とも一次試験は合格しても二次試験が受からなかった。やっと 27 歳で市役所の試験に合格した時は定年まで安定した仕事ができると思った。

転機に対する家族・周囲の反応

自分で決めたので両親には相談しなかったので別に何も言われなかった。同居しているが、転職をしてもフリーターでいる時も食費などは家に入れていたので両親は何も言わなかった。

教育・訓練経験、自己啓発など重要な活動

- ・初職時にボイラーと危険物の資格を取得。
- ・スーパーマーケットでは、グループワークや本を読んだりレポートを書くというような研修をした。対面販売なので接客の研修を受けた。

影響を受けた人・本など

- ・誰とは想定ができないが、初職時の上司には本当によくしてもらえた。周囲の人もいい人ばかりであった。

- ・スーパーマーケットでは同年齢の者が学卒も高卒も混ざり合って切磋琢磨した。周囲に影響をされた。スーパーマーケットでは、お金はお客様からもらうものだと教えてもらった。接客も含めて随分と勉強になった。
- ・高校の先生は初職を退職して就職を紹介してほしいと学校を尋ねた時に探してくれて親身に相談に乗ってくれた。
- ・何処へいっても人間関係に恵まれていたと思う。
- ・初職の株式会社、スーパーマーケット、市役所、転職はしなかったものの官庁や大企業及びブランドの会社への転職したのは、父親が中小企業に働いていて失業をしたことを見ていたので安定性を求めたのだと思う。そういう意味では職業選択には父親の影響が大きかったといえる。

自分にとっての仕事の位置づけ

初職やスーパーで仕事をしている時は、達成感を感じる仕事もしていた。しかし市立病院に転職して4年後にボイラーの仕事が外部委託になってからは、生活のために働いているという感じがしている。確かにそれだけではないけれど今はあまりよくわからない。

これまでの職業経歴を振り返っての評価

初職を辞めなければ良かったと後悔をしている。給料も良かったし、上司も周りの人間関係が良かった。

スーパーではマニュアルどおりの仕事で驚いたが、接客を始め色々と教えてもらったので働いたことは良かったと思う。

将来・今後の展望

- ・転職は考えていない。安定しているので停年まで健康で働くこと
- ・危険物とボイラーの資格を取得しているが転勤するにも電気関係資格とか消防設備士の資格があると有利になるので取得したいと思う。しかし資格を取得すると同じ給料で仕事が増えるので取得をとどまっている。

健康について(本人と家族)

- ・25歳～26歳くらいの時に腎臓結石で2週間の入院をしたが現在は元気である。
- ・同居している両親も80歳を過ぎているが元気である。結婚をしていないので、見かねた姉夫婦が隣に引っ越してきてくれて何かと両親の世話をしてくれている。これからは両親の介護の問題が出てくると思うので課題である。

趣味、スポーツ

- ・ハイキングと登山それにゴルフ

登山は1人で計画を立てずに行く、山小屋は人が多いのでテントを持って行って気楽に楽しんでいる。

仕事探しの情報

ハローワークに行ったり、会社訪問をしたり、求人雑誌を探したりしたが、役に立った情報は市の広報誌だった。自宅に配布されると隅から隅まで読んで探した。官庁と市職員の募集は各2回とも市の広報で見つけた。

ケース 58

女性 50 歳

家族形態 夫（外国に単身赴任中）、子ども 2 人、別棟に義父、義母

現在 主婦、ピアノ教師

現状と今の仕事

- ・週 2 回ピアノの教師をしている
- ・夫は東南アジアに単身赴任で留守なので長男の嫁として別棟の義父と義母の世話をしながら家を守っている。自宅から車で 1 時間ほどのところに実家があり母親が頼っているので呼び出しがあると駆けつけていかなければいけない。
- ・エアロビのレッスンに週 2 回くらい。
- ・高校や短大、子どもが小さい時の PTA の友だちと、お食事やお茶をして楽しんでいる。

これまでの主な経歴

学校歴

昭和 48 年高校普通科卒業後、短期大学音楽学科に進学。昭和 50 年に短大を卒業した。

職業歴等

短大卒業後は両親が教師をしていたので母親の希望で就職はせずに自宅でピアノとエレクトーンを教えながら家事手伝いをした。昭和 52 年～昭和 54 年まで音楽教室で、結婚前はほかの場所で週 3 回音楽講師をしていた。しかし、結婚後は講師を辞めて主婦となった。昭和 54 年 4 月に結婚をしたが夫は 9 月から中近東に転勤となった。社宅で暮らしていたが、すぐに実家に戻った。翌年の昭和 55 年 2 月に夫が迎えに来たので中近東に同行した。しかし 6 月に長男を妊娠したので日本に帰国し実家に戻り長男を出産した。実家では近所の子どもたちにピアノを教えていた。夫は長男が 1 歳になるくらいに帰国した。その後、暫くして夫は東南アジアに単身赴任となった。昭和 59 年に長女が誕生し 1 歳になるのを待って長男と長女の 2 人の子どもを連れて東南アジアで家族 4 人の生活を始めた。昭和 61 年に夫が日本の工場に転勤になったので家族全員が帰国し、夫の両親との同居生活が始まった。日本に帰国した昭和 61 年から週 2 回のピアノ教師の仕事を現在まで継続している。

初職への移行

音楽教師になりたいと思っていた。両親が教員という影響があったと思う。父親は教員試験の申し込み用紙を自宅に持って帰ってきてくれたが、既に教師になっている姉が「むいていない」と反対したので教師にはならなかった。就職しなかったのは母親の希望で自宅でピアノとエレクトーンを教えながら家事手伝いをする事になった。

仕事の内容

初職 家事手伝い

昭和 50 年～昭和 52 年まで自宅でピアノとエレクトーンを子どもたちに教えていた。

2 職

昭和 52 年～昭和 54 年 4 月の結婚するまで音楽教室の講師として仕事をしていた。

3 職

昭和 54 年 4 月に結婚で近隣の社宅に住むことになったのでその音楽教室で翌年に中近東に行くまで音楽講師をしていた。

4 職

中近東から帰国して自宅で子どもたちにピアノを教えていた

5 職

昭和 61 年に東南アジアから帰国して自宅と近隣のレッスン場で週 2 回ピアノを教えて現在に至る。

自分にとっての転機とは何か

- ・ 中学時代から音楽教師になりたいと思っていたが、ならなかったこと。
- ・ 短大卒業後も就職せずにピアノと声楽のレッスンを受けながら自宅では子どもたちにピアノを教え、残りは家事手伝いをするを選択したこと。
- ・ 夫との結婚。
- ・ 中近東と東南アジアでの生活。

転機に対する家族・周囲の反対

- ・ 音楽教師にならなかったことは、既に教師になっていた姉が「むいていない」と反対したので、ならなかった。
- ・ 夫の転勤で中近東や東南アジアに行くことは当然のことなので実家の両親は反対をしなかった。

教育・訓練経験、自己啓発など重要な活動

- ・ ピアノを教えるために音楽教室のグレードを取得し音楽教室の講師となった。
- ・ 音楽教室の講師をしている時に研修などで幼児へのピアノの指導の方法や教材選択など。

影響を受けた人・本など

- ・ 夫が海外転勤でも義父や義母と同居をしながら子育てをしていた。同居先に、共働きをしているからという理由で夫の弟の子どもを預かることになった。義理の両親の手前、自分の子どもと一緒に保育をした。同じ年齢だったので、子ども同士で喧嘩をすると、自分の

子どもを叱って預かっている子どもを叱ることはできなかった。こんな辛いこともあったので実家の両親に相談をすると「自分の子どもを自分で育てることができるんだからいいんだよ」と言われて「ああ、そうかなあー」と納得した。このように実家の両親には随分と影響を受けている。

- ・嫁ぎ先の義母（実家の母親と違った女性としてのモデルである）。前向きな女性である。
- ・実家の姉（教師にならない方がいいと言った。夫が留守の間の子育ての相談）。
- ・子どもの頃、お稽古に行っていたピアノの先生。
- ・子どもが通学していた小学校の校長先生。

自分にとっての仕事の位置づけ

- ・ピアノ教師という仕事は、周囲から見るとOLとは違って遊んでいるという捉え方をされることもあり、卒業後はこれでいいのかと悩んだ時期もあったが、現在は週2回のレッスンが支えとなっている。

これまでの職業経歴を振り返っての評価

- ・中学生の時に抱いた音楽教師には、ならなかったが音楽教室の講師や自宅でピアノの教師をしている。しかも結婚で地元を離れ、さらに夫の転勤で中近東や東南アジアに行ってピアノ教師を途中で中断する時期があっても現在まで継続できていることは自分にとって重要な意味をもっている。夫の転勤で中近東へ行く時にピアノ教室を閉鎖しようと思っていた時に、友人が帰ってくるまで代わりにレッスンを続けてくれた、お陰で中近東から帰ってからすぐに教室をすることができた。東南アジアへの転勤でもそうだった。周囲の人に助けられて好きな仕事を継続できていると思う。何と言っても協力して続けられたこと。

将来の展望

- ・義母が70歳でお琴を始め練習をしている姿を見てきた。現在81歳になっているが勉強をしているので自分も80歳くらいまで細々と何かの曲を弾けるようにしたい。

健康について(本人と家族)

現在のところ自分も夫もそして実家の両親、嫁ぎ先の両親ともに病気知らずに元気である。しかし、単身赴任が長かった夫が定年して一緒に暮らすこと、夫婦の再構築をどのように一緒にしていくかという大きい課題がある。

また、実家、及び嫁ぎ先の両親の介護の問題が、いずれ出てくると思うので、どうすればいいのかと心配をしている。

趣味・スポーツ等

- ・週2回ピアノのレッスンを受けている。また、自分も生徒に週2回レッスンをしている。
この教えてもらい、教えるということがいい感じになっている。
- ・2年に1回のピアノの発表会を姉や友人と共催で行っていること。両家の両親や周囲の人が喜んでくれているので継続したいと思っている。
- ・エアロビ。

ケース 59

女性 49 歳

家族形態 夫、子ども 3 人

現在 不動産業を営む夫の手伝い

インタビューの場所 駅前の大規模店舗内の喫茶店

現状と今の仕事

本業は夫の不動産業の手伝いで肩書きは役員。本業は良心的にやっているの、儲けが薄い。大変な仕事だと思う。本業の傍ら、継続して多種多様なアルバイト、1年程度のパートタイム就労、在宅ワークなどをいつも行っている。厄年を契機に同窓会の世話役をはじめた。長子は自営を目指しているが配偶者を得て独立、今は契約社員だが自営を考えている。次子は地元金融機関に勤務して2年目、末子は専門学校に入学したばかり。

これまでの主な経歴

高校卒業してすぐに会計事務所に正社員の一般事務で就職。そこに出入りしていた営業マンからスカウトされてリゾート開発会社に正社員で就職。受付、事務、書類整理で約2年間勤めた。ただし、そのうちの約3ヶ月は風疹で休んだ。妊娠したので結婚することになり退職。社内結婚。第1子を出産後、4年おきに2人出産して3人の子がいる。もともと、父が建設業を自営していたので事務処理や関係会社に書類を持っていく手伝いをしていた。子育てしながら父親の手伝いで建築業一般をこなしていた。平成2年に夫が不動産業の免許を取って同3年から独立開業。夫の会社の役員となって夫の指示の下に仕事をしている。しかし、夫婦間で給料をもらうわけにもいかなので、自分の小遣いを得るためにさまざまなアルバイトや在宅ワークをしてきた。下着のネットワークビジネス、葉書書きやワープロの在宅ワーク、フィットネスクラブのフロント、競艇場のパートなど。1年程度のものが多い。不当利益の仕組み、企業のリストラや労働者への嫌がらせなどいろいろとみてきた。60歳までは働きたいと思っていたが、「適当にやればよい」とか、「もう会社がなくなる」といわれるなどいろいろあったのでやめたこともある。

職業資格はない。和服着付け1級はとったが師範級はない。本当は不動産業が好きではないが、将来はメンテナンス（便利屋）をやりたい。以前、老人専用住宅を建てたかった。老人が部屋を借りようとするともみんな断られてかわいそうだ。老人と他世代を一緒にして住まわせてあげたかった。国などの公的補助制度があればできるが、ないのでできなかった。結局、この夢は壊れた。

儲けるというよりは、小遣い（自分の自由になる収入）は得たい。その意味では、夢はマッサージや指圧関係の仕事を将来すること。年を取ってもできるし、価格を考えなければ人助けにもなる。利益を得ようというのではなく、やったことに対して金銭的な形で「よくや

ってくれたね」という相手からの反応が欲しい。子供は、精神的にはまだ面倒をみてやらねばならないが、全員ほぼ独立している。

専業主婦として家事・育児だけでなく、仕事を何かしたい。その方が生活にメリハリがあるし、自分が自分のために使う純然たる小遣いが欲しい。生きている証だと思う。同窓会の面倒もみている。

初職への移行

商業科で高校卒業後、すぐに会計事務所に就職。普通の事務職だった。

仕事内容

初職 会計事務所の一般事務。

2職 夫の不動産業の手伝いで肩書きは役員（本人は従業員だと自称）

具体的な仕事の内容は、不動産の仲介、建て売り、管理など不動産業全般の営業、事務、接客等の全般をこなしている。本人は夫の指示の下にこなしているというが、その一方で、仕事では夫とはあわない、「仕事のみえて」どうしても批判を感じるという。

本業の傍ら、継続して多種多様なアルバイト、1年程度のパートタイム就労、在宅ワークなどをいつも行っている。

自分にとっての転機とはなにか

とくにない。「流れのままに惰性で生きてきたようなもので何にも考えない。自分に計画性がない」、「いつも頭が一杯で、振り返ることがない」という。しかし、実兄の死で死に方を考えたこと、もとはスーツ姿のサラリーマンだった夫が最近、身なりをかまわなくなり、あと10年は職業人生があるので考えを変えようと思っていることを心境の変化の契機としてあげている。

教育・訓練経験・自己啓発など重要な活動

宅建など不動産関係の資格を取ろうと通信教育を受けたことがあるがどれも中断してしまい資格は取れていない。和服着付けは1級を取った。しかし、師範を取るには数百万円お金がかかるし、着物は自分にあわない。また、着物は着慣れることが教室で学ぶよりも重要だ。そのほかにもいくつかやったがほとんどとれていない。仕事と家庭で通学は難しいので、通信教育で勉強するが、通信は続かない。本当は通学でないため。

仕事に必要な技術は身に付いている。習得方法は、人のすることをみて覚えたり、経験で身に付ける。人がやっているとき、そばを離れずにみていて覚える。電気でも何でも、大体1回か2回専門家に来てもらい、やってもらうのをそばでみていると大体わかる。パソコンは高校の時に「キーボード」というものは経験したことがあるので、その意味ではなじみが

あったので、ほとんど独学でやりながら覚えた。好きだが最近目は悪くなって説明書が読みにくいので新しいものにはついていけないと思っている。

夫がコンピュータ会社に勤めていた経験があり、理論や構造はわかる。携帯電話も仕事上必要だったので人一倍早い時期に使い始めた。

影響を受けた人・本など

実兄が癌で数ヶ月でなくなった。病名を最後まで教えなかった。本人はわかっていたと思う。最後の2カ月前ぐらいに自分にしつこく聞いて責めた。それで、2カ月ぐらい死ぬ直前まであいにいけなかった。それが心残りだが、延命措置とは何なんだろうと思う。それだったら、もっと食べるもの食べて、痛みをとめて生きて、それで最後を迎えるのが普通ではないか。

その他の特記事項

ネットセールスは、投資したお金よりも、自分の本質、人に対しての正義感のようなものに照らして嫌だと思ったのでやめた。弱いものいじめは許せないから、いじめの現場に居合わせれば「やめろ」と声をかける。

自分の生き方を「いいかげんなんです。すごい、いいかげん。生きてたこと自体がいいかげんに生きてる」と自己評価し、「自分がされて嫌なことはしたくない」、「自分が、もし相手がこういうふうにしたときに、自分だったらどうだろうって、まずそれを考える」という生き方をしている。自分の行動規範は、「それだけですよ」という。

ケース 60

女性 50 歳

家族形態 夫、子ども 3 人

現在 専業主婦。ただし、自営業の夫の会社の従業員の肩書きをもち、時には手伝うことがある。

インタビューの場所 インタビュー対象者に指定されたレストラン

現状と今の仕事

専業主婦として自己認知している。夫が経営する会社（農業機械の販売・修理関係）の従業員になっているが、実態はときどき手伝い程度で、主婦業に専念して夫と子供の面倒をみている。夫は無借金経営をしたいと願っていて、バブルの時に内部留保とあって貯蓄した結果、バブル崩壊以前に念願かなった。不景気にさらされないで済んだ、しかし、農業が変わってきているので、必ずしも子供に後を継がせようとは思っていない。自分自身は、夫にいわれたとおりに銀行へ行って手続きをすとか、夫の心身の様子に気を付けて話を聞くなどしている。

これまでの主な経歴

家が商売をしていた。はっきりした目的があったわけではないが隣の短大に進学。勉強だけでなくはばひろく学ぶべきだという母親の影響を受けたと思う。短大を卒業してすぐに出身県の地方銀行に就職。ただし、勤務地は学校があった県の支店。会社の大阪の寮から通勤。1 年後、残業が多く胃腸が不調で退職。当時は、残業中に男女と一緒に食事をするのがはばかられ、生活時間が不規則になった。親元に戻り、伯父の税理事務所に就職。そこでは、短大の時のアルバイトのような手伝いをしていた。23 歳で結婚。結婚直前に夫の父が亡くなり、夫が 2 代目として後を継いだ。以来、その会社の従業員となっているが、夫の方針もあって実態は猛烈に働く夫をサポートする程度で、子育てに専念している。子供が幼稚園に行きだした頃から今までに、手芸的なことが好きだったので、パッチワーク、刺繍、パン作り、紡ぎなどをやった。しかし、すべて、資格を取る段階に入ると中断する。プロになる気はない。

初職への移行

短大を卒業してすぐに出身県の地方銀行に就職した。英語とくに英会話を学びたくて隣の短大に進学したが、就職後は、英語の学習は地元には適当な教育機関がなかったので無理して続ける勇気がなくてやめる。就職経験はこれだけ。

家庭管理と子育て

自分自身は町の商店街の商家から田舎に嫁いできて結婚後の地域では気は遣った。たとえば、この地域では嫁が働きに出て子供の幼稚園の送迎は祖母がやるのが一般的だが、自分で送迎していたのでつきあいに気を遣うなど。

夫の方針で子育ての主導権は自分もっている。子育ては最も重要な役割である。婚家との関係は、婚家では義父が結婚直前に亡くなり、義母は“一人でやっていくことに強い人”であり、また、跡を継いだ夫が実権を握っているのが楽な面があった。問題があれば夫と話し合えて助かった。仕事以外の生活の行動は夫婦単位で自然に行っている。3人の子供は社会に出るときに選択肢が多いように育てようという方針なので跡継ぎとして育てていない。表向きは一番下が継ぐことにしているが、跡を継ぐという子は今のところはいない。

夫がすごく働くので、家族の団らんがなかった。子供たちは塾に行き、自分は塾の送り迎え、食事の用意をして、夫が食べてパーッと出て行く。子供が大学に行く頃から子育ての主導権を交替して、経済的なことは子供から夫に相談させて感謝させると、あと任せればいいので自分が楽。オイシイ役を夫に回して、うまくいけばそれでよい。自分の気持ちがいいつも穏やかでいられるということを重視している。家庭を大事にしないと、自分がいづらくなる、居心地の悪い家庭にして自分の首を絞めないようにしている。

自分にとっての転機とはなにか

何も知らず銀行に入ったこと。結婚したこと。考え方としては、以前、飼っていた柴犬を亡くした時。43、4歳の頃、体調不調だったとき、面倒をみてやれないでいたところ亡くなってしまった。自分の身代わりになってくれたのかとも思った。それで自分できちんと飼って育てようと思い、ラブラドルを飼ってお金もかけて専門的な訓練をした。競技会でもずっと入賞を続け、県警の囃託犬になった。今2頭いる。囃託犬になってはじめは嬉しかったが、競技会でも入賞した優秀な“うちの子(犬)”が厳しく警察で体罰を受けながら訓練されているのを見て、囃託を辞退した。自分が違う方向に流れていたと気がついて、今度は自分できちんと訓練しようと思ってやっている。癒される。今後の人生はずっと犬とかかわっていこう。子供が家を出ているので夫にもしむけて、夫婦でどこへ行くにも一緒に連れて行く。今後は、リタイアした盲導犬を預かろうと思っている。

転機に対する家族・周囲の反応

夫は、生活のことは任せるから、自分のことには口を出さないでくれというタイプなので、基本的には“全然オッケーしてくれて、何も言わずに”という形である。日頃から夫婦のコミュニケーションはよくとれている。

教育・訓練経験・自己啓発など重要な活動

子育ては修業だ。自分がどうすれば楽になるかという考え方を自然に身につける。精神世界を扱う本は良く読んだ。宗教には入らないが、問題や悩みは人に相談するとかえって自分の首を絞める。趣味に止まる手芸、料理。

その他の特記事項

子供の頃、弟がシャボン玉の液が眼に入って、失明するかもしれない状況で頻繁に病院に行っていた。通院の時は、いつも「お姉さんでしょう」という感じで、自分が一人にされた。

ケース 61

女性 50 歳

家族形態 夫、子ども 1 人

現在 県立高校教員

インタビューの場所 インタビュー対象者に案内されたホテル内喫茶店

現状と今の仕事

1978 年に出身県の県立高校に教員として採用になり、以来現在までに転勤しながら 4 つの高校教員を経験。その間に 15 回（年）担任をした。現在は名門校だが、中位レベルの評価がされている高校。これからも教員生活を“もちろん”続けるつもりである。主任、校長になることや県教育委員会に行くことは望まない。生徒と一緒に汗かいて過ごす現場の醍醐味を味わっている。

これまでの主な経歴

中学生の頃から大学に進学したいと思っていたので憧れの地元進学校だった県立高校に進学。薬剤師になりたかったが理系が弱いことを自覚して、地元（隣県）の名門私立大学の英文科に進学した。文学部なのでなにもないと思って英語で教職をとった。英会話を 4 年間、英文タイプを半年間習った。大学を卒業すると同時に親の縁で地元のアパレル会社に入社。総務に配属された。このままでは物足りないと思いついに夏にある教員採用試験は受けると親に約束をして 3 カ月で退職。新聞でみつけた隣県の国立大学の医学部で研究室のアルバイトに行く。試験管洗いと処方箋書きの手伝いをした。現在までで一番面白かったと思う。その夏に教員試験に合格。翌年 4 月から県立高校に就職。1 年目に世話してくれる人がいて結婚。翌春に長女の誕生とともに育児休業制度ができて 1 年間休業後、復職。以後、英語教師を今日まで続けている。普通校と商業校を経験した。

初職への移行

卒業前に就職活動はあまりしなかった。大学に来た求人を見ていたが女性の求人は少なかった。結局、親の縁で地元のアパレル会社に入社。英語に関係のない仕事だった。とくに何かしようと思っていたわけではないが、父親にアンケートなどがくると押しつけられて、収入は少なくともやりがいのある仕事でないといけなそうと考えさせられるような家庭の仕組みもあった。

仕事内容

初職 アパレル会社の総務部総務係
いろいろな雑務的なものを 3 ヶ月。

2 職までの間のアルバイト

国立大学の医学部の研究室で、最初は試験管洗い。そのうちに、外来診察についていって処方箋書きの手伝いのようなことをした。

2 職 県立高校の英語教師

担任 15 年のほか教務課、生徒課、保健課などを担当した。

自分にとっての転機とはなにか

- ・ 教員になったこと。
- ・ 女性も経済的に自立していたほうがいいという伴侶と結婚したこと。結婚で一皮むけた。
- ・ 娘が高校に入学したときに夫が転勤で単身赴任して子供と 2 人の生活が始まった。阪神大震災の年でもあった。3 年たってまだ夫の赴任が終わらない 2000 年に子供が大学進学で上京。自分が一人になった。いつも明るく前向きなのにガクッときて半年から 1 年間落ち込んだ。自分の転勤も重なった。直前の学校は 10 年いたのでショックが大きかった。

転機に対する家族・周囲の反応

- ・ アルバイト先の上司がよく諭して助言してくれた。よく話をする夫婦で信頼できる相談相手だ。仕事が忙しかったり、単身赴任をしてもきちんと生活していた。
- ・ 落ち込んでいた 1 年間、自分の様子がおかしいと夫が家に勤務地からよく帰ってきてくれて乗り越えた。
- ・ 基本的に、職場、家庭、両親と周囲の人に恵まれていた。自分は子供の頃から両親にとっては期待の娘だった。応援してやるから、頑張れということだった。夫は、頑張る身動きがとれない部分があるという見方もしてくれる人で楽にやるように助言してくれた。教員としても信頼できる先輩がいた。

教育・訓練経験・自己啓発など重要な活動

これまでは高校教員は自由な研修で自分次第だった。しかし、去年から文科省からの指示で英語の教員を対象に、今後 5 年間、全員が研修を受けなくてはならないことになった。余計なこと、うっとうしいというのが現場の教師の実感。英語は毎年、教科書が変わって、二度と同じ教科書を使わない。毎日の教材研究だけでも大変。しかし、やらねばならない。

影響を受けた人・本など

アルバイトをした大学で、若い先生が今の仕事を楽しいと思っているかもしれないけど、あくまでも補佐に過ぎない。絶対、教員になったら良いといわれた。その先生のご両親が小学校の先生で、教師は人を育てる仕事できっと向いているといわれた。“ああ”と思ったのが記憶に残っている。そういう後押しがあった。

5つ年上の良い伴侶に恵まれたことは大きかった。結婚のときに「一人の人間としてちゃんと生きなさい。その家の、僕の妻というだけではなく、自分の人生を生きなさい」といって、実際にも生活面で自立して困難な時には支えてくれた。結婚当初、職場の上司との関係もあって苦労し、体調が悪いときの修学旅行で佐渡島で熱が出て動けなくなって入院した。佐渡まで、絶対会社を休まない夫が迎えに来てくれて、2人で帰ってきた。夏休みの間静養して職場に戻った。それ以来頭があがらない。

その他の特記事項

教員の仕事は、生徒の何かをもらおうというか、エネルギー、エキスを吸い取ってやる、もらってやるとかいうぐらいの気持ちでいかないとできないと思う。

大学時代はお稽古事をするような優雅な生活に憧れていたが、同時に、人に養ってもらいたくないと思っていた。

教師をしつつ子どもを産んでから思ったのは、女性は経済的に、男性は生活面で自立している人同士が結婚したら幸せになれるのではないかということ。それが理想だ。教員は当時はまだ珍しい扱いを受けている男女平等な仕事だったので、そう思うとどんなに大変でも辞められない。

ケース 62

男性 50 歳

現在 ガソリンスタンドの経営

家族形態 妻、子ども 3 人

現状と今の仕事

株式会社代表取締役としてガソリンスタンドの経営にあたっている。10 年前から A 県石油業協同組合支部長に就任中。

これまでの主な経歴

私立高校（自動車科）卒業。父親が経営していたガソリンスタンドの会社に入社。

簿記の学習のため近隣の町まで 1 年間通学した。74 年に専務取締役、79 年に代表取締役に就任。以後、一貫して現職に従事。高校時代に 2 年間に亘り生徒会長を務めた。

初職への移行

親の商売を継ぐという意識があったので、自然体で現在の仕事についた。

仕事内容

仕事内容は初職から一貫してガソリンスタンドの経営である。とはいっても、経営環境は目まぐるしく変化しており、その都度、対応を迫られる状況が発生する。例えば平成 8 年にはスタンド数の規制緩和が行われ競争が激化し、トラックの大型化に伴うタンクローリーの大型化の進行で小さなスタンドは排除の運命に遭ったが、氏の場合、スタート時の土地面積が 350 坪ありキャパシティのお蔭で適応できたとのことである。

自分にとっての転機とは何か

人生の転機は高校時代の生徒会長の経験と夫人と出会った韓国研修旅行であろう。生徒会長の時に授業のボイコットまでして、授業の下手な講師に抗議し、一時は他県内の学校に転校することまで考え、現地まで調査に出掛けている。

教育訓練経験・自己啓発など重要な活動

高校 3 年時にその地区の高校生 7 名が選ばれて韓国の高校を訪問する研修旅行に参加した。当時は飛行機事故が多発した頃で、親には行くなと反対されたが自分の意志を通して参加した。このときのメンバーに夫人が入っていたので運命的な出会いになった。

入社後に通学で習得した簿記の学習は、ガソリンスタンド経営には欠かせない知識である。兄が経営する会社に経理のベテランがいてこの人から実務を学んだ経験が大きい。

影響を受けた人・本など

高校3年間を通して担任であった先生（高校OB）の推薦があり高校2～3年と続けて生徒会長に就任した。自動車工学の講師の授業が生徒の理解度を考慮しないマイペースで行われたことに抗議して授業をボイコットするなど、当時から正義感とリーダーシップにあふれる生徒であった。また、母親からいつも「人より遅れるな！」「早起きしろ！」と言われて実行してきたとのことであるが、これは一例に過ぎず、母親の家庭教育が優れていたことが伺われる。父親は早く亡くなっているが、面倒見の良い人で人徳があり、没後にトラブルが発生した際に銀行の支店長が事業を継いだ兄を助けてくれたことを本人は記憶しており、この父親の良い影響も受けていると思われる。例えば、「人脈が財産」を実現するために、日頃の付き合いを大事にしている。石油組合の会合時には時間前に行き「何か手伝えることはありませんか」と声を掛けている。このような姿勢を前任者が評価して10年前に支部長の後任に推薦してくれたのである。

自分にとっての仕事の位置づけ

父親がトラック6台を所有する運送会社を経営しており、その延長線上にあったガソリンスタンドの経営を自分が引き継いだ訳で、17歳の時にその父親が胃癌で亡くなった後は7歳上の兄が父親代わりを務めたが、直ぐに独力で経営を行うようになった。

これまでの職業経歴を振り返っての評価

親の商売を継承するという自然体でスタートした職業生活も、途中で不渡りを3回経験するなど山谷を乗り越えて現在に至っている。A県石油業協同組合支部長にも就任中と、地元と同業者の中でもリーダー格になっている。

将来・今後の展望

90年頃に市内に110あったガソリンスタンドが今年は90にまで減少した。後継者難と既存施設の老朽化で設備投資が必要であることが背景にある。平成6年に地下タンクの入替え工事で3,500万円を投資したがローンは1,800万円に減っており、今後とも未知のリスクはあるが乗り越えられそうである。家庭生活では、3人の子供が全て結婚し、長女が5月に出産したので49歳でおじいちゃんになるという順調さである。

健康について（本人と家族）

健康上の課題は血糖値が高いことである。若い頃から肉が好きだったために痛風気味でもあり、現在は用心して殆ど肉は食べていない。3ヶ月おきに肝炎の検査も受けている。

夫人が次女を出産後に病を罹ったことが心配な点である。

ケース 63

男性 49 歳

家族形態 妻、子ども 2 人

現在 建設会社 営業部長

現状と今の仕事

建設会社 A 県にある営業所 営業部長

これまでの主な経歴

大学商学部卒業、1978 年 4 月建設会社(株)入社、当時の慣例に従い建設現場に配属されて作業所内を担当。81 年に銀行の産業調査部に出向し財務的な企業の見方を学ぶ。82 年に営業企画部、85 年に総合企画部へ異動。88 年に開発営業部、90 年に他県の支店へ異動。94 年に A 県にある支店、99 年に本社開発営業部、01 年に再び A 県の同支店へ異動し営業部長に就任。この間、仕事は終始一貫して営業の開発・企画関連業務に従事している。

初職への移行

大学卒業時の 1978 年は就職が厳しかった時代で、父親の紹介があった企業を中心に航空会社などの企業訪問を重ねたが、建設会社からの内定で入社を決意する。同社は 1973 年のオイルショック前には文系 200 名の採用規模であったが、1978 年には 30 名に削減されていた。

仕事内容

前記経歴のとおり現在は A 県にある支店の営業部長の地位に就いているが、直接の部下は 3 名のみで、自ら動くプレイヤーとマネージャー役で部下を動かす両面の能力が求められている。大型プロジェクトが対象の営業のため、部下の数より情報と智恵が勝負を左右する。

自分にとっての転機とは何か

高校時代はサッカーに熱中していたが膝の靭帯を傷めて選手生活をリタイアしている。

81 年に銀行の産業調査部に出向し財務的な企業の見方を学んだ。建設業界が冬の時代を経験し、今後のマーケットをどう考えるかを学ぶために、全産業をカバーする銀行調査部に在籍した経験は、その後の開発・企画の仕事に活かされている。

教育訓練経験・自己啓発など重要な活動

入社直後に配属された建設現場での作業経験と銀行調査部への出向経験が教育訓練としては重要なウエイトを占めている。最近、執行役員制度になってから、明日の構想より「今

日の成果を重視する」方向に考え方の変化があった。また、建屋より設備が営業の中心になった。この変化に対応するため大学や官庁の人達との付き合いも勉強した。

影響を受けた人・本など

大学時代に産業史のゼミに所属し、先生から「歴史の勉強」を勧められた。本人は明言していないが、このときに学んだ「歴史の視点」は、その後の仕事で明日を見据えた企画を考える際にベースとして役立っていると思われる。

自分にとっての仕事の位置づけ

中学生時代から飛行機に強い興味を持ち、一時はパイロットを志願したが視力に問題があり断念した。それ以外には仕事内容に強いこだわりを持たず、与えられた任務をこなす姿勢で対応してきた。大学附属高校から大学進学に際し、浅く広くの経済学より狭く深くの商学部を選択しており、若い頃から自分の価値観を持っている人物である。

これまでの職業経歴を振り返っての評価

大手ゼネコンに勤務し順調に昇進しており、収入面でも仕事のやり甲斐の面でも満足している。今でも上司から「お前が、お前が」といって叱られている、というコメントからも、常に前向きに意見具申を行い「出る杭」的な存在になっていることが伺われる。

現在の職務では「企画の立案」より「企画の実現」が重要であり、そのためには開発と営業（ライン）を経験し双方の視点から考えることが必要と考えている。

将来・今後の展望

長女（20歳）は大学で物理学を専攻、次女（18歳）は動物好きでケアをやりたい意向。子供の教育が終わり住宅ローンが完済すれば、自己実現的な活動を考えたい。第二の人生は収入よりやり甲斐重視で仕事を考えたいが、選択のためには何かのきっかけが必要。

できれば夫人と共に楽しみながらやれる仕事がベターと考えている。

健康について（本人と家族）

高校時代に左膝の靭帯を手術した古傷を抱えているが、現在は問題ない。趣味の開拓をするようにと夫人（刺繍に取り組んでいる）から言われ続けているが、多忙で考える暇がない状況である。

ケース 64

男性 50 歳

家族形態 妻、子ども 3 人

現在 精密会社を設立 テレビのブラウン管用の材料の仕入れ・販売

現状と今の仕事

2001 年 9 月に共同出資し勤務していた精密会社を退社し、同年 10 月精密会社を設立し代表取締役役に就任。テレビのブラウン管用の材料を仕入れ・販売。

これまでの主な経歴

1972 年高校卒業、1976 年大学法学部卒業、高校時代に公務員試験を受験した経験がある。大学卒業時には就職活動で、市役所、商工会議所、旅行代理店などを受験したがいずれもうまく行かなかった。旅行代理店は後で合格通知が来たがタイミングが遅すぎ、大学で紹介された販売の会社に入社することに。

初職への移行

文系なのでダイヤモンド関係の商品知識は皆無であったが、工場で 3 ヶ月間実習を受けた後、既定のルート販売の仕事を担当することになる。飛び込みの訪問販売はダメなため、新規の顧客開拓も縁故の人脈を頼りに行った。学生時代からの麻雀(大学クラブ)・海釣り・軟式野球・ゴルフなどの遊び仲間・飲み仲間が結果的に人脈として仕事上にも役に立ったといえる。独身生活が長く大いに遊んでいたことが幸いした面がある。

仕事内容

テレビのブラウン管用の材料を仕入れ・販売するブローカー的な業務である。現在は自分一人で全てをこなしている。

自分にとっての転機とは何か

84 年 4 月に結婚したが、同年 8 月に販売の会社を退職し、かつての同僚営業マン 3 名と共同で精密会社を設立した。同社はテレビのブラウン管関係のビジネスでバブル経済の波に乗って売れに売れ、業績は好調だった。仲間 4 人の共同経営には良い面もあるが悪い面も多く、二度と人とは組まないことに決め独立した。

転機に対する家族・周囲の反応

結婚直後に販売の会社を退職することになったが、夫人は自分が公務員であったことでもあり了解してくれた。障害児の長男が生まれるまで 2 年ほど公務員として勤務を続けていた。

教育訓練経験・自己啓発など重要な活動

受けた職業上の教育訓練といえば販売の会社に入社後の工場実習（3ヶ月）のみである。但し、前記のとおり麻雀・釣り・ゴルフ・野球と多岐に亘る遊び・スポーツの活動を通じて獲得した人脈と先輩後輩の上下関係の厳しさを体得したことが大きな財産になっている。

影響を受けた人・本など

学生時代にアルバイト先（喫茶店）の業務用缶詰を仲間に持ち帰らせていたが、ある日初めて自分用にも持ち出し、バイクで帰宅する途中で検問で捕まった経験がある。アルバイト先は首になり給与も受け取れなくて損をしたが、幸いなことに持ち出した累積金額が少なかったお蔭で刑事事件にならず、退学などの処分に至らずに済んだ。本人は「汚点」と呼んでいるが図書などで学ぶよりはるかに大きな教訓になったと思われる。

自分にとっての仕事の位置づけ

障害児の長男と高校2年生の長女、小学6年生の次女を抱えており、家族を養うことが当面の課題である。このために、仕事は本人のやり甲斐よりも経済収入の源泉としての位置づけが大きい。幸い、家のローンは完済しているが、年金の将来にも不安をいただいており、仕事が順調に行くことが頼みの綱という感じである。

これまでの職業経歴を振り返っての評価

現在の顧客はそれまでの仕事の関係で築いた個人的信用で獲得したものである。良い製造会社を押さえていることがポイントで、そのために会社が成り立っている面がある。

初職の販売の会社を仲間と共に飛び出した時には会社は経営が傾いていたということから、順調な会社生活であったといえる。共同設立した会社はバブルの波に乗って順調に成長したが、共同経営の悪い面が気になって独立の道を選んでおり、これまでの評価としてはまずまずというところである。

将来・今後の展望

テレビのブラウン管が液晶に変わりつつあるので不安が大きい。液晶の取扱にも手を付けているが、状況の変化が読みにくいので将来展望は明るいとはいえない状態にある。

健康について（本人と家族）

本人は左肘がしびれるため整骨医に通っている。長男は出産時の医師の扱いが悪く障害児になってしまったが、現在は何とか働いている状態である。

ケース 65

女性 50 歳

現在 開業し鍼灸治療に従事

現状と今の仕事

現在、B 県の市の中心部で鍼灸治療に従事している。同時に、週末は C 県の市でも治療を行っている。但し、仕事には 6 割程度の時間配分で、4 割は登山やお寺巡りなど旅行などに充てて公私のバランスを取るよう努めている。

これまでの主な経歴

A 県にある大学に入学し、法学部で少年犯罪心理学を専攻した。父親が会社の経営者で、自分は高校時代からソロバンで経理の手伝いもしていたので、法律の必要性を感じていたことが法学部進学の原因である。しかし、親戚のおばさんの影響で鍼灸師への道を選択していたので、それを実現するために、大学での勉学と並行して、B 県にある鍼灸の専門学校（夜間）に 3 年間通学し卒業した。28 歳の時に C 県の市で開業以来 20 年以上にわたり数千人のケースをこなしてきた。途中、31 歳の時に中国に 3 ヶ月間留学して現地の治療法も身につけた。32 歳の時に B 県の現在の治療所に本拠を構えた。

初職への移行

大学卒業と同時に鍼灸師の道へ直行しており迷いのない職業人生を歩み続けている。

仕事内容

鍼灸師の仕事は身体の不調を治す以上に、実態は「心を見るウエイトが半分以上を占めており」カウンセラー的な活動のウエイトが高い。『心療内科では患者の話を聞くだけでアドバイスをしないのが問題である。話をきいてあげるだけで治る人は、そもそも病気にならない人である。「相手の立場から考えたら？」「違う角度から考えたら？」と患者にサジェスションすることが必要だと思う』との発言に見られるように、カウンセラー機能に重点を置いて仕事をしている。これまでに身につけたものは「人間を知ること」であり「病気と共に病人も治す」をモットーに仕事に取り組んでいる。

自分にとっての転機とは何か

中学から高校へ進学する時点で、今で言う「人生設計」を考えていた。そして、高校進学時には既に、鍼灸師への道を歩むことを決めていた。中学時代の先生からは大学受験を勧められたが、自分は「自主的な人生を歩みたい」との思いがあった。親戚のおばさんが腕の良い鍼灸師で、大変流行っているのを子供の頃から見ている「自分の行く道はこれだ」と思わ

せる強い影響を受けている。

転機に対する家族・周囲の反応

「大学と専門学校の学資は両親が負担してくれた。だから、一生懸命に学んだし、分らないことがあれば質問したので、大学の先生からも可愛がられた」と、本人が言うように家族・周囲は常に本人の意向を尊重し、自主的な進路選択に委ねた経緯がある。これだけの熱意があり、相当の努力をしていれば、「思うとおりにさせてあげたい」と考えるのが人情として当然であろう、と感じさせるものがある。

教育訓練経験・自己啓発など重要な活動

専門学校で教えていた先生に卒業前からお願いして勤務した2年間の勤務経験が重要な活動のトップにあげられる。年代は聞きそびれたが、修行時代のある時期に、3ヶ月間、無報酬で毎日18時間も働いたことがあり、その過労が原因か、ヘルペスに罹りお蔭で「病人の気持ちがわかった」ことが治療者としての自分にとって大きな意味のある出来事であった、と感じている。それまでの自分は「カミソリ」と呼ばれ、治療者の「切れ味の鋭さ」を売りものにしてきたキライがあったが、「患者の立場」を体験したことで治療姿勢に変化が生じる契機となった。

影響を受けた人・本など

親戚のおばさんが腕の良い鍼灸師で、大変流行っているのを子供の頃から見ていて、自分も鍼灸師になろうと思った、と言うとおり「人生のキーパーソン」の第一は鍼灸師のおばさんである。第二の重要人物は、大学卒業後に2年間勤務したところの先生である。その先生から学んだ「治療者としての心構え」のポイントは「愛」あるいは「慈しみ」で、この人の治療者としてのバックボーンとなっている。先生の「病気を見て病人を見ずはダメ」という教えが、以後に大きな影響を与えている。

自分にとっての仕事の位置づけ

前述のとおり、仕事に6割、プライベートに4割の配分を行っている。私的生活の中心は登山に置いている。登山は、リフレッシュに役立つだけでなく、自然の厳しさや自己責任の大事さを教えてくれる。また、登山家にはフェミニストが多く、荷物が多いと代わりに持ってくれる優しさを感じることもうれしい。登山の他に、西国・坂東・秩父など札所巡りも頻繁に行っている。西国八十八箇所は3回巡ったし、秩父は100観音を巡った。こうした登山や旅行の予定は、予め計画を立てておき、治療の予約より先にスケジュールを入れるようにしている。関東のお寺巡りは、C県時代の友人宅が千葉にあるので、そこに宿泊させてもらって行った。阪神大震災の頃から独学で水墨画を習い始めた。また、若い頃にバイオリンなど

弦楽器をやりたかった思いを実現するべく、4～5年前から胡弓を習い始めて続けている。

これまでの職業経歴を振り返っての評価

「敵は千万人と言えども我行かん」という性格なので、お茶汲みやコピー取りが中心のOLのような仕事は自分には向かないと思った、と言うとおりで若い頃から自分を良く知っている。親の言うことも一応は聞いて大学に進学し、一方で自分の本命である鍼灸師の道に進むべくA県からB県まで毎日1時間半をかけて二重通学した実績は心からの尊敬に値する。本人の並はずれた努力もさることながら、両親に経済力があり子供の自主性を尊重する人であったことが幸いしている。中学時代にプラスバンドのクラブ活動を創始し部長を務めるなど若い頃からリーダーシップを発揮した実績がある。鍼灸専門学校の同級生30数名のうち、鍼灸師の収入だけで生計を立てているのは5名のみであり、成功者の一人と評価できる。

将来・今後の展望

今の仕事は年齢に関係がないので、今後ともできるだけ長く続けたいと思っている。鍼には治療者の人格が表われるので、弟子を取っても「言葉で教えられるものではない」と考えて弟子は取らないで来た。弟子に教えるより、その努力のエネルギーを自分の能力の向上に向けたほうがプラスが大きいと考えている。若い頃から人が見えすぎて、自分にも他人にも厳しかったので、カミソリのニックネームがついた。それが結婚できなかった理由の一つである。また、自分はリーダーシップがあるが、自分がリードしなければいけない人はイヤなので、そういう条件を満たす男性はこれまで現れなかった。

健康について（本人と家族）

職業柄、腰を曲げる姿勢や力を入れる動きが多いために、腰痛があることと肥満気味なのが健康上の問題点と自覚している。これらに対しても、食事の8割はベジタリアン方式にしており、カラオケでストレス解消を行い、登山に出かけてリフレッシュすることを心がけ着実に実行している。

ケース 66

男性 50 歳

家族形態 父、母、妻、子ども 2 人

現在 電話関係の会社に勤務

現状と今の仕事

電話関係の会社から出向している。ケーブルや引き込み線のメンテナンスや故障対策をしている。入社当時から仕事に大きな変化はない。

これまでの主な経歴

工業高校卒業後、釣針製造の会社に 2 年勤め、半年ほど地元の電気店に勤務したあと、電話関係の会社に入社。入社後、平成 7 年くらいまで現在の地区に勤務し、別のところに移る。4 年ほど前に再び現在の地区で勤務している。

畑を 4 反半ほど持っており農協に手伝ってもらいながら週 2 日ほど米を作っている。自家用以外は出荷し、収入をいくらか得ている。

初職への移行

工業高校卒業後、釣針製造の会社に就職。

仕事の内容

初職 釣針製造の会社に勤務

仕事が単調だったので 2 年で辞職。

2 職 地元の電気店

半年ほどで辞職。

3 職 電話関係の会社に勤務

電話関係の会社に勤務。現場に多くの場合 1 人で行き、ケーブルや引き込み線のメンテナンスや故障対策をしている。入社当時から仕事に大きな変化はない。10 年ほど前から状況が変わり、現在は下請けの業者に任せることが多く、新人を雇わなくなった。昔は故障を直すというのが優先されていたが、今はもう物を売る方向にいており、毎日朝礼で昨日誰が何を売ったかを皆に発表され評価されるようになった。クオカードやハイウェイカード、電気製品、その土地の名産物も売っている。仕事のうえで会社に安全を強調されるが、お客にとって感じの悪いこともあり、会社が変な方向に行っているように思われる。

自分にとっての転機とは何か

36 歳で結婚し、40 歳で子どもが生まれたのが一番大きな出来事である。

阪神大震災のときに応援に行き 2 週間被災地で働いたことが印象に残っている。

教育・訓練経験、自己啓発など重要な活動

電電公社の時代は新しい機械が出ると訓練に行ったが、今はない。

影響を受けた人・本など

お客が「何時に来い」と言っていなかったりと自分勝手になってきた。昔はそんなことはなかった。自分の言いたいことだけ言って、人のことは思いやりがないように、だんだん人間が変わってきたなあとと思う。

お客に喜ばれ、「ありがとうございました」「気をつけて帰ってねえ」と言われるのが嬉しい。

これまでの職業経歴を振り返っての評価

100 点中 70 点くらい。残りの 30 点は仕事での新しい方向にうまく入れず置いて行かれたこと。

将来・今後の展望

会社の要望で来年 51 歳で退職し、給料 25% カットで再雇用される予定。60 歳で定年になったあと何をするかは考えていない。

健康について(本人と家族)

父と母の介護が大変になってきている。

趣味、スポーツ

ゴルフを練習している。半年前からソフトボールのチームに入っている。土日が休みのときは子どもと遊ぶ。また PTA の活動で運動会を手伝ったりもする。

ケース 67

男性 51 歳

家族形態 妻、子ども 2 人

現在の職業 美容院 3 店舗の経営者

インタビュー場所

現状と今の仕事

3 店舗をもつ理容店の経営者。

これまでの主な経歴

中学卒業後、1 年間理容学校に通う。最初 1、2 ヶ月は実家から通い、その後、住み込みで理容師見習いを 6 年間行なった。実家に戻り、30 歳すぎに理容室を建替え以来、父親に代わって経営者になる。96 年くらいに理美容経営者の全国組織に入会。現在は 3 店舗をもつ経営者となっている。

初職への移行

中学卒業後、父親の職業であった理容師をめざし、1 年間理容学校に行きながら全部で 6 年間、住み込みで理容師見習いに行った。

仕事の内容

初職 理容師見習い

6 年間住み込みで理容師見習いになる。最初の 1 年ほどは理容学校に通いながらであった。学校卒業後、1 年間インターンをし理容師免許をとる。その後、通信教育 2 年とインターン 1 年で美容師免許を取得。

2 職 理容師

実家の理容店で理容師となる。父母と妻と 4 人で店を行なう。2 年後、30 歳すぎに店を建替えたときに父親に代わって経営者になる。

3 職 美容院の経営

店を立ち上げ弟子も 1、2 名おいた。技術の県のコンテストで優勝もし、技術は人並み以上に身に付いたので、つぎにコンピューターを買って顧客管理や経営をし始めたときに、経営者組織のダイレクトメールを見た。10 年ほど前から理美容の経営者の全国組織に入会し、経営者組織に入会後は週 1 回の会議に出、県の本部長として組織活動として全国を走り回っている。経営者として店舗を拡大し、美容で展開して 4 店舗を持つようになったが、経営が苦しく 2 年前に 1 店舗売却して現在は 3 店舗となった。さらに経費の削減をする方法を考えられている。

自分にとっての転機とは何か

10年ほど前に理容師の経営者の全国組織に入会したこと。理美容業界は徒弟制度が中心だったが、それを組織化してビジネスとしてとらえていこうとする組織だった。そこで仕事に対するとらえ方が変わり、経営者として多くのスタッフを抱え、店舗を増やし、利益をあげていくようになった。

転機に対する家族・周囲の反応

組織に入る際、父親は「おまえの人生だからおまえの好きなようにやれ」としか言わなかった。父親が組合長をやっていた理容組合は抵抗した。

教育・訓練経験、自己啓発など重要な活動

見習いから戻った後、5年ほど近県まで技術を学びに週1回通った。

経営者組織に入会后、県の本部の週1回の会議に出るほか、その地区の統括本部の会議と、役職による本部長会議のため、隣県に月2、3回出かける。県の本部長という職位にあるため、組織活動として全国を走り回っている。

影響を受けた人・本など

技術はすべて見習いで就いた師匠から学んだ。

自分にとっての仕事の位置づけ

仕事と家庭は半々。家庭がうまくいっているという状況の中でいい仕事ができると考えている。

将来の展望

現在は個人経営だが有限会社にすることも考えている。

趣味・スポーツ

剣道は26年続け、ボランティアで町の子どもに教えている。

家族との関係

妻も美容師で、子ども2人も剣道をしたり、高校卒業後に理美容の業界に入っている。

* 職業的自立を目指すライフ・キャリア

本事例は、一度に学窓を巣立つ若者には、その後にさまざまな人生があり、その中で、精神の病に倒れた者が職業的自立をずっと願い続けてきたという例である。分析・検討を控え、以下に記録の要点を記載することで、調査に快く協力して下さった対象者のお気持ちを読者にお酌み取りいただきたい。

< 事例の記録 >

ケース 68

男性 49 歳

(録音拒否)

自分の生き方はユニークだ。ユニークなのでどうかと思う。

前回の調査とは人が違う。前回は職安からだったように思うが、違うのですね。病気をして市役所はすぐ辞めた。大学を出てから少しして市役所に入った。入ってすぐに研修を受けて、そのときから体調に不調が起きた。最初は総務に配属されが、6ヶ月後には他の部署に配置換えされた。上司から「あなた、医者に診てもらった方がいいよ」と助言された。受診して、治療した。みんなに迷惑をかけた。そのあと、少しして電機工事会社に入って事務職をやったが、試用期間を延長されたので辞めた。そのあと、商業実務を少し勉強しながら、数ヶ月後に貿易会社に事務職で就職したが、休んでばかりで、そこも数ヶ月で辞めた。59年のことだ。

その後、家にいたが、61年に約半年入院。退院後は平成2年までデイケア施設に通院した。平成2年からアルバイトを3つやった。事務的な仕事を3月から7月までやった次は、大手の印刷会社のアルバイトを8月、9月の2ヶ月やった。ここは働きに来て来なくても良い(=入社してもしなくても良い)というところだった。翌年の3月から7月まで遺跡発掘のアルバイトをした。インターのそばで発掘作業があったが、小さなかけら(破片)から全体を考える。その場で、かけらを組み合わせることはしなかった。やれば、もっと面白かったかもしれない。みんなよくしてくれた。

その後は、ずっと無職で家にいた。平成6年から障害者の作業所に行っている。今は、ケーキやクッキーを作っている。作ったものは区役所の入り口で販売している。このところ、作る量が減っている。いろいろな作業を担当するが、仕込みがわりと得意だ。作業所からは、毎日来るなといわれて、今は週2回通所している。自分は、うるさいことをいうからだろう。

これまで、仕事の探し方は人の世話や新聞の折り込み広告だった。職安は人がたくさん混雑しているので利用しない。電話で話すのが不得意なので、仕事の探し方も限られてくる。

自分は楽天的だが、ズルイと思う。仕事も一所懸命やろうとすると限界がきて、あるところからは出来ない。これまでで良かった仕事をあえてあげれば、遺跡発掘だ。もう一度やっても良いものといわれれば、やはりそれだ。みんなよくしてくれたからね。

今も治療は続けている。病院はいくつか変わった。ずっと両親と一緒に住んでいる。父親は、今、入院しており、母親と自分の二人で家にいる。

ときどき、映画を見るのが趣味だ。時には、東京の本屋街の神保町などへ出る。市営のバスや地下鉄を使うと無料で動ける。学生時代は、勉強に専念していてクラブやサークル活動などもしていない。勉強をした。

今、49歳だ。50歳を区切りにして、仕事をみつけて何とかきちっとしたい。今、転機だと思う。50歳を契機として「なんとかしないと」と思っている。

「進路追跡調査」インタビュー（男性用）

お忙しいところ調査にご協力頂きまして、まことにありがとうございます。

インタビューでは以下のような内容についてお伺いする予定です。ついでにはその結果を、別紙のライフヒストリーカレンダーとしてまとめる計画です。ライフヒストリーカレンダーは、記憶の整理および内容の関連など、出来事の整理のために作成するもので、ライフヒストリーカレンダーが外にすることは絶対にありません。インタビュー内容・ライフヒストリーカレンダーをお目通し頂き、もし書き込める部分などありましたら、あらかじめご記入頂き、インタビューにお持ち頂ければ幸いです。

- 1 . 就職・離職・転職・昇進・独立・異動・配置転換などのできごとについて、お伺いします。
 - ・ そのできごとについて、何か活動をされましたか。
 - ・ その中で問題や障害となることはありましたか。
 - ・ 他の方法をとることはできましたか。
 - ・ 周囲の人の影響はどうでしたか。
 - ・ 周囲の人の反応はどうでしたか。
 - ・ 支えてくれた人や助けてくれた人はいましたか。
 - ・ どのような助けがあったらいいと思いましたか。

- 2 . これまでご経験された仕事と、教育・訓練・研修についてお伺いします。
 - ・ 仕事において、自分が求められた能力は何ですか。
 - ・ その能力はどのように身につけてこられましたか。具体例を教えてください。
 - ・ 自発的に身につけようとされたのですか。会社からの指示ですか。そのための費用や時間の確保などはどうでしたか。
 - ・ その努力は報われましたか。

- 3 . 仕事とはあまり関わりのない、教育・訓練・研修についてお伺いします。
 - ・ 仕事とはあまり関わりのない、教育・訓練・研修のご経験はありますか。
 - ・ (ある場合)なぜ、教育・訓練・研修を受けようと思ったのですか。

- 4 . 職業を通じた目標についてお伺いします。
 - ・ 職業を通じてどうなりたい、あるいは何をしたいと思っていますか。

- ・目標を達成するために、どのようなことをしてきましたか。
 - ・今後どのようなことを計画していますか。
- 5 . 仕事上の実績・印象的な経験についてお伺いします。
- ・ご自分のこれまでの仕事の中で、自信や誇りを持っている仕事について教えてください。
 - ・その仕事の中での障害や問題と感じたことはどんなことですか。
 - ・会社やまわりの反応はどのようなものでしたか。
- 6 . 過去の職業生活の比重（ウエイト）についてお伺いします。
- ・あなたにとって仕事とは人生の中でどういうものでしょうか。
 - ・人生の節目とされる時点では、生活や人生における仕事の大きさはどのようでしたか。年齢によって考え方は変化してきましたか。
- 7 . 仕事内容（自営・専門職など、同じ仕事を続けている方に）
あなたがご経験された仕事は、昔と今では変わっていますか。仕事のやり方や中身は昔とは変わりましたか。
今後の展望についてどうお考えですか。
- 8 . これまでの歩みについて、次のことについてはどうお考えですか。
- ・職業キャリアについての評価はどのようなものですか。
 - ・これまでの人生についての評価はどのようなものですか。
- 9 . あなたにとっての職業キャリア上の転機はありましたか。あるとしたら、どのようなことですか。
- 10 . あなたおよびあなたのご家族の健康についてお聞かせ頂けますか。
- 11 . インタビューの中で、言い足りなかったところ、付け加えたいところがありましたら、教えて頂けますか。

もしご希望があれば、作成したライフヒストリーカレンダーを後からお送り申し上げます。

「進路追跡調査」インタビュー（女性用）

お忙しいところ調査にご協力頂きまして、まことにありがとうございます。

インタビューでは以下のような内容についてお伺いする予定です。ついでにはその結果を、別紙のライフヒストリーカレンダーとしてまとめる計画です。ライフヒストリーカレンダーは、記憶の整理および内容の関連など、出来事の整理のために作成するもので、ライフヒストリーカレンダーが外にできることは絶対にありません。

インタビュー内容・ライフヒストリーカレンダーをお目通し頂き、もし書き込める部分などありましたら、あらかじめご記入頂き、インタビューにお持ち頂ければ幸いです。

インタビューでは、あなたの仕事・活動について伺います。ここでいう“仕事・活動”とは、会社などで働くような“有償の仕事（謝金・謝礼などがきちんと支払われる仕事）”という意味だけではなく、家事、育児、介護、社会参加活動（自治会・町内会などの活動、PTA・子供会などの世話、ボランティアなどの奉仕や福祉活動、趣味・スポーツクラブなどの活動、学習研究グループ活動、政治活動・宗教活動、消費者団体などの活動など）を含む、これまでの人生においてあなたが関与してきた活動全般を含むものとして考えています。

1. 就職や活動の開始、独立自営や開業、離職や活動の休止や中断、転職や活動の転換、昇進・昇格、異動・配置転換といったできごとについて、お伺いします。

あなたにとって、重要なできごとはありましたか。それはどのようなものでしたか。

理由

- ・ その当時、そのように決めたのはどうしてですか（きっかけ・理由）。

問題・障害

- ・ その中で問題や障害となることはありましたか。
- ・ 他の方法をとることはできましたか。
- ・ 周囲の人への / からの影響はどうでしたか。
- ・ 周囲の人の反応はどうでしたか。

活動・準備

- ・ そのできごとのために、何か活動をされましたか。

例)就職活動をしましたか。再就職に向けて、どのような準備をしましたか。

支援・制度

- ・ 支えてくれた人や助けてくれた人はいましたか。どんな方法で問題を解決しましたか。
- ・ どのような助けがあったらいいと思いましたか。

家庭生活（出産・育児・介護・パートナーのお仕事の影響）について

- ・ 仕事の状況はどうかわかりましたか。
- ・ パートナー（配偶者）のお仕事の関係で何か影響がありましたか。
- ・ あなたは当時仕事についてはどうお考えでしたか。
- ・ 実際にはどのようにして家庭生活と仕事との選択・調和をはかられましたか。
- ・ そうなったことについて、自分ではどのようにお考えでしたか。
- ・ 今となっては、どうすればよかったと思いますか。
- ・ 当時の勤務先・活動先には、育児や介護を支援する制度など、仕事や活動の継続を支えるしくみがありましたか。また誰か助けてくれる人はいましたか。
- ・ おうちや勤務先で支えてくれた人はいましたか。それで十分でしたか。そのほかにどんな助けがあったらよかったと思いますか。

2 . これまでご経験された仕事・活動と、教育・訓練・研修についてお伺いします。

あなたのお仕事・活動で代表的なものを教えてください・

能力の内容

- ・ 仕事・活動において、自分が求められた能力は何ですか。
- ・ パソコンやワープロなど、情報技術の能力が求められたことはありますか。

能力の身につけ方・手段

- ・ その能力はどのように身につけてこられましたか。具体例を教えてください。
- ・ 自発的に身につけようとしたのですか。勤務先や活動先からの指示ですか。そのための費用や時間の確保などはどうしましたか。

役立ち

- ・ あなたは満足を感じていますか。

3 . 仕事・活動を通じた目標についてお伺いします。

仕事・活動の目標

- ・ 仕事・活動を通じて、どうなりたい、あるいは何をしたいと思っていますか。

目標達成の手段

- ・目標を達成するために、どのようなことをしてきましたか。

計画

- ・今後どのようなことを計画していますか。

4 . 仕事・活動上の実績・印象的な経験についてお伺いします。

誇りをもっている仕事

- ・ご自分のこれまでの仕事・活動の中で、やってよかった、自信や誇りを持っている仕事・活動について教えてください。

問題・障害・反応

- ・その仕事・活動の中での障害や問題と感じたことはどんなことですか。
- ・勤務先・活動先・ご家庭・ご近所での反応はどのようなものでしたか。

5 . 過去の職業生活（有償）の比重（ウエイト）についてお伺いします。

仕事の意味づけ

- ・あなたにとって（有償の）仕事とは人生の中でどういうものでしょうか。
- ・人生の節目とされる時点では、生活や人生における仕事（有償）の大きさはどのようでしたか。年齢によって考え方は変化してきましたか。
- ・仕事（有償）と家庭のバランスをどのようにお考えですか。
- ・仕事（有償）を選ぶ場合に、とくに重視したことは何ですか。

6 . 仕事・活動の内容（自営・専門職など、同じ仕事・活動を続けている方に）

仕事・活動の昔と今

- ・あなたをご経験された仕事・活動の内容と方法は、昔と今では変わっていますか。
仕事・活動のやり方や中身は昔とは様変わりしましたか。

7 . これまでの歩みについて、次のことについてはどうお考えですか。

人生に対する評価

- ・職業生活・経験はどのような意味がありましたか。評価はどのようなものですか。
- ・これまでの人生についての評価はどのようなものですか。

8 . 7までを踏まえて、あなたご自身のこれまでの歩みとお子さまの教育はどのような関係がありますか。お子さまの教育についての考え方を教えてください。

9 . あなたにとっての職業キャリア上の転機はありましたか。あるとしたら、どのよ

うなことですか。

10 . あなたおよびあなたのご家族の健康についてお聞かせ頂けますか。

11 . インタビューの中で、言い足りなかったところ、付け加えたいところがありましたら、教えて頂けますか。

もしご希望があれば、作成したライフヒストリーカレンダーを後からお送りいたします。

生年月日 昭和 ____年 ____月 ____日生 現在 満 ____歳)

居住	A1	15才以降の居住地歴																	
	A2	都道府県+市区町村																	

西暦	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84
昭和・平成	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59

実年齢																		
-----	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

できごと
 連合赤軍浅間山荘事件 第一次オイルショック ベトナム戦争終結 ロッキード事件 第二次オイルショック

教育について	B1	高校/高専/短/大学/大学院																
	B2	その他の教育・研修について																

西暦	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84
昭和・平成	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59

職業について	従業上の地位	1. 自営業・フリーランス 2. 家業従事 3. 正社員 4. 契約・派遣・嘱託 5. アルバイト・パート 6. 無職 7. その他																
	仕事の内容	従業員規模 { ①自営 ②小企業 ③中企業 ④大企業 ⑤官公庁 ⑥わからない }																

職業について	C3	昇進・昇任・異動・配置転換																
	C4	転勤・出向																
	C5	就職・離職																
	C6	満足度 (時間・やりがい・収入)																

西暦	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84
昭和・平成	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59

ライフイベント	D1	自分の親からの独立・別れ																
	D2	親/配偶者の親との同居 主となった時期																
	D3	結婚																
	D4	パートナーの状況																
	D5	子ども [人]																

氏名 _____

90										2000									

85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	00	01	02	03	04
60	61	62	63	元	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

消費税 導入					湾岸戦 争・バブ ル崩壊					阪神大 震災									
-----------	--	--	--	--	--------------------	--	--	--	--	-----------	--	--	--	--	--	--	--	--	--

85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	00	01	02	03	04
60	61	62	63	元	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16

85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	00	01	02	03	04
60	61	62	63	元	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16

労働政策研究報告書 No. 27
個人のキャリアと職業能力形成
- 「進路追跡調査」35年間の軌跡 -

発行年月日 2005年3月31日
編集・発行 独立行政法人 労働政策研究・研修機構
〒177-8502 東京都練馬区上石神井4-8-23
(編集) 研究調整部研究調整課 TEL 03-5991-5104
(販売) 広報部成果普及課 TEL 03-5903-6263
FAX 03-5903-6115
印刷・製本 株式会社 コンポーズ・ユニ

©2005

* 労働政策研究報告書全文はホームページで提供しております。(URL:<http://www.jil.go.jp/>)



The Japan Institute for Labour Policy and Training